Ellen G. White Estate

患難から栄光へ

ELLEN G. WHITE

患難から栄光へ

Ellen G. White

1978

Copyright © 2021
Ellen G. White Estate, Inc.

Information about this Book

Overview

This eBook is provided by the Ellen G. White Estate. It is included in the larger free Online Books collection on the Ellen G. White Estate Web site.

About the Author

Ellen G. White (1827-1915) is considered the most widely translated American author, her works having been published in more than 160 languages. She wrote more than 100,000 pages on a wide variety of spiritual and practical topics. Guided by the Holy Spirit, she exalted Jesus and pointed to the Scriptures as the basis of one's faith.

Further Links

A Brief Biography of Ellen G. White
About the Ellen G. White Estate

End User License Agreement

The viewing, printing or downloading of this book grants you only a limited, nonexclusive and nontransferable license for use solely by you for your own personal use. This license does not permit republication, distribution, assignment, sublicense, sale, preparation of derivative works, or other use. Any unauthorized use of this book terminates the license granted hereby. (See EGW Writings End User License Agreement.)

Further Information

For more information about the author, publishers, or how you can support this service, please contact the Ellen G. White Estate

at mail@whiteestate.org. We are thankful for your interest and feedback and wish you God's blessing as you read.

まえがき

人間がもし次の世代のことを考えなくなるとしたら、そこはもう人間の社会ではない。しかし今われわれが住んでいる社会は、すでにその兆候を示しはじめている。教育の荒廃はわが国だけでなく世界の問題となっているし、古い道徳と価値がすたれ、人はそれぞれ自分がよいとする道を歩んでいる。また一方に圧制があって、若い人たちの道を阻はばんでいる。次代をになう子供たちはいったいどんな社会に入りつつあるのであろうか。

ノーベル文学賞作家アレクサンドル・ソルジェニーツィン氏は、先ごろ西欧の自由社会を批判して、「物質的な向上に狂奔する西側文明の社会では、人間の精神が弱まり、東側社会より弱体化している」と演説した。このソルジェニーツィン氏の言葉は見過ごしてはならない鋭い指摘を持っている。

われわれの社会における精神の弱体化は多くの複合的な要因によってもたらされたものであろう。今日、「物質的な向上に狂奔する」余り、心を失った現象が余りにも多くなってきた。その結果、われわれは将来を望むことが困難になってきた。やがてわれわれの子 子供や孫たちが入っていくであろう社会について、われわれは大きな不安をいだくことなく、考えることができなくなった。われわれは今、無責任にも子供を育て、彼らを霧の彼方へ追いやろうとしているのであろうか。 [2]

戦後三十年を経て、われわれの社会はまだ精神的な理想を失ったままでいる。学校においても家庭においても、まだ心の教育は確立していない。若者たちは物質的なものを求めるが、心の充実を求めない。小学生の自殺が相次いで起こっている。少年少女はあてどもなく大都会の盛り場を歩きまわり、家も故郷も失った根なし草のような人びとが、刹那せつな的な興奮を求めて競馬場へと殺到する。若者や子供だけではなく急激に増大した老人社会は、人間らしさに飢えた老人たちの大衆によって、ますます人間疎外

の状況を深刻にしていくにちがいない。今や社会の見えないところに内攻していく社会病理は、人間そのものの変革を要求している。現代社会が最も必要としていることは精神の優位の確立であり、品性の建設である。

本書『患難から栄光へ』は一世紀のキリスト信徒の物語であるが、それはおどろくべき人間変革の記録でもある。ここでは、かつてローマ帝国の片田舎に住んでいた無学の農民や漁夫たちが、今や有数の精神的指導者として、岩の
[3] ように確固として立つのを見る。もはや彼らは無知でも無学でもない。彼らが語る言葉は人びとを震憾しんかんし、生かすのである。彼らをとりまいて有力な団体が形成されていく。この団体は軍隊の力や政治家の援助を必要としない。また資金に乏しく、貧しい下層民を抱かかえている。しかし、内外の偏見と圧迫に耐えながら、民族の固い殻を破って、広く世界へ福音を伝えていったのである。後世、ローマ帝国は亡びたが、この「無学なただの人たち」の団体は、滅亡に瀕ひんするローマの人びとを救い、今日まで永続しているのである。

初期のキリスト教徒の発展の理由は、歴史家によってさまざまに論じられているけれども、第一に言えることは、彼らの間にあった愛の共同体である。ローマの苛酷な支配によって地中海世界の人びとから奪い去られた最も貴重なものは、彼らの共同体であったと言われている。その帰属する部族や民族を失って根なし草になった人びとに、キリスト教徒は新しい心のよりどころを与えた。それは相互いに自己を捨てて奉仕し合う愛の共同体であった。そこで人びとは新しい生命を得て、自己を変革していった。そこにあるものは生きる目標の高尚さであり、より高く、より純潔で、より崇高な生活へと向上する力であった。その力こそ、キリストの弟子たちがキリストから受けた力であり、品性を再創造する神聖な力であった。この力こそ崩壊の危機に瀕ひんしたローマ帝国の人びとを救った神の恩寵
[4] であった。

今日、われわれが新しく問い直さなければならないのは、崩壊の不安に閉ざされている現代社会を救う道についてである。それは人間を基本から変革し、愛の共同体をつくりあげる力について問うことである。

いったい今の時代に人間を変革する神聖な力とは何であろうか。いったい愛とは何であるのか。どうしたらわれわれは愛することができるのであろうか。そしてどうしたら、時代の悪い趨勢すうせいにうち勝って、新鮮な愛の共同体を現代に、そして次の世代に形成していくことができるのであろうか。

このような課題を覚えながら、『患難から栄光へ』を世に問うこどは、発行者の喜びとするところである。本書は著名なキリスト教著述家であり、信仰の実践者であったエレン・G・ホワイト女史の著作で、原版は一九一一年に発行されたものである。本書は、邦訳「ホワイト選集」（全十一巻）に加えられ、「聖書と信仰の歴史」のうち初期の教会の発展を扱っている。

発行者

[1]

『患難から栄光へ』の由来

『患難から栄光へ』という本書の書名は、新約聖書の次の箇所から出ている。

「だから、わたしたちは落胆しない。たといわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく。なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。わたしたちは、見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである。」

この数行の文章は、初期のキリスト教会の主な指導者の一人であったパウロが、紀元五七年ごろコリント市（ギリシヤ）にいる信徒たちに宛てて書いた手紙の一節である（コリント人への第二の手紙四章一六節－一八節）。

この格調高い文章はひとの心を打つ不思議な力をもっている。それは主張というより告白である。そして告白である以上、そこに秘められた経験がある。それは手紙を書いたパウロの、また手紙を受けとったコリント市のクリスチャンたちの、さらに、ローマ帝国の各地に散在した多くの信徒たちの経験を表わすことばであった。

[2]

パウロの生い立ち

パウロは初期のキリスト教会の最も卓越した指導者の一人であったが、はじめからイエス・キリストの弟子であったのではなかった。弟子でなかったばかりでなく、かえってイエスの弟子たちを地上から抹ま殺しようとする迫害者の急先鋒ぽうであった。

パウロはキリキヤのタルソ市（現在トルコ共和国の地中海に近い町）のユダヤ人の家庭に生まれ、少年時代からエルサレム市に送られて、当時最も有名な碩学せきがくガマリエルの門下生となり、厳格なユダヤ教徒として訓練を受けた。

イエスの神の国運動

そのころ、ガリラヤ地方から出た一人の青年教師を中心として下層民の神の国運動が起こっていた。その中心人物であったイエスは、厳格な律法遵守を強いて民衆の生活から離れてしまった指導層に対立して、貧しく弱い下層民に父なる愛の神の救いを伝えていた。イエスは形式化した当時の宗教を徹底的に批判し、あらゆる人は神を信ずれば救われるという福音を伝えた。やがて、イエスの宗教を反ユダヤ教と断じた指導者たちはイエスを非合法の裁判にかけ、十字架につけて処刑した。

臆病者から指導者へ [3]

イエスの弟子たちはイエスを理解していなかった。彼らはイエスが逮捕されたときイエスを見捨てて逃げてしまった。彼らはイエスと生活を共にして、イエスに最も近い弟子であることを自認していたのに、彼らが属する下層民の他のものたちと同じく、現世利益を求め、表面的な風潮に従い、日和見的であった。

ところが、イエスの十字架のあとしばらくして、これらの弱く、頼りない弟子たちが、人間が変わったように堂々と立ちあがったのである。彼らはこの新しい宗教団体に加えられた迫害の嵐の中に、次々と殉教しながら、偉大な精神的指導者の足跡を残したのである。

無力な弟子たちを精神的指導者に変えたのは復活したイエスとの出会いであった。イエスは十字架の苦難を受けたが、三日目に甦り、弟子たちに栄光の姿を現わされた。この神の奇跡を経験して、弟子たちも変えられたのである。それは一つの衝撃とも言える出来事であった。キリスト信徒たちは、甦ったキリストに神の救いの力を見た。日毎に、多くの民衆が新鮮な期待をもって、イエスの弟子の群れに加わった。

パウロの召し

パウロはユダヤ社会の指導層に属するものとして、この新しい宗教に激しい敵意を燃やしていた。彼はイエスの [4]
弟子たちを、男女にかかわらず捕らえて、ひどい迫害を加

えていった。そのようなパウロに、彼の生き方を百八十度転換させる出来事が起こったのである。それはイエスの弟子たちに起こった変化と同じ、いやそれ以上の劇的経験であった。それは甦ったキリストが、迫害者パウロにご自身を現わされた事件であった。

事件の詳細は本書の記事にゆずるとして、この出来事の意義は広く深いものがある。イエスはパウロを特別な使命のために召し出されたのである。その使命とは異邦人（非ユダヤ人）伝道であった。イエスの宗教はローマ帝国の辺境に生まれたものであったが、それは初めから世界宗教としての特質を備えていた。しかし生まれたばかりのキリスト教会においては、ユダヤ人のもつ民族的な壁にさまたげられて、世界宗教としての発展がおさえられていた。

ここに殻を破る人物が必要であった。長い年月の間につちかわれた伝統と慣習と民族の誇りを打ち破って、異民族がへだてなく同じ信仰に結ばれ、愛の共同体をつくっていくためには、理論と実践を共にもつ人間が必要とされた。パウロはこの任務を果たすのに最もふさわしい人物であった。彼はユダヤ人として最も高い教育をうけ、またギリシヤ哲学や文学の素養をもっていた。またずば抜けた実践力と豊かな感性を備えていた。しかしパウロがイエスの使徒として異邦人の間で働きはじめる前に、イエスの宗教の本質を深くさぐる必要があった。パウロはアラビヤの砂漠に退いて、瞑想と研究に時を費やした。

パウロは荒野で孤独な生活を送ると共に、これまでの生
[5] 活を支えてきたユダヤ議会の議員という社会的地位や、名門ガマリエル塾の誇りを捨て去った。そこで彼はイエス・キリストとの新しい人格関係を築きあげ、神がこの世界に行われた救いを自分の総力をあげて理解し、自分のものとして再構成した。

パウロは自分がイエスの宗教の本質として理解したものを、地中海世界の町や村に伝道していった際に各地にいるキリスト信徒たちに書き送った手紙の中で、明らかにしている。これらの手紙は新約聖書の中に十三通あって、それぞれ特殊な事情のもとに書かれたが、当面する問題の解決と共に、永続的な真理を解明しているのである。

イエスの宗教の特質

パウロによればイエスの宗教の特質は次のようなものである。

まずこの宗教は母胎であるユダヤ教と同じく、創造主である神を信じ、その神による万物の創造と支配を信じる。また人間は神の前に罪を犯し、自分の力で自分を救うことができず、ただ神の裁きによって滅びに定められていることを信じる。しかし、父である愛の神は人間が罪の裁きをうけて滅びることを望まず、御子イエスを世につかわし、人間の身代わりとして十字架の裁きをうけさせ、その犠牲の死によって罪人が受けるべき刑罰をうけさせられた。この十字架の刑死を受けたイエスこそ、神のひとり子であり、その方は神性をもっておられるので墓から甦り、生けるキリストとして今や神の救いの完結のために働いておられる。神がその救いを完結されるの はイエス・キリストが [6]
多くの天使をひきつれて再びこの地上に来られるときである。そのとき栄光あふれる神の国が出現するのである。

宗教は教義と共に宗教経験から成り立っている。パウロの宗教経験は新生ということに特徴を示していた。パウロは自分の自我は日毎に死に、キリストと共に新しい自己が生まれると言った。これが積極的な生き方の秘訣ひけつであり、困難に対処する道であるとパウロは説いた。ここに死して生きるという宗教経験の極致がある。これはパウロの生涯を通じて深められた経験であった。

苦難の旅

パウロの後半生は旅に出て旅に終わった。山頭火は「この道をゆく、この道をゆくしかないわたしである」と書いたが、パウロの旅も同じようにきびしく、苦難に満ちていた。それは誰でもたどれる道ではなかった。あるとき、彼は自分がたどってきた道をふりかえって次のように手紙に書いた。

「投獄されたこともかなりの回数に及び、むち打たれたことは数えきれず、何度も何度も死に直面しました。ユダヤ人から、三十九回の恐ろしいむち打ちの刑を受けたことが五度あります。それから、むちで打たれたことが三度、

石で打たれたことが一度、難船したことが三度、一昼夜、海上を漂ったことが一度あります。幾度も長い苦しい旅をし、川がはんらんしたり、強盗に襲われたり、同国人からも外国人からも迫害されたりして、何度も危険な目に会い
[7] ました。町々では暴徒に取り囲まれ、荒野や嵐の海でやっと命びろいしたこともあります。クリスチャンだと自称しながら、実はそうでない人たちに苦しめられたこともあります。疲れ果て、苦しみ、たびたび眠れない夜を過ごしました。飢え渇き、食べ物もなく過ごしたことも、しょっちゅうです。また服もなく、寒さに震えていたこともありました。

こんなことのほかに、絶えず、諸教会がどうなるかという心配をかかえています。誤った道を進んでいる人を見て、悲しまないでいられるでしょうか。倒れている人を見て、知らん顔ができるでしょうか。精神的に痛手を受けている人を見て、傷つけた相手を激しく怒らずにいられるでしょうか。」[1]

苦難に勝つ

神から与えられた使命を達成するために、パウロは自分に割り当てられた苦難の道を一歩一歩踏みしめながら歩いていった。そして彼はイエスの使徒にふさわしく、苦難を克服する独自の道を開いていったのである。パウロは次のように言う。

「それだけではなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。」[2]

なぜパウロにおいては患難をいとい、恐れ、その場逃れの手段をろうして苦痛を避けようともがき、ついには自分に失望するという順序にならないのだろうか。患難を希望
[8] にまで高める何ものかをパウロは持っていたのである。

パウロはさらに患難について語っている。「わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行

[1] コリント教会の皆さんへII、一一ノ二三ー二九。リビング・バイブル。
[2] ローマ人への手紙五ノ三ー五。

き詰まらない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。」[3]

これは何としぶとく、強靭な態度であろう。このように落ちついて語ることができるまでには、多くの患難を経た経験があったのであろう。彼は「いつもイエスの死をこの身に負うている」[4] と言った。この言葉はパウロがいつもイエスの十字架を背負って歩んだことを示している。イエスと共に死ぬ経験を重ねて、パウロは世の何ものも与えることのできない最高の価値あるものを得たのである。彼がイエスと共に死ぬのは、「イエスのいのちが、この身に現れるため」であった。「イエスのいのち」それは死を克服したいのちである。死と共に人間を束縛し堕落させるあらゆる力に勝利したいのちである。どんなに深い絶望も希望に変える神の恩恵である。不信と恐怖をぬぐい去り、平安と信頼にみちた生活に入らせる力である。

イエスよ、あなたを知ったいま、わたしには他に価値あるものを見いだすことはできません。イエスよ、あなたはわたしのすべての苦難の歩みをわたしと共にして下さいました。わたしはただ、あなたがたどられた十字架の道を、あなたに従って歩むだけです。パウロは自分の道を時には孤独に歩みながら、イエスと語っていた。

パウロは苦しみを知り、そして人生を知った。われわれは苦悩を避けようとして、あらゆる努力をつくしている。だが本当に価値のあるものは快楽より苦悩において発見されるのである。苦しみのなかから何か非常に大きな救いとなるようなことが生じてくることを新約聖書の信仰は語っているのである。 [9]

「このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させ」てくれるとパウロは書いた。われわれにとって「軽い患難」とは何であろうか。また「重い栄光」とは何であろうか。もし「患難から栄光へ」が神の定める道であるならば、勇気をもってその道に歩もうではないか。

福音社編集部

---

[3] コリント人への第二の手紙四ノ八、九。
[4] コリント人への第二の手紙四ノ一〇。

Contents

Information about this Book i
まえがき iii
『患難から栄光へ』の由来 vi
パウロの生い立ち vi
イエスの神の国運動 vii
臆病者から指導者へ vii
パウロの召し vii
イエスの宗教の特質 ix
苦難の旅 ix
苦難に勝つ x
第一章　人類救済への神の計画 14
第二章　十二弟子の訓練 20
第三章　大いなる任命 27
第四章　聖なる霊下る 35
第五章　聖霊の働き 44
第六章　美しの門での奇跡 51
第七章　偽善が招いた死 61
第八章　ユダヤ議会での証言 66
第九章　組織と指導者 73
第一〇章　ステパノの弁明 80
第一一章　へだての壁を越えて 84
第一二章　迫害者から弟子へ 91
第一三章　砂漠での内省の日日 100
第一四章　神は人をかたより見ない 106
第一五章　牢獄から救われたペテロ 115
第一六章彼らは「クリスチャン」と呼ばれた 124
第一七章パウロの第一次伝道旅行 132
第一八章豹変した群衆 140
第一九章エルサレム会議 148
第二〇章パウロの第二次伝道旅行 158
第二一章エーゲ海を渡る 166
第二二章テサロニケでの働き 173
第二三章文化の中心アテネにて 181
第二四章退廃の都コリントにて 190

第二五章テサロニケ教会への手紙 199
第二六章　植える者と水をそそぐ者 210
第二七章　エペソでのめざましい働き 220
第二八章　銀細工人たちの騒動 228
第二九章　共に悩み、共に喜ぶ 233
第三〇章　競走に勝ち抜くために 241

[10]

第一章　人類救済への神の計画

教会は人類救済のために神がお定めになった機関である。教会は奉仕するために組織された。その使命は世界に福音を伝えることである。教会を通して神の満ちあふれる豊かさを世界に反映させることが、神のはじめからのご計画であった。暗やみから驚くべき光に招き入れられた教会員たちは、神の栄光をあらわさなければならない。教会はキリストの恵みに富んだ宝庫であり、教会を通して神の愛がついには「天上にあるもろもろの支配や権威」に対してさえも十分明らかに示されるのである（エペソ三ノ一〇）。

教会に関して多くのすばらしい約束が聖書に記されている。「わが家はすべての民の祈の家ととなえられるからである」（イザヤ書五六ノ七）。「わたしは彼らおよびわが山の周囲の所々を祝福し、季節にしたがって雨を降らす。これは祝福の雨となる。」「わたしは彼らのために、良い
[2] 栽培所を与える。彼ら は重ねて、国のききんに滅びることなく、重ねて諸国民のはずかしめを受けることはない。彼らはその2神、主なるわたしが彼らと共におり、彼らイスラエルの家が、わが民であることを悟ると、主なる神は言われる。あなたがたはわが羊、わが牧場の羊である。わたしはあなたがたの神であると、主なる神は言われる」（エゼキエル書三四ノ二六、二九ー三一）。

「主は言われる、『あなたがたはわが証人、わたしが選んだわがしもべである。それゆえ、あなたがたは知って、わたしを信じ、わたしが主であることを悟ることができる。わたしより前に造られた神はなく、わたしより後にもない。ただわたしのみ主である。わたしのほかに救う者はいない。わたしはさきに告げ、かつ救い、かつ聞かせた。あなたがたのうちには、ほかの神はなかった。あなたがたはわが証人である』」。「主なるわたしは正義をもってあなたを召した。わたしはあなたの手をとり、あなたを守った。わたしはあなたを民の契約とし、もろもろの国びとの

光として与え、盲人の目を開き、囚人を地下の獄屋から出し、暗きに座する者を獄屋から出させる」（イザヤ書四三ノ一〇ー一二、四二ノ六、七）。

「わたしは恵みの時に、あなたに答え、救の日にあなたを助けた。わたしはあなたを守り、あなたを与えて民の契約とし、国を興し、荒れすたれた地を嗣業として継がせる。わたしは捕えられた人に『出よ』と言い、暗きにおる者に「あらわれよ」と言う。彼らは道すがら食べることができ、すべての裸の山にも牧草を得る。彼らは飢えることがなく、かわくこともない。また熱い風も、太陽も彼らを撃つことはない。彼らをあわれむ者が彼らを導き、泉のほとりに彼らを導かれるからだ。わたしは、わがもろ もろの [3]
山を道とし、わが大路を高くする」。

「天よ、歌え、地よ、喜べ。もろもろの山よ、声を放って歌え。主はその民を慰め、その苦しむ者をあわれまれるからだ。しかしシオンは言った、『主はわたしを捨て、主はわたしを忘れられた』と。『女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない。見よ、わたしは、たなごころにあなたを彫り刻んだ。あなたの石がきは常にわが前にある』」（イザヤ書四九ノ八ー一一、一三ー一六）。

教会は神が反逆した世に持っておられる神のとりでであり、神ののがれの町である。教会への裏切り行為は、ひとり子の血によって人類をあがなってくださった神に対する反逆である。世のはじめから忠実な人々がこの地上に教会を構成してきた。いつの時代にも主は見張りびとをお持ちになっていた。彼らは、彼らが生きた世代に忠実なあかしを立ててきたのである。これらの見張りびとたちは警告の使命を伝えた。そして、彼らが自分のよろいをぬぐように命じられたとき、他の人々がその仕事を受け継いだ。神はこうしたあかしびとを神との契約関係に置かれて、地上の教会を天の教会と結ばれたのである。神はご自分の教会に仕えさせるために、天使たちをおつかわしになった。そして、黄泉よみの力は神の民に打ち勝つことができなかった。

幾世紀にもわたる迫害、闘争、暗黒の中にあって、神は教会を支えてこられた。神は教会に落ちかかってくるどん

な暗雲に対しても備えをし、みわざを妨害するために起こ
[4] るどんな反対勢力も予見された。 すべての事は神の予告通りに起こった。神は教会を見捨てておかれず、起こるべきことを預言のことばで明らかにされた。そして預言者がみ霊たまに感じて預言した事は、成就した。神のすべての目的は達成される。神の律法はみ座につながっていて、どんな悪の力も、それを滅ぼすことはできない。真理は神の霊感を受け、神に守られている。それはすべての反対に勝利する。

霊的暗黒の時代に神の教会は、山の上にある町のようなものであった。各時代にわたり、各世代を通じて天の高潔な教えは教会の中で明らかになってきた。教会はどんなに弱く欠陥だらけのように見えても、神が特別な意味で最高の関心を払われる対象である。教会は神の恵みの舞台であり、そこで神は人人の心を変える力をあらわすことを、およろこびになるのである。

「神の国を何に比べようか。また、どんな譬たとえで言いあらわそうか」とキリストは言われた（マルコ四ノ三〇）。キリストはこの世の国を用いて神の国をあらわすことはできなかった。神の国に匹敵するものを、社会の中に見つけることはできなかった。地上の王国は、優勢な権力によって治めるが、キリストの国では、武器や抑圧の道具がことごとく消し去られている。神の国は人間を高め、高貴にする。神の教会はさまざまの賜物に満ち、聖霊を受けてきよい生涯を送るものの宮廷である。教会員たちは、自分たちが助け祝福するものの幸福の中に、自分たちの幸福を見つけるのである。

神のみ名があがめられるようにと、教会を通して完成するように主が計画された、おどろくべきみわざがある。このみわざは、エゼキエルが見たいやしの川の幻の中に描
[5] かれている。「この水は東の境に 流れて行き、アラバに落ち下り、その水が、よどんだ海にはいると、それは清くなる。おおよそこの川の流れる所では、もろもろの動く生き物が皆生き、・・・・川のかたわら、その岸のこなたかなたに、食物となる各種の木が育つ。その葉は枯れず、その実は絶えず、月ごとに新しい実がなる。これはその水が聖所から流れ出るからである。その実は食用に供せられ、その葉は薬となる」（エゼキエル書四七ノ八ー一二）。

世の初めから神はこの世界に祝福を与えるために、神の民を通して働いてこられた。古代エジプトの国に対して、神はヨセフをいのちの泉となさった。ヨセフの誠実さが、エジプトのすべての民の命を守った。神はダニエルを通してバビロンのすべての知者の命を救われた。これらの救いは、実物教訓としてある。それは、ヨセフやダニエルが礼拝していた神とのつながりを通して、世に与えられる霊的祝福を例証するものである。キリストを心にやどしている者、キリストの愛をこの世に示す者はみな、人類の祝福のために神と共に働く者である。他の人々に分け与えるために救い主から恵みを受けるとき、霊的いのちの潮うしおが彼の全身からあふれ出るのである。

神はご自身の品性を人々に現すために、イスラエルの民をお選びになった。神はその民がこの世の救いの井戸となるようにお望みになった。彼らには天来のことば、神のみこころの啓示がゆだねられた。イスラエルの初期の時代に、この世の国々は堕落した習慣によって、神についての知識を失った。彼らは、以前に神を知っていた。しかし、「神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなった」のである（ローマ一ノ二一）。それでも神は、憐あわれみから彼らの存在を抹殺されなかった。神は選ばれた人々を通して彼らが再び神を知るようになる機会を与えようとなさった。犠牲の儀式に関するさまざまの教えによって、キリストはすべての国家の前にあがめられなければならなかった。そして、キリストをあがめる人々はみな生きるはずであった。キリストはユダヤの諸制度の基礎であった。型や象徴の全体系は、福音がぎっしりと詰まった預言であり、救済のさまざまな約束を包含して人々に示していた。 [6]

しかし、イスラエルの人々は神の代表者としての尊い特権を見失っていた。彼らは神を忘れ、聖なる使命を果たさなかった。彼らが受けた祝福は世の祝福とならなかった。彼らは、自分たちが持つすべての有利な状態を、自己を高めるために用いた。彼らは誘惑を免れるために、世から自分たちをしめ出した。偶像崇拝者との交わりの中で異教徒の習慣に従わないための予防手段として神がお定めになった制限を、彼らは自分たちと他のすべての国々とを隔てる壁を築くために用いた。彼らは神が彼らに要求された奉仕

をささげようとせず、人々を信仰に導くことも、聖なる模範を示すこともしなかった。

祭司や役人たちは、儀式尊重主義の型にはまっていった。彼らは律法的宗教に満足していて、他の人人に天の生きた真理を与えることができなくなっていた。彼らは自分の義を十分満足のいくものだと思い、自分たちの宗教に新しい要素がはいることを願わなかった。人間に対する神の好意を、彼らは自分たちに関係づけて受けとり、彼らの善行を理由にして神の好意と、自分たちの功績を結びつけ
[7] た。愛によって働き、魂をきよめる信仰は、儀式と人間の命令から成り立つパリサイ人の宗教と、一致する場所を見いだすことはできなかった。

神はイスラエルについてこう言われた、「わたしはあなたを、まったく良い種のすぐれたぶどうの木として植えたのに、どうしてあなたは変って、悪い野ぶどうの木となったのか」（エレミヤ書二ノ二一）。「イスラエルは実を結ぶ茂ったぶどうの木である」（ホセア書一〇ノ一）。「それで、エルサレムに住む者とユダの人々よ、どうか、わたしとぶどう畑との間をさばけ。わたしが、ぶどう畑になした事のほかに、何かなすべきことがあるか。わたしは良いぶどうの結ぶのを待ち望んだのに、どうして野ぶどうを結んだのか。

それで、わたしが、ぶどう畑になそうとすることを、あなたがたに告げる。わたしはそのまがきを取り去って、食い荒されるにまかせ、そのかきをとりこわして、踏み荒されるにまかせる。わたしはこれを荒して、刈り込むことも、耕すこともせず、おどろと、いばらとを生えさせ、また雲に命じて、その上に雨を降らさない。万軍の主のぶどう畑はイスラエルの家であり、主が喜んでそこに植えられた物は、ユダの人々である。主はこれに公平を望まれたのに、見よ、流血。正義を望まれたのに、見よ、叫び」（イザヤ書五ノ三ー七）。「あなたがたは弱った者を強くせず、病んでいる者をいやさず、傷ついた者をつつまず、迷い出た者を引き返らせず、うせた者を尋ねず、彼らを手荒く、きびしく治めている」（エゼキエル書三四ノ四）。

[8] ユダヤの指導者たちは、教えを必要としないほど賢く、救いを必要としないほど正しく、キリストから来る名誉を必要としないほど高くあがめられていると思っていた。

救い主は、彼らが誤用していた特権と、彼らが軽視していた仕事を他の人々にゆだねるために、彼らに背を向けられた。神の栄光が現わされ、神のみことばは確立されなければならない。キリストの国はこの世界に建設されなければならない。神の救いは、荒野にある町々に知らされなければならない。こうして弟子たちは、ユダヤの指導者がなしとげることのできなかった仕事をなしとげるために召されたのである。

[9]

第二章　十二弟子の訓練

キリストはみわざをお進めになるにあたって、ユダヤ議会の学識と雄弁、あるいはローマの権力を選ばれなかった。すぐれた働き人である主は、この世を動かすはずの真理を宣べ伝えるにあたって、ひとりよがりのユダヤの教師たちには目をお向けにならず、謙遜で無学な人々をお選びになった。これらの人々を主はご自身の教会の指導者として訓練し、教育しようとお考えになった。彼らが次に他の人々を教育し、福音の使命を携えて行かせるのである。彼らがその働きを成功させるために、彼らには聖霊の力が与えられるのであった。福音は人間の力や知恵によらず、神の力によって宣べ伝えられるはずであった。

三年半のあいだ、弟子たちはこの世に知られた最も偉大な教師、キリストの指導を受けた。キリストは個人的な接触や交わりによって、ご自身の働きのために彼らを訓練さ
[10] れた。毎日彼らは、疲れている 者や重荷を負っている者に語りかけておられるキリストの励ましのことばを聞き、また、病人や苦しみ悩む者にみ力を現されるのを見ながら、キリストと共に歩き、そして語った。時には、主は弟子たちと共に山腹に腰をおろして彼らに教えられた。またある時には海辺で、あるいは道を歩きながら神の国の奥義をお示しになった。人々の心が開かれて、神の使命が受けいれられるところではどこででも、主は救いの道についての真理を明らかにされた。主は弟子たちにこれをせよ、あれをせよとお命じにならず、ただ「わたしについて来なさい」と言われた。キリストは人々に教えるご自身の方法を弟子たちに見学させようと、田舎や都市への旅に彼らを伴って行かれた。彼らは主と共に、旅先を次々に尋ねた。彼らは主と共に質素な食物をとり、主と同じように時々飢え、疲れることもたびたびであった。彼らは雑踏した町中や湖畔や、寂しい荒野の中を主と共に歩いた。弟子たちは主の全生活を見たのである。

十二弟子の任命によって、キリストが去ってのち地上でみわざを続ける教会を組織するための第一歩が踏み出された。この任命に関しては、「イエスは山に登り、みこころにかなった者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとにきた。そこで十二人をお立てになった。彼らを自分のそばに置くためであり、さらに宣教につかわ」すためであると記されている（マルコ三ノ一三、一四）。

その感動的な場面を見よ。天の主権者がみずからお選びになった十二人の弟子たちに取り巻かれているさまを見よ。キリストは今、弟子たちをそれぞれの仕事に聖別なさろうとしている。これらの弱い代理者たちをお用いになり、ご自身のことばとみ霊たまによってキリストはすべての者に、もれなく救いを得 させようと計画しておられるのである。 [11]

神と天使たちは、歓喜してこの光景を見守った。み父は、天の光がこの人々から輝き出ることをごぞんじであり、彼らがみ子のために証言をしたとき、彼らが語ったことばは、時の終わりにいたるまで代代にわたって響きわたることを知っておられた。

弟子たちはキリストの証人として出て行き、彼らが主について見たり、聞いたりしたことを世に伝えなければならなかった。彼らの任務は、これまで人間が召された職務の中で最も重要なものであって、キリストご自身のみ働きに次ぐものであった。彼らは人々を救うために神と共に働く者とならねばならなかった。旧約聖書の中で十二人の族長がイスラエルの代表者として立ったように、十二人の使徒たちは福音教会の代表者として立つのである。

公生涯のあいだ、キリストは、ユダヤ人と異邦人との間のへだての壁を打ち破り、人類すべてに救いを宣べ伝えられた。キリストはユダヤ人ではあったが、サマリヤ人と自由に交わり、この軽蔑べつされた民族について、ユダヤ人が持っていたパリサイ的慣習を無視された。キリストは彼らの屋根の下に眠り、彼らの食卓で食べ、彼らの町の通りで教えられた。

救い主はイスラエルと他の国々との「隔ての中垣」を取り除くことについての真理を、すなわち、「異邦人が」ユダヤ人と共に「神の国をつぐ者となり」、「福音によりキリスト・イエスにあって・・・・共に約束にあずかる者

となる」という真理を弟子たちに明らかにしたいと切望さ
[12] れた（エペソ二ノ一四、三ノ六）。主がカペナウムの百卒長の信仰に報いられたときと、スカルの町の人々に福音をお伝えになったときに、この真理の一部が現された。キリストがフェニキヤを訪問されて、カナンの女の娘をいやされたときに、この真理は更に明らかにあらわされた。こうした経験は、救いを受ける価値がないと思っていた多くの人々の中にも、真理の光を渇望している者たちがいることを、弟子たちに理解させるのに役立った。

こうしてキリストは、神の国では領土の境界線がなく、世襲的階級制もなく、貴族もいないという事実を、また、救い主の愛の使命を携えて、あらゆる国々に出て行かなければならないということを、弟子たちに教えようとされた。しかし彼らは後になるまで、神が「ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれひとりびとりから遠く離れておいでになるのではない」ということを十分に認識しなかった（使徒行伝一七ノ二六、二七）。

これら最初の弟子たちには著しい相違点があった。彼らはこの世の教師とならなければならなかったが、性格的にはなはだしく異なるさまざまな型を代表していた。この人たちはゆだねられている仕事を立派に進展させるためには、素質も生活習慣も違うので、感覚、思想、行動において一致する必要があった。この一致こそ、キリストが確かなものにしたいと目指されたものであった。キリストは最
[13] 後まで、ご自身と一つになるよう弟子たちを導かれた。キリストが弟子たちに対して抱いておられた重荷は、み父にささげられた祈りの中に表されている。「父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。すなわち、彼らをもわたしたちのうちにおらせるためであり」、「あなたがわたしをつかわし、わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります」（ヨハネ一七ノ二一、二三）。キリストは、弟子たちが真理によって聖別されるようにと不断の祈りをささげ

ておられた。そして、全能者のみこころは、この世が造られる以前から与えられていたものであるということを知っておられて、確信をもって祈られた。主は、神の国についての福音が、あかしとしてすべての国々に宣べ伝えられることをごぞんじであった。また、聖霊の無限の力で武装した真理が、悪との戦いに勝利し、血に染まった旗が主に従う者たちの頭上に高らかにひるがえる日の来ることをごぞんじであった。

キリストは、地上の働きが終わりに近づき、弟子たちがご自分の直接の指導を離れて働きを受けついでいかねばならないことを実感されると、弟子たちを力づけ、彼らを将来のために準備させようとなさった。キリストはまちがった希望を与えて、弟子たちを欺くことはなさらなかった。開かれた本を読むように、主は起こるべきことを読みとられた。主はご自身がまもなく弟子たちから引き離され、彼らがおおかみの中の羊のようにとり残されることをごぞんじであった。彼らが迫害を受けることや、ユダヤの会堂から追い出されること、そして、牢ろうに投げ込まれることを知っておられた。また、メシヤとしてのキリストをあかししたために、ある者はいのちを落とすであろうということもごぞんじであった。それで主は、弟子たちの将来に関する大切なことを彼らにお語りになった。やがて来る試練の時に、彼らが主のことばを思い出して、主を救い主としてますます強く信じることができるように、主は弟子たちの将来について、明確にお語りになった。 [14]

キリストはまた、弟子たちに希望と勇気に満ちたことばをお語りになった。「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。わたしがどこへ行くのか、その道はあなたがたにわかっている」（ヨハネ一四ノ一一四）。あなたがたのためにわたしはこの世界に来た。あなたがたのためにわたしは働いてきた。わたしは、去っても、なお熱心にあなたがたのために働くであろう。わたしは、わたし自身をあなた

がたに現すためにこの世界に来た。あなたがたが信じるようになるためである。わたしは、わたしの父であり、またあなたがたの父でもあられる方のもとに行き、あなたがたのためにみ父に協力するのである。

「よくよくあなたがたに言っておく。わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう。そればかりか、もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみ
[15] もとに行くからである」（ヨハネ一四ノ一二）。このように言われたのは、弟子たちがキリストがなされた以上に立派な仕事をするというのではなく、弟子たちの働きがより大きくひろがっていくであろうという意味であった。主は奇跡を行うことばかりでなく、聖霊の働きのもとに行われるすべてのわざに注意をひかれたのである。「わたしが父のみもとからあなたがたにつかわそうとしている助け主、すなわち、父のみもとから来る真理の御霊が下る時、それはわたしについてあかしをするであろう。あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのであるから、あかしをするのである」と主は言われた（ヨハネ一五ノ二六、二七）。

このみことばはすばらしく成就した。聖霊が降下したのち、弟子たちは主と、主が身代わりとなって死なれた人々に対する深い愛に満たされたので、弟子たちの語ることばやささげる祈りによって、人々の心は解かされたのである。弟子たちは聖霊の力によって語り、その力の感化によって幾千もの人々が改心した。

キリストの代表者として、使徒たちはこの世に決定的な印象を与えなければならなかった。彼らが身分の低い人々であったということは、彼らの感化力を減少させず、かえってそれを増した。聞く人々の心は弟子たちから救い主へと導かれた。たとえ目には見えなくとも、主は今もなお、弟子たちと共に働いておられたからである。使徒たちのすばらしい教えや、勇気と信頼に満ちたことばは、彼らの働きが自分たちの力でなされているのではなく、キリストの力でなされているのだということをすべての人々に確信させるのである。彼らは、謙遜に、ユダヤ人が十字架に
[16] つけたおかたこそいのちの君、生ける神のみ子であることを言明する。そのおかたの名によって、主が行われたみわざを受け継いで行っているのであると、弟子たちは公言するのである。

救い主は十字架におつきになる前夜、弟子たちに別れのことばを述べられたが、その中でご自分が耐えてこられた苦難と、またこれから耐えねばならない苦難については一言も触れられなかった。主はご自分の前にある屈辱についてお語りにならずに、弟子たちの信仰を強めるものを彼らの心に与え、勝利者のために備えられているよろこびを待ち望むようにし向けられた。これまで約束されたことよりももっと多くのことを、弟子たちのためになさることができるということ、また、主から愛とあわれみが流れ出て魂の宮をきよめ、人々を主に似た品性の者とするということ、また、み霊たまの力によって武装された主の真理が、勝利の上にもなお勝利を得ようとして出て行くのだということを知って、主はよろこばれた。

「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」とキリストは言われた（ヨハネ一六ノ三三）。キリストは失敗をなさらなかったし、失望もされなかった。だから弟子たちも同じように忍耐強い信仰を示さなければならなかった。彼らは主から力をいただき、主が働かれたように働かなければならなかった。たとえ、明らかに不可能な事によって道をふさがれようとも、なお、彼らは主の恵みにより、失望することなく、すべてに望みを抱いて、ひたすら前進しなければならなかった。[17]

キリストはご自身にゆだねられた仕事をなし遂げられた。そして、そのみわざが人々の間で続けられるように、弟子たちを召集されたのである。主は言われた、「わたしは彼らによって栄光を受けました。わたしはもうこの世にはいなくなりますが、彼らはこの世に残っており、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに賜わった御名によって彼らを守って下さい。それはわたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります」。「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします。・・・・それは・・・・みんなの者が一つとなるためであります。・・・・わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは、彼らが完全に一つとなるためであり、また、あなたがわたしをつかわし、わたしを愛されたよう

に、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります」（ヨハネ一七ノ一〇、一一、二〇ー二三）。

第三章　大いなる任命 [18]

キリストがなくなられてのち、弟子たちはほとんど失望に打ちひしがれていた。彼らの主は拒絶され、有罪とされ、十字架につけられた。祭司や役人たちは嘲弄ちょうろうして言った、「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。あれがイスラエルの王なのだ。いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう」（マタイ二七ノ四二）。弟子たちの希望の太陽は沈んだ。そして夜が彼らの心にたれこめた。彼らは幾度もつぶやいた、「わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました」（ルカ二四ノ二一）。弟子たちは寂しく煩悶はんもんしながら主のみことばを思い出していた、「もし、生木でさえもそうされるなら、枯木はどうされることであろう」（ルカ二三ノ三一）。

イエスは弟子たちに何度も、これから起こることを明らかにしようとされたが、彼らは主が言われたことを考えようとしなかった。このために主の死は、彼らにとって思いがけないこととしてやってきたのである。のちに彼らが [19]
過ぎこしかたを振り返って、自分たちの不信の結末を見たときに、悲しみで胸がいっぱいになった。キリストが十字架にかけられたとき、彼らは主がよみがえられるとは信じていなかった。主は、三日目によみがえるとはっきりお語りになっていたが、彼らは主の言われたことに当惑していた。この理解不足のために、彼らはキリストがなくなられた時、全く絶望状態になったのである。彼らはひどく失望していた。彼らの信仰は、彼らの視界をさえぎるようにサタンが投げかけた影のかなたを見透とおさなかった。彼らにはすべてがばく然としていて、不可解であった。もし弟子たちが救い主のみことばを信じていたならば、どんなにか悲しみも少なかったことであろう。

落胆と悲歎と失望に打ちのめされた弟子たちは二階座敷に集まり、自分たちも愛する恩師と同じ運命をたどるのではないかと恐れて、戸口を全部かたく閉ざしていた。とこ

ろがこの場所に、救い主はよみがえられて姿を現されたのである。

四十日間、キリストは地上にとどまられて、弟子たちにゆだねられた仕事の準備をさせ、彼らがこれまで理解できていなかったことを説明された。主はご自身の来臨のことや、ユダヤ人に拒まれたこと、またご自身の死についての預言のことを語り、これらの預言がことごとく成就してきたことを指摘された。キリストはこの預言の成就こそ、取りも直さず弟子たちのこれからの仕事に、力がさずけられることを確証するものだと理解しなければならないと、彼らに語られた。聖書にこう書かれている、「聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、言われた、『こう、しるしてある。キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。そして、その名によって罪のゆるしを得させる悔改めが、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられる。』」そして「『あなたがたは、これらの事の証人である』」とイエスはつけ加えられた（ルカ二四ノ四五－四八）。

[20]

キリストが弟子たちと共に過ごされたこの四十日間に、彼らは新しい経験を得た。敬愛する恩師が、既に起こったことに照らして聖書を説明されるのを聞きながら、彼らは主を信ずる信仰を十分に確立した。彼らは、「わたしは自分の信じてきたかたを知って」いると、言えるところにまで到達した（テモテ第二・一ノ一二）。彼らは自分たちの仕事の性質と、その範囲を認識し、彼らにゆだねられている真理を世に宣べ伝えなければならないことを知りはじめた。キリストのご生涯のさまざまな事件、キリストの死とよみがえり、こうした事件を指し示す預言、救いの計画の奥義、罪をゆるすイエスの力、彼らはこうしたすべてのことの証人となって、それを世界に伝えなければならなかった。彼らは悔い改めと救い主の力によって、平和と救いの福音を宣べ伝えなければならなかった。

昇天される前に、キリストは弟子たちに任務をお与えになった。彼らは永遠のいのちの宝を世に伝えるという、主のご遺言の執行者にならねばならないと、主はお命じになったのである。あなたがたは、この世のためにしたわたしの犠牲の生涯の証人となったのだと、主は彼らに言われた。あなたがたは、わたしがイスラエルのためになしたわ

ざを見てきた。そして、たとえわたしの民がいのちを得るためにわたしのもとに来なくとも、たとえ祭司や役人が記録にあるとおりのことをわたしに向かって行ったとして [21] も、たとえ彼らがわたしを拒んだとしても、彼らには神 [22] のみ子を受けいれるまた別の機会が与えられているのである。自分の罪を告白して、わたしのもとに来る者を、わたしがみな快く受け入れるのをあなたがたは見てきた。わたしのもとに来る者をわたしは決して追い出しはしない。わが弟子たちよ、わたしはあなたがたにこの恵みの使命をゆだねる。それは、ユダヤ人にも異邦人にも、最初にイスラエル人に、それからすべての民族、国語、国民らに与えられなければならない。信じる者がすべて、一つの教会に集められなければならない。

福音の任命は、キリストの国の宣教大憲章である。弟子たちは人々のために熱心に働き、すべての人人に恵みの招待状を渡さなければならなかった。彼らは人々がやってくるまで待つのではなく、使命を携えて人々のところに行かなければならなかった。

弟子たちはキリストのみ名によって、働きを進めて行かなければならない。彼らの言葉や行動はみ名にしっかり結びつけられていて、生き生きした力を持ち、それによって罪人たちが救われるのでなければならない。彼らの信仰は、あわれみと力の源であられるかたに集中する。そのみ名によって彼らはみ父に嘆願し、答えをいただくのであった。弟子たちは、父、み子、聖霊の名によってバプテスマを施さなければならない。キリストのみ名は彼らの合い言葉、彼らを区別するバッジ、一致のきずな、彼らの行動方針を支持する権威、成功の源となるはずであった。キリストの名が書かれていないものは、神の国では認められるはずはないのである。

キリストは、わたしの名によって出て行き、信じる者を [23] すべて教会に集めよと弟子たちに言われたとき、単純さを保つことの必要を彼らに明らかにお示しになった。見栄や見せびらかしが少なければ、それだけ彼らの感化は大きいのである。弟子たちはキリストがお語りになったような単純さで語らなければならなかった。彼らはキリストから教えられた教訓を、聞く者たちの心にしっかり刻みつけなければならなかった。

キリストは弟子たちに、彼らの働きが容易であるとは言われなかった。主は彼らにこぞって対抗する、膨大な悪の連合体を示された。彼らは「もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対」して戦わなければならないであろう（エペソ六ノ一二）。しかし彼らは、自分たちだけで戦わなければならないのではなかった。主は彼らと共にいること、そして彼らが信じて進むならば、彼らは全能者の盾のもとに行動することを約束なさった。キリストは彼らに、雄々しく強くなるようにとお命じになった。み使いよりも強い、天の軍勢の将が彼らの隊列の中におられるからである。キリストは彼らの任務遂行のために万全を期し、その成果の責任をみずからお取りになった。主のことばに従い、主と連携して働く限り、彼らに失敗はなかった。キリストは、すべての国民のもとへ行けと弟子たちにお命じになった。地球上の人の住むところにはどこへでも行き、そこにもわたしがあなたと共にいることを確信しなさい。信じて、自信をもって働きなさい。わたしがあなたを見捨てるような時は決して来ないからである。わたしはいつもあなたがたと共にいて任務を果
[24] たすのを助け、あなたがたを導き、慰め、きよめ、支え、人々の注意を天に向けさせる言葉を上手に語らせてあげよう。

キリストは人類のために、十分に完全な犠牲をお払いになった。あがないの条件は満たされていた。キリストがこの世に来られた目的のわざは完了していた。キリストはすでに王国を勝ちとられた。主はサタンからそれを勝ちとり、万物の継承者となられたのである。キリストは神のみ座に向かう途上におられて、やがて天の軍勢にあがめられるはずであった。主は限りない権威の衣をまとって、弟子たちにお命じになった、「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」（マタイ二八ノ一九、二〇）。

キリストは弟子たちとお別れになる直前に、もう一度神の国の本質を明らかにご説明になった。主は、これまで神の国について弟子たちにお語りになった事を思い出さ

せて、この地上に一時的な王国を築くことが主の目的なのではないとご説明になった。主はダビデの王位について地上の君主として治めるように任命されたのではない。「主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか」と弟子たちが質問したとき、「時期や場合は、父がご自分の権威によって定めておられるのであって、あなたがたの知る限りではない」と主はお答えになった（使徒行伝一ノ六、七）。主が未来について弟子たちにわからせようとしてお与えになった啓示以上のことを、彼らがわかろうとする必要はなかった。彼らの仕事は、福音の使命を伝えることであった。

キリストの目に見える姿は弟子たちから消え去ろうとしていたが、新しい力が彼らにさずけられるはずであった。[25] 聖霊が十分に彼らにさずけられて、彼らの任務が保証されなければならなかった。「見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」と救い主は言われた（ルカ二四ノ四九）。「すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう。」「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」（使徒行伝一ノ五－八）。

救い主は、たとえどんなに筋が通っていても、議論をもってしては固い心を溶かしたり、世俗と私欲のからを破ることはできないことを知っておられた。また、弟子たちが天来の賜物を受けなければならないことを知っておられた。また、道であり、真理であり、いのちであるかたをほんとうに知ることによって暖められた心と、雄弁にされた唇から伝える時に、福音は、はじめて効果をあらわすこともごぞんじであった。悪の潮流は弟子たちに対抗して激しく深く流れていたので、彼らにゆだねられた働きは強力に進められる必要があった。固い決意で警戒を怠らない首領が暗黒の勢力を指揮していたので、キリストに従う者たちは、神が聖霊によって賜わる助けによらないで、正義のための戦いをたたかうことができなかった。

キリストは弟子たちに、彼らの働きをエルサレムで始
[26] めるようにと言われた。この町は、キリストが人類のため
にささげられた驚くべき犠牲の舞台であった。そこでキリ
ストは人性の衣をまとい、人々と共に歩き、語られたが、
天国がどれほどこの世に近づいていたかを見きわめた者は
ほとんどいなかった。その場所で主は罪を宣告され、十字
架にかけられたのである。エルサレムにはナザレのイエス
がメシヤだと、ひそかに信じていた人々が大ぜいいたし、
祭司や役人にだまされていた人々も大ぜいいた。こうした
人々に福音は宣べ伝えられなければならない。彼らは悔い
改めるように招かれなければならなかった。キリストを通
してはじめて、罪の赦免がなされるという驚くべき真理が
明らかにされなければならなかった。また、過去数週間の
感動的な事件に、エルサレム全体がわき立っていたあいだ
こそ、弟子たちの説教は最も深く影響を及ぼすことであろ
う。

イエスは、公生涯のあいだ、この世を罪の奴隷の身か
ら自由にさせるには、主の働きにおいて弟子たちが主と
一つになることだと、絶えず彼らに教えておられた。主が
神の国を宣べ伝えさせるために十二人を送り出し、後に七
十人を送り出されたのは、主が弟子たちにお教えになった
事を、他の人々に伝える義務があるのだということをお教
えになるためであった。主はご自身のすべてのみわざの中
で、個々の働きから彼らの仲間が増えるにしたがって働き
をひろげ、最後には地上のすみずみにまで達するように、
弟子たちを訓練しておられたのである。主に従った者たち
に主がお与えになった最後の教訓は、彼らがこの世のため
に救いのよきおとずれを委託されているのだということで
あった。

キリストは、み父のもとに昇天なさる時が来たとき、弟
[27] 子たちをできるだけ遠く離れたベタニヤまでお導きになっ
た。そこで、主は立ち止まり、弟子たちは主のまわりに集
まった。主は、あたかも主の守りを保証なさるかのように
両手を広げて祝福なさり、ゆっくりと弟子たちのあいだか
らのぼって行かれた。「祝福しておられるうちに、彼らを
離れて、〔天にあげられた〕」（ルカ二四ノ五一）。

弟子たちが昇天して行かれた主の、最後のみ姿を捉と
らえようと上の方を見上げていると、主は天使たちのよ

ろこびの群れに迎えられた。これらの天使たちは天の宮廷へとキリストを護衛して行き、勝利の歌をうたった、「地のもろもろの国よ、神にむかって歌え、主をほめうたえ。いにしえからの天の天に乗られる主にむかってほめうたえ。・・・・力を神に帰せよ。その威光はイスラエルの上にあり、その力は雲の中にある」（詩篇六八ノ三二ー三四）。

弟子たちがなおも熱心に天を見ていると、「見よ、白い衣を着たふたりの人が、彼らのそばに立っていて言った、『ガラリヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう」（使徒行伝一ノ一〇、一一）。

キリストの再臨のみ約束は、弟子たちの心にいつも鮮明に刻まれていなければならなかった。彼らが昇天されるのを見ていたそのイエスは、この地上で主の働きに献身する人々をみもとに連れて行くために再び来られるのである。「見よ、わたしは終りまで、いつもあなたがたと共にいる」と彼らに言われた同じ声が、彼らを天のみ国で、み前に迎えてくださるのである。

贖罪しょくざいの象徴的な儀式のときには、祭司長は祭司の服を脱ぎ、一般の祭司の白いリンネルの服を着て務めを行った。そこでキリストも王の衣をお脱ぎになり、人間性をまとわれて、祭司としてのご自身を、いけにえとしてささげられた。大祭司が至聖所の儀式をとり行ったあと、待っている会衆の前に祭司服を着て現れたように、キリストは、「どんな布さらしでも、それほどに白くすることはできないくらいに」真白く輝く衣を着て、再び来られるのである（マルコ九ノ三）。主はご自分の栄光と父の栄光に包まれておいでになり、すべての天使たちの群れが主のあとにつき従うのである。 [28]

こうしてキリストの「またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう」という、弟子たちへの約束は果たされるのである（ヨハネ一四ノ三）。主を愛して待っている人々には、主は栄光と名誉と不死のいのちで報いてくださるであろう。死んでいる義人は墓から出て来るであろう。また生きている義人は空中でとらえられて主にお会いするであろう。人間がこれまで耳にしたどんな音楽よりもす

ばらしいキリストのみ声が、あなたの戦いは終わったとお告げになるのを彼らは聞くであろう。「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」（マタイ二五ノ三四）。

弟子たちは、主がもどって来られる希望を抱いて、大いによろこんだにちがいない。

第四章　聖なる霊下る [29]

本章は使徒行伝二章一節－三九節に基づく

弟子たちがオリブ山からエルサレムにもどってきたとき、人々は彼らが悲しみ、取り乱し、挫折感に打ちのめされて帰ってくるだろうと思いながら彼らを迎えた。しかし人々はそこによろこびと勝利を見た。弟子たちは希望が失望に終わったことを歎なげいてはいなかった。彼らはよみがえられた救い主を見てきたのである。そして別れのとき主が約束されたことばが、彼らの耳の中に絶えず響きわたっていた。

弟子たちはキリストのご命令に従って、エルサレムで天父のお約束の聖霊の降下を待った。彼らは何もせずぼんやりと待っていたのではない。記録によると、「絶えず宮にいて、神をほめたたえていた」としるされている（ルカ二四ノ五三）。彼らはまた、イエスの名によってみ父に願いを申し出ようと集まっていた。天には彼らの代表者であられるおかた、神のみ座でとりなしをされるおかたがおられるのだということを知っていた。彼らは厳粛な畏敬の念に打たれ、「あなたがたが父に求めるものはなんでも、わた [30] しの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい、そうすれば、与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう」という確証をくり返しながら、こうべをたれて祈った（ヨハネ一六ノ二三、二四）。「キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」という、ゆるぎない論証をもち、彼らは信仰の手をますます高く差しのべた（ローマ八ノ三四）。

弟子たちは約束が成就されるのを待っていたあいだ、謙遜な心でほんとうに悔い改め、また自分たちの不信心を告白した。彼らは、キリストがなくなられる前にお語りになったことばを思い出しながら、それらの意味を一層深く理解した。既に記憶から消えてしまっていた真理が再び

心によみがえってきて、彼らはこれを互いにくり返し合った。そして、救い主について誤解していたことを思い、自責の念にかられた。主のすばらしいご生涯の場面が行列のように一つ一つ彼らの前を通り過ぎた。主の純粋できよらかなご生涯を瞑想めいそうしながら、もし、キリストの美しいご品性をあかしする生活をすることができさえすれば、どんな仕事でもむずかしすぎることはなく、どんな犠牲でも大きすぎることはないと思った。もし、過去の三年間をもう一度やりなおすことができるとすれば、弟子たちはどんなにか違った行動をとることだろう。もし、主に再び会うことができさえすれば、どんなにか熱心に、自分たちが主を深く愛していたかを示そうと懸命に努めることであろう。また、不信の言葉や行動で主を嘆かせたことに、[31] どんなにか真心からのおわびを申しあげることであろう。しかし、彼らは、自分たちはゆるされていると考えたとき慰められた。そして、主に対する信仰をできるかぎり勇敢に世の人々の前で告白し、自分たちの不信心の償いをしようと決心した。

弟子たちは人々と接するのにふさわしくなるように、また、日常の交わりの中で罪人をキリストに導くような言葉を語るのにふさわしくなるように、とりわけ熱心に祈った。意見の不一致や優位を望む心をすべて捨て、クリスチャンの交わりの中で互いに親密になった。彼らは神に近づくにしたがい、ますます、キリストとの密接な交わりを許されたことに、すばらしい特権があるということを悟った。理解力がにぶいために、主が彼らに教えようとされた教訓を悟ることができずに、主を何度も悲しませたことを思い出して、彼らの心も悲しみでいっぱいになった。

こうした準備の日々は、深く心をさぐる日々であった。弟子たちは霊的な不足を感じ、救霊の働きをするのにふさわしい者となることができるように、聖油が注がれることを祈り求めた。彼らは自分たちのために祝福を求めたのではない。彼らは魂の救いという重荷を負っていた。弟子たちは、福音が世に宣べ伝えられなければならないことを悟って、キリストが約束された力を求めたのである。

父祖の時代には聖霊の感化はしばしば著しく現されたが、決して満ちあふれるほどではなかった。今、救い主のみ言葉に従って、弟子たちはこの賜物を懇願し、天におい

てはキリストがそのとりなしをしておられた。主はその民にみ霊たまを注ぐことができるように、み霊たまの賜物をお求めになったのである。

「五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっぱいに響きわたった」。 [32]

み霊は、祈りながら待っていた弟子たちに臨み、ひとりびとりの心を十分に満たされた。無限なる神が、力をもって教会にご自身を現されたのである。この力の現れはもう何年ものあいだ、差しとどめられていたかのようであったが、今こそ、天は、み霊たまの恵みの富を教会に注ぐことができることをよろこんだ。そして、み霊の感化のもとに、悔い改めや告白のことばが、罪をゆるされたさんびの歌と交替した。感謝の声があがり、預言のことばがきこえた。全天は崇敬の思いでこの比類のない、無限の愛に輝く知恵を見守り、あがめた。使徒たちはわれを忘れて「ここに愛がある」と叫んだ。彼らは与えられた賜物をしっかりと握りしめた。それから何が起こったであろうか。み霊の剣は、新たに力でとぎすまされ、天来の電光に輝いて、不信仰な者へと突き進み、一日に幾千もの人々が改心した。

「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう」とキリストは弟子たちに言っておられた。「真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは自分から語るのではなく、その聞くところを語り、きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう」（ヨハネ一六ノ七、一三）。

キリストの昇天は、主に従う者たちが約束の祝福を受けることのしるしであった。彼らは、仕事にと

りかかる前にこれを待たなければならなかった。キリス [33]
トは天の門の中に入って行かれて、天使たちのさんびのう [34]
ちに王座につかれた。この儀式が終わるとすぐ、聖霊は豊かな流れとなって弟子たちの上にくだり、キリストは永遠の昔から父と共に持っておられた栄光をお受けになった。ペンテコステの聖霊降下は、あがない主の就任式が完了したことを知らせる天からの通報であった。主は、その約束に従って、ご自分が祭司、また王として、天と地のすべて

の権威を引き継ぎ、神の民の上に立つ油そそがれた者となられたしるしとして、弟子たちに天から聖霊を送られたのであった。

「また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した。」聖霊は炎の舌の形をとって、集まっていた人々の上にくだった。これは、そのとき弟子たちにさずけられた賜物の象徴であった。そして彼らは、それまで知らなかった他国の言葉で流暢りゅうちょうに話すことができた。その炎は、使徒たちが働くときの燃えるような熱意と、その働きに伴う力を現した。

「エルサレムには、天下のあらゆる国々から、信仰深いユダヤ人たちがきて住んでいた。」ユダヤ人たちは離散された期間に、人が住むほとんどすべての場所へ散らされ、異境の生活の中でさまざまの違った国語を話すことを学んでいた。この時、これらのユダヤ人の多くがエルサレムに来て、その時行われていた宗教の祭りに出ていた。そこにはあらゆる国語を話す人々が集まっていた。このように言葉がいろいろ異なっていたことは、福音宣伝のためには非
[35] 常な妨げとなったはずであった。そこで神は、不思議な方法で弟子たちの不足を補われたのである。聖霊は彼らが一生かかってもなし遂げられないことを彼らのためになさった。弟子たちは今、自分たちの働きかけている人々の言語を正確に話して、福音の真理を広く宣伝することができた。この奇跡的な賜物は、彼らの任務が天の認印を押されたものであることを世に示す確かな証拠であった。この時から弟子たちの言葉は、母国語で語ろうと、外国語で語ろうと、純粋で単純で正確であった。

「この物音に大ぜいの人が集まってきて、彼らの生れ故郷の国語で、使徒たちが話しているのを、だれもかれも聞いてあっけに取られた。そして驚き怪しんで言った、『見よ、いま話しているこの人たちは、皆ガラリヤ人ではないか。それだのに、わたしたちがそれぞれ、生れ故郷の国語を彼らから聞かされるとは、いったい、どうしたことか』。」

祭司や役人たちはこの驚くべき現象にひどく立腹したが、人々の暴力に自分たちの身をさらすことになるのでは

ないかと恐れて自分たちの敵意をぐっとこらえていた。彼らはあのナザレ人を殺したが、今ここに、彼のしもべであるガラリヤの無学な人々が、当時語られていたあらゆる国語で、その人の生涯とその働きのことを話しているではないか。祭司たちは弟子たちの奇跡的な力を常識的に説明しようと決めて、これは祭りのために用意されていた新酒を飲み過ぎて酔ったためだとふれ込んだ。中でもとりわけ無知な者たちはこの主張を真に受けたが、知的な者たちはそうではないことを知っていた。そしてそのような違った国語を知っていた人々は、弟子たちの使っている言葉が正確であることを証言した。 祭司たちの非難に答えて、ペテ [36]
ロは、このような事が起こったのは、ヨエルの預言がまさしく成就したのであると言った。このような力はある特別の仕事に適合させるために人々に臨むものだとヨエルが預言したのだと説明した。「ユダヤの人たち、ならびにエルサレムに住むすべてのかたがた、どうか、この事を知っていただきたい。わたしの言うことに耳を傾けていただきたい。今は朝の九時であるから、この人たちは、あなたがたが思っているように、酒に酔っているのではない。そうではなく、これは預言者ヨエルが預言していたことに外ならないのである。すなわち、『神がこう仰せになる。終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。そして、あなたがたのむすこ娘は預言をし、若者たちは幻を見、老人たちは夢を見るであろう。その時には、わたしの男女の僕たちにもわたしの霊を注ごう。そして彼らも預言をするであろう』」と、ペテロは言った。

ペテロは、明瞭に力強くキリストの死とよみがえりをあかしした。「イスラエルの人たちよ、今わたしの語ることを聞きなさい。あなたがたがよく知っているとおり、ナザレ人イエスは、神が彼をとおして、あなたがたの中で行われた数々の力あるわざと奇跡としるしとにより、神からつかわされた者であることを、あなたがたに示されたかたであった。・・・・あなたがたは彼を不法の人々の手で十字架につけて殺した。神はこのイエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせたのである。イエスが死に支配されているはずはなかったからである。」

ペテロは自分の立場を立証するのに、キリストの教えを引用しなかった。それは聴衆の偏見が非常に 大きいの [37]

で、それについて語っても効果がないことを知っていたからである。むしろ彼はダビデのことを語った。ダビデは彼らの国の族長のひとりであると、ユダヤ人からみなされていたからである。「ダビデはイエスについてこう言っている、『わたしは常に目の前に主を見た。主は、わたしが動かされないため、わたしの右にいて下さるからである。それゆえ、わたしの心は楽しみ、わたしの舌はよろこび歌った。わたしの肉体もまた、望みに生きるであろう。あなたは、わたしの魂を黄泉に捨ておくことをせず、あなたの聖者が朽ち果てるのを、お許しにならないであろう・・・・。』」

「兄弟たちよ、族長ダビデについては、わたしはあなたがたにむかって大胆に言うことができる。彼は死んで葬られ、現にその墓が今日に至るまで、わたしたちの間に残っている。」「キリストの復活を・・・・『彼は黄泉に捨ておかれることがなく、またその肉体が朽ち果てることもない』と語ったのである。このイエスを、神はよみがえらせた。そして、わたしたちは皆その証人なのである。」

この光景はまことに興味深い。見よ、人々は弟子たちが、イエスにある真理をそのままあかしするのを聞こうと、四方から集まってくる。彼らは会堂いっぱいに押しかけてくる。祭司や役人たちもまだ、敵意のある暗い顔をしかめてそこにいるが、彼らの心はなおもキリストに対する憎しみに満ち、その手は、この世のあがない主を十字架につけた時の、殺害行為からきよめられていなかった。彼らは使徒たちが強力な迫害や虐殺の手を恐れて、おびえているだろうと思っていた。ところが、彼らは、使徒たちがすべての恐れを乗り越えて、み霊に満たされ、力強くナザレ
[38] のイエスの神性を宣べ伝えているさまを 見るのである。彼らは使徒たちが、ごく最近、屈辱を受け、嘲笑ちょうしょうされ、残酷な手で打たれ、十字架につけられたかたが、いのちの君であって、今や神の右にまで高められていることを、勇敢に宣べ伝えているのを聞く。

使徒たちに耳を傾けていた人々の中には、キリストを罪と死に陥れることに一役買った者もいた。彼らの声は、主を十字架につけよと叫ぶ群衆の声に混じっていた。イエスとバラバが法廷で彼らの前に立ち、ピラトが「おまえたちは、だれをゆるしてほしいのか」とたずねたとき、「そ

の人ではなく、バラバを」と彼らは叫んでいた（マタイ二七ノ一七、ヨハネ一八ノ四〇）。ピラトがキリストを彼らの前に連れてきて、「あなたがたが、この人を引き取って十字架につけるがよい。わたしは、彼にはなんの罪も見いだせない。」「この人の血について、わたしには責任がない」と言うと、「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」と彼らは叫んだのであった（ヨハネ一九ノ六、マタイ二七ノ二四、二五）。

いま、彼らは、十字架につけられたのは神のみ子であったという弟子たちの言葉を聞いている。祭司や役人たちは震えおののいた。人々は罪の自覚と苦悩におそわれた。「人々はこれを聞いて、強く心を刺され、ペテロやほかの使徒たちに、『兄弟たちよ、わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか』と言った。」弟子たちの言葉を聞いていた人々の中に信心深いユダヤ人もいた。彼らは真心から信じていた。語る者の言葉に力が伴い、イエスこそ本当にメシヤであるということを彼らは得心した。

「すると、ペテロが答えた、『悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう。この約束は、われらの主なる神の召しにあずかるすべての者、すなわち、あなたがたと、あなたがたの子らと、遠くの者一同とに、与えられているものである』」。 [39]

ペテロはその罪意識に苦しんでいる人々に、彼らは祭司や役人たちにだまされてキリストを拒んだのである。だから、もし彼らがなおもこれらの人々の勧告をあてにして、祭司や役人たちがキリストを認めないうちは、自分たちも認めようとしないということであれば、彼らは決してキリストを受け入れるようにはならないであろうと熱心に訴えた。これらの有力者たちは、聖職についていても、世的な富や栄誉にあこがれていた。彼らは進んでキリストのところに来て、光を受けようとしなかった。

この天の光に照らされて、キリストが弟子たちに説明しておられた聖書は、完全な真理として彼らの前に燦然さんぜんと輝いた。ベールが取り除かれて、既に廃止されたことが一つ残らず弟子たちの前に明らかになった。弟子たちはキリストの使命の目的と神の王国の性質を全く明快に

理解した。彼らは救い主の力をもって語ることができた。そして、彼らが聞く者たちに救いの計画を説くと、多くの人々が罪を悟り、納得した。祭司たちに教え込まれていた伝統や迷信は、人々の心から取り除かれて、救い主の教えが受け入れられた。

「そこで、彼の勧めの言葉を受けいれた者たちは、バプ
[40] テスマを受けたが、その日、仲間に加わったものが三千人ほどあった。」

ユダヤの指導者たちは、キリストのみわざはキリストの死とともに終わるのだと思っていた。ところが、それどころか、彼らはペンテコステ（五旬節）の日のすばらしい光景を目撃したのである。彼らは、弟子たちがこれまで知らなかった権威と力をさずけられ、また、語る言葉もさまざまのしるしや不思議によって強められて、キリストについて説くのを聞いた。ユダヤ教の根拠地エルサレムでは、幾千もの人々が公然と、ナザレのイエスをメシヤとして信じる信仰をあかしした。

弟子たちは魂の大きな収穫に驚き、おどりあがってよろこんだ。彼らはこのすばらしい収穫を、自分たちの努力の賜物とは考えなかった。彼らは、自分たちは他の人々の働きに参加しつつあるのだと悟った。アダムの堕落以来、キリストは、選ばれたしもべたちにみことばの種をゆだね、人々の心にそれを植えつけさせられた。この地上での生涯をかけて、キリストは真理の種をまき、ご自身の血でそれを潤された。ペンテコステ（五旬節）の日に起こった人々の改心は、この種まきの結果であり、キリストの教えの力を現すキリストの働きの収穫であった。

使徒たちの論証がたとえ、明瞭で信服させるものであったとしても、それだけでは、あれほどはっきりと反抗していた偏見を取り除くことはできなかったであろう。聖霊は聖なる力で、人々の心にその論証をはっきり悟らせた。使徒たちの言葉は、全能者のとぎすまされた矢のように、栄光の主を拒み、十字架につけるほどの恐ろしい罪を犯した人々の罪を悟らせた。

[41] キリストの訓練のもとに、弟子たちは聖霊を必要と感じるように導かれていた。聖霊の教えにより、彼らは最終的な資格を受けて、彼らの生涯をかけた仕事に出て行った。もはや彼らは無学ではなく、無教養でもなかった。もはや

彼らはてんでんばらばらな一団ではなく、また、不調和で矛盾した分子の寄り集まりでもなかった。もはや彼らの望みは、世的な成功を目指すものではなかった。彼らは「心を一つにし思いを一つにして」いた（使徒行伝二ノ四六、四ノ三二）。キリストが彼らの思想となり、キリストの国の前進が彼らの目標であった。彼らは心も品性も主に似たものとなっていた。そして人々は「彼らがイエスと共にいた者であることを認め」た（使徒行伝四ノ一三）。

ペンテコステは彼らに天の啓示をさずけた。キリストと共にいたときには理解できなかった真理が、いま明らかにされた。彼らはこれまで知らなかった信仰と確信を与えられて、聖なるみことばについての教えを受け入れた。キリストが神のみ子であるということは、もはや彼らにとって信仰の問題ではなかった。主が、たとえ人間性を身につけておられても、本当に、メシヤであられることを彼らは知っていた。そして、神が彼らと共におられるのだという確信をもって、世に自分たちの経験を堂々と語った。

弟子たちはイエスのみ名を、確信をもって語ることができた。それは、イエスが彼らの友であり、兄であられたからではなかっただろうか。キリストとの親しい交わりに導かれて、彼らは主と共に天に備えられた場所に座った。キリストをあかしするとき、弟子たちの思想を包んだのは、すさまじく燃えることばであった。弟子たちの心には豊かな深い愛、どこまでも広い慈愛が積みすぎるほど積みこまれていたため、キリストのみ力をあかししに、地の果て [42]
までも行かずにはおられなかった。弟子たちは、キリストが始められたみ働きを進展させたいという、切なる願いでいっぱいであった。彼らはまた、神の恩義の大きさと、彼らの仕事の責任の大きさを悟った。聖霊の賜物に力づけられて、彼らは、十字架の勝利を更にひろげたいという熱意に燃えて出て行った。聖霊は彼らを活気づけ、彼らを通して語った。キリストの平和が彼らの顔から輝き出た。彼らの生涯を奉仕のために主にささげていたので、その顔には神にゆだねきった表情があらわれていた。

[43]

第五章　聖霊の働き

弟子たちにみ霊たまを約束されたとき、キリストはこの地上でのみわざの終わりに近づいておられた。罪を負う者としてご自身にのしかかる罪の重荷を十分に認識されて、十字架の影にお立ちになっていた。キリストは、犠牲としてご自身をおささげになる前に、弟子たちに与えようとしておられた絶対に必要で完全な賜物、限りない主の恵みの富を、彼らのもとに届けてくれる賜物についてお教えになった。

「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである」（ヨハネ一四ノ一六、一七）。救い主は聖霊が主の代表者として、やがて大きな働きをする時があ
[44] ことをご指摘になった。聖霊の神聖な力は、幾世紀 ものあいだ積み上げられてきた悪と戦わなければならなかった。

ペンテコステの当日、聖霊が注がれたその結果はどうであったろうか。復活された救い主についての喜ばしい知らせは、人の住むところにはどこにでも伝えられた。弟子たちがあがないの恵みについての使命を伝えると、人々の心はこの使命の力に従った。教会は四方から集まってくる改心者を見守った。信仰を棄てた人々ももう一度悔い改めた。罪人たちは、高価な真珠を求めて信者たちに加わった。福音に最も激しく反対していた人々もその擁護者になった。「彼らの中の弱い者も・・・・ダビデのようになる。またダビデの家は・・・・主の使のようになる」という預言が成就した（ゼカリヤ書一二ノ八）。どのクリスチャンもみな、お互いのうちに神の愛と慈善心があらわれているのを見た。ただ一つの関心が支配し、一つの対象を求める熱意が他のすべてをのみこんだ。信徒の望みはキリ

ストのご品性に似たものとなることであり、神の国を発展させるために働くことであった。

「使徒たちは主イエスの復活について、非常に力強くあかしをした。そして大きなめぐみが、彼ら一同に注がれた」（使徒行伝四ノ三三）。彼らの働きによってすぐれた人々が教会に加えられた。これらの人々は真理のことばを受け入れて、自分たちの心によろこびと平安を満たしてくれた望みを、他人に分け与える働きに生涯をささげた。彼らはどんな脅迫によっても、拘束されたり脅かされたりすることはなかった。主は彼らによってお語りになり、彼らの行く先々で、貧しい者たちは福音が自分たちに語られるのを聞いた。そして、神の恵みの奇跡が起こった。

人が聖霊の支配に身をゆだねる時、神はこのように大いなる働きをなさることができるのである。 [45]

聖霊の約束は一時代や一民族に限られたものではない。キリストは、み霊たまの聖なる感化は世の終わりにいたるまで、キリストに従う者の上にあると宣言なさった。ペンテコステの日から現代にいたるまで、主とそのみわざに自分のすべてをささげてきた人々に、助け主が送られてきた。キリストを個人的な救い主として受け入れたすべての者に、聖霊は助言者、聖別する者、導き手、証人としてのぞんだ。信ずる者たちは、神に密接につながって生活すればするほど、あがない主の愛と救いの恵みについて一層はっきりと力強くあかしした。幾世紀にもわたる長い迫害と試練の時代に生きて、生涯、聖霊が豊かにとどまった人々は、この世におけるしるしとなり、不思議となった。彼らは天使や人々の前で、人の心を変えるあがないの愛の力をあらわしてきた。

ペンテコステに天から力をさずけられた人々でも、それ以後、もはや誘惑や試みを受けなかったわけではない。彼らは真理や義のためにあかしをしているとき、すべての真理の敵にくり返しおそわれた。敵は彼らのクリスチャン経験を堕落させようとしたのである。彼らは神から与えられた力の限りをつくして、キリスト・イエスにある男女の水準に到達しなければならなかった。また、完全を目指してより高い高みへ達するために、日ごとに新たな恵みを求めて祈った。どんなに弱い者でさえも、聖霊の働きにより、神を信じる信仰を表すことによってきよめられ、洗練さ

れ、高尚にされるように、各自に与えられた力を磨くことを学んだ。彼らは謙遜に、聖霊のつくり変える感化力に自
[46] 分をゆだねたとき、神の 徳を豊かに受けて、神に似たものにつくりかえられた。

キリストがご自分の代表者として聖霊を送るという別れの約束は、時がたっても変わりはない。み霊の恵みが豊かに地上の民に注がれないのは、神が制限しておられるからではない。もし約束の実現がみられないとすれば、それは約束が理解されていないからである。もしだれでも求めるならば、すべてのものはみ霊に満たされるのである。聖霊の必要性を重大に考えていないところには必ず、霊的なかわき、霊的な暗黒、霊的な堕落と死がある。小さな事に気を奪われているときにはいつでも、教会の成長と繁栄に必要な、しかもその後にさまざまの祝福をもたらす神の力が、たとえ限りなく豊富に提供されていても、なお欠けているのである。

これこそ、われわれが力を受ける手段なのだから、み霊の賜物を飢えかわくように求めようではないか。それについて語り、そのために祈り、そのことについて説教しようではないか。両親がその子供たちによい贈り物を与えるときよりももっと気持ちよく、主は人々に聖霊を与えてくださる。み霊のバプテスマを日ごとに受けるためには、働き人がめいめい神に願いをささげなければならない。クリスチャンの働き人は仲間同士集まって、いかに計画し、賢く実行するかということを知ることができるように、特別な助けと天来の知恵を求めなければならない。彼らは特に神がみずからお選びになった大使たちに、任地でみ霊を豊かに注いでくださるように、祈らなければならない。み霊が神の働き人と共にいるとき、真理の宣伝には、この世の名誉や栄光のすべてをもってしても与えることのできない力
[47] が加えられるの である。

神のために献身した働き人がどんな場所にいようと、み霊は共に住んでくださる。弟子たちに語られたことばは、同時にわれわれにも語られている。助け主は彼らのものであるばかりでなく、われわれのものである。どんな緊急の際でも、この世の憎しみのまっただ中にあっても、み霊は、もがき、格闘している魂をささえる力をさずけられる。また彼らの失敗や誤りに気づかせてくださる。悲しみ

や苦しみの中で、見通しは暗く、未来は難問題ばかりのように見えるとき、また、どうしようもない孤独感におそわれているとき、こうした時こそ、聖霊は信仰の祈りに答えて、心を慰めてくださるのである。

異常な環境の中で霊的な恍惚状態をあらわしたからといって、その人がクリスチャンであるなどという確証にはならない。聖潔は忘我の境地ではない。それは意志を全く神に従わすことである。それは神のみ口から出る一つ一つのことばで生きることであり、天の父なる神のみこころをなすことである。光のうちにいるときと同様に、試練のときにも暗黒のときにも神により頼むことである。また、目で見て歩くのでなく、信仰によって歩むことである。それは少しも疑わずに確信をもって神に頼み、神の愛に安らぐことである。

聖霊とは何であるか、その正確な定義づけをする必要はない。み霊は助け主「父のみもとから来る真理の御霊」であるとキリストは言っておられる。聖霊については、人々をあらゆる真理に導く働きにおいて「それは自分から語るのではな」いとはっきり述べられている（ヨハネ一五ノ二六、一六ノ一三）。

聖霊の性質は神秘である。人間はそれについて説明することができない。なぜなら、主がそれを彼らに明らかにされていないからである。空想的な考えを持った人々は聖霊について書かれた聖句を集めて、人間的な解釈をつくり上げるかもしれないが、そのような見解を受け入れたところで教会を強化することにはならない。余りに深いので人間には理解できないこのような神秘については、沈黙が金である。 [48]

聖霊の働きはキリストのみことばに明細に記されている。「それがきたら、罪と義とさばきとについて、世の人の目を開くであろう」（ヨハネ一六ノ八）。罪を自覚させるものは聖霊である。もし罪人がみ霊の生きかえらせる感化力に反応するならば、彼は改心へと導かれて、神の要求に従うことの重大さに目覚めるであろう。

義に飢えかわく、悔い改めた罪人に、聖霊はこの世の罪を取り除く神の小羊を示す。「わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」とキリストは言われた。「聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また

わたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう」（ヨハネ一六ノ一四、一四ノ二六）。

聖霊はあがない主の死によって可能となった救いを与えるために、霊的な生まれかわりの力として賜るものである。み霊は、カルバリーの十字架上でささげられた大きな犠牲に人々の注意を向けさせ、この世に神の愛を示し、改心した人々に聖書の大切な事柄を提示しようと絶えず努めている。

聖霊は人々に罪を認めさせ、義の標準を心に示してから、この世のものに対する愛着を取り除き、魂を聖なる事[49]物への願望で満たす。「あなたがたをあらゆる真理に導い[50]てくれるであろう」と、救い主は言われた。もし人々が作りかえられることを望むならば、全人格のきよめがなし遂げられるであろう。み霊は神に関する事柄を取り、それを魂に刻みつける。み霊の力によっていのちの道は明らかにされ、そこではだれも過ちをおかす必要がない。

はじめから、神は堕落した人類を救うご計画を完成するために人々を用い、聖霊によって働いてこられた。これは父祖たちの生活にはっきりあらわされていた。モーセの時代の荒野の教会に対しても、神は「良きみたまを賜わって彼らを教え」られた（ネヘミヤ記九ノ二〇）。使徒の時代にも、神は聖霊の力により教会のために偉大な働きをなさった。父祖たちをささえ、カレブやヨシュアに信仰と勇気を与え、使徒の教会の働きを効果的なものにした同じ力が、後につづくすべての時代に神の忠実な子らをささえてきた。ワルドー派のキリスト教徒が、暗黒の時代に改革の道を備える助けをしたのも、聖霊の力によるものであった。現代の伝道事業を確立するために道を開拓したり、聖書をあらゆる国家、民族の言葉や方言に翻訳したすぐれた人々の立派な努力も、同じ聖霊の力によるものであった。

そして今日もなお、神はご自身の目的をこの地上に知らせるために教会を用いておられる。今日、十字架の使者たちは町から町へ、ある地方から他の地方へとキリスト再臨の道を備えに出ていく。神の律法の標準は高められつつある。全能の神のみ霊は人々の心に働きかけて、その感化を受けるものたちは、神と神の真理のために証人となるのである。献身した人々が、キリストによる救いの道を明らか[51]にしてくれた光を、他の人々に伝えている姿をあちこちに

見かけるであろう。そして、彼らは、ペンテコステの日にみ霊を受けた人々と同じように、その光を輝かしつづけるならば、み霊の力を更に多く受け、こうして地は神の栄光に輝くのである。

一方、現在の機会を賢明に生かそうともせず、他の人々を啓蒙けいもうする能力が一段と増し加えられる時、すなわち、霊による特別の刷新の時期を、何もしないで待っている人々がいる。彼らは、現在の義務と特権を怠り、彼らの光をほの暗いままにさせておき、それでいて、特別の祝福にあずかる者となる時を待っている。その時がくれば、何の努力もせずに、奉仕をするのにふさわしく変えられると思っているのである。

地上における神のみわざが閉ざされる終末の時には、聖霊の導きにより、献身した信徒たちのささげる熱心な努力に、神の恵みの特別なしるしが伴うのは事実である。種まき時と、収穫のころに東方の国国に降る前の雨、後の雨という比喩ひゆを用いて、ヘブルの預言者たちは、神の教会に異常なほど豊かに霊的恵みがさずけられることを預言した。使徒の時代の聖霊の降下は前の雨、またはさきの雨の始まりであった。そして、その結果はすばらしかった。終わりの時まで聖霊はまことの教会に臨在するのである。

地上の収穫が終わりに近くなると、教会を人の子イエスの来臨に備えるために、霊的な恵みが特別に与えられると約束されている。この聖霊の降下は後の雨にたとえられている。クリスチャンは「春の雨の時」にこの特別の力を収穫の主に求めなければならない。これに応こたえて「主はいなずまを造り、大雨 を人々に賜い」、「豊かに雨を降らせ、・・・・秋の雨と春の雨とを降らせられる」（ゼカリヤ書一〇ノ一、ヨエル書二ノ二三）。 [52]

しかし、今日、神の教会の信徒たちは、すべての霊的成長の源であられる神との強いつながりを持っていなければ、刈り入れの時に備えていることにならないであろう。彼らは絶えずランプの芯しんを切りそろえて、燃やしていなければ、いざというときに特別の恵みにあずかることができない。

恵みを絶えず新たに受けている者たちだけが、日常の必要に応じて、また力を用いる彼らの能力に応じて、力を受けるであろう。霊的な力が特別に賦与されて、やがて救霊

のために驚異的な装備を受ける時が来るのを待ち望むのではなく、彼らは、神の御用にふさわしい器としていただくために、日ごとに神に従っている。彼らは手の届く範囲にある奉仕の機会を毎日利用している。家庭の地味な仕事をしていても、あるいは、有用な社会の職場にいても、どこででも彼らは主のためにあかしを立てている。

キリストでさえこの地上でのご生涯に、毎日必要な恵みを神に求められたということは、献身的な働き人にとって、すばらしい慰めである。神とのこの交わりから、イエスは力を受けて、人々を力づけ、祝福するために出て行かれた。神のみ子が父の前にこうべをたれて祈っておられる姿を見よ。イエスは、神のみ子であったが、祈りを通してご自分の信仰を強め、天との交わりによって、悪に抵抗し、人類の必要に奉仕する力をお受けになった。人類の長兄としてキリストは、弱さに取りまかれ、罪と誘惑の世に住みながらなお、主に仕えたいと望む者たちの必要をごぞ[53]んじである。また、主がつかわすにふさわしいと思っておられる使者たちが、弱く過ちをおかしやすい人間であることもごぞんじである。しかし主の働きに全く献身するすべての人に、主は神からの援助を約束しておられる。神に頼りきって、みわざに惜しみなく献身する信仰、この信仰をもって神に熱心に、忍耐強く懇願すれば、罪との戦いにおいて聖霊の助けを必ず受けることができる。このことを主ご自身の模範は保証している。

キリストの模範に従う働き人はみな、地上の収穫物を実らせるために神が教会に約束された力を受け、これを用いるために備えをする。朝ごとに福音の使者が主の前にひざまずいて、献身の誓いを新たにするとき、神は信仰を覚醒させ、きよめる力をもった聖霊の臨在をお与えになる。日々の勤めに出かけるとき、彼らは見えない聖霊の力によって「神と共に働く者たち」となることができるという保証を受けるのである。

第六章　美しの門での奇跡 [54]

本章は使徒行伝三章、四章一節－三一節に基づく

キリストの弟子たちは自分たちの無能力を深く自覚し、謙遜に、祈りながら、彼らの弱さをキリストの強さに、彼らの無知をキリストの知恵に、彼らの無価値さをキリストの義に、彼らの貧しさをキリストの尽きることのない富に結びつけた。こうして強められ、必要な能力を身につけて、彼らは主への奉仕に臆おくすることなく前進した。

聖霊降下ののち間もなく、熱心な祈りの時間の直後に、ペテロとヨハネは宮に礼拝に出かけたが、美しの門のそばに足のきかない男がいるのを見た。彼は生まれた時から四十才の今まで、苦痛と病気の生活を送っていたのである。この不幸な男は、イエスに会って、いやしていただきたいと長いあいだ願いつづけていた。だが、彼はほとんど体の自由がきかず、偉大な医師、イエスのご活躍の場から遠くへ移されていた。彼の嘆願はやっと聞かれて、何人かの友達が彼を宮の門まで運んで行った。しかし、彼は、宮に着 [55]
いてすぐ、あれほど望みをかけていたおかたがすでに残酷な死を遂げたことを知った。

彼の失望は、彼がイエスにいやされることをどれほど前から熱心に望みつづけていたかを知っていた人々の同情を買った。そして彼らは、通行人が彼を憐あわれんで、その困窮を和らげるためにわずかな物でも彼に恵んでやる気持ちになるようにと、毎日彼を宮に運んできた。ペテロとヨハネが通りかかると、彼はふたりに施しをこうた。弟子たちは気の毒そうに彼を見た。ペテロが言った、「わたしたちを見なさい」。「彼は何かもらえるのだろうと期待して、ふたりに注目していると、ペテロが言った、『金銀はわたしには無い』」。ペテロが自分の貧しさを説明すると、足のきかない男の表情は沈んだ。しかし、ペテロが続けて、「しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい」と言うと、男の顔は希望に輝いた。

「彼の右手を取って起してやると、足と、くるぶしとが、立ちどころに強くなって、踊りあがって立ち、歩き出した。そして、歩き回ったり踊ったりして神をさんびしながら、彼らと共に宮にはいって行った。民衆はみな、彼が歩き回り、また神をさんびしているのを見、これが宮の『美しの門』のそばにすわって、施しをこうていた者であると知り、彼の身に起ったことについて、驚き怪しんだ。

彼がなおもペテロとヨハネとにつきまとっているとき、人々は皆ひどく驚いて『ソロモンの廊』と呼ばれる柱廊にいた彼らのところに駆け集まってきた。」人々は、イエスが奇跡を行ったように、この弟子たちも奇跡を行うことに驚いた。しかもここに、四十年間、無力な足なえであった
[56] この男が、今や苦 痛から解放され、手足を自由に動かして
[57] よろこび、またイエスを信じてしあわせそうにしているのだ。

弟子たちが人々の驚きを見たとき、ペテロが尋ねた。「なぜこの事を不思議に思うのか。また、わたしたちが自分の力や信心で、あの人を歩かせたかのように、なぜわたしたちを見つめているのか」。ペテロは、そのいやしがナザレのイエスの名により、主の力によってなされたもので、そのイエスを神は死からよみがえらせられたのだと、彼らに説明した。「イエスの名が、それを信じる信仰のゆえに、あなたがたのいま見て知っているこの人を、強くしたのであり、イエスによる信仰が、彼をあなたがた一同の前で、このとおり完全にいやしたのである」と、使徒ペテロは強調した。

使徒たちは、いのちの君イエスを拒んで死なせたユダヤ人たちの罪が大きいことをはっきり語った。しかし彼らは、人々を絶望に陥れないように気遣った。「あなたがたは、この聖なる正しいかたを拒んで、人殺しの男をゆるすように要求し、いのちの君を殺してしまった。しかし、神はこのイエスを死人の中から、よみがえらせた。わたしたちは、その事の証人である」とペテロは言った。「さて、兄弟たちよ、あなたがたは知らずにあのような事をしたのであり、あなたがたの指導者たちとても同様であったことは、わたしにわかっている。神はあらゆる預言者の口をとおして、キリストの受難を予告しておられたが、それをこのように成就なさったのである。」ペテロは、聖霊が彼ら

の悔い改めと改心を求めていると強調し、彼らが十字架にかけたかたのあわれみがなくては、絶対に救いの望みがないと言った。キリストを信じる信仰によってのみ、彼らの罪はゆるされることができた。

「だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔 [58]
い改めて本心に立ちかえりなさい」とペテロは叫んだ。

「あなたがたは預言者の子であり、神があなたがたの先祖たちと結ばれた契約の子である。神はアブラハムに対して、『地上の諸民族は、あなたの子孫によって祝福を受けるであろう』と仰せられた。神がまずあなたがたのために、その僕を立てて、おつかわしになったのは、あなたがたひとりびとりを、悪から立ちかえらせて、祝福にあずからせるためなのである。」

こうして弟子たちは、キリストの復活を説いた。聞いていた者たちの多くは、このあかしを待っていた。だから、それを聞いたとき、彼らは信じたのである。それは、キリストが語っておられたみことばを彼らに思い出させた。彼らは福音を受け入れた人々の列に加わった。救い主がおまきになった種は、芽を出し実を結んだ。

弟子たちが人々と話をしているあいだに「祭司たち、宮守がしら、サドカイ人たちが近寄ってきて、彼らが人々に教えを説き、イエス自身に起った死人の復活を宣伝しているのに気をいら立て」た。

キリストの復活後、祭司たちは、キリストの遺体がローマの見張り人の眠っているあいだに、弟子たちに盗まれたという偽りの報告を遠くまでひろめていた。だから、彼らはペテロとヨハネが、彼らが殺したキリストが復活したと説いているのを聞いて、不愉快に思ったのは当然のことであった。特にサドカイ人たちは大いに刺激された。彼らは自分たちが最も大事にしていた教理が危くなり、自分たちの名 声にかかわると感じた。 [59]

新しい信仰に改心する者たちが激増してきたので、パリサイ人やサドカイ人たちは、これらの新しい教師たちを阻止せず宣伝を続けさせるならば、キリストが地上におられたとき以上に、自分たちの信望が危くなるだろうと話し合った。それで、宮守がしらは何人かのサドカイ人たちの手を借りて、ペテロとヨハネを逮捕し、その日ふたりの取り調べをするには遅かったので、そのまま獄に入れた。

弟子たちの敵は、キリストが死からよみがえられたことを認めざるを得なかった。証拠があまりにも明白で疑えなかった。それにもかかわらず、彼らの心はかたくなになり、イエスを死に陥れたその恐ろしい行為を悔いようとしなかった。弟子たちが神の霊感を受けて語ったり行動しているのだという証拠は十分に、ユダヤの役人たちに示されていたにもかかわらず、彼らは真理の使命に固く抵抗していた。キリストが彼らの期待していたような方法では来られなかったので、彼らは、キリストが神のみ子であると悟ったことも時々あったが、なお、その確信をもみ消して、主を十字架につけたのである。神はなお、あわれみをもって彼らに更に証拠をお与えになり、主に立ち帰るもう一つの機会を今、さずけられた。神は弟子たちをつかわして、彼らがいのちの君を殺したことを告げ、この恐ろしい罪の告発をうけて悔い改めるように、もういちど彼らに呼びかけられた。しかし、ユダヤの教師たちは、おのれの義に安んじて、キリストを十字架にかけた責任を迫る人々が、聖霊の導きによって語っているのを認めなかった。

[60] キリストに反対しつづけた結果、祭司たちにとって、反抗のあらゆる行為は、同じ反対を次々に誘発する刺激となった。彼らの強情はますますその度を増した。彼らは服従することができないというのではなく、服従できたのに、そうしようとしなかったのである。彼らが救いから断ち切られたのは、ただ単に、罪を犯して、死に値するからというばかりではなかった。それは、彼らがみずから武装して神に反抗したからであった。彼らは頑固がんこに光を拒み、み霊の、罪を認めさせる働きを押しもどした。不従順な子らを支配する影響力が彼らの中で働き、神に用いられて働いている人々をロぎたなくののしった。彼らの悪意にみちた反逆は、神と、神がそのしもべたちに伝えさせようとお与えになった使命とに敵対して抵抗する行為のたびごとに、激しさを増していった。ユダヤの指導者たちは、毎日悔い改めを拒むごとに、反抗を新たにして、既にみずからまいたものを刈り取る準備をしていた。

神の怒りは、単に罪人の犯した罪のために彼らの上に下るのではなく、罪を悔い改めるよう求められたときに、彼らがその呼びかけに抵抗しつづけ、彼らに与えられた光を無視して、過去の罪を繰り返すことを選んだために下るの

である。もしユダヤの指導者たちが聖霊の説得力に服従していたならば、彼らはゆるされていたはずである。だが、彼らは従うまいと決意していた。同様に、罪びとは拒みつづけることによって、聖霊がもはや感化できないところにわが身を置くのである。

足なえをいやした翌日、アンナスとカヤバは、その他の宮の高位聖職者たちと共に、裁判のために集まった。ふたりの囚人たちが彼らの前に連れてこられた。その同じ部屋で、何人か同じ顔ぶれの人たちの前で、ペテロは以前に、恥知らずにも自分の主を拒んだのであった。ペテロは、今、自分が裁かれるために出頭して、この事をはっきりと思い出した。ペテロにとっては今こそ、自分の臆病おくびょうを償う時であった。 [61]

そこに連なっていた人々は、キリストが裁かれた時にペテロが取った行為を覚えていて、ペテロは今、投獄と死の恐怖におじけづいているであろうと、高をくくっていた。しかし、キリストが最も苦しんでおられた時に、主を拒んだペテロは、衝動的で、自信家であったが、取り調べを受けるためにサンヒドリンに連れて来られたペテロは、以前のペテロとは違っていた。彼は、つまずいて以来、改心していた。彼はもはや誇らず、高慢にならず、謙遜で、自己に頼らない者になっていた。ペテロは聖霊に満たされ、聖霊の力によって、一度捨てたみ名をあがめ、自分の背信の汚点を取り除く決意であった。

これまで祭司たちはイエスの十字架の刑や復活について語ることを避けていた。しかし、今、彼らは目的を達成するにあたって、足のきかない男のいやしがどのようにしてなされたのか、調査せざるを得なかった。「あなたがたは、いったい、なんの権威、また、だれの名によって、このことをしたのか」と、彼らは尋ねた。

ペテロは敬虔けいけんな勇気と、聖霊の力によって、恐れることなく言明した、「あなたがたご一同も、またイスラエルの人々全体も、知っていてもらいたい。この人が元気になってみんなの前に立っているのは、ひとえに、あなたがたが十字架につけて殺したのを、神が死人の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのである。このイエスこそは『あなたがた家造りらに捨てられたが、隅のかしら石となった石』なのである。この人 [62]

による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」。

この勇敢な抗弁にユダヤの指導者らは胆をつぶした。サンヒドリンの前に引き出されたら、弟子たちはきっと恐れ、とまどうにちがいないと、彼らは想像していたのである。ところがそれどころか、この証人たちはキリストがお語りになったように、敵を黙らせてしまうような説得力で語った。キリストこそは「あなたがた家造りらに捨てられたが、隅のかしら石となった石」であると断言したペテロの声に、恐怖の色はみじんもなかった。

ペテロはここで、祭司たちがよく知っている比喩ひゆを用いた。昔から預言者たちは捨てられた石について語っていた。キリストご自身も、あるとき、祭司や長老たちにお語りになって、「あなたがたは、聖書でまだ読んだことがないのか、『家造りらの捨てた石が隅のかしら石になった。これは主がなされたことで、わたしたちの目には不思議に見える』。それだから、あなたがたに言うが、神の国はあなたがたから取り上げられて、御国にふさわしい実を結ぶような異邦人に与えられるであろう。またその石の上に落ちる者は打ち砕かれ、それがだれかの上に落ちかかるなら、その人はこなみじんにされるであろう」（マタイ二一ノ四二－四四）と言われた。

使徒たちの大胆な言葉を聞いていた祭司たちは、「彼らがイエスと共にいた者であることを認め」た。

[63] 弟子たちがキリストの変貌を目撃したとき、その驚くべき光景の最後に「彼らが目をあげると、イエスのほかには、だれも見えなかった」と書かれている（マタイ一七ノ八）。「イエスのほかには」という言葉には、初代教会の歴史を特徴づけたいのちと力の秘訣ひけつが包含されている。弟子たちは最初、キリストのみことばを聞いたとき、自分たちには主が必要だと思った。彼らは主を求めて、見いだし、そして、主に従った。彼らは、宮で、食卓で、山腹で、また野で、主と共にいた。彼らはひとりの師を持つ弟子たちとして、毎日主から永遠の真理について教えを受けた。

救い主の昇天後も、なお、弟子たちには愛と光に満ちた神の臨在感があった。それは人格を備えたおかたの存在で

あった。彼らと共に歩き、語り、祈られた救い主イエス、また、彼らの心に希望と慰めをお語りになったイエスは、平和の福音を語っておられるあいだに、彼らから天へと上げられたのであった。天使たちの馬車が主を迎え入れたとき、主のみことばが下ってきた、「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」（マタイ二八ノ二〇）。キリストは人の姿で天に昇られた。弟子たちは、キリストが神のみ座の前におられても、なお、彼らの友であり、救い主であられること、主の思いやりは変わらないこと、主は苦しむ人類といつまでも一体になられるということを知っていた。主があがなわれた人々のために支払われた値を思い出させる、傷ついた手と足を神にお示しになって、ご自身の血の功績を神に献呈しておられることを、弟子たちは知っていた。そして、そのことが分かったとき、弟子たちには、主のために受ける非難に耐える力がわいた。彼らとキリストとの結合は、今や、主が人間 [64]
の姿をとられて彼らと共におられたときよりも、もっと強かった。内住するキリストの光と愛と力は、弟子たちから輝き出て、それを見る人々の目を見張らせた。

キリストは、ペテロが主を弁護して語ることばにご自身の印を押された。この弟子のすぐわきに、説得力のある証人として、奇跡的にいやされた男が立った。数時間前まで無力な足なえであったが、今、健全な体にかえったこの男の容貌ようぼうは、ペテロの言葉に対する重要な証拠となった。祭司や役人たちは沈黙した。彼らはペテロの供述に論駁ろんばくできなかったが、それでもなお、弟子たちの教えを中止させようと決めた。

キリストの最高の奇跡ーラザロのよみがえりーは、世界からイエスとその驚くべきみわざを除こうとする祭司たちの決定を、既に変更できないものにした。それが民衆に対する祭司たちの影響を、速やかに打ちこわしつつあったからである。こうして、彼らはイエスを十字架にかけてしまった。しかし、今やここに、主のみ名によって奇跡を行い、イエスが教えられた真理を宣伝するのを、祭司たちが中止させることができなかったという、確かな証拠があった。足なえのいやしと使徒たちの説教は、すでに、エルサレムを興奮の渦中に巻き込んでいた。

祭司や役人たちは当惑をかくすために、使徒たちを連れ去らせるように命じた。自分たちだけで協議しようと思ったからである。その男がいやされたことを否定するのは無益だということに、彼らは全員同意した。彼らは、できればその奇跡を偽りで包みかくしてしまいたいと思った。し
[65] かし、これは不可 能であった。その奇跡は白昼、群衆の前
[66] で行われて、既に何千人もの人々がそれを知っていたからである。祭司や役人たちは、弟子たちの働きをやめさせなければならないと思った。そうしなければ、イエスが多くの信者を獲得してしまうであろう。そうなると、自分たちが神のみ子の殺害者という罪をきせられることになり、自分たちの恥辱になるであろう。

しかし、祭司たちは、弟子たちを抹殺したいと願ったにもかかわらず、もし弟子たちが依然としてイエスの名によって語ったり、伝道をつづけるならば、最も過酷な罰を与えるとおどす以外どうしようもなかった。彼らはサンヒドリンの議会にもういちど弟子たちを呼び出して、イエスの名によって語ったり、教えたりしないように命じた。しかし、ペテロとヨハネはこれに対して言った、「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい。わたしたちとしては、自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない」。

祭司たちはこのふたりが神の召しに確固たる忠誠を示しているという理由で、思うままにふたりを罰したいと思った。しかし、彼らは民衆を恐れた。「みんなの者が、この出来事のために、神をあがめていた」からである。そこで、弟子たちは何度もおどされ、きびしくいましめられて、釈放された。

ペテロとヨハネが捕らわれていたとき、他の弟子たちはユダヤ人たちの悪意を知っていたので、キリストに示した残酷なことをまた繰り返すのではないかと恐れて、この兄弟たちのためにひたすら祈っていた。ふたりの使徒たちはゆるされるとすぐ、あとの弟子たちを探し、彼らに尋問の
[67] 結果を報告した。 信徒たちは非常によろこんだ。一同は、「口をそろえて、神にむかい声をあげて言った、『天と地と海と、その中のすべてのものとの造りぬしなる主よ。あなたは、わたしたちの先祖、あなたの僕ダビデの口をとお

して、聖霊によって、こう仰せになりました、「なぜ、異邦人らは、騒ぎ立ち、もろもろの民は、むなしいことを図り、地上の王たちは、立ちかまえ、支配者たちは、党を組んで、主とそのキリストとに逆らったのか」。まことに、ヘロデとポンテオ・ピラトとは、異邦人らやイスラエルの民と一緒になって、この都に集まり、あなたから油を注がれた聖なる僕イエスに逆らい、み手とみ旨とによって、あらかじめ定められていたことを、なし遂げたのです。主よ、いま、彼らの脅迫に目をとめ、僕たちに、思い切って大胆に御言葉を語らせて下さい。そしてみ手を伸ばしていやしをなし、聖なる僕イエスの名によって、しるしと奇跡とを行わせて下さい』」。

弟子たちは、キリストが地上におられた時に遭遇された、断固たる反対に自分たちも遭あうことを知ったので、彼らの任命された働きの上に大きな力がさずけられるように祈った。心を合わせてささげられた信仰の祈りは天にのぼり、その答えがかえってきた。彼らの集まっていた場所が揺れ動き、彼らは新たに聖霊をさずけられた。彼らの心に勇気がみなぎり、再びエルサレムへ神のみことばを伝えに出て行った。「使徒たちは主イエスの復活について、非常に力強くあかしをし」、神は彼らの努力に、信じられないほどの祝福をお与えになった。

イエスの名をこれ以上語ってはならないという命令に対して、「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい」と答えて、弟子たちは恐れなくその主義に立った。これは宗教改革の時代に、福音を信じる者たちが戦い抜いて守ったものと同じである。一五二九年にドイツの諸侯がシュパイエル会議に召集された時、宗教の自由を抑圧し、それ以後、改革派の教理の宣伝を厳禁する皇帝の勅令が出された。この世界の希望はまさに抹殺されようとしていた。諸侯はその勅令を受け入れるだろうか。福音の光は、今もなお暗黒の中にいる多くの人々から閉ざされてよいだろうか。世界の大問題が危機にひんしていた。そこで改革派の信仰を受け入れていた人々が集まり、「この勅令を拒否しよう。良心の問題について多数決ということは言えないはずだ」と満場一致で可決した（ドービニエー著「宗教改革史」第一三巻・五章）。 [68]

今日、われわれはこの原則を確固として支持しなければならない。その時以来、幾世紀にわたり、福音教会の創設者や神の証人たちが高くかかげてきた真理と宗教の自由の旗は、この最後の争闘においてわれわれの手にゆだねられている。この大いなる賜物の責任は、聖書の知識をさずけられた人々の上にかかっている。われわれは、聖書のことばを最高の権威として受け人れる。われわれは人間の政府を神が定められたものとして認め、合法的な範囲内でそれに従うことを、聖なる義務として教えなければならない。しかし、その要求が神のご要求と矛盾するときは、人間よりむしろ神に従わねばならない。神のみことばをすべての人間の法律にまさるものとして認めねばならない。「教会がこう言う」、あるいは「国がこう言う」ということのために、「主がこう言われる」ということを放棄してはなら
[69] ない。キリストの王冠は、この世の主権者の王冠より高くかかげられねばならない。

われわれは、権威を無視するようには求められていない。法と秩序に反対する者と思われるようなことをしゃべったとして記録されることがないように、話す言葉でも、書く言葉でも、注意深く気をつけなければならない。われわれの道を不必要に閉ざすようなことを、言ったりしたりしてはならない。われわれはキリストのみ名によって前進し、ゆだねられた真理を擁護しなければならない。もしこの働きを人々から禁じられるような場合には、使徒たちと同じように、「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい。わたしたちとしては、自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない」と答えることができる。

第七章　偽善が招いた死 [70]

本章は使徒行伝四章三二節－五章一一節に基づく

弟子たちがエルサレムで福音の真理を宣べ伝えたとき、神は彼らのことばに有利な証拠を与えられ、民衆はそれを信じた。こうした初期の信者たちの多くは、ユダヤ人の激しい頑迷がんめいさのために、たちどころに家族や友人の縁を切られてしまったので、彼らのために食物や宿を心配する必要があった。

記録によると「彼らの中に乏しい者は、ひとりもいなかった」と書かれており、彼らの必要がいかに満たされたかを伝えている。金銭や持ちものに恵まれた信者たちは、危急の場合によろこんでこれを提供した。彼らは自分たちの家屋や地所を売り、その代金を持ってきて、使徒たちの足もとに置いた。

「そしてそれぞれの必要に応じて、だれにでも分け与えられた。」

信者たちのこのような寛容さは、聖霊が注がれた結果であった。福音を受け入れた人々はみな、「心を一つにし思いを一つにし」た。彼らの心はただ一つの共通な関心事に支配されていた。それは彼らに 委託された伝道事業を成功 [71]
させることであった。彼らの生活に、貪欲どんよくがはいり込む余地はなかった。兄弟たちへの愛や自分たちが引き受けた働きに対する愛は、金銭や所有物に対する愛よりも強かった。彼らは地上の富よりも人の魂を高く評価していることを、実際の働きで証拠だてた。

神のみ霊が生活を支配するときには、常にこのようなことが起こるのである。心がキリストの愛で満たされている人々は、ご自身の貧しさによってわれわれが富むものとなるように、われわれのために貧しくなられたキリストの模範に従う。金銭、時間、感化力など、神のみ手からさずけられた賜物すべてを、彼らはただ福音のわざを進展させる手段として重んじるのである。初代教会ではそうであった。そして、今日も、教会の中で、教会員たちが聖霊の力

に導かれて、世俗的なことがらへの愛着を捨て、自分たちの同胞に福音を伝えるために、よろこんで犠牲をはらうことが見られるならば、宣べ伝えられる真理は、聞くものの心を力強く動かすであろう。

信者たちが示した博愛の模範とひどく違った対照をなして、アナニヤとサッピラの行為があった。霊感を受けてしるされた記録を見ると、このふたりの経験は初代教会史上に汚点を残したことがわかる。みずから弟子だと名乗っていたこのふたりは、他の者たちと共に、使徒たちの説く福音を聞く特権にあずかっていた。彼らは使徒たちが祈り終えたとき「その集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされ」たその場所に他の信者たちと共にいたのである（使徒行伝四ノ三一）。深い確信がその場にいたすべての者にやどり、直接に神のみ霊たまの感化を受けたアナニ
[72] ヤとサッピラは、ある資産を売った収益 を神にささげる誓いを立てていた。

後になってアナニヤとサッピラは欲深い気持ちに負けて、聖霊を嘆かせた。ふたりは約束を後悔しはじめた。そしてキリストのみわざのために立派なことをしたいという願いで心を燃やしてくれた、新鮮な尊い感動を失った。彼らは早まったことをしたと思った。だから自分たちの決心を考え直さなければならない。ふたりはそのことを話し合い、自分たちの誓約を果たさないことに決めた。しかし彼らは、自分たちよりも貧しい兄弟たちの必要を満たすために、自己の資産を手放した人々が信者のあいだで高く評価されているのを見て、厳粛に神にささげていたものを惜しむ自分たちの利己的な心を、人々に見すかされることを恥じ、考え抜いた末、自分たちの資産を売ることに決めた。そして彼らはその収益を全部共同資金にささげたふりをして、その実、売り上げの大部分を手放さなかった。このようにしてふたりは、共同の蓄えから生活を保証され、同時に兄弟たちからも高く評価されると思っていた。

神は偽善と虚偽を憎まれる。アナニヤとサッピラは神との取り引きで詐欺行為を行った。彼らは聖霊を欺いたために、その罪はたちどころに厳しく罰せられた。アナニヤが献金を携えてきたとき、ペテロが言った。「『アナニヤよ、どうしてあなたは、自分の心をサタンに奪われて、聖霊を欺き、地所の代金をごまかしたのか。売らずに残して

おけば、あなたのものであり、売ってしまっても、あなたの自由になったはずではないか。どうして、こんなことをする気になったのか。あなたは人を欺いたのではなくて、神を欺いたのだ。』アナニヤはこの言葉を聞いているうちに、倒れて息が絶えた。このことを伝え 聞いた人々は、みな非常なおそれを感じた。」 [73]

「売らずに残しておけば、あなたのもの・・・・になったはずではないか」とペテロは聞いた。アナニヤは、不当な力が加えられたために、強制されて自分の財産をみんなの益となるようにささげたのではない。彼は自分で選択し、行動したのである。しかし弟子たちを欺こうとして、神を欺いていた。

「三時間ばかりたってから、たまたま彼の妻が、この出来事を知らずに、はいってきた。そこで、ペテロが彼女にむかって言った、『あの地所は、これこれの値段で売ったのか。そのとおりか』。彼女は『そうです、その値段です』と答えた。ペテロは言った、『あなたがたふたりが、心を合わせて主の御霊を試みるとは、何事であるか。見よ、あなたの夫を葬った人たちの足が、そこの門口にきている。あなたも運び出されるであろう』。すると女は、たちまち彼の足もとに倒れて、息が絶えた。そこに若者たちがはいってきて、女が死んでしまっているのを見、それを運び出してその夫のそばに葬った。教会全体ならびにこれを伝え聞いた人たちは、みな非常なおそれを感じた。」

神の無限の英知は、この注目すべき神の怒りの顕示が、若い教会を道徳的な堕落から守るために必要であったことを見通しておられた。信徒たちは急速にふえていった。この信徒数の急増するなかで、神に仕えることを表明しながら、富を礼賛している男女が加えられていたとすれば、教会は危機に陥ったであろう。この刑罰は、人は神を欺くことができない、また、神は心にかくされている罪を見通しになられて、欺かれることがないことを立証した。この刑罰は教会員を虚偽や偽善に陥らぬよう導き、神の ものを盗まぬよう用心させるために、教会に与えた警告としてもくろまれたのである。 [74]

神が貪欲や詐欺や偽善を憎むことを示されたこの実例は、初代の教会ばかりでなく、後につづくすべての時代に対して与えられた危険信号であった。アナニヤとサッピラ

が最初にいだいたのは貪欲であった。彼らは神に約束したものの一部をとっておきたいと望んだために、詐欺と偽善に陥ったのである。

神はご自分の民の働きとささげものによって、福音を宣伝してこられた。任意のささげものと什一が主のみ事業の財源である。神は人におゆだねになった資源から特定の部分、すなわち什一を要求なさっている。神は人がこれ以上ささげるかささげないかということを、人の自由にまかせておられる。しかし聖霊の感化を受けて、ある金額をささげる誓いを立てたら、誓った者はもはやささげた部分に対する権利を持たない。人に対するこのような種類の約束は、義務と見なされるであろう。ましてや神に対する約束は義務以上のものとならないだろうか。良心の法廷において結ばれた約束は、人々との契約書より拘束力が弱いものだろうか。

神の光がひときわ明るく、力強く人の心を照らしているとき、いつもの利己心は手をゆるめて、神のためにささげる気持ちになる。しかしそのときに結ばれた約束が、サタンの側の反対を受けずに果たされると思ってはならない。サタンは救い主の王国がこの地上に築き上げられることをよろこばない。彼は誓われた誓約が多すぎるのではないか、財産を得ようとする努力や、家族の希望を満足させようとする努力に支障をきたすのではないかとほのめかす。

[75] 人間に財産をお恵みになるのは神であって、これをなさ
[76] るのは、彼らがみ事業進展のためにつくすことができるためである。神は日光や雨を送ってくださる。また、植物を豊かに成長させてくださる。神は健康を与えてくださり、目的を果たす能力を与えてくださる。祝福はすべて神の恵み深いみ手から与えられる。その代わりに神は、男にも女にも財産の一部を什一及びその他の献金、すなわち感謝のささげもの、任意のささげもの、また罪のためのささげものとして神に返し、感謝の気持ちを現すよう求められる。神の定めたこの計画にしたがって、あらゆる所得の十分の一や惜しみないささげものなど、資産が倉に蓄えられるならば、主のみわざはゆたかに進展するのである。

しかし人間の心はわがままからかたくなになり、アナニヤやサッピラのように神からの要求を満たしているふりをしながら、財産の一部を隠したい誘惑にかられる。多くの

人々は自分を満足させるためには惜しみなく金銭を使う。男も女も自分の都合を考えて、自分たちの好みを満たしているが、神へのささげものは、しぶしぶと、切りつめて持ってくる。彼らは神の財産が使用された明細書を神がいずれ要求されることや、神がアナニヤやサッピラのささげものをお受けにならなかったように、彼らが倉に携えてきたわずかなものをお受けにならないことを忘れている。

これらの偽証者に課した厳しい罰から、神はあらゆる偽善や詐欺をどれほど深く憎み、軽蔑べつしておられるかをわれわれに学ばせようとされたのである。アナニヤとサッピラはすべてをささげたふりをして聖霊を欺いた。その結果彼らはこの世のいのちと、来るべき世におけるいのちを失った。彼らを罰せら れた同じ神が、今日、すべての [77]
虚偽をとがめられる。偽ることは神にとって忌まわしい行為である。「汚れた者や、忌むべきこと及び偽りを行う者は」聖なる都に「決してはいれない」と神は言われる（黙示録・二一ノ二七）。真実を語るのにいいかげんであったり、あいまいであってはいけない。真実を語ることが生活の一部となるようにしよう。真実をもてあそび、自分の都合のよいように当てはめて偽ることは、信仰の破滅である。「立って真理の帯を腰にしめ」なさい（エペソ六ノ一四）。事実でないことを語る人は、自分の魂を安売りするのである。彼のうそは、とっさの場合の役に立つように見えるかもしれない。こうして、彼は正当なやり方では望めないような商売の発展を期待するかもしれない。しかし最後には、だれも信頼できなくなる。自分がうそつきであるために、ほかの人の言葉を信用できないのである。

アナニヤとサッピラの場合、神に対する欺瞞ぎまんの罪は速やかに罰せられた。同様の罪は教会の後の歴史の中でもしばしば繰り返された。今日でも多くの人々により同じ罪が犯されている。しかし、たとえそれに対する神のご立腹が目に見えるようにあらわされなくとも、使徒の時代と同じように今日も神の御目にそれは憎むべきものである。警告は与えられてきた。神は明らかにこの罪を忌みきらわれた。偽善と強欲に身をやつす者は、みずから自分の魂を破壊していることを知るようになるであろう。

[78]

第八章　ユダヤ議会での証言

本章は使徒行伝五章一二節－四二節に基づく

世界に望みと救いをもたらしたのは、あの恥辱と拷問の道具、十字架であった。弟子たちは富もなく、地位の低い人たちにすぎなかった。また、神のみことばのほかに武器もなかった。それでも彼らはキリストの力に満たされて、馬槽うまぶねと十字架の驚くべき物語を語り、すべての反対に勝利するために出て行った。この世の名誉や承認がなくとも、彼らは信仰の英雄であった。彼らの唇から世界を揺さぶる生き生きとした聖なることばがほとばしり出た。

エルサレムは最も偏見の根深いところで、また、悪人として十字架にかけられたキリストについて、最も混乱した考えがひろまっていたところであったが、弟子たちはその町で、キリストのみわざと使命、十字架、復活、また昇天をユダヤ人の前に示し、いのちのことばを大胆に語りつづけた。祭司や役人たちは使徒たちの明瞭で大胆なあかしを聞いて驚いた。実に、よみがえられた救い主の力が弟子
[79] たちの上にくだっていて、彼らの働きにしるしや奇跡が伴い、信者の数は日増しにふえていった。弟子たちが通る町では人々が病人を大通りに運び出し、「寝台や寝床の上に置いて、ペテロが通るとき、彼の影なりと、そのうちのだれかにかかるようにしたほどであった」。ここにはまた、汚れた霊に苦しめられている人たちも連れてこられた。群衆はその人々のまわりに集まり、いやされた人々は高らかに神をさんびして、救い主のみ名をあがめた。

祭司や役人たちは、キリストが自分たち以上に賞揚されていることを知った。復活を信じないサドカイ派の人たちは、使徒たちがキリストのよみがえられたことを断言するのを聞いて腹を立て、もし使徒たちがそのまま、よみがえられた救い主のことを宣べ伝え、その名によって奇跡を行うとすれば、復活はないと説く教理をだれも信じなくなり、自分たち一派はすぐに絶滅してしまうだろうと考えた。またパリサイ人は使徒の教えがユダヤの儀式を傷つ

け、犠牲のささげ物を無効とする傾向にあると言って怒った。

この新しい教えを抑えようとしたこれまでの努力は、すべてむだであった。こうなると、サドカイ人やパリサイ人は、弟子たちの働きがイエスの死に関しては、自分たちに罪があることを証明することになるので、その働きをやめさせようと決めた。祭司たちはひどく憤慨し、ペテロとヨハネに暴行を加えて、留置場にほうり込んだ。

ユダヤの国の指導者たちは、選ばれた民に対する神の御目的の成就にはなはだしく失敗した。主から 真理の受託者 [80] とされていた人々は、その義務に不忠実だったことを証明した。そこで神は、みわざを行うために他の人々をお選びになった。これらの指導者たちは、彼らが大切にいだいていた教えを放棄していく者たちに向かって、何もわからずに、居丈高になって、義憤だとして、怒りをぶちまけた。彼らは自分たちがみことばを正しく理解しないで、聖書を誤解したり、誤用していた可能性のあることすら認めようとしなかった。彼らはまるで理性を失った人々のように行動した。中には、たかが漁師にしかすぎない者もいるというのに、これらの教師どもが、われわれが民衆に教えていた教義と矛盾する意見を公開する何の権利をもつというのかと、彼らは言った。彼らは、こんな意見を教えることをやめさせなければならないと決意して、教えを説く者たちを投獄したのである。

弟子たちはこのような扱いを受けても動じることなく、落胆もしなかった。聖霊は彼らにキリストの語られたことばを思い出させた、「僕しもべはその主人にまさるものではない。・・・・もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害するであろう。また、もし彼らがわたしの言葉を守っていたなら、あなたがたの言葉をも守るであろう。彼らはわたしの名のゆえに、あなたがたに対してすべてそれらのことをするであろう。それは、わたしをつかわされたかたを彼らが知らないからである」。「人々はあなたがたを会堂から追い出すであろう。更にあなたがたを殺す者がみな、それによって自分たちは神に仕えているのだと思う時が来るであろう。」「わたしがあなたがたにこれらのことを言ったのは、彼らの時がきた場合、わたしが彼

らについて言ったことを、思い起させるためである」（ヨ
[81] ハネ一五ノ二〇、二一、一六ノ二、四）。

宇宙の偉大な支配者、天の神は、弟子たちの投獄の問題をご自身の手の中に引き受けておられた。というのは、人々がみわざに反対して立ち向かってきたからである。夜になって主のみ使いが獄の戸を開き、そして弟子たちに言った、「さあ行きなさい。そして、宮の庭に立ち、この命の言葉を漏れなく、人々に語りなさい」。この命令はユダヤの役人たちが与えた命令に真っ向から反対するものであった。しかし弟子たちは、行政官たちに相談して、許可を受けないうちは、そうするわけにいかないと言ったであろうか。そうではない。「行きなさい」と神が言われたとき、彼らはそれに従った。「彼らは・・・・夜明けごろ宮にはいって教えはじめた。」

ペテロとヨハネが信者たちの前にあらわれて、天使が獄の番人たちの見張りをくぐって自分たちを助け出し、中断している働きに再び取りかかるように命じたいきさつを語ると、兄弟たちは大いに驚き、また、よろこんだ。

とかくするうちに、大祭司やその仲間の者たちが「議会とイスラエル人の長老一同とを召集し」た。祭司や役人たちは弟子たちを暴動罪で告発し、アナニヤとサッピラを殺し、共謀して祭司たちの権利を剥奪したかどで告訴することに決めた。彼らは暴徒を扇動して事態を解決させ、暴徒がイエスにしたように弟子たちにもしてくれることを望んだ。彼らは、キリストの教えを受け入れなかった多くの人々が、ユダヤ当局の専横な支配をきらって、なんらかの
[82] 変化を切望しているのに気づいていた。祭司たちは、もしこれらの不満をいだいている者たちが使徒たちの教える真理を受け入れ、イエスをメシヤとして認めることになれば、全民衆の怒りは、宗教の指導者らに向けられ、キリストを殺害した責任をとらされるのではないかと恐れた。そこで彼らは、これを防止するために強硬な手段を講じることにした。

祭司たちが囚人を引き出してくるよう使いを差し向けると、獄の戸は固く錠がかけられ、番人も部署についていながら、囚人が中にいないという報告が来て、彼らは非常に驚いた。

やがて、驚くべき報告が入ってきた、「『行ってごらんなさい。あなたがたが獄に入れたあの人たちが、宮の庭に立って、民衆を教えています。』そこで宮守がしらが、下役どもと一緒に出かけて行って、使徒たちを連れてきた。しかし、人々に石で打ち殺されるのを恐れて、手荒なことは」しなかった。

使徒たちは獄屋から奇跡的に救出されたとはいえ、取り調べと刑罰から免れたわけではなかった。キリストは、弟子たちと共におられたとき、「あなたがたは自分で気をつけていなさい。あなたがたは、わたしのために、衆議所に引きわたされ」るであろう、と言われた（マルコ一三ノ九）。神は天使を送って彼らを救出することにより、ご自分の愛のしるしと、ご臨在の確証をお与えになった。こんどは彼らが、宣べ伝える福音をさずけてくださった神のために苦しむ番であった。

預言者や使徒たちの歴史には、神に忠誠をつくした立派な模範がたくさんある。キリストの証人たちは、神のご命令にそむくより投獄や拷問や死に耐えてきた。ペテロとヨハネが残した記録は、福音の摂理の賜物の中で、他に劣らず英雄的である。このふたりを滅ぼそうと躍起になっていた人々の前に、二度目に立ったときも、ふたりの言葉や態 [83]
度には何の恐れもためらいも認めることができなかった。そして、大祭司が、「あの名を使って教えてはならないと、きびしく命じておいたではないか。それだのに、なんという事だ。エルサレム中にあなたがたの教えを、はんらんさせている。あなたがたは確かに、あの人の血の責任をわたしたちに負わせようと、たくらんでいるのだ」と言ったとき、ペテロは、「人間に従うよりは、神に従うべきである」と答えた。獄から彼らを救い出して、宮で教えるようにと命じたのは、天からのみ使いであった。彼らは天使の指示に従って、神のご命令に従っていたのである。これこそ、彼らがどんな値を払ってでも、やり通さなければならないことである。

それから霊感を与えるみ霊たまが弟子たちの上にくだった。訴えられた者が訴える者となり、議会を召集した人々をキリストの殺害者として告訴した。「わたしたちの先祖の神は、あなたがたが木にかけて殺したイエスをよみがえらせ、そして、イスラエルを悔い改めさせてこれに罪の

ゆるしを与えるために、このイエスを導き手とし救主として、ご自身の右に上げられたのである。わたしたちはこれらの事の証人である。神がご自身に従う者に賜わった聖霊もまた、その証人である」とペテロは強調した。

これを聞いたユダヤ人たちは、激しい怒りのあまり、自分たちで勝手に制裁を加えて、これ以上の裁判を行わず、ローマの役人たちの許可も得ずに、彼らを殺してしまおうと思った。すでにキリストの血を流す罪を犯していた彼らは、今度は主の弟子たちの血で彼らの手を汚すことに躍起になった。

議会において、弟子たちの語る言葉の中に神のみ声を
[84] 認めた者がひとりいた。それは評判のよいパリサイ人ガ
[85] マリエルで、学識があり、高い地位についていた。彼の明晰な知性は、祭司たちのもくろんでいる乱暴な手段が恐ろしい結果を招くことを見抜いた。出席している人々に語る前に、彼は囚人たちを外に連れ出すように頼んだ。彼は処理しなければならない問題のかなめをよく知っていた。また、キリストを死につけた人々が、目的遂行のためには手段を選ばないことも知っていた。

それから彼は、非常に慎重に、落ち着いて言った、「イスラエルの諸君、あの人たちをどう扱うか、よく気をつけるがよい。先ごろ、チウダが起って、自分を何か偉い者のように言いふらしたため、彼に従った男の数が、四百人ほどもあったが、結局、彼は殺されてしまい、従った者もみな四散して、全く跡方あとかたもなくなっている。そののち、人口調査の時に、ガラリヤ人ユダが民衆を率いて反乱を起したが、この人も滅び、従った者もみな散らされてしまった。そこで、この際、諸君に申し上げる。あの人たちから手を引いて、そのなすままにしておきなさい。その企てや、しわざが、人間から出たものなら、自滅するだろう。しかし、もし神から出たものなら、あの人たちを滅ぼすことはできまい。まかり違えば、諸君は神を敵にまわすことになるかも知れない」。

祭司たちはガマリエルの考えが正当なことを知って、しかたなく彼に同意した。しかし偏見や憎悪をおさえることができず、弟子たちをむち打ち、今後イエスの名によって語るなら二度と命はないと言いわたして、しぶしぶ釈放した。「使徒たちは、御名のために恥を加えられるに足る者

とされたことを喜びながら、議会から出てきた。そして、毎日、宮や家で、イエスがキリストであることを、引きつづき 教えたり宣べ伝えたりした。」 [86]

キリストは十字架にかかる少し前に、平安の遺産を弟子たちに残された。「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」と主は言われた（ヨハネ一四ノ二七）。この平安は世と一致することによってくる平安ではない。キリストは悪と妥協することによって平安を買いとられたことはない。キリストが弟子たちに残されたのは、うわべの平安ではなく、心の平安であり、反目や争いの中にも絶えずキリストの証人と共にとどまるものであった。

キリストはご自身についてこう言われた、「地上に平和をもたらすために、わたしがきたと思うな。平和ではなく、つるぎを投げ込むためにきたのである」（マタイ一〇ノ三四）。平和の君、主は、なお、分裂を引き起こす者であられた。よろこばしい知らせを伝えて、人の子らの心に希望とよろこびを起こさせるために来られた主は、人々の心の内奥を燃やし、激しい情熱を起こす戦いを開始された。そして主は従う者たちに警告しておられる、「あなたがたは、この世ではなやみがある」。「人々はあなたがたに手をかけて迫害をし、会堂や獄に引き渡し、わたしの名のゆえに王や総督の前にひっぱって行くであろう。」「しかし、あなたがたは両親、兄弟、親族、友人にさえ裏切られるであろう。また、あなたがたの中で殺されるものもあろう」（ヨハネ一六ノ三三、ルカ二一ノ一二、一六）。

この預言は著しく成就した。サタンは人々の心をそそのかし、イエスに従う者たちを思いつくかぎり の侮辱、非 [87]
難、残酷行為に陥れた。これは再び、著しく繰り返されるであろう。この世的な心は、いまだに神の律法に敵対し、その命令に従わないからである。今日の世界は使徒の時代と同様、キリストの原則に少しも調和していない。「彼を十字架につけよ、彼を十字架につけよ」と囃はやし立てた同じ憎しみや、弟子たちを迫害に陥れた同じ憎しみは、今もなお、不従順な子らの心に働いている。暗黒時代に人人を牢獄や流刑や死に渡し、宗教裁判のひどい拷問を思いつ

き、聖バーソロミューの大虐殺を計画して執行し、またスミスフィールドの火責めをあおったその同じ精神が、改心されていない人々の心の中で、今も悪意をいだいて活発に働いている。真理の歴史は常に善悪間の闘争の記録であった。福音の宣伝は、この世で反対と危険と損失と受難に直面しながらも常に先へと伝えられてきた。

過去において、キリストのために迫害を受けてきた人々が持っていた力は何であったのか。それは、神との一致、聖霊との一致、キリストとの一致であった。多くの者は、そしりと迫害によって、地上の友から引き離されたが、キリストの愛からは引き離されていなかった。魂が、あらしに悩まされ、真理のためにそしりを受ける時ほど、救い主の愛を深く受ける時はない。「わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう」とキリストは言われた（ヨハネ一四ノ二一）。信者が真理のためにこの地上の法廷に立つ時、キリストは彼のそばにお立ちになる。彼が牢獄の中に閉じこめられる時、キリストは彼にあらわれてその愛によって彼の心を励まされる。彼がキリストのために死刑を受ける時、救い主は、人々は肉体を殺すことができても、魂を損なうことはできないのだと、彼に言われ
[88] る。「勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる」（ヨハネ一六ノ三三、イザヤ書四一ノ一〇）。

「主に信頼する者は、動かされることなくて、とこしえにあるシオンの山のようである。山々がエルサレムを囲んでいるように、主は今からとこしえにその民を囲まれる。」「彼らのいのちを、しえたげと暴力とからあがなう。彼らの血は彼の目に尊い」（詩篇一二五ノ一、二、七二ノ一四）。

「万軍の主は彼らを守られる・・・・その日、彼らの神、主は、彼らを救い、その民を羊のように養われる。彼らは冠の玉のように、その地に輝く」（ゼカリヤ書九ノ一五、一六）。

第九章　組織と指導者 [89]

本章は使徒行伝六一節－七節に基づく

「そのころ、弟子の数がふえてくるにつれて、ギリシヤ語を使うユダヤ人たちから、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して、自分たちのやもめらが、日々の配給で、おろそかにされがちだと、苦情を申し立てた。」

初代教会は、多くの階級や、さまざまの異なる国籍の人々で構成されていた。ペンテコステ（五旬節）の聖霊降下の時に「エルサレムには、天下のあらゆる国々から、信仰深いユダヤ人たちがきて住んでいた」（使徒行伝二ノ五）。エルサレムに集まってきたヘブルびとの信仰をいだく者たちの中に、ふつうギリシヤ人として知られている人々がいた。彼らとパレスチナのユダヤ人の間には長い間、不信があり、敵意さえ生じていた。

使徒たちの働きの結果改宗した人々の心は、クリスチャンの愛によって和らげられ、ひとつになった。以前には偏 [90]
見をいだいていたにもかかわらず、だれもが互いに仲よくなった。サタンはこの一致が継続するかぎり、福音真理の進展を阻むことができないことを知っていたので、人々の以前の考えかたを利用して、それによって教会に不和の分子をもたらそうとした。

こうして、弟子たちの数が増していくにつれて、敵は、以前からしばしば信仰を持つ兄弟たちをねたましい思いでみつめ、霊的指導者たちのあらさがしをしていたことのある者たちの心に、疑いの気持ちをかき起こすことに成功した。そして「ギリシヤ語を使うユダヤ人たちから、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して・・・・苦情を申し立てた。」つぶやきの原因は、ギリシヤ語を使うやもめたちが日々の配給でおろそかにされがちだと、苦情を申し立てたことにあった。どんな不平等でも福音の精神に反するのはたしかなのだが、その主張のかげで既にサタンは疑いの気持ちをかきたてることに成功していた。いまや、不満をひきおこすすべてのきっかけを除くために、速やかな処置を

講じなければならない。さもないと敵の努力が実って、信者たちのあいだに分裂を招くことになる。

イエスの弟子たちは既に、彼らの信仰経験における一つの危機に直面していた。聖霊の力により、固く一致して働いていた使徒たちの賢明な指導のもとに、福音の使命者にゆだねられた事業は速やかに進展していた。教会は絶えず拡張していた。信者の数がふえるにつれて、責任のある人々の重荷は重くなる一方だった。人がひとりで、いや、仲間が数人集まっても、彼らだけでこれらの重荷を担っていこうとすれば、教会の将来の繁栄は危くなるであろう。
[91] そこで教会の初期のころ、わずかな人々が忠実に負ってきた責任の分担が、これからは必要となった。今や使徒たちはそれまで自分たちだけでささえてきた責任の一部を、他の人たちに任せることによって、教会内の組織を完全にする大切な手段を講じなければならなかった。

聖霊に導かれた使徒たちは、信者を集めて、教会のあらゆる活動力を更に組織だてる計画のあらましを話した。教会を監督している霊的指導者らは、貧しい人々に配給するというような仕事をのがれて、福音宣伝事業の前進に専念すべき時がきたのだと、彼らは説明した。「そこで、兄弟たちよ、あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判のよい人たち七人を捜し出してほしい。その人たちにこの仕事をまかせ、わたしたちは、もっぱら祈と御言のご用に当ることにしよう」と彼らは言った。この提案がきかれ、選出された七人の上に手が置かれて、祈りがささげられ、彼らは厳粛に執事としての務めに任命された。

この特別な仕事を監督するために七人が任命されたことは、教会に大きな祝福となった。この役員たちは教会の全般的な財政面だけでなく、個人の必要を慎重に考慮した。そしてその賢明な管理と敬虔な模範によって、教会の各方面の利害関係を統一して全体にまとめる上に、共労者たちの大切な助けとなった。

この方法が神のみむねにかなっていたことは、すぐによい結果があらわれたことでわかる。「神の言は、ますますひろまり、エルサレムにおける弟子の数が、非常にふえ
[92] ていき、祭司たちも多数、信仰を受けいれるようになった。」この魂の収穫は、使徒たちが一層自由に活動できたことと、七人の執事が熱意と力を示したおかげであった。

これらの兄弟たちは、貧しい人々の必要をかえりみるという特殊な務めをゆだねられたといっても、信仰の教えを説かないでよいわけではなかった。それどころか、彼らは他の人々に真理を教える十分な資格があり、実際熱心にこの働きに携わって成功をおさめたのである。

初代教会には、みわざを絶えず拡張する仕事がゆだねられていた。それは、キリストへの奉仕に進んで献身する正直な人々のいるところには、どこにでも光と祝福の中心を設けることであった。福音宣伝の範囲は世界的なものでなければならなかった。十字架の使命者たちはクリスチャンの一致のきずなで結ばれ、こうして彼らが、神にあってキリストと一つであるということを世に示さないかぎり、彼らの大切な使命を達成することは望めなかった。彼らの指導者である主は、み父に、「わたしに賜わった御名によって彼らを守って下さい。それはわたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります」とお祈りにならなかっただろうか。また、弟子たちについて「世は彼らを憎みました・・・・彼らも世のものではないからです」と言われなかっただろうか。「彼らが完全に一つとなるため」に、「あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるため」にみ父に熱心に求められなかっただろうか（ヨハネ一七ノ一一、一四、二三、二一）。彼らの霊的生活と力は、福音を伝える使命をゆだねて下さったおかたと、いかに親しくつながっているかにかかっているのである。

弟子たちは、キリストにつながっていたときにのみ、聖霊の力を受けて、天使たちの協力を期待する ことができ [93] た。このような天来の力の助けをうけて、彼らは世に対して共同戦線をはることができ、また彼らが暗黒の力にたえまなく立ち向かうことを強いられている戦いにおいて、勝利することができた。弟子たちがたえず結束して働いているかぎり、天使たちは彼らを先導し、道を開くのである。そして人人の心は真理を受け入れる準備をし、多くの者がキリストへと導かれる。彼らが結束しているかぎり、教会は「月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のよう」に前進したのである（雅歌六ノ一〇）。何ものも教会の前進に逆らうことはできなかった。

教会はこの世に福音を宣伝する天来の使命を立派に果たし、勝利から勝利へ進むのである。

エルサレムの教会の組織は、真理の使者が改宗者を福音に導くところではどこででも、教会組織の型となるべきであった。教会全体の監督の責任をゆだねられたものは、神の教会の上に立って尊大にふるまってはならない。かえって、賢明な羊飼いとして「神の羊の群れを牧し・・・・群れの模範となるべきであ」った（ペテロ第一・五ノ二、三）。また執事は「みたまと知恵とに満ちた、評判のよい人」でなければならなかった。これらの人々は一致してその地位を正しく保ち、かたい決意のもとに任務を遂行しなければならなかった。こうして彼らの感化のもとに教会全体は一致した。

初代教会の歴史において、のちに、世界の各地で信者たちの多くのグループによって教会がつくられたとき、秩序と一致した行動とが保たれるように、教会の組織が一層完成された。教会員はみな自分の立場を尽くすようにすすめられた。だれでもみな、自分にゆだねられているタラント[94]トを賢明に用いなけ ればならなかった。中には聖霊によって特別な賜物をさずけられている者もあった。「第一に使徒、第二に預言者、第三に教師とし、次に力あるわざを行う者、次にいやしの賜物を持つ者、また補助者、管理者、種々の異言を語る者」である（コリント第一・一二ノ二八）。しかしこれらすべての種類の働き人は、一致して働かなければならなかった。

「霊の賜物は種々あるが、御霊は同じである。務は種々あるが、主は同じである。働きは種々あるが、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる神は、同じである。各自が御霊の現れを賜わっているのは、全体の益になるためである。すなわち、ある人には御霊によって知恵の言葉が与えられ、ほかの人には、同じ御霊によって知識の言、またほかの人には、同じ御霊によって信仰、またほかの人には、一つの御霊によっていやしの賜物、またほかの人には力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わける力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が、与えられている。すべてこれらのものは、一つの同じ御霊の働きであって、御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられるのである。からだ

が一つであっても肢体は多くあり、また、からだのすべての肢体が多くあっても、からだは一つであるように、キリストの場合も同様である」（コリント第一・一二ノ四ー一二）。

地上の神の教会において、指導者として行動するように召されている人々に負わされている責任は、厳粛である。神権政治の時代に、モーセは重い責任をひとりで負っていて、まもなくその重荷に疲れ果 ててしまうだろうと思われ [95]
たとき、エテロから、その責任を賢く分担するようにと教 [96]
えられた。「あなたは民のために神の前にいて、事件を神に述べなさい。あなたは彼らに定めと判決を教え、彼らの歩むべき道と、なすべき事を彼らに知らせなさい」とエテロは助言した。エテロは更に、人を選び「千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長としなさい」と勧めた。この人たちは「有能な人で、神を恐れ、誠実で不義の利を憎む人」でなければならなかった。彼らは「平素は・・・・民をさば」き、こうしてモーセの重荷を解き、気疲れとなる多くの小事件を神に献身している助力者たちが賢くさばいた。

教会で、神の摂理のもとに、重責を負う地位にいる人々の時間と力は、特別な知恵と幅の広い心を必要とする重大な問題を処理するために、費やされなければならない。ほかの人たちでも十分に処理できる取るに足りない問題の調停を、そのような人々が依頼されることは神のみむねではない。「大事件はすべてあなたの所に持ってこさせ、小事件はすべて彼らにさばかせなさい。こうしてあなたを身軽にし、あなたと共に彼らに、荷を負わせなさい。あなたが、もしこの事を行い、神もまたあなたに命じられるならば、あなたは耐えることができ、この民もまた、みな安んじてその所に帰ることができよう」とエテロはモーセに提案した。

この提案に従い、「モーセはすべてのイスラエルのうちから有能な人を選んで、民の上に長として立て、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長とした。平素は彼らが民をさばき、むずかしい事件はモーセに持ってきたが、小さい事件はすべて彼らみずからさばいた」（出エジプト記一八ノ一九ー二六）。

のちにモーセは、指導者としての責任を分担してもらう [97]

ために七十人の長老を選出したとき、彼の助力者として品位があり、正しい判断力を持ち、経験のある人を慎重に選んだ。これらの長老たちに按手礼あんしゅれいをさずけるにあたり、モーセは教会における賢明な指導者になるのにふさわしい資格を述べた。「兄弟たちの間の訴えを聞き、人とその兄弟、または寄留の他国人との間を、正しくさばかなければならない。あなたがたは、さばきをする時、人を片寄り見てはならない。小さい者にも大いなる者にも聞かなければならない。人の顔を恐れてはならない。さばきは神の事だからである」とモーセは言った（申命記一ノ一六、一七）。

ダビデ王はその治世の終わりにあたり、彼の時代に神のみわざに携わっていた人々に、厳粛な命令を下した。「イスラエルのすべての長官、すなわち部族の長、王に仕えた組の長、千人の長、百人の長、王とその子たちのすべての財産および家畜のつかさ、宦官、有力者、勇士などをことごとくエルサレムに召し集め」て、「主の会衆なる全イスラエルの目の前およびわれわれの神の聞かれる所で」年老いた王は厳かに彼らに命じた。「あなたがたはその神、主のすべての戒めを守り、これを求めなさい」（歴代志上二八ノ一、八）。

統率の責任ある地位につく者としてのソロモンに、ダビデは特別に命じた「わが子ソロモンよ、あなたの父の神を知り、全き心をもって喜び勇んで彼に仕えなさい。主はすべての心を探り、すべての思いを悟られるからである。あなたがもし彼を求めるならば会うことができる。しかしあ
[98] なたがもしかれを 捨てるならば彼は長くあなたを捨てられるであろう。それであなたは慎みなさい。主はあなたを選ん」だ、「心を強くして」いなさい（歴代志上二八ノ九、一〇）。

モーセやダビデの時代に、神の民の中で指導者を導いた同じ敬虔けいけんな正義の原則は、福音による律法の時代に、新たに組織された神の教会を監督する人々によっても、受け継がれなければならなかった。すべての教会において物事をきちんと整え、役員として働くにふさわしい人々を任命するにあたって、使徒たちは旧約聖書に述べられている、指導者の高い標準を固く守った。彼らは、教会で指導的な責任のある地位につく者は「神に仕える者と

して、責められる点がなく、わがままでなく、軽々しく怒らず、酒を好まず、乱暴でなく、利をむさぼらず、かえって、旅人をもてなし、善を愛し、慎み深く、正しく、信仰深く、自制する者であり、教にかなった信頼すべき言葉を守る人でなければならない。それは、彼が健全な教によって人をさとし、また、反対者の誤りを指摘することができるためである」と主張した（テトス一ノ七ー九）。

初代キリスト教会で維持されていた秩序によって、彼らはよく訓練され、神の武具を身につけた軍隊として、団結して前進することができた。信者の群れはひろく散らばっていたとはいえ、みな一つのからだの部分であった。すべての者がお互いに一致協力して行動した。のちにアンテオケやその他のところで不和が起こったように、地方教会で不和が起こり、信者たちが自分たちで解決できなくなったとき、そうした問題のために教会に分裂を生じないように、各地方教会から選ばれた代議員及び重責の地位にある [99]
使徒や長老たちから成る、信徒全体の総会に問題がもち出された。こうして遠く離れた場所の教会を攻撃しようとするサタンの努力に、全部の人たちが行動を一つにして対抗したので、教会を分裂させ、破壊しようとする敵の計画は妨げられた。

「神は無秩序の神ではなく、平和の神である。聖徒たちのすべての教会で行われているように・・・・」（コリント第一.一四ノ三三）。神は昔と同じように今日も、教会の事柄を行うのに秩序と組織とを要求される。神はみわざに承認の印をおすことができるように、それが完璧かんぺきに正確に進められることを望んでおられる。クリスチャンはクリスチャンと、教会は教会と一致し、人間の力が神の力と協力し、すべての働きが聖霊に従属し、神の恵みのよいおとずれを世に知らせるために、すべてのものが結合しなければならない。

[100]

第一〇章　ステパノの弁明

本章は使徒行伝六章五節－一五節、七章に基づく

ステパノは七人の執事のうち第一のものであって、信心深く、幅の広い信仰をもった人であった。彼はユダヤ人であったが、ギリシヤ語を話し、ギリシヤ人の習慣や風習をよく知っていた。そこで彼は、ギリシヤ系ユダヤ人の会堂で福音を宣べ伝える機会を見いだした。ステパノは実に活発にキリストのみわざのために働いて、大胆に信仰を表明した。博学なラビや律法学者たちは容易に勝利できるとうぬぼれて、人々の前で彼と議論した。しかし「彼は知恵と御霊とで語っていたので、それに対抗できなかった。」ステパノはみ霊たまの力で語っていただけでなく、預言の研究者でもあり、律法の内容を残らず学んでいたことが明らかであった。彼は自分の擁護する真理が正当であることを立派に論じて、反対者たちを完全に敗北させた。彼にこのみ約束が成就したのである、「だから、どう答弁しようかと、前もって考えておかないことに心を決めなさい。あなたの反対者のだれもが抗弁も否定もできないような言葉
[101] と 知恵とを、わたしが授けるから」（ルカ二一ノ一四、一五）。

ステパノの説教に伴う力を見た祭司や役人たちは、激しい憎悪の念でいっぱいになった。彼らはステパノが示した証拠に屈服するかわりに、彼を処刑して沈黙させることにした。彼らはローマ当局を買収して、事実の説明もなく事件を自分たちの手で処理するのを黙認してもらい、ユダヤのならわしどおりに囚人を審問し、刑を申し渡し、処刑したことが幾度かあった。ステパノの敵は、もう一度同じ方法をとっても自分たちの身の危険はないものと判断した。彼らは結果はどうであろうと、ともかくやってみることに決めたので、ステパノを捕らえてサンヒドリンの前に引き出し審問にかけた。

近隣の国々からきた博学なユダヤ人たちが、この囚人の議論を論駁ばくするために召集された。タルソのサウロも

その場にいて、先頭に立ってステパノに反対した。彼はその事件を扱うのに、力強い雄弁とラビの論理を用い、ステパノは人心を惑わす危険千万な教えを説いていると民衆に思わせた。しかしサウロは、他の国々に福音をひろめるという神の目的を、十分に理解している人以外に、ステパノの中に何も見いださなかった。

祭司や役人たちは、ステパノのけがれない穏やかな賢明さに打ち勝てなかったので、彼をみせしめのために懲らしめてやることにした。彼らはこうして自分たちの執念深い憎悪の念を満足させる一方、他のものが恐れてステパノの信仰を受け入れなくなるようにしようと思った。偽証をたてるためにやとわれた証人たちは、彼が聖所と律法とに逆らう冒涜ぼうとく的な言葉を吐いたと語った。「『あのナザレ人イエスは、この聖所を打ちこわし、モーセがわたし [102]
たちに伝えた慣例を変えてしまうだろう』などと、彼が言うのを、わたしたちは聞きました」と証人たちは言った。

ステパノが冒涜のかどで訴えられて、答弁するために裁判官と顔と顔を合わせて立ったとき、その顔からきよい光が輝き出た。そして、「議会で席についていた人たちは皆、ステパノに目を注いだが、彼の顔は、ちょうど天使の顔のように見えた。」この光を見た人たちの多くはふるえおののいて思わず顔をおおったが、祭司たちのかたくなな不信と偏見はいっこうにゆるがなかった。

ステパノは訴因にまちがいがないかどうかをただされると、はっきりした感動的な声で抗弁しはじめ、その声は議場いっぱいに響きわたった。彼は会衆一同をうっとりさせるような言葉で、神の選民の歴史をつまびらかに語りはじめた。彼はユダヤの制度に通暁していることを示し、今やキリストを通して明らかにされたその制度の霊的な解釈を論述した。彼はメシヤについて預言したモーセの言葉を繰り返した。「神はわたしをお立てになったように、あなたがたの兄弟たちの中から、ひとりの預言者をお立てになるであろう」と。ステパノは神とユダヤびとの信仰に対する彼自身の忠誠を明らかにして、ユダヤ人たちが救いのために信頼していた律法が、イスラエルびとを偶像崇拝から救うことができなかったことを教えた。彼はイエス・キリストをユダヤの歴史全体に結びつけた。彼はソロモンによって造られた神殿の建物について語り、ソロモンやイザヤの

ことばを引用した。「しかし、いと高き者は、手で造った家の内にはお住みにならない。預言者が言っているとおり
[103] である、『主が仰せられる、どんな家をわたしのために建てるのか。わたしのいこいの場所は、どれか。天はわたしの王座、地はわたしの足台である。これは皆わたしの手が造ったものではないか』」。

ステパノがここまで語ってきたとき、人々は騒然となった。彼が預言にキリストを結びつけ、また、神殿について自分の意見を語ると、祭司は恐怖にとりつかれたふりをして、衣を裂いた。この行為はステパノにとって死が間近いことを意味する合図であった。彼は自分の言葉が受け入れられないのを見て、最後のあかしをしていることを知った。彼は説教の途中であったが、突然、それをやめた。

ステパノはそれまでたどってきた歴史の説明を突然中断して、激怒した裁判官らに向かい「ああ、強情で、心にも耳にも割礼のない人たちよ。あなたがたは、いつも聖霊に逆らっている。それは、あなたがたの先祖たちと同じである。いったい、あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者が、ひとりでもいたか。彼らは正しいかたの来ることを予告した人たちを殺し、今やあなたがたは、その正しいかたを裏切る者、また殺す者となった。あなたがたは、御使たちによって伝えられた律法を受けたのに、それを守ることをしなかった」と叫んだ。

これを聞いた祭司や役人たちは怒りで逆上し、人間とは思えぬさまであたかも猛獣のように歯ぎしりしながらステパノに突進した。ステパノは彼らの残忍な顔を見て、自分の運命を悟ったが、少しもたじろがなかった。死の恐怖は彼から去っていた。彼は怒り狂った祭司も気の立った暴徒も恐ろしくなかった。目の前の光景は見えなくなり、そのかわりに天の門が開かれていて、神の宮廷の栄光と、み
[104] 座から立ち上がって、ご自分のしもべをささえようとしておられるキリストが見えた。彼は勝利のよろこびをこめて「ああ、天が開けて、人の子が神の右に立っておいでになるのが見える」と叫んだ。

ステパノが自分の目に映る輝かしい光景を描写しはじめると、迫害者たちはもうがまんできなかった。彼らはその言葉が聞こえないように耳をふさぎ、猛烈な勢いで一せいにとびかかってきて、「彼を市外に引き出し」た。「こう

して、彼らがステパノに石を投げつけている間、ステパノは祈りつづけて言った、『主イエスよ、わたしの霊をお受け下さい。』そして、ひざまずいて、大声で叫んだ、『主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないで下さい』。こう言って、彼は眠りについた。」

ステパノに法律上の刑の宣告は申し渡されていなかったが、ローマ当局は多額の金で買収されていたために、この事件について調査しなかった。

ステパノの殉教を目撃した人たちはみな深い感動をおぼえた。彼の顔に押された神の印の記憶と、聞いた人々の心を動かした彼の言葉は、目撃者の心にいつまでも残って、彼が宣べ伝えていた真理のあかしとなった。彼の死は教会にとって苦しい試練であったが、サウロが導かれたのはこのおかげであった。サウロは殉教者ステパノの信仰と忠誠、その顔にやどった栄光をどうしても記憶から消すことができなかった。

ステパノの裁判と死の光景を見て、サウロはあらあらしい熱意を吹きこまれたように見えた。そののちサウロは、ステパノが人々から屈辱を受けていた、まさにその同じときに、神からは名誉を与えられていたことを、ひそかに [105]
認めている自分に腹を立てた。サウロは神の教会を迫害し [106]
つづけ、信者の家々に押し入って、彼らを捕らえ、投獄し殺すために祭司や役人のもとへ引っ立てて行った。この迫害を推進させるサウロの熱狂ぶりは、エルサレムのクリスチャンを恐怖のどん底に陥れた。ローマの官憲はこの残酷な事態を食い止める努力をいっこうにせず、ユダヤ人たちと和解し、彼らから好意を得るためにひそかに彼らを助けた。

ステパノの死後、サウロはその迫害でたてた功績のおかげで、サンヒドリンの一員に選ばれた。一時、彼は神のみ子への反逆をなし遂げようとするサタンの手中で力強い器となって働いたが、それからまもなく、この情け容赦ない迫害者は、そのとき彼が荒らしていた教会の発展のために用いられることになった。サタンよりも力強い神がサウロを選んで、殉教したステパノのあとに立て、宣教させ、主のみ名のために苦しませ、主の血による救いのおとずれを広く伝えさせられたのである。

[107]

第一一章　へだての壁を越えて

本章は使徒行伝八章に基づく

ステパノの死後、エルサレムにいる信者たちに対して残忍な迫害が起こり、「使徒以外の者はことごとく、ユダヤとサマリヤとの地方に散らされて行った。」サウロは「家々に押し入って、男や女を引きずり出し、次々に獄に渡して、教会を荒し回った。」のちに彼は、この無慈悲な行為に熱狂的であったことを、「わたし自身も、以前には、ナザレ人イエスの名に逆らって反対の行動をすべきだと、思っていました。そしてわたしは、それをエルサレムで敢行し、・・・・多くの聖徒たちを獄に閉じ込め、・・・・それから、いたるところの会堂で、しばしば彼らを罰して、無理やりに神をけがす言葉を言わせようとし、彼らに対してひどく荒れ狂い、ついに外国の町々にまで、迫害の手をのばすに至りました」と語った。死の苦しみを受けた者がステパノだけでなかったことは、「彼らが殺される時には、それに賛成の意を表しました」という、サウロ自身の言葉からわかる（使徒行伝二六ノ九－一一）。

[108] この危機のときに、ニコデモは恐れず進み出て、十字架にかけられた救い主に対する信仰を明らかにした。ニコデモはサンヒドリンの議員であったが、他の人々と共にイエスの教えに感動していた。キリストのすばらしいみわざを目撃したとき彼は、このかたこそ神からつかわされたかたであるという確信を固めていたのである。彼は誇りのために、このガリラヤの大教師に共鳴していることを公に認めることができず、ひそかに主に会いに行っていた。この会見のとき、イエスはニコデモに救いの計画や、この世に対するご自身の使命を打ち明けられた。しかし、ニコデモはなおも躊躇ちゅうちょしていた。彼は真理を心にかくしていて、三年間は成果を見ることがなかった。しかしニコデモは、公に認めていなかったあいだも、サンヒドリンの協議会において、主を殺そうとしている祭司たちの陰謀には

繰り返し反対していた。ついにキリストが十字架上にあげられたとき、ニコデモは、夜オリブ山に主をたずねたときに主が「ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない」と彼に語られたみことばを思い出して、イエスの中にこの世のあがない主を見たのである（ヨハネ三ノ一四）。

ニコデモは、アリマタヤのヨセフと共に、イエスの埋葬の費用を分担した。弟子たちは自分たちがキリストの弟子であると公に示すことを恐れていたが、ニコデモとヨセフは勇敢に援助の手を差しのべた。これらの金持ちで尊敬されている人々の助けは、その暗黒の時にはことさら必要であった。彼らはなくなられた主のために、貧しい弟子たちができなかったことをすることができた。彼らの富と感化力が、祭司や役人たちの敵意から大いに彼らを守ったのである。

いまやユダヤ人たちが生まれたばかりの教会を破壊しようとしていたとき、ニコデモはそれを防ぐために進み出た。もはや警戒も疑問もなく、ニコデモは弟子たちの信仰を励まし、エルサレムの教会を支え、福音事業を進めるために、自分の富を用いた。以前に彼を尊敬していた人々は、いまは彼を嘲弄し、迫害した。そして彼はこの世の富には貧しくなったが、信仰を守ることにはひるまなかった。 [109]

エルサレムの教会をおそった迫害は、福音の働きに強い刺激を与える結果になった。エルサレムでのみことばの宣教は成功していたので、弟子たちには、全世界に出て行けとの救い主のご命令をなおざりにして、いつまでもそこにとどまる危険があった。悪に抵抗する力は、活動的な奉仕によって最も多く得られるということを忘れて、彼らは敵の攻撃からエルサレムの教会をかばうほど重要な仕事はないと思いはじめていた。彼らは新しく改心した人たちに福音を宣べさせる教育をするどころか、既になし遂げられた事に、みんなで満足しているだけで終わってしまうような危険に陥っていた。神はご自分の代表者たちを広く散らして、その行く先々で他人のために働くことができるように、彼らの上に迫害の手がのびるままにしておかれた。信者たちはエルサレムを追われて、「御言を宣べ伝えながら、めぐり歩いた。」

救い主が「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民・・・・に教えよ」と、任命された人々の中には、主を愛することを学んでいた人々や、主の無我の奉仕の模範に従う決心をしていた人々など、より謙遜な生活をしている者が大ぜいいた（マタイ二八ノ一九）。これらの謙遜な
[110] 人々には、救い主がこ の世で公生涯を過ごされたころ共にいた弟子たちと同様に、尊い責任が与えられていた。彼らはキリストによる救いのよろこばしいおとずれを、世に宣べ伝えなければならなかった。

彼らは迫害のために散らされた時、宣教の熱意に燃えて出て行った。彼らは自分たちに負わされた使命の責任を感じた。また、飢えている世の人々に与えるいのちのパンをもっていることを自覚していたので、キリストの愛に迫られて、このパンを求めているすべての者に分け与えた。主は彼らを通して働かれた。彼らが行く先々で、病人はいやされ、貧しい者に福音が宣べ伝えられた。

七人の執事のひとりピリポも、エルサレムから追われた者の中にはいっていた。ピリポは「サマリヤの町に下って行き、人々にキリストを宣べはじめた。群衆はピリポの話を聞き、その行っていたしるしを見て、こぞって彼の語ることに耳を傾けた。汚れた霊につかれた多くの人々からは、その霊が・・・・出て行くし、また、多くの中風をわずらっている者や、足のきかない者がいやされたからである。それで、この町では人々が、大変なよろこびかたであった。」

ヤコブの井戸のほとりで、キリストがサマリヤの女にお語りになった使命はすでに実を結んでいた。女は主のみことばを聞くと、町の人々のところへ行って「わたしのしたことを何もかも、言いあてた人がいます。さあ、見にきてごらんなさい。もしかしたら、この人がキリストかも知れません」と言った。人々は彼女について行き、イエスのみことばを聞いて、主を信じた。彼らはもっと聞きたいと願い、主に滞在していただきたいと願った。主は彼らと共に
[111] 二日間過ごされて、「なお多くの人々が、イエスの 言葉を
[112] 聞いて信じた」（ヨハネ四ノ二九、四一）。

エルサレムから追われた弟子たちの中には、サマリヤに安全な避難所を見いだした者もいた。これらの福音の使者たちをサマリヤ人はよろこんで迎え、ユダヤの改宗者た

ちは、かつては大敵であった人々の中から尊い収穫を集めた。

サマリヤにおけるピリポの働きは非常な成功をおさめ、これに励まされた彼はエルサレムに援助を求めた。使徒たちは「エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」と言われたキリストのみことばの意味が、いまこそ十分にわかるようになった（使徒行伝一ノ八）。

ピリポがまだサマリヤにいた時、「南方に行き、エルサレムからガザへ下る道に出なさい」と天の使いに命じられた。「そこで、彼は立って出かけた。」彼は神のみ旨に応じる教訓を学んでいたから、その召しを疑ったり、従うのを躊躇ちゅうちょしたりしなかった。

「すると、ちょうど、エチオピヤ人の女王カンダケの高官で、女王の財宝全部を管理していた宦官であるエチオピヤ人が、礼拝のためエルサレムに上り、その帰途についていたところであった。彼は自分の馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいた。」このエチオピヤ人は名声の高い、有力な人であった。神は、彼が改心したら、自分の受けた光を人に分かち、福音のために大きな感化を及ぼすことをごぞんじであった。神の天使たちが、光を求めるこの求道者に付き添っていたので、彼は救い主へ引きよせられ [113]
ていった。聖霊の働きにより、神はこのエチオピヤ人を、光へ導くことのできる人と接するよう導かれた。

ピリポはエチオピヤ人のところに行って、彼が読んでいる預言を説明してやるように命じられた。「進み寄って、あの馬車に並んで行きなさい」とみ霊たまが言った。ピリポは宦官に近づいて「『あなたは、読んでいることが、おわかりですか』と尋ねた。彼は『だれかが、手びきをしてくれなければ、どうしてわかりましょう』と答えた。そして、馬車に乗って一緒にすわるようにと、ピリポにすすめた。」彼が読んでいた聖書の箇所は、キリストに関するイザヤの預言であった。「彼は、ほふり場に引かれて行く羊のように、また、黙々として、毛を刈る者の前に立つ小羊のように、口を開かない。彼は、いやしめられて、そのさばきも行われなかった。だれが、彼の子孫のことを語ることができようか、彼の命が地上から取り去られているからには。」

「お尋ねしますが、ここで預言者はだれのことを言っているのですか。自分のことですか、それとも、だれかほかの人のことですか」と宦官が尋ねた。そこでピリポは救いの偉大なる真理を彼に示し、同じ聖句から説き起こして、「イエスのことを宣べ伝えた」。

聖書の説明が進むにつれて、宦官の心にますます興味がわいてきて、ピリポが話し終わったときには、宦官は与えられた真理を受けいれる気持ちになっていた。彼は自分の社会的な高い地位を理由に、福音を拒むようなことはしなかった。「道を進んで行くうちに、水のある所にきたので、宦官が言った、「ここに水があります。わたしがバプテスマを受けるのに、なんのさしつかえがありますか』。これに対して、ピリポは、『あなたがまごころから信じるなら、受けてさしつかえはありません』と言った。すると、彼は『わたしは、イエス・キリストを神の子と信じます』と答えた。そこで車をとめさせ、ピリポと宦官と、ふたりとも、水の中に降りて行き、ピリポが宦官にバプテスマを授けた。[114]

ふたりが水から上がると、主の霊がピリポをさらって行ったので、宦官はもう彼を見ることができなかった。宦官はよろこびながら旅をつづけた。その後、ピリポはアゾトに姿をあらわして、町々をめぐり歩き、いたるところで福音を宣べ伝えて、ついにカイザリヤに着いた。」

このエチオピヤ人は、ピリポのような伝道者たち、すなわち神のみ声を聞いて、神からつかわされるところに行く人たちから、教えを受ける必要のある部類の人々を代表している。聖書を読んでも、その真の意味がわからないでいる者が多い。世界中の男女は何かを求めて天を仰いでいる。光と恵みと聖霊を求める魂から、祈りと涙とねぎごとが天にのぼっていく。多くのものは、み国の人口に立って、刈り集められるのを待つばかりになっているのである。

光を求め、福音を受け入れる準備のできた人のところに、ひとりの天使がピリポを導いた。今日も天使たちは、聖霊に舌をきよめていただき、心を純化し高めていただく働き人の歩みを導くのである。ピリポに送られた天使は、自分自身でエチオピヤ人に働きかけることもできたが、そ

れは神の働かれる方法ではない。神は人が同胞のために働くように計画しておられる。

最初の弟子たちに与えられた責務は、どの時代の信徒にも分担されてきた。福音を受けた者はみな、世に伝える尊い真理をさずけられた。神の忠実な民は常に、彼らの財源を神のみ名をあがめるために用い、彼らの才能を神への奉仕に賢く用いた積極的な伝道者であった。 [115]

過去におけるクリスチャンの無我の働きは、われわれにとって実物教訓となり、励ましとならなければならない。神の教会の会員はよきわざに熱心で、世俗的な野心を離れ、善をなして巡られたキリストのみ足跡を歩まなければならない。また、同情とあわれみに満ちた心をもって、助けの必要な人々のために働き、罪びとに救い主の愛を教えなければならない。そうした働きには骨の折れる努力がいるが、その報いは大きい。まじめな決心をしてこのわざに携わる者は、救い主に魂が導かれるのを見ることができる。神の任命を実践するときに伴う感化力は、人を信服させずにはおかないからである。

出て行ってこの任命を果たす責任は、按手礼あんしゅれいを受けた牧師にだけ負わされているのではない。キリストを受け入れた者はみな、同胞を救う仕事に召されているのである。「御霊も花嫁も共に言った、『きたりませ』。また、聞く者も『きたりませ』と言いなさい」（黙示黙二二ノ一七）。この招待をせよとの命令は、すべての教会に出されたものである。この招待を聞く者はみな「きたりませ」と言って、この招きを丘から谷へこだまさせなければならない。

救霊の働きが牧師にのみかかっていると考えるのは、重大な誤りである。ぶどう園の主から魂への重荷をゆだねられ、へりくだって献身した信徒には、いっそう大きな責任を神からさずかっている人々からの、励ましがなければならない。神の教会における指導者として立つ人々は、救い主の任命が、み名を信じるすべての者に与えられていることを知らなければならない。神はまだ按手により牧師職に聖別されていない多くの人々を、ぶどう園に送りこまれるであろう。 [116]

すでに救いのおとずれを聞いた幾百、いや、幾千もの人々は、活動的な奉仕に携わることができるはずなのに

今もなお、市場で何もせずぶらぶらしている。そのような人々にキリストは「なぜ、何もしないで、一日中ここに立っていたのか」と言われ、更に「あなたがたも、ぶどう園に行きなさい」と言っておられる（マタイ二〇ノ六、七）。この招きになぜもっと多くの人々が応じないのか。彼らは聖職に立たないのだから、義務を免じられているとでも思っているのだろうか。幾千もの献身した信徒たちのしなければならない大きな仕事が、聖職以外にあることを彼らは知らなければならない。

奉仕の精神が教会全体にゆきわたって、教会員が残らず各々の才能に応じて主のために働くのを、神は長いあいだ待っておられる。福音事業の任命を完成するために、神の教会の会員が、光の必要な自国や外国の伝道地で、それぞれ定められた働きをするならば、まもなく全世界に警告がゆきわたり、主イエスは力と大いなる栄光をもってこの世にもどってこられるのである。「この御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである」（マタイ二四ノ一四）。

第一二章　迫害者から弟子へ [117]

本章は使徒行伝九章一節－一八節に基づく

福音の宣教に伴う成功によって徹底的に覚醒させられたユダヤの指導者たちの中で、タルソ人サウロは際立っていた。サウロはローマ市民として生まれたが、ユダヤ人の家系から出ていて、エルサレムで最も著名なラビたちから教育を受けていた。サウロは「イスラエルの民族に属する者、ベニヤミン族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法の上ではパリサイ人、熱心の点では教会の迫害者、律法の義については落ち度のない者で」あった（ピリピ三ノ五、六）。彼はラビたちから非常に将来性のある若者と期待され、古来の信仰を熱心に擁護することができる者として、高い望みがかけられていた。サンヒドリン議会の議員に推されたために、彼は有力な地位を占めることになった。

サウロはステパノの審問と有罪の判決に当たって顕著な役割を演じたが、殉教していくステパノと共に神が臨在されたという驚くべき証拠を見て、イエスの弟子たちに反対して支持してきた主張が、果たして正しいかどうかを疑う [118]
ようになった。彼の心は全く動揺していた。当惑のあまり彼は、知恵と判断において全幅の信頼を寄せていた人々に訴えてみた。ところが祭司や役人たちは議論づくで、ステパノは神を冒涜ぼうとくする者であり、この殉教した弟子が宣べ伝えていたキリストは詐欺師である、聖職につく者は正しくなければならないのだと、ついに彼を信じ込ませてしまった。

サウロはきびしい吟味もせずにこの結論に達したわけではなかった。しかしついに、彼の受けた教育と偏見、以前の教師に対する尊敬、人望を得ようとする誇りのために、良心の声と神の恵みに逆らってしまったのである。そしてサウロは祭司や学者たちが正しいとすっかり決めこみ、イエスの弟子たちが教える教理にますます激しく反対するようになった。罪のない男女を法廷にひっ立ててきて、イエスを信じているという理由だけで投獄したり、死刑を言い

わたすようなサウロの仕打ちに、新しく組織されたばかりの教会は悲歎にくれ、意気消沈し、多くの信者が身の安全を求めて逃げ出した。

この迫害でエルサレムから追い出された人々は「御言を宣べ伝えながら、めぐり歩いた」（使徒行伝八ノ四）。彼らがめぐって行った町々の一つはダマスコであったが、この新しい信仰はそこでも多くの改宗者を得た。

祭司や役人たちは油断のない努力と激しい迫害をつづけて、この異端をおさえてしまいたいと思っていた。今や彼らは、エルサレムでその新しい教えに対してとった決定的な方法を、今度はほかの場所でもとらなければならないと考えた。サウロは彼らがダマスコでやりたいと思っていた特別な働きを、引き受けようと申し出た。サウロは「主の弟子たちに対する脅迫、殺害の息をはずませながら、大祭司のところに行って、ダマスコの諸会堂あての添書を求めた。それは、この道の者を見つけ次第、男女の別なく縛りあげて、エルサレムにひっぱって来るためであった」。こうして、タルソ人サウロは「祭司長たちから権限と委任とを受けて」、力と活力をみなぎらせ、誤った熱情に燃えて、あの記念すべき、彼の人生を完全に転向させる不思議な事件に遭遇する旅へと出発した（使徒行伝二六ノ一二）。

[119]

旅の最後の日の「真昼に」、疲れきった旅人らは、ダマスコに近づいた時、広々とした肥沃な土地や美しい園や、周囲の山々からそそぐ冷たい流れに潤された実りのよい果樹園を一望のもとに見渡した。荒野の長旅のあとに、そのような光景は実にすがすがしいものであった。サウロも同行者たちと、その実り多い平原や美しい町を見おろして感嘆していると、「突然」－彼は後になってそのありさまを説明したが－「光が天からさして・・・・わたしと同行者たちとをめぐり照し」た。それは人間の目では耐えられないほどの輝きで、「太陽よりも、もっと光り輝いて」いた（使徒行伝二六ノ一三）。サウロは目が見えなくなり、途方にくれて地に伏してしまった。

光がなおも彼らをめぐり照らしていたとき、サウロは「ヘブル語で・・・・こう呼びかける声を」聞いた。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」（使徒行伝二六ノ一四）。「そこで彼は『主よ、あなたは、どなたで

すか』と尋ねた。すると答があった、『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。』」「とげのあるむちをければ、傷を負うだけである」（使徒行伝九ノ五、二六ノ一四）。

サウロの同行者たちは恐ろしさでいっぱいになり、また [120] 強烈な光のためにほとんど目が見えなくなり、声は聞いたが、人の姿が見えなかった。しかしサウロには語られたことばがわかった。そればかりか、語られたかたが神のみ子であると、彼にはっきり示された。彼の前に輝かしい姿で立っておられるかたが、十字架にかけられたかただと彼にはわかった。打ちのめされたこのユダヤ人の魂に、救い主のみ顔が永久に焼きつけられた。語られたみ言葉は驚くばかりの力で彼の心を打った。心の暗室の中にあふれるばかりの光が注がれて、以前の無知と誤りや、現在の彼に聖霊による啓発の必要なことが示された。

いまこそサウロは、イエスの信徒を迫害することが、実際にはサタンの仕事をしていたのだと知った。正義と彼自身の義務に対する確信が、主として祭司や役人への絶対的な信頼に基づいていたことを知った。サウロはよみがえりの話が、弟子たちの巧みな作りごとだと祭司や役人たちから聞かされたとき、それを信じてしまったが、いまこそイエスご自身が姿を現して立っておられたのであるから、弟子たちの主張が真実であったことを確信した。

天からの光に照らされたとき、サウロの頭は驚くべき早さで働いた。聖書の預言の記録が彼の知力の前に開かれた。彼は、イエスがユダヤ人から退けられ、十字架にかかり、よみがえって昇天されたことが、預言者たちによって既に予告されていたこと、そして、それらのことによってイエスが約束のメシヤであることが、証明されたことを知った。ステパノの殉教のときの説教が力強くサウロの頭によみがえり、この殉教者が「ああ、天が開けて、人の子が神の右に立っておいでになるのが見える」と言ったとき、ステパノは実際に「神の栄光」を見たのだというこ [121] とに気がついた（使徒行伝七ノ五五、五六）。祭司たちはこのことばを神をけがすことばだと宣言していたが、サウロは、いまそのことばが事実であることを知った。

何とすばらしい啓示がこの迫害者に与えられたことであろう。サウロはいま、メシヤがナザレのイエスとしてこ

の世に来ていたことや、イエスが救おうとした人々に拒まれて、十字架にかけられたことをはっきり知った。また彼は救い主が墓から意気揚々とよみがえられて、天にのぼられたことを知った。その尊い啓示の瞬間にサウロは、救い主の十字架と、そのよみがえりをあかししていたステパノが、サウロの同意により犠牲となり、後には、その他のイエスの尊い信徒が大ぜい、彼の力をかりた残酷な迫害により殺されたことをぞっとする気持ちで思い出した。

救い主がステパノを用いてサウロに語っておられた。ステパノのはっきりした論証は反駁はんばくの余地のないものであった。このユダヤ人の学者は、キリストの栄光の光を反映している殉教者の顔を見た。それはちょうど「天使の顔のように」見えたのである（使徒行伝六ノ一五）。彼は敵に対するステパノの忍耐強さとゆるしを目撃した。サウロはまた、自分が責め苦しめた多くのものが示した不屈の精神と、よろこんで耐え忍ぶ姿を見た。彼はあるものたちが信仰のために、いのちさえよろこんで捨てるのを見たのである。

これらすべてのことが声を大にしてサウロの心を動かし、時には、イエスこそ約束のメシヤだという、抗しがたい確信が彼の心を突き通した。そのようなとき彼は幾夜もこの確信に抵抗してもがき、いつでも、イエスはメシヤではなく、彼の信者たちも惑わされた狂信者だという自己の信念を公言することによって内心の葛藤をしずめていた。 [122]

いまキリストはサウロにみずから声をかけ、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」と言われた。そして「主よ、あなたは、どなたですか」と尋ねると、同じ声が「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」と答えられた。ここでキリストは、ご自身をその民と同一視しておられる。キリストに従う者たちを迫害したとき、サウロは直接、天の神にたてついていたのである。キリストの弟子たちを告発し、彼らに敵して偽証を言いたてたとき、サウロは世の救い主に対して同じことをしていたのである。

サウロは自分に語ったおかたこそ、ナザレのイエスであり、長く待望してきたメシヤ、イスラエルの慰め、贖あがない主であることを少しの疑いもなく受けいれた。おののき驚きながら彼が、「主よ、わたしは何をしたらよいでしょうか」と尋ねると、イエスは「さあ立って、町には

いって行きなさい。そうすれば、そこであなたのなすべき事が告げられるであろう」と言われた。

栄光が去ったとき、サウロは地面から立ち上がった。彼は自分の視力が全く失われたことを知った。キリストの栄光の輝きは人間の目にはあまりに強すぎた。そしてその光がなくなっても彼にとってあたりは真の闇であった。彼は自分がイエスに従う人々を残酷に迫害したために、神罰がくだって盲目にな ったのだと思った。全くの闇の中をサウ [123] ロは手探りし、同行者たちは恐れと驚きを抱きながら「彼の手を引いてダマスコへ連れて行った」。

その事件のあった朝、サウロは祭司長たちから信任を与えられていたので、満足感をいだいてダマスコに近づいていた。彼には重大な責任が負わされていた。彼は、できればダマスコにおいて新しい信仰のひろまるのをくい止めることによって、ユダヤの宗教の勢力を増強するよう命じられていた。彼は自分の使命を成功させなければならないと決意し、期待していた経験が目前にあることをしきりに予想し、待ちうけていた。

しかしダマスコに着いてみると、彼の予想はなんと違っていたことであろう。盲目になって、自分ひとりではどうすることもできず、悔恨にさいなまれ、罰はこれだけではすまないのではないかと恐れた彼は、弟子のユダの家をさがし求め、そこでただひとり反省と祈りにひたすら時を費やした。

サウロは三日間「目が見えず、また食べることも飲むこともしなかった」。この魂の苦悩の日々は彼にとっては長い年月のようであった。ステパノが殉教したときに自分が受け持った役割を、彼は苦悶しながら何度も思い出した。ステパノの顔が天の光に照らされていたときでさえ、祭司や役人の悪意や偏見に彼自身ふりまわされてしまった罪を、ぞっとする思いで思い出した。最も印象的な出来事に目や耳をふさいでいたこと、ナザレのイエスを信じる人々への迫害を冷酷にせき立てたことが幾たびあったか、サウロは悲しみに打ちひしがれながら繰り返し数え上げた。

その間、サウロはただひとり引きこもって、深く心を [124] 探りへりくだった。サウロがダマスコにきた目的を警告されていた信者たちは、彼が自分たちをだますために芝居をしているのではないかと恐れたので、遠ざかっていて、彼

をあわれもうともしなかった。サウロは、自分が力を合わせて信者の迫害に当たるつもりであった、改宗していないユダヤ人に、助けを求めたいとは思わなかった。彼らはサウロの話に耳を傾けようとさえしないことが、わかりきっていたからである。こうして彼は人の同情からすっかり遮断されてしまったようであった。助けを求める彼の唯一の望みはあわれみ深い神にあったので、彼は心くだけて神に祈った。

ひとり引きこもって神とすごした長い時間、サウロは聖書のキリストの初臨についてのべられた箇所を幾つも思い出した。既に彼の心を占めていた確信にとぎすまされた記憶をたどり、預言を注意深くたどった。これらの預言の意味を吟味してみて、彼は以前の自分に識別力のなかったことや、約束のメシヤとしてのイエスを拒むようになったユダヤ人一般の無知に驚いた。サウロの知性は明るくされ、すべてのことが明らかになった。以前の偏見や不信が彼の霊的知覚を曇らせ、ナザレのイエスの中に、預言されていたメシヤを認めることができなくなっていたことを知った。

サウロは聖霊の罪を認めさせる力に全く屈服したとき、自分の人生の過ちを知り、神の律法の広範囲に及ぶ要求を認めた。自分の良い働きによって義とされると確信していた高慢なパリサイ人であった彼は、いま謙遜に幼な子のように単純な気持ちで神のみ前にぬかずき、自己の無価値さ
[125] を告白し、十字架にかけられ、よみがえられた救い主の功績を、自分のために懇願した。サウロはみ父やみ子との完全な一致と霊的な交わりに入りたいと思い、自分がゆるされて、受け入れられるようにと切に願って、恵みの座に熱心な祈りをささげた。

このパリサイ人の後悔の祈りはむだにはならなかった。彼の心に奥深くあった思想と感情は、神の恵みによって変えられた。彼のより高貴な才能は神の永遠の目的に調和していった。キリストとその義は、サウロにとって全世界よりも価値のあるものとなった。

サウロの改宗は、罪人たちに罪を悟らせる、聖霊の不思議な力を示す著しい証拠である。彼はナザレのイエスが神の律法を軽視し、律法はもはや無効であると弟子たちに教えていたと思っていた。しかし改宗してのち、サウロは、

イエスこそ天父の律法を擁護するために、この世に来られたかたであると知った。彼はイエスこそユダヤの完全な犠牲制度の創設者であられたことに気がつき、十字架において予型は本体と一致したことや、イエスがイスラエルのあがない主に関する旧約の預言を、成就されたことを知った。

サウロの改宗の記録の中に、われわれが常に心に留めておかなければならない重要な原則が与えられている。サウロはキリストのみ前に直接に導かれた。彼こそキリストが最も大事な仕事をゆだねようとされた人、主のために「選ばれた器」となる人であった。しかし神はゆだねておられた仕事を、すぐには彼にお告げにならなかった。神はサウロを道の途中で捕らえて、罪を認めさせられた。しかしサウロが「なすべき事」を尋ねたとき、救い主はこの探求心 [126]
の強いユダヤ人をご自分の教会に引き合わされ、そこで彼に対する神のみこころをお知らせになった。

サウロの心のやみを驚くべき光で照らしたのは、主のお働きであった。しかし弟子たちにも、サウロのためにしなければならない働きがあった。キリストは啓示し罪を悟らせる働きをなさった。今この悔い改めたサウロは、神の真理を教えるよう任命された人々から、教えを聞く用意ができていた。

サウロがユダの家にひとりこもって祈り、懇願しつづけているあいだに、神はダマスコにいる「アナニヤというひとりの弟子」に幻の中に現れて、サウロというタルソ人が助けを求めて祈っていることを告げられた。「立って、『真すぐ』という名の路地に行き、ユダの家でサウロというタルソ人を尋ねなさい。彼はいま祈っている。彼はアナニヤという人がはいってきて、手を自分の上において再び見えるようにしてくれるのを、幻で見たのである」と天からの使者が言った。

アナニヤは天使の言葉をとても信用することができなかった。エルサレムの聖徒たちに対するサウロのひどい迫害の知らせが既に遠くまで広く伝わっていたからである。アナニヤは主に諫かん言するつもりで「主よ、あの人がエルサレムで、どんなにひどい事をあなたの聖徒たちにしたかについては、多くの人たちから聞いています。そして彼はここでも、御名をとなえる者たちをみな捕縛する権を、

祭司長たちから得てきているのです」と答えた。しかし命令は厳かであった「さあ、行きなさい。あの人は、異邦人たち、王たち、またイスラエルの子らにも、わたしの名を伝える器として、わたしが選んだ者である」。

[127] アナニヤは天使の指示に従い、最近まで、イエスの名を
[128] 信じるすべての者に対して脅迫の息をはずませていたその男を探し出した。そしてアナニヤは、後悔し苦しんでいるその人の頭に手を置いて言った、「『兄弟サウロよ、あなたが来る途中で現れた主イエスは、あなたが再び見えるようになるため、そして聖霊に満たされるために、わたしをここにおつかわしになったのです。』

するとたちどころに、サウロの目から、うろこのようなものが落ちて、元どおり見えるようになった。そこで彼は立ってバプテスマを受け」た。

こうしてイエスは組織されたキリスト教会の権威を承認し、サウロを地上でご自身が任命された機関である教会に引き合わされた。いまやキリストは地上でのご自身の代表者として、一つの教会を持っておられ、その教会が、人生の途上で過ちを犯して悔い改めた、この罪びとを導く仕事にかかわることになった。

多くの人々は、自分たちの光と経験はキリストに対してだけ責任を負うものであり、キリストが信徒と認めた人々とは関係がないという考えをもっている。イエスは罪びとの友であり、その心は彼らの悲哀に動かされる。彼は天においても地においてもいっさいの権威を持っておられるが、人々の教化と救いのためにご自身がお定めになった方法を尊ばれる。イエスは、ご自身が世に対する光の通路と定められた教会に、罪びとを導かれるのである。

サウロは盲目的な誤りと偏見のさ中に、彼が迫害してい
[129] たキリストの啓示を与えられたとき、世の光である教会と直接交わることができるように導かれた。この出来事においては、アナニヤはキリストを代表し、また、地上において主の代わりに行動するよう任命されている、キリストの使者たちを代表する。キリストの代わりにアナニヤは、サウロの目が見えるようになるために、彼の目に触れる。彼がキリストの代わりにサウロの上に手を置き、キリストのみ名により祈ると、サウロは聖霊を受ける。すべてのこと

はキリストのみ名と権威においてなされるのである。キリストは源泉であり、教会はその伝達経路である。

[130]

第一三章　砂漠での内省の日日

本章は使徒行伝九章一九節－三〇節に基づく

バプテスマを受けたのち、パウロは断食を終えて「ダマスコにいる弟子たちと共に数日間を過ごしてから、ただちに諸会堂でイエスのことを宣べ伝え、このイエスこそ神の子であると説きはじめた」。彼はナザレのイエスが、長いあいだ待ちのぞんでいたメシヤであると、大胆に宣べ伝えた。そして「キリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、そして葬られたこと、・・・・三日目によみがえったこと」、十二人やその他の人々に現れ、「最後に、いわば、月足らずに生れたようなわたしにも、現れたのである」とパウロはつけ加えた（コリント第一一一五ノ三、四、八）。預言から説く彼の論法は非常に断固たるもので、彼の努力には明らかに神の力が伴っていたので、ユダヤ人たちは面くらい、彼に太刀打ちできなかった。

パウロの改心の知らせにユダヤ人たちは非常に驚いた。

[131] 「祭司長たちから権限と委任とを受けて」信 者たちを捕らえ、求刑するためにダマスコに行った彼は今、十字架にかけられて、よみがえられた救い主の福音を宣べ伝え、既に福音の弟子となった者たちの力を強め、彼が今まで激しく反対していた信仰へと絶えず新しい改心者を導いていたのである。

パウロは以前はユダヤ教の熱烈な擁護者として、またイエスの弟子たちを疲れを知らずに迫害する者として知られていた。勇気があり、自主的で辛抱強いパウロは、その才能と教育とをもって、どんな資格においてでも奉仕することができた。彼は驚くべき明確さで弁明し、どぎまぎさせるような皮肉で反対者を勝ち目のない状態におくことができた。こうして今ユダヤ人たちは、この並々ならぬ有望な青年が、以前自分が迫害していた人たちと一緒になり、恐れることなくイエスの名によって説教しているのを見た。

軍司令官が戦場で戦死すると、その軍隊にとって損失になるが、その死は敵の力を増大させることはない。しかし卓越した人物が敵方に加わると、彼の働きが失われるばかりか、彼が加わった側は決定的な利益を得る。タルソびとサウロはダマスコへの途上で、神によって簡単に打ち殺されていてもよかった。そうすれば迫害する力を大いに減退させたであろう。しかし神はみ摂理によってサウロの命を助けたばかりか、彼を改心させて、敵側の戦士からキリストの側の戦士になさった。雄弁な演説家であり、辛辣しんらつな批評家であるパウロは、断固たる志と豪胆な勇気を備えていて、初代教会にちょうど必要な資質を持っていたのである。

パウロがダマスコでキリストを宣べ伝えたとき、その言葉を聞いた者はみな驚いて言った、「あれは、エルサレムでこの名をとなえる者たちを苦しめた男ではないか。その上ここにやってきたのも、彼らを縛りあげて、祭司長たちのところへひっぱって行くためではなかったか」。パウロは自分の信仰の変化は、衝動や熱狂にかりたてられたものではなく、抵抗できない力によってなし遂げられたものであると述べた。彼は福音を提示するにあたって、キリストの初臨に関する預言を明白に教えようと努めた。そして彼は結論として、これらの預言が文字通りにナザレのイエスに成就したことを告げた。彼の信仰の基礎はゆるぎない預言のことばであった。 [132]

パウロは驚いている人々に「悔い改めて神に立ち帰り、悔改めにふさわしいわざを行うようにと」説き続けて（使徒行伝二六ノ二〇）、「ますます力が加わり、このイエスがキリストであることを論証して、ダマスコに住むユダヤ人たちを言い伏せた」。しかし多くの人々は彼の説教に応じることを拒み、心をかたくなにした。やがて、パウロの改心に対する彼らの驚きは、イエスに示したような憎しみに変わった。

反対がますます激しくなったので、パウロはダマスコで働きを続けることができなくなった。天よりの使者がしばらくそこを去るようにと彼に命じたので、彼は「アラビヤに出て行っ」て、そこで安全なかくれ家を見つけた（ガラテヤ一ノ一七）。

パウロは砂漠のさびしい所で、静かな研究と瞑想の時
[133] を十分に得た。彼は静かに自分の過去をふりかえり、悔い改めの確かなわざをなした。彼は真心から神を求めて、彼の悔い改めが受け入れられ、罪がゆるされたことを確かめるまで気を安めなかった。彼はこれから伝道するにあたって、イエスが彼と共にいてくださるという確証を得たいと切望した。彼はこれまで彼の生活を形造っていた偏見や言い伝えを一切捨てて、真理の源なる神の教えを受けた。イエスはパウロと交わり、彼の信仰を固め、知恵と恵みを豊かにお与えになった。

人の心が神の心と交わり、限りあるものが無限の創造主と交わるとき、身体や精神や魂に及ぼすその影響は計り知れない。そのような交わりの中に最高の教育がある。それが神ご自身の教育方法である。「あなたは神と和ら・・・・ぐがよい」これは神が人類にお与えになった教えである（ヨブ記二二ノ二一）。

アナニヤに会ったときにパウロが受けたおごそかな命令は、パウロの心にますます重くとどまった。「兄弟サウロよ、見えるようになれ」という言葉に答えてパウロがはじめてこの信仰深い人の顔を見たとき、アナニヤは聖霊の霊感をうけて彼に告げた。「わたしたちの先祖の神が、あなたを選んでみ旨を知らせ、かの義人を見させ、その口から声をお聞かせになった。それはあなたが、その見聞きした事につき、すべての人に対して、彼の証人になるためである。そこで今、なんのためらうことがあろうか。すぐ立って、み名をとなえてバプテスマを受け、あなたの罪を洗い落しなさい」（使徒行伝二二ノ一四－一六）。

これらの言葉はイエスご自身が、ダマスコへの旅の途
[134] 上にいたサウロを捕らえてお語りになったこと ばと一致するものであった。「わたしがあなたに現れたのは、あなたがわたしに会った事と、あなたに現れて示そうとしている事とをあかしし、これを伝える務に、あなたを任じるためである。わたしは、この国民と異邦人との中から、あなたを救い出し、あらためてあなたを彼らにつかわすが、それは、彼らの目を開き、彼らをやみから光へ、悪魔の支配から神のみもとへ帰らせ、また、彼らが罪のゆるしを得、わたしを信じる信仰によって、聖別された人々に加わるため

である」とイエスは言われたのである（使徒行伝二六ノ一六ー一八）。

パウロはこれらの事を心の中でじっくり考えながら、「神の御旨により召されてキリスト・イエスの使徒となった」意味をますますはっきり理解するようになった（コリント第一・一ノ一）。その召しは「人々からでもなく、人によってでもなく、イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神」から来たものであった（ガラテヤ一ノ一）。自分の前にある働きの重大さを思って、パウロは聖書をよく研究するようになった。それは彼が福音を、「知恵の言葉を用いずに宣べ伝えるためであった。それは、キリストの十字架が無力なものになってしまわないためなのである。」また「霊と力との証明に」より、聞いた者の信仰が「人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであった」（コリント第一・一ノ一七、二ノ四、五）。

パウロは聖書を探りながら、各時代を通じて「人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も多くはいない。それだのに神は、知者をはずかしめるために、この世 の愚かな者を選び、強い者 [135]
をはずかしめるために、この世の弱い者を選び、有力な者を無力な者にするために、この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無きに等しい者を、あえて選ばれた」ことを知った。「それは、どんな人間でも、神のみまえに誇ることがないためである」（コリント第一・一ノ二六ー二九）。このようにこの世の知恵を十字架の光に照らしてみて、パウロは「イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは・・・・何も知るまいと、決心した」（コリント第一・二ノ二）。

その後、伝道の働きを通して、パウロは知恵と力の源であられるかたを見失うことがなかった。何年かたってのちもなお「わたしにとっては、生きることはキリストであ」ると彼が言うのを聞くことができる（ピリピ一ノ二一）。また「わたしは、更に進んで、わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている。キリストのゆえに、わたしはすべてを失った・・・・それは、わたしがキリストを得るためであり、律法による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰に

よる義、すなわち、信仰に基く神からの義を受けて、キリストのうちに自分を見いだすようになるためである。すなわち、キリストとその復活の力とを知り、その苦難にあずか」るためであるとパウロは述べている（ピリピ三ノ八―一〇）。

パウロはアラビヤから「再びダマスコに帰っ」て（ガラテヤ一ノ一七）、「イエスの名で大胆に宣べ伝えた」。彼の説得の知恵に逆らうことができなかった「ユダヤ人たち
[136] はサウロを殺す相談をした」。彼がのがれる道を遮断する
[137] ために、町の門は夜昼休みなく見張りがつけられた。この危機のために弟子たちは熱心に神を求めて、ついに彼らは「夜の間に彼をかごに乗せて、町の城壁づたいにつりおろした」（使徒行伝九ノ二五）。

ダマスコからのがれ出てのち、パウロはエルサレムに行った。改心以来、約三年たっていた。ここを訪問した主な目的は、彼がのちに述べているように「ケパ（ペテロ）をたずね」るためであった（ガラテヤ一ノ一八）。以前に「迫害者サウロ」としてよく知られていた所に着いてすぐパウロは、「弟子たちの仲間に加わろうと努めたが、みんなの者は彼を弟子だとは信じないで、恐れていた」。以前にあれほど頑迷がんめいなパリサイ人で、教会をひどく破壊した人がイエスの誠実なしもべになることができたとは、弟子たちにはなかなか信じられなかった。「ところが、バルナバは彼の世話をして使徒たちのところへ連れて行き、途中で主が彼に現れて語りかけたことや、彼がダマスコでイエスの名で大胆に宣べ伝えた次第を、彼らに説明して聞かせた。」

これを聞いて弟子たちは、パウロを自分たちの仲間のひとりとして受け入れた。まもなく彼らは、パウロのクリスチャン経験が正真正銘のものだという十分な証拠を得た。異邦人に対する将来の使徒は、以前に彼が交わっていた人々の大ぜいいるこの町に、今、来ているのであった。そして、これらのユダヤ人の指導者たちに、既に救い主の来臨によって成就されていた、メシヤに関する預言を明らかにしたいと彼は思った。パウロは、これまで非常によく
[138] 知っていたこれらのイスラエルの教師たちが、以前の彼と同様に誠実で正直だということを確信していた。しかし彼は、ユダヤ人の兄弟たちの精神を見込み違いしていたた

めに、彼らを性急に改心させようとして、みじめな失望に陥るはめになった。彼は「主の名によって大胆に語り、ギリシヤ語を使うユダヤ人たちとしばしば語り合い、また論じ合った」が、ユダヤ教の主立った人々は信じることを拒み、「彼を殺そうとねらっていた」。パウロの心は悲しみに満たされた。彼は、そうすることでだれかに真理を理解させることができれば、自分の命をよろこんで捨てたであろう。パウロはステパノの殉教に自分が積極的な行動に出たことを恥ずかしく思い返し、不実に訴えられた者の上につけられた汚点を今拭い去りたいと願って、ステパノが命をかけて守り通した真理を彼も擁護しようとした。

信じることを拒んだ人々のために重荷を感じて、パウロは宮で祈っていた。後になって彼はこの事をあかししているが、その時、彼は夢心地になった。そこに天使が現れて彼に言った、「急いで、すぐにエルサレムを出て行きなさい。わたしについてのあなたのあかしを、人々が受けいれないから」（使徒行伝二二ノ一八）。

パウロは、反対者に立ち向かうことのできるエルサレムに留まっていたい気持ちであった。彼にとって、逃げることは臆おく病な行為に思えた。たとえ留まることが命をかけることであっても、もし留まれば頑固なユダヤ人たちのだれかに、福音使命の真理を確信させることができるかもしれないからであった。そこで彼は「主よ、彼らは、わたしがいたるところの会堂で、あなたを信じる人々を獄に投じたり、むち打ったりしていたことを、知っています。また、あなたの証人ステパノの血が流された時も、わたしは立ち合っていてそれに賛成し、また彼を殺した人たちの上着の番をしていたのです」と答えた。しかし、神のしもべが不必要に命を危険にさらすことは、神の目的に添うものではなかった。「行きなさい。わたしが、あなたを遠く異邦の民へつかわすのだ」と天使が答えた（使徒行伝二二ノ一九－二一）。 [139]

この幻について聞かされた兄弟たちは、パウロが暗殺されることを恐れて、急いで彼をエルサレムからひそかに逃れさせた。兄弟たちは「彼をカイザリヤに連れてくだり、タルソへ送り出した」。パウロが去ったことで、ユダヤ人たちの激しい反対が一時停止し、教会は平安を保ち、多くの人々が信者の中に加えられた。

[140]

第一四章　神は人をかたより見ない

本章は使徒行伝九章三二節－一一章一八節に基づく

使徒ペテロは伝道の旅行中に、ルダに住む信徒たちを訪問した。そこで彼は、中風のために八年間も床についていたアイネヤをいやした。「アイネヤよ、イエス・キリストがあなたをいやして下さるのだ。起きなさい。そして床を取りあげなさい」とペテロが言った。「すると、彼はただちに起きあがった。ルダとサロンに住む人たちは、みなそれを見て、主に帰依した。」

ルダの近くのヨッパにドルカスという名前の婦人が住んでいた。彼女はよい働きをして、人々から非常に愛されていた。彼女はイエスのりっぱな弟子で、かずかずの親切なことを行いながら暮らしていた。また、だれに心地よい衣服が必要であるか、だれに同情が必要であるかを知っていて、貧しい者や悲しむ者のために惜しみなく尽くしていた。彼女の器用な手先はその舌よりも活発に働いた。

「ところが、そのころ病気になって死んだ。」ヨッパの
[141] 教会は彼らの損失を知った。ペテロがルダにいることを聞いた信者たちは彼に使いをやり、「『どうぞ、早くこちらにおいで下さい』と頼んだ。そこでペテロは立って、ふたりの者に連れられてきた。彼が着くとすぐ、屋上の間に案内された。すると、やもめたちがみんな彼のそばに寄ってきて、ドルカスが生前つくった下着や上着の数々を、泣きながら見せるのであった」。ドルカスが送った奉仕の一生を考えると、彼らが嘆き悲しんだこと、熱い涙のしずくが生命のない土くれの上に落とされたことに不思議はない。

使徒ペテロは彼らの悲しみを見て同情し、心を動かされた。それから彼は嘆き悲しんでいる友人たちを部屋から出させるように命じ、ひざまずいてドルカスの命と健康が取りもどされるように、神に熱心に祈った。それから死体に向かい、彼は言った「タビタよ、起きなさい」。「すると彼女は目をあけ、ペテロを見て起きなおった。」ドルカスは教会にとって有益な奉仕をしていたので、神は彼女を

敵の地から導きかえすことが必要だと思われた。その器用な手先と精力をなお他人を恵むために用いさせ、またこの神のみ力の現れによって、キリストのみわざが強められるようになるためであった。ペテロはまだヨッパにいたときに、カイザリヤにいるコルネリオに福音を伝えるようにという神の召しを受けた。

コルネリオはローマの百卒長であった。彼は金持ちで高貴の生まれであったし、責任と名誉のある地位についていた。彼は異教徒の生まれで異教の訓練と教育を受けていたが、ユダヤ人との接触によって神のことを学び、心から神を拝して、貧しい人々をあわれむ行為によって、その信仰の偽りないことを あらわしていた。彼の慈善行為は遠くま [142] で知れわたり、その正しい生活によってユダヤ人の間にも異邦人の間にも評判がよかった。彼は接触するすべての者によい感化を及ぼした。彼については、「信心深く、家族一同と共に神を敬い、民に数々の施しをなし、絶えず神に祈をしていた」と、霊感の書に記されている。

彼は神を天地の創造主として信じていたので、神を敬いその権威を認め、生活のどんなことにも神のみこころを求めた。彼は家庭生活にも職務の上でも主に忠実であった。彼は家庭に神の祭壇を築いた。というのは、彼は神の助けを受けずに自分の計画を実行したり、責任を負うことができなかったからである。

コルネリオは預言を信じ、メシヤの来臨を待ち望んでいたが、キリストのいのちと死にあらわされた福音についての知識を持っていなかった。彼はユダヤ教の信徒ではなかったので、ラビたちから異教徒で汚れている者とみなされていたかもしれない。しかしアブラハムについて、「わたしは彼を知っている」と仰せになった聖なる警護者は、コルネリオをも知っておられて、天から直接、彼にメッセージをお送りになった。

コルネリオが祈っていると天使が現れた。百卒長は自分の名が呼ばれたので恐れたが、神の使者がきたことを悟って「主よ、なんでございますか」と言った。すると天使が答えて「あなたの祈や施しは神のみ前にとどいて、おぼえられている。ついては今、ヨッパに人をやって、ペテロと呼ばれるシモンと いう人を招きなさい。この人は、海べ [143]

に家をもつ皮なめしシモンという者の客となっている」と言った。

これらの命令の明白なこと、また、ペテロが宿っている家の人の職業まであげられていることを見ると、どんな身分の人々の一生も仕事も天には知られていることがわかる。神は王の経験や働きを知っておられるだけでなく、身分の低い労働者のこともごぞんじなのである。

「ヨッパに人をやって・・・・シモンという人を招きなさい。」こうして神は福音事業と、ご自分の組織された教会に関心をもっておられることをあらわされた。天使はコルネリオに、十字架の話をするためにつかわされたのではない。神は百卒長と同じように弱い、誘惑にも陥りやすいひとりの人間を選んで、十字架につけられ、よみがえられた救い主のことを彼に伝えさせられたのである。

人々の中での神の代表者として、神は誤りを犯したことのない天使をお選びになるのではなく、救いの対象とされている人々と同じ感情を持った人間をお選びになる。キリストは人類に近づくために人間性をとられた。この世に救いをもたらすためには、神性と人性をとられた救い主が必要であった。そして男にも女にも「キリストの無尽蔵の富」を宣べ伝える仕事が、神からゆだねられているのである（エペソ三ノ八）。

神はその英知で、真理を求めている人々を、真理を知っている仲間たちと交わるように導かれる。光を受けた者たちが、それを暗黒の中にいる者たちに分け与えることは、天の計画である。人間性は、知恵の偉大な源から能力をひき出し、福音がそれを通して、心と思いを変える力を働かせる媒介、すなわ ち実際的な仲立ちとなるのである。[144]

[145] コルネリオは幻によろこんで従った。天使が行ってしまってから百卒長は、「僕しもべふたりと、部下の中で信心深い兵卒ひとりとを呼び、いっさいの事を説明して聞かせ、ヨッパへ送り出した」。

天使はコルネリオにあらわれてから、ヨッパにいるペテロのもとに行った。その時ペテロは、泊まっている家の屋上で祈っていた。記録には、「彼は空腹をおぼえて、何か食べたいと思った。そして、人人が食事の用意をしている間に、夢心地になった」とある。ペテロがほしかったのは肉体的な食物ばかりではなかった。ヨッパの町とその郊外

を屋上から見おろした彼は、その地方の人々の救いを求めたのである。彼はキリストの苦悩と死に関する預言を、聖書から彼らに示したいとひたすら願っていた。

幻のうちにペテロは「天が開け、大きな布のような入れ物が、四すみをつるされて、地上に降りて来るのを見た。その中には、地上の四つ足や這うもの、また空の鳥など、各種の生きものがはいっていた。そして声が彼に聞えてきた、『ペテロよ、立って、それらをほふって食べなさい』。ペテロは言った、『主よ、それはできません。わたしは今までに、清くないもの、汚れたものは、何一つ食べたことがありません』。すると、声が二度目にかかってきた、『神がきよめたものを、清くないなどと言ってはならない』。こんなことが三度もあってから、その入れ物はすぐ天に引き上げられた」。

この幻はペテロにとって譴責ともなり、教えともなった。それは神の目的、すなわちキリストの死によって異邦人もユダヤ人とひとしく、救いの恩恵にあずかることを示していた。当時まだ弟子たちはだれも、異邦人に福音を伝 [146]
えていなかった。彼らの心の中には、キリストの死によって取り除かれたはずの隔ての中垣が、今もなお存在していて、彼らの働きはユダヤ人たちにだけしか向けられていなかった。彼らは、異邦人は福音の祝福にあずかることはないと思っていたからである。神は今、ご自分の計画を世界的にひろめるように、ペテロに教えておられた。

異邦人たちの中には、ペテロやその他の使徒たちの説教に興味深く耳を傾ける者が大ぜいいた。そして多くのギリシヤ語を話すユダヤ人がキリストの信徒になったが、コルネリオの改心は、異邦人たちの中でも最初の重要な事件であった。

キリストの教会が、全く新しい方面の働きを開始すべき時がきていた。ユダヤの改宗者たちの多くが異邦人に対して閉ざしていた戸を、今こそ広く開かなければならなかった。そして福音を受け入れた異邦人は、ユダヤ人の弟子とひとしくみなされ、割礼の儀式を守る必要はなかった。

ユダヤ人の教育を受けたために、ペテロの心にしっかり固着していた異邦人に対する偏見を取り去るために、主はいかに慎重に働きかけられたことであろう。布とその中身の幻によって、神は使徒の心にあるこの偏見を脱ぎすてさ

せ、天国では人を差別待遇することはなく、ユダヤ人も異邦人も神の御目にはひとしく尊いものであり、キリストを通して、異教徒も福音の祝福と特権にあずかることができるということを教えようとされた。

ペテロが幻の意味をいろいろ考えている時、コルネリオ
[147] の使いの者がヨッパに着いて、ペテロが泊まっていた家の門口に立った。するとみ霊たまは「ごらんなさい、三人の人たちが、あなたを尋ねてきている。さあ、立って下に降り、ためらわないで、彼らと一緒に出かけるがよい。わたしが彼らをよこしたのである」と言った。

ペテロにとってこれは苦しい命令だったので、その役目を引き受けるには一足ごとに足が重くなるばかりであったが、彼は拒もうとしなかった。「そこでペテロは、その人たちのところに降りて行って言った、『わたしがお尋ねのペテロです。どんなご用でおいでになったのですか』」。彼らはその不思議な用向きを説明して言った「正しい人で、神を敬い、ユダヤの全国民に好感を持たれている百卒長コルネリオが、あなたを家に招いてお話を伺うようにとのお告げを、聖なる御使から受けましたので、参りました」。

神から受けたばかりの命令に従い、使徒は彼らと共に行く約束をした。あくる朝、彼は兄弟たち六人を連れてカイザリヤに向かった。この人々は異邦人をおとずれている時、彼の言行すべての証人となるはずであった。彼はユダヤの教えを真向からおかすことに、申し開きするよう求められることを知っていたからである。

ペテロがその異邦人の家に入るとコルネリオは、普通の訪問者を迎えるようなあいさつではなく、神からつかわされた尊い客として彼を迎えた。王子や高貴な人の前にぬかずいたり、子供が両親の前に頭をさげてあいさつすることは東方の習慣である。しかし、コルネリオは教えをさず
[148] けるために神からつかわされた人を尊敬するあまり、感極
[149] まって使徒の足もとにひれ伏して、拝した。ペテロは恐怖におそわれ、百卒長を引き起こして言った、「お立ちなさい。わたしも同じ人間です」。

コルネリオの使いの者たちが使いに出ていたあいだに百卒長は、福音の説教を自分一人でなくみんなで聞こうと「親族や親しい友人たちを呼び集めて」いた。ペテロが到

着すると、大ぜいの人々が彼の言葉を聞こうと熱心に待っていた。

こうして集まった人々に、ペテロはまずユダヤ人の習慣について話し、ユダヤ人にとって異邦人と交際することは違法と考えられていて、宗教的な汚れをうけることになると説教した。「あなたがたが知っているとおり、ユダヤ人が他国の人と交際したり、出入りしたりすることは、禁じられています。ところが、神は、どんな人間をも清くないとか、汚れているとか言ってはならないと、わたしにお示しになりました。お招きにあずかった時、少しもためらわずに参ったのは、そのためなのです。そこで伺いますが、どういうわけで、わたしを招いてくださったのですか」とペテロが言った。

そこでコルネリオは彼の経験と天使の言葉について話し、「それで、早速あなたをお呼びしたのです。ようこそおいで下さいました。今わたしたちは、主があなたにお告げになったことを残らず伺おうとして、みな神のみ前にまかり出ているのです」と言葉を結んだ。

ペテロは、「神は人をかたよりみないかたで、神を敬い義を行う者はどの国民でも受けいれて下さることが、ほんとうによくわかってきました」と言った。

それから、その熱心な聴衆に使徒はキリストの生涯と奇跡、彼に対する裏切りと十字架、よみがえりと昇天、人類のための代表者であり、弁護者としての天におけるキリストの働きについて説いた。ペテロは集まっている人々に、イエスが罪人の唯一の望みであると語っているあいだに、彼の見た幻の意味が自分自身に更によくわかるようになった。そして彼が紹介している真理への熱情で心が燃えた。 [150]

突然聖霊がくだって、説教が中断された。「ペテロがこれらの言葉をまだ語り終えないうちに、それを聞いていたみんなの人たちに、聖霊がくだった。割礼を受けている信者で、ペテロについてきた人たちは、異邦人たちにも聖霊の賜物が注がれたのを見て、驚いた。それは、彼らが異言を語って神をさんびしているのを聞いたからである。

そこで、ペテロが言い出した、『この人たちがわたしたちと同じように聖霊を受けたからには、彼らに水でバプテスマを授けるのを、だれがこばみ得ようか』。こう言っ

て、ペテロはその人々に命じて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けさせた。」

こうして福音は異邦人や外国の人々に伝えられ、彼らは聖徒と同じ市民になり、神の家族の中に加えられた。コルネリオとその家族の者たちの改宗は、これから集められる収穫の初穂にほかならなかった。これがきっかけとなり、神の恵みの働きは異教の町に広くひろめられた。

今日、神は身分の低い者だけでなく、身分の高い者の中からも魂を求めておられる。コルネリオのように、主がみわざに携わらせたいと思っておられる人々がこの世に大ぜ
[151] いいる。彼らの心は神の民と共感しながら、なお、彼らが世と結ばれているきずなも固いのである。彼らがキリストの側に立つためには道徳的な勇気が必要である。これらの魂にとっては、特別な努力が払われなければならない。彼らは責任や交際のために大きな危険にさらされているからである。

神は身分の高い人々に福音を伝える、熱心で謙遜な働き人を求めておられる。今ははっきり見ることはできないが、純粋な改心をもたらすように働く奇跡がある。この地上でどんなに偉い人々でも、不思議を行う神の力の及ばないところにいるのではない。もし、神と共に働く者が機会をとらえて、勇敢に、忠実に働くならば、神は責任のある地位にいる人々や、知的で感化力のある人々を改心させるのである。聖霊の力によって多くの人々が神の原則を受け入れるようになる。真理に改宗した人々は、神に協力する働き人となって光を伝えるであろう。彼らは、おろそかにされていたこの階級の他の人々に、特別の重荷を感じるであろう。時間と金銭が神の働きのためにささげられ、新しい能力と力が教会に加えられるであろう。

コルネリオは受けた教えをそのまま生活に実践していたので、神は彼がもっと多くの真理を受けるように事をお運びになった。天の宮廷から使者が送られて、このローマの軍人とペテロに現れた。それはコルネリオが更に大いなる光に導いてくれる者と接触するためであった。

この世にはわれわれが考えているよりも、神のみ国に近づいている者がたくさんいる。神はこの暗い罪の世にも多くの貴重な宝石のような人々を知っておられ、彼らにご自
[152] 分の使者をお送りになる。キリストの側に立とうとする者

はどこにでもいる。地上のどんな特権よりも神の知恵を尊んで、忠実に光をかかげる者となる人が大ぜいいる。キリストの愛に迫られた彼らは、キリストのみもとに行くように他の人々に迫るのである。

ユダヤにいる兄弟たちは、ペテロが異邦人の家に行って、集まった人々に福音を宣べ伝えたことを聞くと驚き、また憤った。そして僭越せんえつとしか思われないそうしたやりかたは、かえって彼自身の教えを妨げる結果になるのではないかと彼らは恐れた。彼らはその後ペテロに会ったとき、「あなたは、割礼のない人たちのところに行って、食事を共にしたということだが」と言って、彼を厳しく非難した。

ペテロは事の次第を残らず彼らに明かして、幻に関する経験を語り、その幻によって自分は、割礼を受ける受けないという宗教上の差別をつけたり、異邦人をけがれた者とみなしたりしてはならないことを教えられたと言って説得した。また異邦人の家に行くように命じられたこと、み使いたちがやってきたこと、カイザリヤへの旅のこと、コルネリオと会ったことを彼らに聞かせた。ペテロは百卒長との会見の内容をくわしく話し、百卒長がまず幻を受けて自分に使いを送ったという事情を説明した。

「わたしが語り出したところ、聖霊が、ちょうど最初わたしたちの上にくだったと同じように、彼らの上にくだった。その時わたしは、主が『ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは聖霊によってバプテスマを受けるであろう』と仰せになったことばを思い出した。このように、わたしたちが主イエス・キリストを信じた時に下さったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったとすれば、わたしのような者が、どうして神を妨げることができようか」と、ペテロは経験したことを話した。 [153]

この説明を聞くと兄弟たちはだまってしまった。ペテロのとった方法は、神のご計画をそのまま実行したものであり、自分たちの偏見や排他的な気持ちは福音の精神に全く反するものであることをさとって、彼らは神をさんびし、「それでは神は、異邦人にも命にいたる悔改めをお与えになったのだ」と言った。

こうして、争いもなく偏見は打ち破られ、長年の習慣によって築かれていた排他的な気持ちは捨てられ、異邦人にも福音を宣べ伝える道が開かれた。

第一五章　牢獄から救われたペテロ [154]

本章は使徒行伝一二章一節－一三節に基づく

「そのころ、ヘロデ王は教会のある者たちに圧迫の手をのばし」た。

当時、ユダヤの政府はローマの皇帝クラウディウスの支配下にあったが、ヘロデ・アグリッパ王が実権を握っていた。ヘロデ王はまたガリラヤの領主でもあった。彼はユダヤ教への改宗者であると公然と名のり、うわべだけはユダヤのおきての祭儀を熱心に守った。ヘロデはユダヤ人の支持を受けて、自分の地位と栄誉を確保したいと思い、ユダヤ人の望みどおりにキリスト教会を迫害し、信者の家や所有物を破損し、教会の指導者らを投獄した。彼はヨハネの兄弟ヤコブを獄ひとやに投げ込んで、もうひとりのヘロデ王が預言者ヨハネを打ち首にしたように、剣で彼を殺すために死刑執行人を送った。このような行為が、ユダヤ人をよろこばせたことを知って、彼はペテロをも投獄した。

これらの残虐行為がなされたのは過越すぎこしの祭の時であった。ユダヤ人はエジプトからの救済を祝い、神のお [155] きてに対する熱誠を装っていながら、一方ではキリストの信者を迫害し殺すことによって、そのおきてのすべての原則を犯していた。

ヤコブの死は信者たちの間に、大きな悲しみと驚きをひきおこした。ペテロまでも投獄されたので、教会はこぞって断食し、祈った。

ヤコブを死刑にしたヘロデの行為はユダヤ人の称賛を受けたが、一部の人々はそのやりかたがあまり非公式なのを不平に思って、公然と処刑が行われれば信者や彼らに同情する人々を、もっとおびやかすことができたにちがいないと主張した。そこでヘロデはペテロを監禁しておいて、彼の死刑を見せ物にし、ユダヤ人たちをもっと満足させてやろうと思った。しかしその時エルサレムに集まっていた大ぜいの人々の前で、大使徒ペテロを引き出して処刑するのは危険ではないかというものがあった。死刑にされる彼の

姿を見たら、群衆の同情心を買うかもしれないと思われたのである。

祭司や長老たちはまた、ペテロが人々に、イエスの一生とご品性を研究させずにはおかないようなあの力強い訴えを、またしかねないかもしれないと恐れた。それは祭司たちがどんなに議論をつくしても、論駁することができなかった訴えである。キリストの主義を唱道するペテロの熱意に動かされて、多くの者が福音のために献身したので、役人たちは、祭のために町にやってきた群衆の前で、信仰を擁護する機会がペテロに与えられれば、王の権限により彼を釈放せざるを得なくなるのではないかと恐れた。

いろいろな口実にかこつけて、ペテロの死刑は過越の祭の後まで延期されていたが、そのあいだ、教会 員は心を深くさぐり祈る時が与えられた。訴因からみてもペテロが助命されることはできないと彼らは感じていたからである。彼らは神の特別の助けがないかぎり、キリストの教会は破壊されるというところまできていることを知っていた。[156]

そうしているあいだも各国からやってきた参拝者たちは、神を礼拝するために献堂された宮をたずねていた。黄金や宝石に輝く宮は美と壮麗そのものであった。しかし主はもはやその美しい宮殿におられなかったのである。一民族としてのイスラエルはすでに神から離れていた。キリストはこの地上でのみわざの終わりごろ、宮の内部を最後に御覧になったとき、「見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう」と言われた（マタイ二三ノ三八）。これまでキリストは宮をみ父の家と呼んでおられたが、神のみ子がその宮から出て行かれたとき、神の栄光のために建てられた宮には永久に神の臨在はなくなった。

ついにペテロの処刑の日が決まったが、信者たちの祈りはなお天にのぼっていた。彼らが精力と同情の気持ちを注ぎつくして熱心に助けを祈り求めている時、神のみ使いたちは投獄されている使徒を見守っていた。

ヘロデは以前に、使徒たちが獄から逃げたことがあるのをおぼえていたので、今度は用心に用心をした。どうみても救われる可能性がないように、ペテロは十六人の兵卒に夜昼寝ずの番で監視された。また獄房では二本の鎖につながれてふたりの兵卒の間におかれ、その鎖はそれぞれ兵卒の手首に結びつけてあった。ペテロが少しでも動けば必ず

彼らに気づかれた。獄の戸口の錠は厳重におろされ、屈強な番 兵が見張りをしているために、人間がどう手をくだしても全然助けるすべも、逃げるすべもなかった。しかし人間の窮地は神の好機である。 [157]

ペテロはこうして岩を切り抜いて造った獄房に監禁され、その戸口には厳重なかぎとかんぬきがかかっていた。番兵たちは囚人の保護の責任をもたされた。しかし人間の救助手段を全然断ち切ってしまったような錠前もかんぬきもローマの番兵も、ペテロを救われる神の勝利をいっそう輝かしいものとする手段としかならなかった。ヘロデは全能の神に逆らって手をあげていたが、全く敗北する。神はその偉大な力を発揮されて、ユダヤ人が滅ぼそうとたくらんでいた尊い命を、まさに救おうとしておられた。

処刑が予定されていた前夜のことである。ペテロを助けるために力強い天使がひとり送られる。神の聖徒ペテロを閉じ込めていた頑丈がんじょうな門は人手によらずに開く。至高の神のみ使いがそこを通り抜けると、門は音もなくしまる。天使が獄房にはいっていくと、ペテロは神を信頼しきって安らかに眠っている。

天使をとりまいていた光が獄房いっぱいにひろがるが、ペテロは目をさまさない。天使の手が触れるのを感じ、「早く起きあがりなさい」という声を聞いてはじめて目をさました彼は、天の光が獄房に輝き、大いなる栄光の天使が前に立っているのを見る。彼は語りかける言葉に機械的に従い、立ち上がりながら両手をもちあげたとき、鎖が手首から落ちているのにぼんやり気がつく。

再び天使の声が「帯をしめ、くつをはきなさい」と命じると、ペテロは天使を不思議そうに見つめながら、機械的にその命令に従い、夢か幻を見ているにちがいないと思う。またもや天使が「上着を着て、 ついてきなさい」と命じる。天使が戸口のほうへ歩き出すと、日ごろおしゃべりなペテロも、この時ばかりは驚いて物も言えずにだまってついていく。彼らが番人をまたいで通り過ぎ、錠前の頑丈な門のところに来ると、門はひとりでに開いて、すぐまた閉じる。その間、内側と外側の番人は動かずにその部署についている。 [158]

次にまた内外とも見張りのついている二番目の門に来る。それははじめの門と同じように開き、蝶つがいのきし

る音も鉄のかんぬきのガチャガチャいう音もしない。ふたりはそこを通り抜ける。門はまた音もなく閉じる。第三の門も同じようにして通り過ぎ、表通りに出る。一言も声はなく、足音もしない。まばゆい光につつまれた天使は音もなく前を歩いていくので、ペテロはとまどい、夢ではないかと思いながら、そのあとからついて行く。こうしてふたりが一つの通りを過ぎると、自分の任務を果たした天使は突然姿を消す。

天来の光が消えると、ペテロは真のやみの中に取り残されたように感じた。しかし暗やみに目がなれて来ると、その暗さも次第にうすらいできた。彼はただひとり静かな通りに立って、冷たい夜風にさらされていた。ようやく彼は自分が自由の身となって、なじみの深い町の一角にいることを悟った。彼は自分のいる場所がわかった。そこは彼がたびたび来たところで、翌朝はそこを通って刑場に向かうはずであった。

ペテロは過ぎ去った数分間の出来事を思い起こそうとした。彼はくつも上衣も取り去られてふたりの 兵卒の間[159]につながれ、眠ったことを思い出した。今自分の身のまわりをよく調べてみるとちゃんと上衣を着て、くつもはいていた。残酷な鉄かせをはめられてはれあがっていた手首は自由になっていた。彼は自分の救われたのが気の迷いでも夢でも幻でもなく、よろこばしい現実であることをさとった。あすは死刑に処せられるはずであったのだが、見よ、天使が彼を獄屋と死から救い出したのである。「ペテロはわれにかえって言った、『今はじめて、ほんとうのことがわかった。主が御使をつかわして、ヘロデの手から、またユダヤ人たちの待ちもうけていたあらゆる災から、わたしを救い出して下さったのだ』。」

使徒は、兄弟たちが集まって、彼のためにその瞬間も熱心に祈っている家へとすぐさま向かった。「彼が門の戸をたたいたところ、ロダという女中が取次ぎに出てきたが、ペテロの声だとわかると、喜びのあまり、門をあけもしないで家に駆け込み、ペテロが門口に立っていると報告した。人々は『あなたは気が狂っている』と言ったが、彼女は自分の言うことに間違いはないと、言い張った。そこで彼らは『それでは、ペテロの御使だろう』と言った。

しかし、ペテロが門をたたきつづけるので、彼らがあけると、そこにペテロがいたのを見て驚いた。ペテロは手を振って彼らを静め、主が獄から彼を連れ出して下さった次第を説明し」、それから彼は、「どこかほかの所へ出て行った」。神が彼らの祈りを聞き、それに答え、ペテロをヘロデの手から救い出されたので、信者たちの胸はよろこびとさんびでいっぱいになった。

翌朝、大群衆が使徒の死刑を見るために集まった。ヘロデはペテロを迎えに役人たちを獄につかわし た。仰々し [160]
い武装と監視つきで彼を連れ出すことになっていた。それは彼が逃亡できぬようにし、また、すべての同情者をおどし、王の威力を示すためであった。

戸口にいた番人はペテロが逃げたことを発見して恐怖にとりつかれた。彼らは命をかけて責任を負うようにと特別に言いわたされていたので、特に寝ずの番をしていたのである。役人たちがペテロを迎えにやってきたとき、番兵たちはまだ獄の戸口にいて、錠前もかんぬきもしっかりかけられ、鎖はふたりの兵卒の手首にがっちりとついていた。しかし囚人がいなくなっていたのである。

ペテロが逃げたという知らせがヘロデに届いたとき、彼は激怒した。彼は番兵たちの不忠実をとがめて、死刑を言いわたした。人間の力によってペテロが救い出されたのではないことをヘロデは知っていたが、神の力が彼の計画を失敗させたとは断固として認めず、大胆に神に挑戦する態度を固めた。

ペテロが獄から救い出されて間もなく、ヘロデはカイザリヤに行った。彼はそこで大きな祭りをもよおし、人々の称賛をかりたてて拍手かっさいを得ようとした。この祭りには諸国から道楽者が集まり、宴会や酒盛りでにぎわった。ヘロデは華麗に仰々しく人々の前に姿を見せ、雄弁な演説を行った。金銀に輝く衣をまとった彼は絢爛けんらんたる姿であった。衣のひだは太陽の光を受けてきらびやかに輝き、見上げる人々の目はくらんだ。彼の堂々とした容姿とよく選択された言葉の威力は列席する人々を強い力でゆさぶった。彼らの感覚は既に美食と酒のために異常になり、ヘロデの着飾った装いに目がくらんで、彼の振る舞いや雄弁に魅了されていた。そして、これほど立派な押し出しと雄弁をそなえた人間はめずら しいと言って、熱狂的な [161]

お世辞を彼にあびせた。更に彼らは、これまでヘロデを統治者として尊敬していたが、今後は神として拝まねばならないと言った。

こうして一人の卑劣な罪人を称賛している人々の中には、数年前に逆上した叫びをあげて、イエスを殺せ！彼を十字架につけよ、十字架につけよ！とどなった者もいた。ユダヤ人たちはしばしば、旅によごれた粗末な衣の下に神の愛を包んでおられたキリストを受け入れず拒んだ。キリストの力は、単なる人間にはできないみわざをとおして、彼らの前にあらわされたが、彼らはその粗末なみなりからいのちと栄光の主を見きわめることができなかった。だが彼らは、金銀をあしらった立派な衣の下に、堕落した残酷な心を秘めている堂々たる王を、神として拝もうとしていた。

ヘロデは自分が賛辞も尊敬も受けるに値しない者であることを知っていたが、人々の崇拝をまるで当然のことのように受けていた。「これは神の声だ、人間の声ではない」という叫びがわき上がるのを聞いて、彼の心は勝利におどり、傲慢な満足感が顔面にみなぎった。

しかし突然、恐ろしい変化が彼を襲った。彼は死人のように青ざめ、苦しみに顔がゆがんだ。大粒の汗が毛穴から流れ出て、彼は一瞬、苦痛と恐怖にすくみあがったように立っていた。それから、恐怖におびえている友人のほうへまっさおな顔を向け、うつろな絶望的な調子で叫んだ。おまえたちが神としてあがめた者が打たれて死ぬぞと。

彼は耐えがたいほどの苦しみにさいなまれながら、酒宴
[162] をもうけ自分を誇示した場所から運び去られた。たった今まで、その大群衆の賛辞と崇拝を得々として受けていた彼は今、自分よりも強い統治者の手中にあることを悟った。彼は自責の念におそわれた。彼はキリストの弟子たちを容赦なく迫害したこと、罪もないヤコブを死刑にせよと残酷な命令を出したこと、使徒ペテロを殺そうとはかったことを思い出した。また悔しさと失望の怒りにまかせて、獄の看守たちにわけのわからない恨みを晴らしたことを思い出した。彼は今、神が冷酷な迫害者なる自分をさばいておられるのを感じた。そして肉体の苦痛と心の苦しみからのがれるすべもなく、絶望に陥った。

ヘロデは「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」という神の律法を知っていた（出エジプト記二〇ノ三）。彼は人々の崇拝を受け、おのれの不法の秤はかりを満たし、みずから主の正当な怒りを招いたことを知った。

ペテロを救い出すために天の宮廷からきたこの同じ天使が、ヘロデに怒りとさばきをもたらす使者となった。天使はペテロの肩をたたいてその眠りをさましたが、今度はこれとちがった一撃をこの邪悪な王に加えて、その高ぶりをくじき、大能の神の刑罰をくだした。ヘロデは神の報復の刑罰を受けて、心も体も苦しみもだえながら死んでいった。

この神の正義のあらわれは、人々の心を強く動かした。キリストの使徒は獄と死から奇跡的に救われたが、彼の迫害者は神ののろいを受けて打たれたという知らせが国々に伝わり、多くの人々をキリストの信仰に導く手段となった。

天使に命じられたところに行って、真理を求めている一人の人に会ったピリポの経験、神からの使命をもった天使の訪問を受けたコルネリオの経験、投獄され死刑の宣告を受けながらも無事に天使に助けられたペテロの経験、どの経験もみな、天地間のつながりの密接なことを物語っている。 [163]

こうした天使のおとずれの記録は、神の働き人に力と励ましを与えるにちがいない。今日、使徒時代と全く同じように、天の使者たちは地上くまなくおとずれて、悲しむ者を慰め、罪びとを守り、人々の心をキリストに導いている。われわれは天使たちを見ることはできないが、彼らはわれわれと共にいて導き、守り、行く手を示しているのである。

天はその神秘的なはしごにより、地へと近づけられている。その土台は地に固くすえられ、その頂点は神のみ座にまで達している。天使たちはその明るく輝くはしごを絶えず上ったり下りたりして、求める者、苦しみ悩む者の祈りを神のみもとに携え行き、祝福と希望、勇気と助けを人の子らに運んでくる。これら光の天使たちは人の周囲に天の雰囲気をつくり、われわれを目には見えないもの、永遠のものへと向けさせる。われわれは生まれながらの視力でそ

の姿を見ることはできないが、霊的な幻によって天の事を認識できる。霊的な耳だけが天の調和ある声を聞くことができるのである。

「主の使は主を恐れる者のまわりに陣をしいて彼らを助けられる」（詩篇三四ノ七）。神は選ばれた者たちを惨禍から救い、「暗やみに歩きまわる疫病」や「真昼に荒す滅び」から彼らを守るよう天使たちを任命されている（詩篇九一ノ六）。天使たちは、人が友と語り合うようにくり返
[164] し人々と語り合い、彼らを安全な場所へ導いてきた。天使たちの励ましの言葉は、幾たびとなく信仰者の打ちしおれた精神を生きかえらせ、彼らの心を高く、地よりも上にあるものへと向けさせ、勝利者が偉大な白い御座を囲むときに受ける白い衣、冠、勝利のしゅろの枝を信仰によって見上げさせてきた。

試練に会っている者、苦しんでいる者、誘惑に陥っている者の近くに来るのが天使の働きである。彼らはキリストが身代わりにいのちをささげられた人々のために、たゆみなく働いている。罪びとが悔い改めて救い主のみもとに行くと、天使たちはそのおとずれを天に携えて行く。すると天使たちのあいだに大きなよろこびが起こる。「罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔改めを必要としない九十九人の正しい人のためにもまさる大きいよろこびが、天にあるであろう」（ルカ一五ノ七）。暗黒を追いやって、キリストについての知識をひろめるわれわれの努力が成功するたびに、天にそのことが知らされる。父なる神のみ前にその行為が取り上げられると、全天軍はよろこびにわくのである。

天の支配者や権威者たちは、神のしもべたちが、見たところ思わしくない状況のもとでつづけている戦いを見守っている。クリスチャンが救い主のみ旗のもとにはせ参じ、信仰の戦いをりっぱに戦いぬくとき、新しい勝利が遂げられ、新しい名誉が勝ちとられているのである。天使たちはみな神のつつましい信徒たちに仕えている。この地上で神の働き人の軍がさんびの歌をうたうと、天の聖歌隊も彼らに合わせて神とそのみ子にさんびをささげる。

われわれは天使の働きについて、現在以上によく理解
[165] する必要がある。真実の神の子らはみな、天使 たちの協力を受けていることを忘れずにいるがよい。目には見えな

いが、光と力の軍隊は、神を信じ、神の約束を求める柔和で謙遜な者たちにつきそっているのである。ケルビムやセラピムや力にぬきんでた天使たちが神の右手に立っているが、「すべて仕える霊であって、救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわされたもの」たちである（ヘブル一ノ一四）。

[166]

第一六章彼らは「クリスチャン」と呼ばれた

本章は使徒行伝一一章一九ー二六節、一三章一ー三節に基づく

迫害によって弟子たちがエルサレムから散らされたあとに、福音の使命は、パレスチナの境界線を越えた地方にまで急速に宣べ伝えられ、信徒の小さな集団は多数の重要な伝道の中心を形成した。弟子たちのある者は「ピニケ、クプロ、アンテオケまでも進んで・・・・御み言ことばを語っ」た。彼らの伝道はいつも、ヘブル語とギリシヤ語を話すユダヤ人たちに限られていた。ユダヤ人の大居留地は当時、世界のほとんどすべての都市の中に見ることができた。

福音をよろこんで受け入れたと言われている場所の一つに、当時シリヤの首都であったアンテオケがある。その人口が密集した中心地から、広範囲にわたる商取引が行われていたので、そこには各国の人が大ぜい集まっていた。そのうえ、アンテオケは健康的な場所にあり、環境は美しく、富と教養と優雅さが見いだされたので、快楽を愛する者たちが好んで行く場所として知られていた。使徒たちの
[167] 時代に は、それはぜいたくと罪悪の町となっていた。

何人かの弟子たちがクプロ人とクレネ人の中から「主イエスを宣べ伝え」にやってきて、アンテオケで福音を公に説いた。「主のみ手が彼らと共にあったため」、また彼らが熱心に働いたために成果があがり、「信じて主に帰依するものの数が多かった」。

「このうわさがエルサレムにある教会に伝わってきたので、教会はバルナバをアンテオケにつかわした。」新しい伝道地に着いたバルナバは、みわざが既に神の恵みによって果たされているのを見て、「よろこび、主に対する信仰を揺るがない心で持ちつづけるようにと、みんなの者を励ました」。

アンテオケでのバルナバの働きはゆたかに恵まれて、信者の数がふえていった。働きが拡張するにつれて、バルナ

バは神の摂理による好機を発展させるために、だれか適当な助手がほしいと思った。そこでバルナバは、パウロを捜しにタルソへ出かけて行った。パウロはしばらく前にエルサレムを去って、「シリヤとキリキヤとの地方」で、「以前には撲滅しようとしていたその信仰を」宣べ伝えながら働いていたのである（ガラテヤ一ノ二一、二三）。バルナバは無事にパウロを見つけ出し、アンテオケに行って一緒に伝道してくれるように、うまく頼みこんだ。

人口が多いアンテオケの町は、パウロにとってすばらしい伝道地であった。彼の学識、知恵、熱意は、その文化都市の住民や、そこをたびたびおとずれる者たちに、力強い感化を及ぼした。彼は、バルナバが必要としていたとおりの助けとなった。一年間、このふたりの弟子は力を合わせて忠実に伝道し、多くの人々に世のあがない主、ナザレのイエスのことを伝え、救いの知識をもたらした。 [168]

弟子たちがはじめてクリスチャンと呼ばれたのは、アンテオケにおいてであった。彼らの説教や教えや話題の中心がキリストであったので、この名がつけられたのである。彼らは、キリストが公生涯を送っておられたころ、キリストと個人的に交わる恵みを受けた日々の出来事を、繰り返し詳しく語った。彼らは疲れを知らずに、キリストの教えやいやしの奇跡について語った。また、ゲッセマネの園でのキリストの苦悩や、裏切り、裁判や処刑、敵たちから負わされた侮辱や責め苦に耐えられたキリストの忍耐と謙遜、また、彼を迫害した人々のために祈られた神々こうごうしいまでのあわれみについて、弟子たちは唇をふるわせ、目にいっぱい涙をためて語った。キリストの復活、昇天、また堕落した人類の仲保者としての天における働きなどは、弟子たちが喜んで力説する話題であった。彼らはキリストを説き、キリストを通して神に祈りをささげていたのだから、異教徒が彼らをクリスチャンと呼んだのも当然であろう。

弟子たちにクリスチャンという名前をお与えになったのは神であった。これはキリストにつながるすべての者に与えられる、栄誉ある名前である。後にヤコブが「あなたがたをしいたげ、裁判所に引きずり込むのは、富んでいる者たちではないか。あなたがたに対して唱えられた尊い御名を汚すのは、実に彼らではないか」と書いたのは、こ

の名前のことであった（ヤコブ二ノ六、七）。またペテロは「クリスチャンとして苦しみを受けるのであれば、恥じることはない。かえって、この名によって神をあがめなさい」。「キリストの名のためにそしられるなら、あなたが
[169] たはさいわいである。その時には、栄光 の霊、神の霊が、
[170] あなたがたに宿るからである」と述べている（ペテロ第一・四ノ一六、一四）。

アンテオケの信者たちは、神が自分たちの生活の中に働き、「その願いを起させ、かつ実現に至らせる」ことを認めた（ピリピ二ノ一三）。彼らは、永遠の価値には全くむとんちゃくに見える人々の中に生活していたが、心の正直な人々の関心を引いて、自分たちの愛し仕えている主について、積極的なあかしをたてようと努力した。彼らは、そのささやかな働きをとおして、いのちのことばを効果的なものとする、聖霊の力によりたのむことを学んだ。こうして彼らは、生活のさまざまな歩みをとおして、日ごとにキリストに対する信仰をあかししていった。

アンテオケにいたキリストの信徒たちの模範は、今日世界の大都市に住むすべての信徒に、霊感を与えるものでなければならない。才能があり献身した働き人たちが、公衆伝道の働きを導くために、人口が集中している重要な地方に配置されるのは神の命令による。一方、これらの都市に住む教会員たちが、神から与えられた才能を救霊事業に用いるのも、神が意図されたことである。神の召しに心から従う人人のために、豊かな祝福が準備されている。そのような働き人が、イエスのもとに魂を導く努力をするとき、彼らは、他のどのような方法でも接することのできない多くの人々が、賢明な個人的働きかけにいつでも応じる用意ができていることを発見するのである。

今日、地上における神のみわざは、聖書の真理の生きた代表者を必要としている。按手礼を受けた牧師だけが、大都市に警告を与えるにふさわしいのではない。神は、ま
[171] だ警告されていない都市の必要を 考慮するようにと、牧師ばかりでなく、医者、看護婦、文書伝道者、婦人伝道者など、さまざまな才能を持つ献身的な信者で、神のみことばについての知識を持ち、神の恵みの力を知っている人々を求めておられる。時は速やかに過ぎて行くが、まだしなければならない事がたくさんある。現在ある機会がうまく用

いられるように、すべての活動を進めていかなければならない。

パウロは、バルナバと力を合わせて、アンテオケで伝道したおかげで、自分は異邦人のための特別な働きに当たるよう神に召されている、との確信を強めた。パウロが改心した時、主は彼を異邦人につかわすと仰せになった。「それは、彼らの目を開き、彼らをやみから光へ、悪魔の支配から神のみもとへ帰らせ、また、彼らが罪のゆるしを得、わたしを信じる信仰によって、聖別された人々に加わるためである」（使徒行伝二六ノ一八）。アナニヤにあらわれた天使は、パウロについてこう言った、「あの人は、異邦人たち、王たち、またイスラエルの子らにも、わたしの名を伝える器として、わたしが選んだ者である」（使徒行伝九ノ一五）。のちにパウロ自身にも、エルサレムの宮で祈っている時に天使があらわれて、「行きなさい。わたしが、あなたを遠く異邦の民へつかわすのだ」と命じた（使徒行伝二二ノ二一）。

こうして神はパウロを、異邦の広い伝道地にはいるよう任命された。そして、この広汎で困難な働きに携わらせるために、神は彼をご自身としっかり結びつけ、恍惚こうこつとして幻にとらえられた彼の眼に、麗しく栄光に輝く天の光景をお示しになった。彼には「長き世々にわたって、隠されていた・・・・奥義」を 知らせる働きが与えられて [172]
いた（ローマ一六ノ二五）。「御旨の奥義」は（エペソ一ノ九）、「いまは、御霊によって彼の聖なる使徒たちと預言者たちとに啓示されているが、前の時代には、人の子らに対して、そのように知らされてはいなかったのである。それは、異邦人が、福音によりキリスト・イエスにあって、わたしたちと共に神の国をつぐ者となり、共に一つのからだとなり、共に約束にあずかる者となることである。わたしは・・・・福音の僕しもべとされたのである。すなわち、聖徒たちのうちで最も小さい者であるわたしにこの恵みが与えられたが、それは、キリストの無尽蔵の富を異邦人に宣べ伝え、更にまた、万物の造り主である神の中に世々隠されていた奥義にあずかる務がどんなものであるかを、明らかに示すためである。それは今、天上にあるもろもろの支配や権威が、教会をとおして、神の多種多様な知恵を知るに至るためであって、わたしたちの主キリスト・

イエスにあって実現された神の永遠の目的にそうものである」とパウロは述べている（エペソ三ノ五ー一一）。

神は、パウロとバルナバが、アンテオケの信者たちといっしょにいたその年のあいだ中、彼らの働きを豊かに祝福された。しかしふたりとも、まだ正式には、福音の働きに任命されていなかった。彼らはいまや、そのクリスチャン経験において、困難な伝道事業をおし進める責任を、神から負わされる段階に達していた。そこでこの責任を遂行するには、教会の機関をとおして得られる、あらゆる便宜が必要であった。

「アンテオケにある教会には、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、・・・・マナエン、およびサウロなどの預言者や教師がいた。一同が主に礼拝をささげ、断食をしていると、聖霊が、『さあ、バルナバとサウロとを、わたしのために聖別して、彼らに授けておいた仕事に当らせなさい』と告げた。」これらふたりの使徒たちは、異教徒の地域に宣教師としてつかわされる前に、断食して祈り、按手によって厳粛に神にささげられた。こうして彼らは、教会の完全な権威をさずけられ、真理を教えるばかりでなく、バプテスマの式をあげたり、教会を組織したりする資格を教会から与えられた。 [173]

キリスト教会はこの時、重要な時代にはいりつつあった。福音使命を異邦人に伝える働きは、いまや力強く遂行されねばならなかった。そしてその結果、教会は魂の大収穫によって強められるのであった。この働きを指導する任務を受けた使徒たちは、疑いと偏見とねたみとにさらされるであろう。長年のあいだユダヤ人の世界と異邦人の世界とをへだててきた「隔ての中垣」を打破することについて教えるならば、当然異端のそしりを招くであろう（エペソ二ノ一四）。そして福音の教役者としての彼らの権限が、多くのしっと深いユダヤ人の信者によって、問題とされるであろう。神はご自分のしもべたちが出会わねばならない困難を予見され、彼らが挑戦をものともせずに働くよう、伝道の働きのために彼らを公的に聖別するようにと、啓示を通して教会にお命じになった。彼らの按手礼は、彼らが、福音のよろこびのおとずれを異邦人に伝える働きに立つよう、天から任命を受けたことを、公認するものであった。

パウロとバルナバのふたりは、既に神ご自身から任命を受けていたので、手を置く儀式は、新しい恩恵や実際の資格を付け加えるものではなかった。それは任命された職務を認定することであり、その職務における権威を認知するものであった。按手によって、神の働きの上に教会の印が押されたのである。 [174]

ユダヤ人にとってこの形式は意味深いものであった。ユダヤ人の父は、子供たちを祝福するとき、敬虔けいけんに、子供たちの頭の上に手を置いた。動物が犠牲としてささげられるとき、祭司の職権をさずけられている者が、犠牲のささげ物の頭の上に手を置いた。アンテオケの教会の指導者たちが、パウロとバルナバの上に手を置いたとき、彼らはその行為によって、この選ばれた使徒たちが既に任命されていた特別の仕事に献身するにあたり、祝福が彼らにさずけられるよう神に求めたのである。

のちに、手を置く按手の儀式は非常に誤用された。まるで按手礼を受けた者の上に直ちに力が加わり、そのことによって、どんな奉仕の働きにもたちどころに資格ができたかのように、この按手の式に不当な重要性が加えられた。しかしこれらふたりの使徒が聖別されるにあたって、単に頭に手を置く行為によって徳がさずけられたというような記録はない。ただ彼らの按手礼の記録と、その式が彼らの将来の働きに関係したという記録があるだけである。

聖霊の導きにより、パウロとバルナバを特定の奉仕に聖別したことの次第は、神の組織された教会において、神が任命された器を通して働かれることを明らかに示している。何年か前に、パウロに関する神の目的が、まず救い主ご自身によりパウロにあらわされたとき、そのすぐあとにパウロは、ダマスコの新しく組織された教会の信者たちに接触するよう導かれた。更にその教会は、この改宗したパリサイ人の個人的な経験にいつまでも無知のままではいなかった。そして今、その時与えられた神の任命が豊かに遂行されようとしているとき、聖霊は、パウロが異邦人に福音を伝えるための選ばれた器であるというあかしを再び携え、彼と彼の共労者に按手礼をほどこす仕事を、教会に与えたのである。アンテオケの教会指導者たちが「主に礼拝をささげ、断食をしていると、聖霊が『さあ、バルナバと [175]

サウロとを、わたしのために聖別して、彼らに授けておいた仕事に当らせなさい』と告げた」。

神は地上の教会を光の通路とし、これを通して神の目的や意図をお伝えになる。神は、教会自体の経験と無関係な経験や、あるいはこれに反するような経験を、しもべの一人にお与えになるようなことはない。また、キリストのからだである教会が暗黒の中にあるのに、教会全体に対する神のみこころについての知識を、一人の人間だけにお与えになることもない。み摂理のうちに神は、ご自分のしもべたちを、教会との密接なつながりのうちに置かれ、彼らが自己を信頼せずに、神がみわざを進めるために導いておられる他の人々に、より大きな信頼を持つようにさせられる。

教会の中には、絶えず、個人的な独立に走ろうとする傾向の人々がいる。彼らは、独立心というものが、人を自己過信に陥らせ、兄弟たち、特に、神がその民たちの指導のために任命された職務にある人人の勧告を尊重せず、また彼らの判断を高く評価しないで、自己の判断に頼らせてしまう、ということに気づかないようである。神は教会に、特別な権威と力とをおさずけになった。だれもそれを無視したり軽んじたりする資格はない。そうする者は神のみ声をあなどることになるからである。

自己の判断が最上だと思いがちな人々は、重大な危険に
[176] さらされている。光の通路となり、神がこの 地上におけるみわざを築き上げ、進展させるために働きかけてこられた人々から、そのような人々を引き離すことが、サタンの巧妙な手口である。真理を前進させるために責任のある指導的立場を神からゆだねられた人々を、無視したり、軽んじたりすることは、神がその民を助け、励まし、力づけるために定められた手段を、拒むことになる。だれでも神の御目的の中で働く者にとって、この手段を見落として、自分の光が他の通路を通らず、神から直接に来たものだと思うことは、敵に欺かれ打ち負かされやすい立場に、自分を置いているのである。賢明な主は、すべての信徒が守らなければならない、密接なつながりという手段によって、クリスチャン同志、教会同志が一つに結ばれるよう計画なさった。こうして人間の器は神と協力できるのである。すべての働きが聖霊に従属し、すべての信徒が組織的に、よい指

揮のもとに一致し、神の恵みのよろこばしいおとずれを世に伝えるようになるのである。

パウロはこの正式の按手の式を、彼の生涯の働きにおける、新しい重要な時期の始まりを示すものと見なした。彼はのちにこの時を、キリスト教会における使徒としての、自分の任務の始まりの日と定めている。

福音の光がアンテオケであかあかと輝いていたとき、エルサレムにとどまっていた使徒たちによって、重要な働きが続けられていた。毎年、祭りの時期には、各国から多くのユダヤ人がエルサレムへやってきて、神殿で礼拝をささげた。これらの巡礼者たちの中には、熱烈な信仰者や熱心な預言の研究者たちがいた。彼らはイスラエルの望みである、約束されたメシヤの来臨を待ち望んでいた。エルサレムがこうした来訪者たちでいっぱいになると、使徒たちは、たえず生命の危険にさらされていることを承知の上で、ひるむことなく勇気をもってキリストを宣べ伝えた。神のみ霊は彼らの働きを承認され、多くの者が信仰に導かれた。そうしてこれらの人たちは、世界の各地にあるそれぞれの故郷にもどると、すべての国民、社会のあらゆる階級に、真理の種子をまきちらした。 [177]

この働きに携わっていた使徒たちの中で傑出していたのは、ペテロ、ヤコブ、ヨハネであり、彼らは、自分たちの故郷にいる人々にキリストを宣べ伝えるよう、神から任命されているという確信を持っていた。彼らは忠実に賢く働き、彼らが見たり聞いたりしたことをあかしして、「預言の言葉」を「いっそう確実」に訴えて（ペテロ第二・一ノ一九）、「イスラエルの全家」に、ユダヤ人が「十字架につけたこのイエスを、神は、主またキリストとしてお立てになったのである」と説いた（使徒行伝二ノ三六）。

[178]

第一七章パウロの第一次伝道旅行

本章は使徒行伝一三章四節－五二節に基づく

パウロとバルナバは、アンテオケの兄弟たちにより按手礼を受けてから「聖霊に送り出されて、セルキヤにくだり、そこから舟でクプロ（注・キプロス島）に渡った」。こうして使徒たちは最初の伝道旅行を始めた。

クプロは、ステパノの死後に起こった迫害のために、エルサレムから信者たちがのがれていった場所の一つであった。このクプロから何人かの人々が、アンテオケへと「主イエスを宣べ伝え」に出て行ったのである（使徒行伝一一ノ二〇）。バルナバ自身も「クプロ生れ」で、彼は自分の親戚にあたるヨハネ・マルコを連れて、パウロと共に、伝道地であるこの島をたずねた（使徒行伝四ノ三六）。

マルコの母はキリスト教に改宗していて、エルサレムにある彼女の家は、弟子たちのための隠れ場であった。そこに行けば、彼らはいつでも必ず歓迎され、しばらくの休息
[179] が与えられた。マルコが伝道旅 行に加わりたいと、パウロとバルナバに申し出たのも、使徒たちが母の家をたずねたときのことであった。彼は心に神の恩寵を感じて、福音伝道の働きに自分のすべてをささげたいと望んだ。

使徒たちはサラミスに着くと、「ユダヤ人の諸会堂で神の言ことばを宣べはじめた。・・・・島全体を巡回して、パポスまで行ったところ、そこでユダヤ人の魔術師、バルイエスというにせ預言者に出会った。彼は地方総督セルギオ・パウロのところに出入りをしていた。この総督は賢明な人であって、バルナバとサウロとを招いて、神の言を聞こうとした。ところが魔術師エルマ（彼の名は『魔術師』との意）は、総督を信仰からそらそうとして、しきりにふたりの邪魔をした」。

一つの戦いもなしに、地上に神の国が建設されるのをサタンは許さない。悪の勢力は、福音宣伝のために定められた機関に絶えず戦いをいどみ、暗黒の力は、名声のある、真に高潔な人々に真理が宣べ伝えられる時、特に活発に働

く。クプロの総督セルギオ・パウロが福音使命を聞いた時も同様であった。総督は、使徒たちが携えてきた使命を学ぶために彼らを迎えにやった。すると、悪の勢力が魔術師エルマを通じて働き、彼らの悪意をこめた暗示によって彼を信仰からそらし、神の目的をくじこうとした。

このように、堕落した敵は、改宗すれば神のために有能な奉仕をするかもしれない影響力のある人々を、悪の列に加えようと、たえず働くのである。しかし、忠実な福音宣伝者は、敵の手にかかって敗北するなどと恐れる必要はない。すべてのサタン的な感化に抵抗するよう、天来の力で耐え忍ぶことが彼の特権だからである。

パウロは、サタンに激しく悩まされたけれども、敵の [180]
手先となっている者を譴責けんせきする勇気を持っていた。パウロは「聖霊に満たされ、彼をにらみつけて言った、『ああ、あらゆる偽りと邪悪とでかたまっている悪魔の子よ、すべて正しいものの敵よ。主のまっすぐな道を曲げることを止めないのか。見よ、主のみ手がおまえの上に及んでいる。おまえは盲になって、当分、日の光が見えなくなるのだ』。たちまち、かすみとやみとが彼にかかったため、彼は手さぐりしながら、手を引いてくれる人を捜しまわった。総督はこの出来事を見て、主の教にすっかり驚き、そして信じた」。

魔術師はこれまで、福音の真理の数々の証拠に目をつむっていた。そこで神は正義の怒りから、彼の肉眼を閉じさせて日の光を見えなくさせられたのである。この盲目は永久的なものではなく、一時的なものであった。それは彼に悔い改めをうながし、彼がはなはだしく背いた神に、ゆるしを求めさせるためであった。彼は狼狽ろうばいした。そしてキリストの教えに逆らう彼の陰険な術は、役に立たなくなった。彼が盲目となり、手探りして歩かなければならなくなったという事実は、使徒たちの行った奇跡、しかもエルマが奇術だとして公然と非難していた奇跡が、神の力によって行われたものだということをみんなに証明した。総督は、使徒たちが語った教えが真理であることを確信して、福音を受け入れた。

エルマは教育を受けた者ではなかったが、サタンの仕事をするのに特に適していた。神の真理を説く人たちは、さまざまな違った形でずるい敵に会うのである。時にはそれ

は学識のある人たちの中にもいるが、無学なものの場合のほうが多い。サタンは彼らを仕込んで、巧妙に人々をだま
[181] す道具とするのである。神を恐れ、その偉大な力によって忠実に自分の持ち場に立つことが、クリスチャンの義務である。こうして彼はサタンの軍勢を混乱させ、主のみ名によって勝利することができる。

パウロとその一行は旅を続けて、パンフリヤのペルガに渡った。それは骨の折れる道であった。彼らは困難や不自由な目に会い、四方から危険に襲われた。彼らが通った町や都市や、物寂しい街道で、目に見える危険にも見えない危険にもとり囲まれた。しかし、パウロとバルナバは、神の救いの力に頼ることを既に学んでおり、ふたりの心は滅びゆく魂への熱烈な愛に満たされていた。いなくなった羊を捜している忠実な羊飼いのように、彼らは自分たち自身の安楽や都合などは少しも念頭に置かなかった。自己を忘れ、疲れや飢えや寒さにもひるまなかった。彼らは、おりから遠くへさまよい出た人々の救いという、たった一つの目的しか心に留めていなかった。

マルコはここで、不安と落胆にくじけてしまって、主の働きに全心全霊を打ちこんで献身するという彼の目的が、一時ぐらついた。彼は困難に慣れていなかったので、道中の危険と窮乏に気力を失ってしまったのである。彼はこれまで順調な境遇のもとに働いて成功してきたが、いま開拓伝道者たちにしばしばつきまとう反対と危険のさなかにあっては、十字架のよき兵士として困難に耐えることができなかった。彼は、勇敢な心で危険と迫害と逆境に立ち向かうことを、これから学ぶはずであった。しかし、使徒たちが前進するにつれて、更に大きな困難が危惧きぐされたとき、マルコは恐れてすっかり勇気を失い、先へ進むことを拒み、エルサレムへ引き返したのである。

[182] パウロは働きを放棄したマルコを非難し、一時は厳しいほどの批判を下していた。一方、バルナバは、経験のないマルコには無理もないことと思っていた。そして、彼は、キリストのために役立つ働き人になるにふさわしい資質を、マルコが備えていることを見て、マルコにこのまま伝道を放棄させてはならないと考えていた。このマルコへの配慮は、何年かのちに豊かに報われた。この若者は主のために、また困難な伝道地で福音使命を宣べ伝える働きに、

惜しみなく献身したからである。神の祝福とバルナバの賢明な指導のもとに、マルコは貴重な働き人に成長した。

パウロは後にマルコと和解して、共労者として彼を迎えた。パウロはまたマルコを、「神の国のために働く同労者」、「わたしの慰めとなった者」として、コロサイ人たちに推薦した（コロサイ四ノ一一）。更にパウロは、死ぬ少し前に、マルコのことを「務のために役に立つ」者と言った（テモテ第二・四ノ一一）。

マルコが去ってから、パウロとバルナバはピシデヤのアンテオケを訪問し、安息日にユダヤの会堂に行って、席に着いた。「律法と預言書の朗読があったのち、会堂司たちが彼らのところに人をつかわして、『兄弟たちよ、もしあなたがたのうち、どなたか、この人々に何か奨励の言葉がありましたら、どうぞお話し下さい』と言わせた。」このようにして話を勧められたので「パウロが立ちあがり、手を振りながら言った。『イスラエルの人たち、ならびに神を敬うかたがたよ、お聞き下さい』。」それからすばらしい説教が続いた。彼は神がユダヤ人を、エジプトの奴隷の身から救い出された時から導いてこられたその方法の歴史 [183]
を語り、また、ダビデのすえとして救い主がどのように約束されたかを語った。そして彼は、「神は約束にしたがって、このダビデの子孫の中から救い主イエスをイスラエルに送られたが、そのこられる前に、ヨハネがイスラエルのすべての民に悔改めのバプテスマを、あらかじめ宣べ伝えていた。ヨハネはその一生の行程を終ろうとするに当って言った、『わたしは、あなたがたが考えているような者ではない。しかし、わたしのあとから来るかたがいる。わたしはそのくつを脱がせてあげる値うちもない』」と大胆に述べた。こうして彼は、人間の救い主、預言されたメシヤとしてのイエスを力強く説いた。

この宣言をしてからパウロは言った。「兄弟たち、アブラハムの子孫のかたがた、ならびに皆さんの中の神を敬う人たちよ。この救の言葉はわたしたちに送られたのである。エルサレムに住む人々やその指導者たちは、イエスを認めずに刑に処し、それによって、安息日ごとに読む預言者の言葉が成就した」。

パウロは、救い主がユダヤの指導者たちに拒まれた明白な事実を、ためらわずに話した。「なんら死に当る理由が

見いだせなかったのに、ピラトに強要してイエスを殺してしまった。そして、イエスについて書いてあることを、皆なし遂げてから、人々はイエスを木から取りおろして墓に葬った。しかし、神はイエスを死人の中から、よみがえらせたのである。イエスは、ガリラヤからエルサレムへ一緒に上った人たちに、幾日ものあいだ現れ、そして、彼らは今や、人々に対してイエスの証人となっている」と使徒は述べた。

[184] 使徒はまた続けた、「わたしたちは、神が先祖たちに対してなされた約束を、ここに宣べ伝えているのである。神は、イエスをよみがえらせて、わたしたち子孫にこの約束を、お果しになった。それは詩篇の第二篇にも、『あなたこそは、わたしの子。きょう、わたしはあなたを生んだ』と書いてあるとおりである。また、神がイエスを死人の中からよみがえらせて、いつまでも朽ち果てることのないものとされたことについては、『わたしは、ダビデに約束した確かな聖なる祝福を、あなたがたに授けよう』と言われた。だから、ほかの箇所でもこう言っておられる、『あなたの聖者が朽ち果てるようなことは、お許しにならないであろう』。事実、ダビデは、その時代の人々に神のみ旨にしたがって仕えたが、やがて眠りにつき、先祖たちの中に加えられて、ついに朽ち果ててしまった。しかし、神がよみがえらせたかたは、朽ち果てることがなかったのである。」

そして今、パウロは、メシヤに関するよく知られた預言の成就についてはっきりと述べ、悔い改めと、救い主イエスのいさおしを通して罪のゆるしが与えられることとを、彼らに説いた。「この事を承知しておくがよい。すなわち、このイエスによる罪のゆるしの福音が、今やあなたがたに宣べ伝えられている。そして、モーセの律法では義とされることができなかったすべての事についても、信じる者はもれなく、イエスによって義とされるのである。」

パウロの語る言葉に神のみ霊たまが伴い、人々を感動させた。旧約の預言に関する彼の訴えと、これらの預言がナザレのイエスの働きの中で成就されたと述べる言葉には、
[185] 約束のメシヤの再臨を待ち望んでいる多くの人々を説得する力があった。そして救いの「よきおとずれ」が、ユダヤ人と同様に異邦人のためでもあるという説教者の確証の言

葉は、血縁から言えばアブラハムの子孫の中に数えられていなかった人々に、希望とよろこびを与えた。

「ふたりが会堂を出る時、人々は次の安息日にも、これと同じ話をしてくれるようにと、しきりに願った。そして集会が終ってからも、大ぜいのユダヤ人や信心深い改宗者たちが」、その日に与えられたよろこびのおとずれを受け入れて、「パウロとバルナバとについてきたので、ふたりは、彼らが引きつづき神のめぐみにとどまっているようにと、説きすすめた」。

ピシデヤのアンテオケでは、パウロの説教により関心が高まり、次の安息日には「ほとんど全市をあげて、神の言を聞きに集まってきた。するとユダヤ人たちは、その群衆を見てねたましく思い、パウロの語ることに口ぎたなく反対した。

パウロとバルナバとは大胆に語った、『神の言は、まず、あなたがたに語り伝えられなければならなかった。しかし、あなたがたはそれを退け、自分自身を永遠の命にふさわしからぬ者にしてしまったから、さあ、わたしたちはこれから方向をかえて、異邦人たちの方に行くのだ。主はわたしたちに、こう命じておられる、「わたしは、あなたを立てて異邦人の光とした。あなたが地の果までも救いをもたらすためである」』。

異邦人たちはこれを聞いてよろこび、主の御言をほめたたえてやまなかった。そして、永遠の命にあずかるよう [186]
に定められていた者は、みな信じた。」彼らはキリストが [187]
彼らを、神の子らと認めてくださることをこの上もなくよろこび、感謝の気持ちで語られる言葉に耳を傾けた。信じた人々は福音使命を熱心に他の人々に伝えた。こうして、「主の御言はこの地方全体にひろまって行った」。

幾世紀も前に、霊感による筆はこの異邦人の収穫について述べていたのであるが、その預言的なことばはぼんやりと理解されたにすぎなかった。ホセアは次のように言っていた、「イスラエルの人々の数は海の砂のように量ることも、数えることもできないほどになって、さきに彼らが『あなたがたは、わたしの民ではない』と言われたその所で、『あなたがたは生ける神の子である』と言われるようになる」。そして、更に、「わたしはわたしのために彼を地にまき、あわれまれぬ者をあわれみ、わたしの民でない

者に向かって、『あなたはわたしの民である』と言い、彼は『あなたはわたしの神である』と言う」（ホセア書一ノ一〇、二ノ二三）。

救い主ご自身も、地上で働いておられたとき、福音が異邦人に宣べ伝えられることを預言された。ぶどう園の譬たとえの中で、イエスは頑固なユダヤ人たちに、「神の国はあなたがたから取り上げられて、御国にふさわしい実を結ぶような異邦人に与えられるであろう」と言われた（マタイ二一ノ四三）。また復活後にイエスは弟子たちに「行って、すべての国民を弟子と」するようお命じになった。警告を受けない者がひとりもいないように、弟子たちは「すべての造られたものに福音を宣べ伝え」なければならなかった（マタイ二八ノ一九、マルコ一六ノ一五）。

[188] パウロとバルナバは、ピシデヤのアンテオケにいる異邦人たちに伝道しているあいだも、みことばを聞き入れる可能性のありそうなところではどこででも、ユダヤ人のために働きかけることをやめなかった。のちにはテサロニケやコリント、エペソ、その他重要な中心地において、パウロの一行はユダヤ人と異邦人に福音宣伝を続けていった。しかし彼らはそののち、真の神とみ子についての知識をほとんど持たない、あるいは全く持たない人々のいる異教の地に、神の国を築き上げることに主力を注いだ。

パウロとその共労者たちの心は「キリストを知らず、イスラエルの国籍がなく、約束されたいろいろの契約に縁がなく、この世の中で希望もなく神もない」人々に引きつけられていった。異邦人に対する使徒たちのたゆまぬ伝道により、「以前は遠く離れて」いた「異国人」や「宿り人」たちは、自分たちが「キリストの血によって近いものとなった」こと、また、キリストのあがないの犠牲を信じる信仰により、自分たちも「聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族」になることができることを知った（エペソ二ノ一二、一三、一九）。

パウロは、信仰が深まるにつれ、一層熱心に、イスラエルの教師たちがかえりみなかった人々の中に、神の国を打ち建てる仕事に励んだ。彼はたえずイエス・キリストを「もろもろの王の王、もろもろの主の主」とあがめて（テモテ第一・六ノ一五）、信者たちに「彼に根ざし、彼に

あって建てられ・・・・信仰が確立され」るようにと説き勧めた（コロサイ二ノ七）。

信じる者たちにとって、キリストは確かな土台である。この生きた石の上に、ユダヤ人も異邦人も建てることができるのである。それはすべての者を受けいれるのに十分広く、全世界の重みと重荷を十分に支えるほど強い。これはパウロ自身がはっきり認めた事実である。パウロは伝道の最後の時期に、福音の真理をしっかり愛しつづけていた異邦人の信者たちにあてて「あなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である」と書いた（エペソ二ノ二〇）。 [189]

ピシデヤに福音使命が伝わると、アンテオケの不信仰なユダヤ人たちが、盲目的な偏見から「信心深い貴婦人たちや町の有力者たちを煽動して、パウロとバルナバを迫害させ、ふたりをその地方から追い出させた」。

使徒たちはこうした取り扱いにも失望しなかった。彼らは主のみことばを思い出した。「わたしのために人々があなたがたをののしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである。喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きい。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである」（マタイ五ノ一一、一二）。

福音使命は進展してゆき、使徒たちもそれに励まされた。彼らの働きは、アンテオケのピシデヤ人たちの中で豊かに祝福され、しばらくのあいだみわざの進展をゆだねられた信者たちは、「ますます喜びと聖霊とに満たされていた」。

[190]

第一八章豹変した群衆

本章は使徒行伝一四章一節ー二六節に基づく

ピシデヤのアンテオケをあとに、パウロとバルナバはイコニオムへ行った。ここでもアンテオケの場合と同じように、ユダヤ人の会堂にはいって伝道を始めた。そして、めざましく成功し、「ユダヤ人やギリシヤ人が大ぜい信じた。」しかしイコニオムでも、使徒たちが伝道した他の場所の場合と同じように、「信じなかったユダヤ人たちは異邦人たちをそそのかして、兄弟たちに対して悪意をいだかせた」。

しかし使徒たちは、彼らの使命から身をはずさなかった。多くの人々がキリストの福音を受け入れていたからである。反対やねたみ、偏見に直面しながらも、「大胆に主のことを語」り、働きを続けたので、神は「彼らの手によってしるしと奇跡とを行わせ、そのめぐみの言葉をあかしされた」。神の承認をうけたこのような証拠は、説得を受け入れる者たちに力強い感化を与え、福音への改宗者が増えていった。

[191] 使徒たちの伝える福音使命の人気が高まるにつれて、信じようとしないユダヤ人たちのあいだにねたみと憎しみがわきあがり、彼らはすぐさまパウロとバルナバの仕事をやめさせようとした。虚偽や誇張のある報告を流して、彼らは町全体が暴動にまで扇動されるおそれがあると、官憲の心配をひきおこした。そして、大ぜいの人々が使徒たちにひきつけられているが、それは秘密の危険な企てがあるためだなどと言い出した。

このような訴えのために、弟子たちは繰り返し官憲の前に引き出された。しかし弟子たちの答弁は明瞭で、常識的であり、また、彼らが教えていることに関する供述は非常に穏やかでわかりやすかったので、彼らの利益になるような強い感化を及ぼした。長官たちは、自分たちが聞いていた偽りの供述のために、使徒たちに偏見を持ってはいたものの、使徒たちを有罪にしようとは思わなかった。彼ら

は、パウロとバルナバの教えが、人々を高潔にし、法律をよく守る市民にする助けになっていることや、もし使徒たちの教えが受け入れられれば、町の道徳と秩序が更によく保たれることを、認めるほかなかった。

弟子たちが直面した妨害を通して、真理の使命は多くの人々にひろまった。新しい教師たちの仕事の邪魔をしようとするユダヤ人たちの努力が、結果的にはただ新しい信者の数を加えるばかりになったことを、ユダヤ人たちは知った。「そこで町の人々が二派に分れ、ある人たちはユダヤ人の側につき、ある人たちは使徒の側についた。」

ユダヤ人の指導者たちは、このように事態が一変したことに激怒して、暴力を用いてでも自分たちの 目的を達成 [192]
しようとした。彼らは無知で騒々しい暴徒の悪感情をかき [193]
たてて、うまく騒動を起こさせ、それを弟子たちの教えのせいにした。彼らは、この偽りの訴えによって、長官たちも自分たちの目的を遂げるのを助けてくれるだろうと思った。彼らは、使徒たちに弁明の機会を持たせないようにし、群衆にはパウロとバルナバに石を投げて邪魔をさせ、使徒たちの働きを挫折ざせつさせようと決心した。

使徒たちの友人たちは、信者ではなかったが、ユダヤ人たちの悪意ある計画を彼らに警告し、激情的な群衆の前に不必要に姿を現さず、生命を守ってのがれるようにと勧めた。そこでパウロとバルナバはしばらくのあいだ、信徒たちだけで働きを続けるように依頼して、ひそかにイコニオムを去った。しかし彼らはそのまま戻ってこないつもりではなかった。人々の興奮がさめたら戻ってきて、自分たちの始めた仕事を完成させようと思っていた。

どの時代でも、どの国でも、神の使命者たちは、天の光を故意に拒もうとする人々からの激しい反対に会うよう定められてきた。しばしば誤報や虚偽のために、神の使命者が人々に接近できるはずの戸が閉ざされ、福音の敵のほうが勝利したかのように見えることがある。しかし、これらの戸が永久に閉ざされていることはできない。しばしば、神のしもべたちがしばらくしてのち、戻ってきて再び働きを始めるとき、彼らがみ名をあがめる記念物を建てることができるように、神は彼らのために力強く働いてこられた。

使徒たちは迫害に追われて、イコニオムからルカオニヤ
[194] のルステラとデルベへ行った。これらの町の 住民は大部分が迷信深い異教徒であったが、その中には、よろこんで福音の使命を聞いて受け入れる者たちもいた。使徒たちは、ユダヤ人の偏見や迫害を避けたいと思って、これらの場所とその周囲の地方で働くことにきめた。

ルステラの町には少数のユダヤ人が住んでいたが、ユダヤ人の会堂はなかった。ルステラの住民の多くは、ジュピターにささげられた神殿で礼拝していた。パウロとバルナバがこの町に現れ、ルステラの人たちをまわりに集めて福音の単純な真理を説明すると、多くの者はその教えを、ジュピターの礼拝における彼ら自身の迷信的な信仰と関連させようとした。

使徒たちはこれらの偶像礼拝者に、創造主である神について、また、人類の救い主である神のみ子についての知識を与えようとした。彼らはまず、神のすばらしいみわざに注意をひいた。太陽や月、星、四季の美しい秩序、雪をいただく雄大な山々、そそり立つ木々、その他、自然のさまざまな驚異など、人間の理解をこえたすばらしいわざに人々の目を向けさせた。こうした全能者である神のみわざを通して、宇宙の偉大な支配者を思うように、異教徒たちの心を導いた。

創造主に関するこうした基本的な真理を明らかにして、使徒たちはルステラの人々に、人の子らを愛するがゆえに天からくだって来られた、神のみ子について教えた。彼らは、キリストのご生涯とその働き、キリストが、救うためにこられたその人々から拒まれたこと、裁判と十字架、復活、昇天、天における人類の仲保者としての働きについて話した。こうして聖霊と神のみ力により、パウロとバルナ
[195] バは ルステラの町で福音を説いた。

ある時パウロが、病気で苦しんでいる者をいやしてくださるかたとしてのキリストの働きについて、人々に語っていると、彼は聴衆の中に足なえがいるのを見た。その男はパウロにじっと目を注いでいたが、彼の言葉を受け入れ信じた。パウロはこの苦しんでいる男に心から同情した。そしてこの男に「いやされるほどの信仰が」あるのを認め、偶像礼拝者たちが集まっている目の前で、パウロは足なえにまっすぐに立ちなさいと命令した。これまでこの病人は

座る姿勢しかとることができなかったが、即座にパウロの命令に従い、生まれて初めて自分の足で立ちあがった。この信仰の努力とともに力がわきあがり、足なえであった男は「踊り上がって歩き出した。

群衆はパウロのしたことを見て、声を張りあげ、ルカオニヤの地方語で、『神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお下りになったのだ』と叫んだ。」この言葉は、神々が時々地上をおとずれるという彼らの伝説に一致するものであった。彼らはバルナバを、神々の父であるゼウスと呼んだ。彼が徳の高い容貌に威厳のあるあごひげを蓄え、穏やかな慈悲深い表情をしていたからである。パウロは熱心で行動的であり、警告や訓戒の言葉を雄弁に用いて「おもに語る人なので」、彼らはパウロをヘルメスだと信じた。

ルステラの人々は、感謝の気持ちを示したいと熱望し、使徒たちに敬意を表すようにゼウスの祭司を説き伏せた。そこで祭司は「群衆と共に、ふたりに犠牲をささげようと思って、雄牛数頭と花輪とを門 前に持ってきた」。パウロ [196]
とバルナバは、人々の前から退いて休息しようとしていたので、そんな準備には気づかなかった。しかしまもなく、彼らは音楽の音と群衆の熱狂した叫びに気がついた。群衆が彼らの滞在している家の前にきていたのである。

使徒たちは群衆のやってきた目的と興奮した様子を知って、それ以上の行為をやめさせたいと思い、「上着を引き裂き、群衆の中に飛び込んで行」った。パウロは鳴り響くような大声で彼らの注意をひいた。するとその声が人々の叫びよりも大きかったので、群衆の騒ぎが突然静まった。そこでパウロは言った、「皆さん、なぜこんな事をするのか。わたしたちとても、あなたがたと同じような人間である。そして、あなたがたがこのような愚にもつかぬものを捨てて、天と地と海と、その中のすべてのものをお造りになった生ける神に立ち帰るようにと、福音を説いているものである。神は過ぎ去った時代には、すべての国々の人が、それぞれの道を行くままにしておかれたが、それでも、ご自分のことをあかししないでおられたわけではない。すなわち、あなたがたのために天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満

たすなど、いろいろのめぐみをお与えになっているのである」。

自分たちは神ではないと使徒たちが極力否定したにもかかわらず、また、礼拝すべき唯一のおかたである真の神へ、人々の心を向けようとパウロが努力したにもかかわらず、犠牲をささげようとする異教徒たちの気持ちを変えることは不可能に近かった。ふたりが本当の神だという彼らの信念は固く、またその熱狂は大変なもので、自分たちの誤りを認めようとしなかった。記録には「やっとのことで・・・・思い止まらせた」と記されている。[197]

ルステラの人たちは、使徒たちが奇跡的な力を発揮するのを自分たちの目で見たのだと言い合った。彼らは、これまで絶対に歩けなかった足なえが完全な健康と力を与えられてよろこんだのを見たのである。パウロがよくよく言いきかせ、自分とバルナバは天の神と、偉大な医者である神のみ子とを代表する使命をもっている者だと懸命に説明すると、ようやく人々は自分たちの計画をとりやめる気になった。

ルステラでのパウロとバルナバの働きは、「アンテオケやイコニオムから押しかけて」きた「あるユダヤ人たち」のために、突然妨害された。この人たちは、使徒たちがルカオニヤ人のあいだで働いて成功していることを知り、使徒たちのあとをつけて、迫害しようとして来たのだった。ルステラに着くと、このユダヤ人たちは自分たちの心の動機となっているのと同じ冷酷な精神を、たちまち人々に吹き込んだ。いままでパウロとバルナバを神さまのように思っていた人たちが、うそと中傷の言葉によって、実際は使徒たちは人殺しより悪い人間で、死に値する者だと信じ込まされてしまった。

ルステラの人たちは、使徒たちに犠牲をささげる特権を拒絶されて失望したことから、ふたりを神として歓呼しようとしたときと同じ熱狂ぶりで、こんどはパウロとバルナバに反対しようとした。ユダヤ人に扇動されて、彼らは暴力をもって使徒たちを襲撃しようと計画した。ユダヤ人たちは、パウロに話す機会を与えないようにと彼らに命じ、もし彼らがパウロにこの特権を与えるなら、パウロは人々に魔法をかけるだろうと断言した。

[198] まもなく、福音の敵どもの殺人計画は実行された。ルス

テラの人々は悪の力に屈服していたので、サタンの怒りに満たされ、パウロをつかまえて情け容赦なく石を投げつけた。使徒は自分の生命もこれで終わりだと思った。ステパノの殉教と、その時パウロ自身がとった残酷な行為が、彼の心にはっきりとよみがえってきた。からだ中傷だらけになり、痛みに気を失って、パウロが地面に倒れたので、怒り狂った群衆は、「死んでしまったと思って、彼を町の外に引きずり出した」。

パウロとバルナバの伝道によって、イエスの信仰に導かれたルステラの信者の群れは、この暗黒の試練の時にも忠実で真実だった。彼らの敵の理由のない反対と残酷な迫害は、このような敬虔けいけんな兄弟たちの信仰をますます固くさせるのに役立っただけだった。そしていまや、危険と嘲笑に直面しながら、彼らは、パウロが死んだものと信じて、悲しみながら彼のからだのまわりに集まることによって、彼らの忠誠心を表した。

ところが驚いたことに、彼らが嘆き悲しんでいる最中に、パウロは突然頭を持ちあげ、神をさんびしながら立ちあがった。神のしもべが思いがけなく生き返ったことは、信者たちには天来の力の奇跡と考えられ、自分たちの改宗に天の神が認証の印を押されたように思えた。彼らは言い表しようのないよろこびにあふれ、新たな信仰をもって神をほめたたえた。

ルステラで悔い改めて、パウロの苦難を目撃した人々の中に、ひとり、のちにキリストのためにすぐれた働き人となった者がいた。それはテモテという名の青年だった。パウロが町からひきずり出されたとき、この年若い弟子は、[199]見たところ生命のとだえたようなパウロのからだのそばに立って、傷ついて血まみれのパウロが、キリストのために苦難を受けることを許されたといって、さんびを口にしながら起きあがるのを見た人々のひとりだった。

パウロが石で打たれた翌日、使徒たちはデルベに向かって出かけた。彼らの働きはそこで祝福されて、多くの人々が導かれ、キリストを救い主として受け入れた。しかし「その町で福音を伝えて、大ぜいの人を弟子とした後」、パウロもバルナバも、彼らが最近伝道した町々の改宗者たちの信仰を固めないで、別の場所で働きを始めることには満足しなかった。というのは、彼らは改宗者たちをそのま

ま放って、余儀なくそれらの町々から出てきていたからである。そこで彼らは、危険にも屈せず、「ルステラ、イコニオム、アンテオケの町々に帰って行き、弟子たちを力づけ、信仰を持ちつづけるようにと奨励し」た。多くの人々が既に福音のよろこばしいおとずれを受け入れて、非難や反対に身をさらしていた。使徒たちは、既に始めた働きが存続するように、この人々の信仰を確立させようとした。

新しい改心者の霊的成長をはかる重要な手段として、使徒たちは福音の組織で彼らの身を守らせようと気をくばった。信者がいるルカオニヤやピシデヤの町々に、正式に教会が組織された。教会毎に役員が任命されて、信者の霊的繁栄に関する事柄をすべて管理するために、適当な秩序と組織が定められた。

これは、すべての信者たちをキリストにあって一つのからだとして結びつける、福音の計画に調和するものであり、この計画こそ、パウロが伝道にあたってつらぬき通そうと心がけたことであった。パウロの働きにより、キリストを救い主として受け入れるまでに導かれた人々は、どこにおいても、適切な時期に教会を形成した。たとえ信者数が少ない場合でも、教会組織が行われた。クリスチャンはこうして、「ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである」という約束を覚えて、互いに助け合うように教えられた（マタイ一八ノ二〇）。

[200]
[201]

パウロは、こうして設立された教会を忘れなかった。これらの教会を案じる気持ちは、いよいよつのる重荷として心に残っていた。たとえ小さな組織であっても、教会はやはり、たえずパウロの気づかいの対象であった。彼は小さい教会の信徒が完全に真理に立つことができるよう、特別に面倒を見る必要のあることを知っていて、教会をやさしく見守り、彼らの周囲にいる人々のために熱心に無我の努力を払うよう教えた。

パウロとバルナバは、伝道活動の初めから終わりまで、キリストがよろこんで犠牲を払い、魂のために忠実に熱心に働かれたその模範に従おうと努めた。彼らは油断なく、熱心で、たゆまず、自分たちの好みや身の安楽などを考えずに、祈りながら、熱意とやむことのない活動とによって、真理の種子をまいた。種子をまくとともに、使徒たち

は、福音のがわに立ったすべての人に、測り知れないほど価値のある実際的な教えを与えるよう気をくばった。この熱心な精神と神をおそれる思いは、福音使命の重要さについていつまでも消えることのない印象を、新しい弟子たちの心に植えつけた。

有望で有能な人たちが改心したとき、テモテの場合に見られるように、パウロとバルナバは、ぶどう園で働く必要を彼らに熱心に教えようとした。そして使徒たちがまた別の場所へと出て行ったときも、これらの人々の信仰はくじけるどころかかえって増し加わった。彼らは主の道に沿うよう堅く教えられていた。また、利己心を捨てて、熱心に、忍耐強く同胞の救いのために働くよう教えられていた。こうして新しい改心者を慎重に訓練したことは、パウロとバルナバが異教徒の国で福音を宣べ伝えて、目覚ましい成功を遂げるにあたっての重要な要因であった。 [202]

最初の伝道旅行は、早くも終わりに近づいていた。新しく組織されたこれらの教会を主にゆだねて、使徒たちはパンフリヤに行き、「ペルガで御言を語った後、アタリヤにくだり、そこから舟でアンテオケに帰った」。

[203]

第一九章エルサレム会議

本章は使徒行伝一五章一節ー三五節に基づく

パウロとバルナバはシリヤのアンテオケから伝道旅行につかわされていたのであるが、旅から戻ってくると早々に機会をとらえて信者を呼び集め、「神が彼らと共にいてして下さった数々のこと、また信仰の門を異邦人に開いて下さったことなどを」報告した（使徒行伝一四ノ二七）。アンテオケの教会は大きく成長している教会であった。宣教活動の中心をなすこの教会は、キリスト教信者の集団の中で最も重要なものの一つだった。教会員はユダヤ人と異邦人の中から来た種々の階級の人々で構成されていた。

使徒たちは教役者や信徒といっしょに熱心に努力し、多くの人々をキリストに導いていたが、一方、ユダヤから来た「パリサイ派」のあるユダヤ人信徒たちは、一つの問題を持ち込んできた。それはまもなく教会内に、広範囲に及ぶ論争を引き起こし、異邦人の信徒たちを驚愕きょうがくさせるものとなった。これらユダヤ主義の教師たちは、救われるためには割礼を受けて、礼典律を完全に守らなければならないと、大きな確信をもって主張した。[204]

パウロとバルナバはこの誤った教えを速やかに聞きつけて、異邦人たちにこの問題を持ち出すことに反対した。ところが、アンテオケのユダヤ人信徒の多くは、最近ユダヤから来た兄弟たちの立場に賛成していた。

ユダヤ人の改宗者はたいてい、神の摂理によって道が開かれても、すぐに進んでいこうとしなかった。使徒たちが異邦人のあいだで働いたために、ユダヤ人の改宗者よりも異邦人の改宗者の数のほうがはるかに多かったことは確かである。もしユダヤ人の律法が命じる禁止事項や儀式を、教会員になる条件として異邦人に行わせることをしないでいると、これまでユダヤ人を他の国民と区別してきた国民的特異性が、ついには福音を信じた人びとのあいだから失われるのではないかと、ユダヤ人は恐れた。

ユダヤ人は、神から命じられた宗教儀式につねに誇りを持ってきた。キリストの信仰へと改心した人人の多くはなお、神がひとたびヘブライ的な礼拝の大要を明確にされたのであるから、その礼拝儀式のどんな細かい部分でも変えることを神が認可されるようなことは起こり得ない、と思った。彼らはユダヤの律法と儀式が、キリスト教の宗教儀式と結び合わされるべきだと主張した。すべてのいけにえのささげ物は神のみ子の死を予示したもので、予型はキリストの死において本体に合わされるのであり、キリストの死後は、モーセの律法の儀式や礼典はもはや義務づけられないということを、彼らはなかなか認めなかった。

パウロは改宗する前には、自分を「律法の義については落ち度のない者である」と思っていた（ピリピ三ノ六）。[205] しかし心を変えてから彼は、ユダヤ人ばかりでなく、異邦人も含めた全人類のあがない主としての救い主の使命について、明確な概念をつかみ、生きた信仰と死んだ形式主義との違いを学んでいた。イスラエルにゆだねられた古い慣習や儀式は、福音の光を受けて、より深い意味を持つようになっていた。それらの慣習や儀式に予示されていた事が既に起こったので、福音の時代に生きている人々は、それらを遵守することから解放されていた。しかしパウロはなおも、神の変わることのない律法である十戒を、文字通りに守るばかりでなく、精神的にも遵守していた。

アンテオケの教会では、割礼の問題について活発な議論や論争が起こった。ついに教会員たちは、これ以上議論を続ければ、彼らのあいだに分派が起こるのではないかと恐れて、教会から数人の責任のある人々をつけて、パウロとバルナバをエルサレムにつかわし、使徒や長老たちの前で事を解決させようとした。彼らはそこで、それぞれの教会からの代表者たちや、まもなくやってくる祭りに参加するために、エルサレムに集まってきていた人々と会うことになった。その間に全体的な会議があって、最終決議が採択され、すべての論争が終わるはずであった。この決議は国中のそれぞれの教会に例外なく受け入れられることになるはずであった。

使徒たちはエルサレムに行く途中、通過する町々に住む信者たちを訪問し、神のみ働きにおいて彼らが経験したことや、異邦人たちの改心を話して信者を励ました。

[206] エルサレムでは、アンテオケからつかわされた者たちは、あちこちの教会から総会に出席するために集まってきていた兄弟たちに会い、異邦人伝道で収めた成功について話した。それから彼らは、改宗したパリサイ派のある者たちがアンテオケにきて、救われるためには改宗した異邦人は割礼を受け、モーセの律法を守らなければならないのだと主張したために起こった混乱のあらましを、はっきり述べた。

この問題は集会において熱心に討議された。割礼の問題と深い関係のあるもので、十分に研究を要する幾つかの問題が他にもあった。その一つは、偶像にささげられた肉の使用に対してとらなければならない態度に関するものであった。改宗した異邦人の多くは、無学で迷信的な人々の中に住んでいた。そのような人々は、絶えず偶像にいけにえやささげ物をささげていた。この異教の礼拝をする祭司たちは、彼らのもとに携えられてきたささげ物で、手広い商売を行っていた。それでユダヤ人たちは、異邦人の改宗者たちが、偶像にささげられたものを買い、そのために偶像崇拝的な習慣をいくぶんか是認することになり、キリスト教の評判をそこねるのではないかと心配した。

更に、異邦人たちは絞め殺された動物の肉を食べる習慣があったが、ユダヤ人は、動物が食用として殺されるときには、血液が体内から流れ出るよう特別な処置が取られねばならない、でなければ、その肉は健康によいものとされないことを、神から指示されていた。神はユダヤ人の健康を守るために、これらの命令をお出しになっていた。ユダヤ人は、血を食べものとして用いることは罪だとみなしていた。彼らは血をいのちと考え、罪の故に血を流すのだと思っていた。

[207] それとは反対に、異邦人は、犠牲の動物から流れる血を受けて、それを調理に用いていた。ユダヤ人は、神の特別な指示のもとに取り入れていた習慣を、変えねばならないと信じることができなかった。だから、当時、ユダヤ人と異邦人が食事に同席しなければならないようなことになると、ユダヤ人は異邦人の習慣によって衝撃を受け、侮辱されるのであった。

異邦人、特にギリシヤ人は非常に放縦で、ある者は、心の中では改心せず、悪い習慣を捨てずに信仰を告白する

おそれがあった。ユダヤ人のクリスチャンは、異教徒には犯罪とはみなされていないような行為を不道徳と考え、寛大に扱うことができなかった。それゆえに、ユダヤ人は、割礼や礼典律の遵守を異邦人の改宗者たちに実行させて、改宗の真実性と献身の試金石とするのがよいと、強く主張した。こうすれば、心から改宗せずに真理を受け、のちになって不道徳、不節制な行為のために恥辱となるような人々を、教会に加えずにすむと、彼らは信じた。

ここで争われている主要な問題を解決するために、考えなければならないさまざまな問題点は、克服しがたい困難さを会議の前にもたらしたように見えた。しかし、その決定次第では、キリスト教会の繁栄、あるいはその存在そのものすら左右されようというこの問題は、実際には既に聖霊によって解決されていた。

「激しい争論があった後、ペテロが立って言った、『兄弟たちよ、ご承知のとおり、異邦人がわたしの口から福音の言葉を聞いて信じるようにと、神は初めのころに、諸君の中からわたしをお選びになったのである』。」ペテロ [208] は、聖霊が割礼を受けていない異教徒にも割礼を受けたユダヤ人にも同じ力をもってくだり、論争中のこの問題を既に決定したのだと説明した。彼は幻のことを再び取り上げた。その幻の中で彼は、あらゆる種類の四つ足の獣が入っている布を神から与えられて、それをほふって食べるようにと命じられたのである。彼が清くないもの、汚れたものは何一つ食べたことがないと答えてご命令を拒んだとき、「神がきよめたものを、清くないなどと言ってはならない」と言われていたのである（使徒行伝一〇ノ一五）。

ペテロはこれらの言葉の明瞭な意味を説明した。それは彼が、百卒長のところへ行ってキリストを信じる信仰へ導くようにとの召しを受ける直前に、与えられたものであった。この使命は、神が人をかたより見られず、神をおそれるすべてのものを受け入れ、認めてくださることを示した。ペテロは、自分がコルネリオの家に集まった人々に真理のことばを語っていて、聴衆のユダヤ人も異邦人も聖霊に満たされたのを目撃したときの自分の驚きについて話した。割礼を受けたユダヤ人に反映しているのと同じ光と栄光が、割礼を受けていない異邦人の顔にも輝いていた。このことは、ペテロが異邦人をユダヤ人よりも劣ったものと

見てはならないという、神の警告であった。なぜならキリストの血は、一切のけがれをきよめることができるからである。

以前にペテロは、コルネリオとその友人たちの改心のことや、彼らとの交わりのことを兄弟たちに話したことがあった。その時、聖霊が異邦人の上にくだったさまを彼ら
[209] に話して、「このように、わたしたちが主イエス・キリストを信じた時に下さったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったとすれば、わたしのような者が、どうして神を妨げることができようか」とペテロは説明したのである（使徒行伝一一ノ一七）。いま彼は同じ熱意と力をこめて言った、「人の心をご存じである神は、聖霊をわれわれに賜わったと同様に彼らにも賜わって、彼らに対してあかしをなし、また、その信仰によって彼らの心をきよめ、われわれと彼らとの間に、なんの分けへだてもなさらなかった。しかるに、諸君はなぜ、今われわれの先祖もわれわれ自身も、負いきれなかったくびきをあの弟子たちの首にかけて、神を試みるのか。」このくびきは、律法の拘束に反対している人々が主張するような、十戒の律法ではない。ペテロはここで礼典律について言及したのである。それはキリストの十字架によって無効とされたものであった。

ペテロの言葉で会衆は、異邦人のために働いた経験を説明するパウロとバルナバに、辛抱強く耳を傾けることができるようになった。「全会衆は黙ってしまった。それから、バルナバとパウロとが、彼らをとおして異邦人の間に神が行われた数々のしるしと奇跡のことを、説明するのを聞いた。」

ヤコブもきっぱりと証言して、神がユダヤ人にお与えになった特権と祝福を、異邦人にも同じようにお与えになることが、神の目的であると語った。

聖霊は、改宗した異邦人に、礼典律の実行を義務づけない方がよいと見られた。この問題に関する使徒たちの考えも、神のみ霊の考えと同じであった。ヤコブは会議におい
[210] て議長をつとめていたが、彼の最終的決定は「そこで、わたしの意見では、異邦人の中から神に帰依している人たちに、わずらいをかけてはいけない」ということであった。

これで話し合いは終わった。この例を見れば、ローマ・カトリック教会が教えるようにペテロが教会の頭かしら

ではなかったことがわかる。法王のように、ペテロの継承者だと主張してきた人々には、その主張に対する聖書的な根拠がない。ペテロの生涯において、彼が神の代理者として兄弟たちの上位にあがめられたという主張を是認するようなものは、何もない。ペテロの継承者だと宣言している人々が彼の模範に従っていたならば、彼らは常に兄弟たちと同等の立場にとどまることで満足していたはずである。

この場合ヤコブは、会議によって到達した決定を発表する者として選ばれていたようである。ヤコブは礼典律、特に割礼の儀式を異邦人に強制したり、勧めたりすべきでないと宣言した。ヤコブは、異邦人が神に献身するにあたって、彼らの生活には既に大きな変化があったこと、また彼らがキリストに従うにあたって失望させられないように、あまり重要でない問題で困惑させたり、疑わせたりして彼らを悩ませないよう十分注意を払わねばならないことを、兄弟たちに理解させようとした。

しかし異邦人の改宗者たちは、キリスト教の原則に矛盾する習慣をやめなければならなかった。そこで使徒や長老たちは、偶像にささげた肉や、不品行を避け、絞め殺されたものや血を食べないよう、書面で異邦人たちを指導することにきめた。いましめを守り、きよい生活を送るよう、彼らに勧めねばならなかった。また、割礼が義務づけられたものであると言った人々は、使徒たちによって公認されてそう言ったのではないということも、彼らにはっきり [211]
言っておかねばならなかった。

パウロとバルナバが、主のために命をかけて働いている者として、彼らに推薦された。ユダとシラスも選ばれて、この使徒たちと共に異邦人のところに行き、会議の決定を口頭で伝えることになった。「聖霊とわたしたちとは、次の必要事項のほかは、どんな負担をも、あなたがたに負わせないことに決めた。それは、偶像に供えたものと、血と、絞め殺したものと、不品行とを避けるということである。これらのものから遠ざかっておれば、それでよろしい。」あらゆる論争に終止符を打つために、文書と口頭で伝える言葉を携えて、神の四人のしもべがアンテオケにつかわされた。それは地上に与えられた最高の権威の声であった。

この事件を解決した会議は、ユダヤ人や異邦人のキリスト教会を建設するのに功のあった使徒や教師たち、及び各地から派遣された代議員たちで構成されていた。エルサレムからの長老たちと、アンテオケからの代表者が出席し、最も有力な教会からも代表者が来ていた。会議は啓発された判断が命じるところに従って運営され、また、神のみこころによって建てられた教会の権威にふさわしく進められた。審議の結果、彼らはみな、神が異邦人にも聖霊をお与えになって、論争中の問題をご自身で解決されたのを見て、彼らのなすべきことは聖霊の導きに従うことであると悟った。

この問題に関する採決のために、クリスチャン全員が召集されたのではない。影響力と判断力のある「使徒たちや長老たち」が通達を書き、発行した。そして、それはキリ[212]スト教会に広く受け入れられた のである。しかし、すべての者がこの決定に満足したわけではない。この決定に反対した野心的で、自信の強い兄弟たちの党派があった。これらの人々は、独断でみわざに携わっているという態度をとり、しきりに激しくつぶやき、あらを探し、新しい計画を持ち出して、福音使命を伝えるよう神から任命されていた人々の働きをくずそうとした。教会は最初からそのような障害に会ってきたのであるが、これは、今後も常に、終わりの時まで続くであろう。

エルサレムはユダヤ人の中心地で、最も強い排他性と頑迷さが見られたところであった。神殿の見えるところに住んでいるユダヤ人のクリスチャンたちの心が、ユダヤ国民としての特別な特権に逆戻りするのは自然なことであった。彼らはキリスト教会がユダヤ教の儀式や伝統から離れて行くのを見て、ユダヤ人の慣習にさずけられていた特別な聖さが、新しい信仰の光に照らされて、まもなく失われるであろうと気づき、多くの者は、この変化を引き起こしたのは大部分パウロのせいであるとして、憤慨するようになった。弟子たちでさえ、全部が会議の決定をよろこんで受け入れる気持ちになったのではない。中には礼典律に熱心な者もいて、彼らはユダヤ人の律法の義務についてパウロの原則が手ぬるいと考え、パウロに対しておもしろくない気持ちを持っていた。

会議の決定は広く遠大な精神のものであったから、異邦人の信者たちは、確信を与えられて、神の働きは栄えていった。アンテオケの教会は、エルサレムの会議から使徒たちと共に帰ってきた特別の使命者、ユダとシラスを迎えて恵まれた。ユダとシラスは「共に預言者であったので、多くの言葉をもって 兄弟たちを励まし、また力づけた。」 [213] この信仰深い人たちは、しばらくのあいだアンテオケに滞在した。「パウロとバルナバとはアンテオケに滞在をつづけて、ほかの多くの人たちと共に、主の言葉を教えかつ宣べ伝えた。」

のちになってペテロがアンテオケを訪問した時、彼は異邦人の改宗者たちに対する賢明な振る舞いによって、多くの人々の信頼を得た。しばらくのあいだ、彼は天来の光に従って行動した。彼は異邦人の改宗者と食事の席を共にするほどに、生まれつきの偏見を克服していた。しかし、礼典律に熱心なユダヤ人がエルサレムからやって来たとき、ペテロは異教から改心した人々に対する態度を、無分別に変えた。何人かのユダヤ人たちも「彼と共に偽善の行為をし、バルナバまでがそのような偽善に引きずり込まれた」（ガラテヤ二ノ一三）。指導者として愛し尊敬されている人々の弱点がこのように現れたために、異邦人の信者たちは、心に大きな痛手を受けた。教会に分裂の恐れがあった。しかしペテロがあいまいな態度をとり、教会を破壊するような悪影響を及ぼしているのを知ったパウロは、彼が本心をごまかしていることを公然と非難した。パウロは教会の人々の前で彼に向かい「あなたは、ユダヤ人であるのに、自分自身はユダヤ人のように生活しないで、異邦人のように生活していながら、どうして異邦人にユダヤ人のようになることをしいるのか」と詰問きつもんした（ガラテヤ二ノ一四）。

ペテロは自分のあやまちを認め、自分の力でできるかぎり、それまでの弊害を取り除くことに努めた。はじめからその終わりを知っておられる神は、ペテロが性格上の弱さをさらけだすままにさせておかれ た。それはペテロが、経 [214] 験を通して、自分に何も誇るべきものがないことをさとるためであった。どんなに立派な人でも、好きなようにさせておかれると、判断を誤るものである。また、将来、欺かれた人人が、神だけが持っておられる高貴な特権を、ペテ

ロやその後継者と称する人々にも要求するようになることも、神は知っておられた。そして使徒ペテロの弱さを示したこの記録は、彼の誤りやすいことや、彼が決して他の使徒たちの上位に立つ者ではないことの証明として、残されたのである。

神の働きに重要な役割を持つ人々が、自ら高潔さを捨てることなく固く原則に立つように、この正しい原則からの離反の歴史は、厳粛な警告を与えている。人に課せられた責任が重ければ重いだけ、また、彼が命令したり、支配する機会が多ければ多いだけ、彼が神の道に慎重に従って、総会で信者たちが到達した決定に一致して働かないかぎり、彼はそれだけ大きな害を及ぼしてしまうのである。

ペテロのすべての失敗ののちに、すなわち、彼がつまずき、立ち直ってのち、また、彼の長い奉仕の期間、キリストと親しく交わり、正しい原則を実行されたキリストから直接に知識を受け、彼がみことばを説いたり、教えたりして賜物や知識や感化力をさずけられたのちに、彼が人を恐れたり、あるいは、人に重んじられようとして福音の原則を偽り、これを避けねばならなかったとは、不思議ではないか。ペテロが動揺して正しいものを固く守れなかったとは、不思議ではないか。神がすべての人に、自己の無力さ、自分の船を安全に真っ直ぐ港に操縦できない無能さを、悟らせてくださるように。

パウロは伝道の働きにおいて、孤立せざるを得ないこ
[215] とがよくあった。彼は神について特に教えられていたので、あえて原則にかかわる譲歩をすることができなかった。時にはその荷は重かったが、パウロは義のために固く立った。教会が人間の権力による支配下に置かれてはならないということを、彼は知っていた。啓示された真理が、人間の伝説や格言に置きかえられてはならない。教会における地位がいかなるものであろうとも、人々の偏見や好みによって福音使命の進展が妨げられてはならない。

パウロは自分自身と、彼のすべての能力を神への奉仕にささげていた。彼は福音の真理を直接に天からさずけられており、その伝道生涯のあいだ、神の摂理ときわめて重大なつながりを保っていた。彼は異教徒のクリスチャンに課せられている不必要な義務について、神から教えられていた。こうしてユダヤ教の信者が、アンテオケの教会に割礼

の問題を持ち込んだとき、パウロはそのような教えに関する聖霊の考えを知っていて、ユダヤ人の慣例や儀式から教会を解放する、堅実な断固たる立場をとった。

パウロは個人的に神に教えられたのであるが、自己の責任を乱用するような考えを持っていたのではない。神の直接の導きを求めながらも、パウロは、教会員として一致している信者たち全体にさずけられた権威を、常に重んじる態度を取った。彼は話し合いの必要を感じていた。そして、重要な事が起こると、彼は快くそれを教会にゆだねて、兄弟たちと共に心を合わせて神に知恵を求め、正しい決定を行った。「預言者の霊」でさえ「預言者に服従するものである。神は無秩序の神ではなく、平和の神である」とパウロは言った（コリント第一・一四ノ三二、三三）。彼はペテロと共に、すべての者は教会員として「みな互に謙遜」にならなければならないと教えた（ペテロ第一・五ノ五）。

[216]

第二〇章パウロの第二次伝道旅行

本章は使徒行伝一五章三六節－四一節、一六章一節－六節に基づく

アンテオケでしばらくのあいだ伝道をしてのちパウロは、また別の伝道旅行に出かけることを仲間に提案した。「さあ、前に主の言葉を伝えたすべての町々にいる兄弟たちを、また訪問して、みんながどうしているかを見てこようではないか」と彼はバルナバに言った。

パウロとバルナバは、自分たちの働きにより少し以前に福音使命を受け入れていた人々への、優しい心づかいを持っていたので、もう一度その人々に会いたいと思っていた。パウロはこの心づかいを忘れなかった。たとえ遠い伝道地にいても、以前に働いた場所からはるかに離れた所にいてもパウロは「神をおそれて全く清くなろうではないか」と改宗者たちを励まして、信仰を守り通させる重荷を持ち続けていた（コリント第二・七ノ一）。彼は絶えず彼らを助けて自信を持たせ、成長するクリスチャンとなり、信仰を強め、熱意を燃やし、誠意をこめて神とみ国の到来を早める働きへと献身させようとした。

[217] バルナバは、パウロと一緒に行くつもりであったが、決心を新たにして伝道に献身したマルコも連れて行きたいと思った。だがパウロはこれに反対だった。彼は、第一次伝道旅行の際いざというときに離れて行ったような者は「連れて行かないがよいと考えた」。彼は、家庭生活の安全と楽しみのために働きを放棄するようなマルコの弱さを、ゆるす気になれなかった。そんなに耐久力のない者は、忍耐、克己、勇気、献身、信仰、心からの犠牲、いや必要ならば生命さえも要求する働きには向かないと、パウロは主張した。こうして激論となり、その結果ふたりは互いに別れ別れになり、バルナバは自分の主張したとおりにマルコを連れて行った。「バルナバはマルコを連れてクプロに渡って行き、パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて、出発した。」

パウロとシラスは、シリヤ、キリキヤの地方を通って、諸教会を力づけ、それからルカオニヤ地方のデルベとルステラにたどりついた。パウロが石で打たれたのはルステラにおいてであったが、彼はいままたこの以前の危険な場所に姿を現している。彼は自分の骨折りによって福音を受け入れた人たちが、試練に耐えているのを見たかったのである。彼は失望しなかった。ルステラの信者たちが、激しい反対に会いながら、信仰を固く持ちつづけているのを見たからである。

ここでパウロは、ふたたびテモテに会った。テモテは、パウロが初めてルステラをおとずれた時の終わりごろ、パウロが受けた苦難を目撃し、そのとき心に受けた印象が時がたつにつれてますます深くなり、伝道の働きに全的に献身することが自分の義務であると、確信するようになっていた。彼の心はパウロの心に固く結びつけられ、道が開 [218]
けるならばパウロを助けて働きを共にしたいと熱望していた。

パウロと共に働いていたシラスは、預言の霊をさずけられており、頼りになる働き人であった。しかしなすべき仕事があまりにも多かったので、とにかく活発に仕事をしてくれる働き人を、もっと養成する必要があった。パウロはテモテが、牧師の働きの尊さを理解し、前途の苦難や迫害にも動揺せず、よろこんで指導を受ける人だと見ていた。それでもなおパウロは、まずテモテの性格や過去の生活が、十分満足すべきものだということがわかるまでは、この未経験な若者に福音伝道の訓練を与える責任を負うことはあえてしなかった。

テモテの父はギリシヤ人で、母はユダヤ人であった。テモテは子供のころから聖書を知っていた。彼が自分の家庭で見た信仰は、健全で良識的であった。聖書に対する彼の母と祖母の信仰は、彼に神のみこころをなすことの祝福を絶えず思い出させた。神のみことばは、これら二人の敬虔な婦人たちがテモテを導いた原則であった。この二人から受けた教訓の霊的な力によって、彼の語ることは純潔で、彼は周囲の悪影響にけがされなかった。このように、家庭の訓育者たちは、神と協力して、彼が重荷を負う準備をしたのであった。

パウロはテモテが誠実で、しっかりしていて、正直だと知って、自分と共に働き、伝道旅行をする相手として彼を選んだ。子供のころのテモテを教育した人々は、自分たちの世話した息子が、偉大な使徒と親しく交わっているのを見て報われた。教師として神から選ばれたとき、テモテは
[219] ただの若者にすぎ なかった。しかし初期の教育によって彼
[220] の信念は確立されており、彼はパウロの助手としての地位を受けるにふさわしかった。彼は若かったがクリスチャンの素直な心で責任を引き受けた。

予防手段として、パウロは賢明にもテモテに、割礼を受けるようにすすめた。それは神が要求されたからではなく、ユダヤ人の心から、テモテの奉仕にじゃまとなるようなものを取り除くためであった。パウロは伝道の仕事で、町から町へと多くの地を旅行し、いろいろの集会所やユダヤ人の会堂でも、キリストを説く機会にしばしば恵まれた。それで、もし彼と共に働く者のひとりが、まだ割礼を受けていないことがわかると、彼の働きはユダヤ人の偏見と頑迷さによってじゃまされたことだろう。使徒はいたるところで断固とした反対や厳しい迫害に会ったのである。彼はユダヤ人の兄弟にも異邦人の兄弟にも、福音の知識を伝えたいと思ったので、自分の信仰に反しないかぎり、反対の口実をすべて除こうとした。彼はユダヤ人の偏見にそこまで譲歩したが、それでもなお、割礼や無割礼は問題ではなく、キリストの福音こそ最も重要なものであると信じて、そのように教えた。

パウロは「信仰による・・・・真実な子」テモテを愛した（テモテ第一・一ノ二）。この偉大な使徒はしばしば、聖書の歴史についてこの若い弟子に質問しては話を引き出した。またふたりで旅行してまわるときには、働きを成功させる方法を注意深く教えた。パウロもシラスも、テモテと一緒にいるときにはいつでも、すでにテモテが心に受けとめている福音伝道の働きの尊さ、重大さを、より深く彼の心に植えつけようとした。

[221] テモテはその働きにおいて、絶えずパウロに忠告や指示を求めた。彼は衝動的に行動することなく、一歩ごとにこれは主の方法だろうかとたずねながら、慎重に落ち着いて考えた。聖霊はテモテを、神が内住される宮として形づくることのできる者と見られた。

聖書の教訓が日常生活の中に徐々に入って行くとき、それは品性に深く、永続的な感化を及ぼす。このような教訓をテモテは学び、実行した。彼は、特にすぐれた才能を持っていたわけではないが、神からさずけられた能力を主のご用のために用いたので、彼の働きには価値があった。彼の、経験に基づく敬神の知識は、ほかの信者たちの中でも抜群で、影響力があった。

魂のために働く人々は、普通の努力で得られる以上により深く、完全に、明確に、神についての知識を得なければならない。彼らは主の働きに全力を注がなければならない。彼らは高く聖なる召しを受けている。そしてその報酬として魂を得るのであれば、彼らはすべての祝福の源であられる神から、日毎に恵みと力を受け、神にしっかりつかまっていなければならない。「すべての人を救う神の恵みが現れた。そして、わたしたちを導き、不信心とこの世の情欲とを捨てて、慎み深く、正しく、信心深くこの世で生活し、祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神、わたしたちの救主キリスト・イエスの栄光の出現を待ち望むようにと、教えている。このキリストが、わたしたちのためにご自身をささげられたのは、わたしたちをすべての不法からあがない出して、良いわざに熱心な選びの民を、ご自身のものとして聖別するためにほかならない」（テトス二ノ一一―一四）。

パウロとその一行は、新しい地方へ向かう前に、ピシデヤとその周辺の地方に設立した教会をたずねた。「彼らは通る町々で、エルサレムの使徒たちや長老たちの取り決めた事項を守るようにと、人々にそれを渡した。こうして、諸教会はその信仰を強められ、日ごとに数を増していった。」 [222]

使徒パウロは、自分の働きによって改宗した人々に対して、重い責任を感じていた。何よりも彼らが信仰を持ち続けて、「キリストの日に、わたしは自分の走ったことがむだでなく、労したこともむだではなかったと誇ることができる」ようにと彼は切望した（ピリピ二ノ一六）。パウロは自分の伝道の結果を気づかっていた。彼は、もし自分が、自分の義務を果たさないならば、また、教会が救霊の働きにおいて、自分と協力できないとすれば、自分自身の救いさえも危くなると感じた。信者にいのちのことばを

伝えさせる教育を施すには、説教だけでは十分でないことを彼は知っていた。キリストのみわざを進展させるためには、規則に規則を、教訓に教訓を、ここにも少し、そこにも少しと教えなければならないことを彼は知っていた。

神から与えられた力を用いることを拒むときはいつでも、これらの力が衰退して、消滅するということは、宇宙の原則である。生かされていない真理、告げられない真理は、そのいのちを与える力やいやしの効力を失う。このゆえに、彼らをキリストにあって全きものとして立たせることができなくなるのではないかと使徒はおそれた。パウロは、教会を神にかたどるどころか、人にかたどってしまう結果になるような自分のがわの失敗のことを考えるとき、[223] 天国への希望が薄らいでいく思いであった。彼が働きかけていた人々が、神の恵みを受けられずに、彼の働きが失敗に終わったら、彼の知識も、雄弁も、奇跡も、第三の天に引き上げられたときの永遠の光景に関する見解も、すべては無益になるだろう。そこで彼は、キリストを受け入れていた人々が、「責められるところのない純真な者となり、曲った邪悪な時代のただ中にあって、傷のない神の子となるため・・・・いのちの言葉を堅く持って・・・・星のようにこの世に輝いている」ようにと、口で語り、手紙に書いてその人々に訴えた（ピリピ二ノ一五）。

真実な牧師はみな、自分にゆだねられている信徒の霊的成長のために重い責任を感じ、彼らが神の共労者となるように切望している。教会の繁栄が、神からゆだねられた働きを忠実に実行することに、大部分かかっていることを牧師は知っている。教会員の増加は、そのまま、あがないの計画の実行者の増加でなければならないことを覚えて、牧師は熱心に、たゆまず、人々をキリストに導くようにと信徒たちを励ますのである。

ピシデヤとその近隣地方を訪問してから、パウロとシラスはテモテを伴って、「フルギヤ・ガラテヤ地方」へ進み、そこで救いのよろこばしいおとずれを力強く宣べ伝えた。ガラテヤ人たちは偶像礼拝をやめるように導かれたが、使徒たちが教えを説いているうちに、罪の束縛からの自由を約束している使命をよろこぶようになった。パウロとその仲間の働き人たちは、キリストのあがないの犠牲を信じる、信仰による義についての教理を宣べ伝えた。彼ら

は、キリストが堕落した人類の救いようのない状態をご覧になり、みずから神の律法に従う生活をなさって、不従順の罰をお受けになることにより、彼らを あがなうために来 [224]
られたかたであると教えた。そして十字架の光により、これまで真の神を知らなかった多くの人々が、み父の愛の偉大さを理解しはじめた。

こうしてガラテヤ人たちは「父なる神」と、「わたしたちの父なる神の御旨に従い、わたしたちを今の悪の世から救い出そうとして、ご自身をわたしたちの罪のためにささげられた」「主イエス・キリスト」についての重要な真理を教えられた。彼らは「聞いて信じたから」神のみ霊を受け入れ、「キリスト・イエスにある信仰によって、神の子」となった（ガラテヤ一ノ三、四、三ノ二、二六）。

ガラテヤ人の中にいたころの自分の生活態度についてパウロは、のちになって「兄弟たちよ。お願いする。どうか、わたしのようになってほしい」と言うことができた（ガラテヤ四ノ一二）。彼のくちびるは祭壇からとった燃えている炭に触れていたので、彼は身体の欠陥を超越し、イエスを罪びとの唯一の望みとして示すことができた。彼の言葉を聞いた人々は、彼がイエスと共にいたことを知った。天来の力をさずけられて、彼は霊によって霊のことを解釈し、サタンの拠点を打ちくだくことができた。彼が神のひとり子イエスの犠牲に表されている神の愛を示すと、人々の心はくだかれて、多くの者が「わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」という気持ちにまで導かれた。

福音を提示するこの方法は、パウロの異邦人伝道の一貫した働きを特色づけるものであった。彼は常にカルバリーの十字架を彼らに示した。のちになって彼は、自分の体験を「わたしたちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝える。わたしたち自身は、ただイエスのために 働くあなたがたの僕にすぎない。『やみ [225]
の中から光が照りいでよ』と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである」と述べた。（コリント第二・四ノ五、六）。

キリスト教の初期のころ、滅びゆく世に救いのよきおとずれを携えていった献身的な使命者たちは、自己称揚の思

いから、キリストとその十字架を示す働きを台なしにするようなことはなかった。彼らは権威も、自己の卓越をも望まなかった。彼らは救い主の中に自己をかくし、救いの偉大な計画と、この計画の創り主であられ、完成者であられるキリストのご生涯をかかげた。きのうも、きょうも、また永遠に変わることのないキリストが、彼らの教えの要旨であった。

もし今日神のみことばを教えている人々が、キリストの十字架をいよいよ高くかかげるならば、その伝道はもっと大きく成功するのである。もし罪人にひとたび十字架を熱心に見させることができるならば、もし彼らが十字架につけられた救い主についての全貌ぼうを知り得たら、彼らは神の深いあわれみと自分の罪の深さとを認めるようになるであろう。

キリストの死は、人類に対する神の深い愛を証明している。それはわれわれの救いの保証である。クリスチャンから十字架を取り除くことは、空から太陽をおおい隠すようなものであろう。十字架はわれわれを神に和解させ、われわれを神に近づかせる。父親の愛の優しいあわれみをもって、神は、人類を永遠の死から救うためにみ子が耐えられた苦悩をご覧になり、愛するみ子によってわれわれを受け
[226] 入れてくださるのである。

十字架がなければ、人は神と和合することができなかった。われわれのすべての望みは十字架にかかっている。そこに救い主の愛の光が輝いている。罪人が十字架のもとで、彼を救うために死なれたおかたを見上げるときに、彼は満ちたりたよろこびを味わうのである。それは彼の罪が赦ゆるされたからである。信仰をもって十字架のもとにひざまずくとき、彼は人が到達できる最高の場所に到達しているのである。

われわれは、天のみ父が無限の愛をもってわれわれを愛してくださっていることを、十字架によって学ぶのである。「わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあってはならない」とパウロが叫んだのは、当然である（ガラテヤ六ノ一四）。十字架を誇りとし、われわれのためにご自身をお与えになった主にわれわれを全くささげることは、われわれの特権でもある。その時に、カルバリーの十字架から流れ

る光を顔に受けて、この光を暗黒にある者たちへ現すために出かけて行くことができるのである。

[227]

第二一章エーゲ海を渡る

本章は使徒行伝一六章七節－四〇節に基づく

福音が小アジヤの境界を越えて宣べ伝えられる時期は、既に到来していた。パウロと彼の共労者たちが、ヨーロッパへ渡って行くための道は準備されていた。地中海沿岸にあるトロアスで「夜、パウロは一つの幻を見た。ひとりのマケドニヤ人が立って、『マケドニヤに渡ってきて、わたしたちを助けて下さい』と、彼に懇願するのであった。」

この召しは延期を認めぬ命令であった。「パウロがこの幻を見た時、これは彼らに福音を伝えるために、神がわたしたちをお招きになったのだと確信して、わたしたちは、ただちにマケドニヤに渡って行くことにした。そこで、わたしたちはトロアスから船出して、サモトラケに直航し、翌日ネアポリスに着いた。そこからピリピへ行った。これはマケドニヤのこの地方第一の町で、植民都市であった」と、パウロ、シラス、テモテに同行してヨーロッパへの旅をつづけたルカが述べている。

[228] 「ある安息日に、わたしたちは町の門を出て、祈り場があると思って、川のほとりに行った。そして、そこにすわり、集まってきた婦人たちに話をした。ところが、テアテラ市の紫布の商人で、神を敬うルデヤという婦人が聞いていた。主は彼女の心を開い」たと、ルカは引きつづき述べている。ルデヤは真理をよろこんで受け入れた。彼女もその家族も改心してバプテスマを受け、また、彼女の家に泊まるようにと彼女は使徒たちに懇望した。

十字架の使命者たちが教えを説いて回っていたとき、占いの霊につかれた女が彼らについてきて「この人たちは、いと高き神の僕たちで、あなたがたに救の道を伝えるかただ」と叫んだ。「そして、そんなことを幾日間もつづけていた。」

この女はサタンの特別な手先で、占いをして彼女の主人たちに多くの利益を得させていた。彼女の感化により偶像礼拝が盛んになっていた。サタンは自分の王国が侵略され

ていることを知って、神のみわざに反対するのにこうした手段を用い、福音使命を宣べ伝えている人々の教える真理に彼の詭弁を混ぜようと望んだ。この女が語る推薦の言葉は、人々の心を使徒たちの教えからそらし、福音の評判を傷つけるので、真理のみわざにとっては有害であった。その言葉によって多くの者は、み霊と神の力によって語っている人々が、このサタンの使者と同じ霊によって動かされていると信じさせられたのである。

しばらくのあいだは、使徒たちはこの反対にがまんした。それから聖霊の導きのもとに、パウロは悪霊に女から出て行けと命令した。彼女がたちまち黙ってしまったことから、使徒たちが神のしもべであり、悪霊が彼らを神のしもべとして認め、その命令に従ったのだとわかった。 [229]

女は悪霊から解放され、正常な心をとりもどすと、キリストに従う者となることを望んだ。すると彼女の主人たちは、自分たちの職業のことが気になってきた。彼らは、彼女の占いや予言から金銭を得る望みが全くなくなったこと、また、もし使徒たちに福音の働きをつづけさせるならば、彼らの収入源がまもなく全く断たれてしまうことを知った。

そのほかこの町には、サタンの惑わしによって利益を得ることに関心のある者がたくさんいて、彼らは自分たちの仕事をいやおうなしにやめさせた力の影響を恐れ、神のしもべたちに向かって大声をあげて騒ぎ出した。彼らは使徒たちを長官たちの前に引き出して訴えた。「この人たちはユダヤ人でありまして、わたしたちの町をかき乱し、わたしたちローマ人が、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しているのです。」

熱狂的な興奮をかきたてられ、群衆は、いっせいに弟子たちに反対して立ち上がった。騒ぎがおこる気配がひろがり、官憲はそれを知って、使徒たちの上着をはぎとり、彼らをむち打つように命令した。「それで、ふたりに何度もむちを加えさせたのち、獄に入れ、獄吏にしっかり番をするようにと命じた。獄吏はこの厳命を受けたので、ふたりを奥の獄屋に入れ、その足に足かせをしっかとかけておいた。」

使徒たちは苦しい姿勢のままに置かれていたので、激しい苦痛を味わったが、それでもつぶやかなかった。それど

ころか、真っ暗闇のみじめな獄屋の中で、彼らは祈りの言
[230] 葉で互いに励まし合い、自分たちが神のためにはずかしめを受けるにふさわしいものとされたことを知って、神をさんびして歌った。彼らの心は、あがない主のみわざに対する深い、真実な愛によって元気づけられた。パウロは自分が手をかしてキリストの弟子たちを迫害に追いやったことを思い、かつては軽蔑べつしていた輝かしい真理の力を見る目が開かれ、それを感じる心が開かれたことをよろこんだ。

ほかの囚人たちは、奥の獄屋から祈りと歌が聞こえてくるのを、驚きながら聞いていた。彼らは、夜のしじまを破って聞こえてくる悲鳴やうめき、のろいや悪口には慣れていたが、陰気な地下室から祈りやさんびの言葉が上ってくるのをこれまで聞いたことがなかった。獄吏も囚人たちも驚き、寒さと飢えと責め苦に会いながら、なおよろこぶことのできるこの人たちはだれだろうかと、互いに語り合った。

やがて長官たちは、迅速果敢な手段で騒ぎを静めたことをよろこびながら家へ帰った。しかし途中で彼らは、自分たちがむち打ちと投獄の刑に処した人たちの人となりと働きについて、更にくわしいことを聞いた。彼らはサタンの影響力から解放された女を見て、彼女の容貌や態度の変化にはっと驚いた。これまで彼女は町に大変な迷惑をかけていたのだが、いまは静かで穏やかな人間になっていた。彼らは、おそらく自分たちは罪のないふたりにローマの法律の厳罰を課したのではないかと気がつき、自分で自分に腹を立て、翌朝になったらひそかに彼らを釈放して、群衆による暴力の危険のないところへ、町から送り出すように命令しようと決意した。

しかし人々が残酷で復讐しゅう心に満ちていたあいだ
[231] も、あるいは彼らにかかっている厳しい責任に対して怠慢の罪を犯していたあいだも、神はそのしもべたちに対して恵み深くあることをお忘れにならなかった。全天は、キリストのために苦しんでいる人々に関心をよせ、獄屋をおとずれるために天使たちがつかわされた。天使たちの足音に地はゆれ動いた。重いかんぬきのかかった獄屋の戸が開け放たれ、くさりと足かせは囚人たちの手足から落ち、明るい光が獄中にみなぎった。

獄吏は、獄屋に入れられた使徒たちの祈りと歌を、驚きながら聞いたのであった。使徒たちが獄に入ってきたとき獄吏は、彼らの腫はれて血の滲にじんだ傷を見ていた。また自分も彼らに足かせをつけたのであった。だから、彼らの口からは当然、呻うめうめきや呪呪のろいが出てくるものと思っていた。しかし、それどころか、よろこびとさんびの歌を聞いたのであった。獄吏は、耳にひびくこれらの音を聞きながら眠り込んでいたのだったが、獄屋の壁をゆさぶる地震で目が覚めた。

驚いて立ち上がった獄吏は、獄屋の戸が全部開いているのを見て狼狽ろうばいし、囚人たちが逃げてしまったという恐怖が心にひらめいた。その前夜、パウロとシラスをしっかり監視しているようにとはっきり言い渡されていたことを思い出し、彼は、まぎれもないこの不覚は死でもって罰せられるであろうと思いこんだ。不名誉な刑罰に服するよりは、みずからの手で死んだほうがましだと、彼は悲痛な気持ちになった。彼が剣を抜いて自殺しようとすると、「自害してはいけない。われわれは皆ひとり残らず、ここにいる」と、元気づける言葉を語るパウロの声が聞こえた。囚人たちは、ひとりの仲間を通して働きかける神の力にひきとめられて、ひとり残らずもとの場所にいたのである。

獄吏は使徒たちを苛酷かこくにあしらったが、彼らは [232]
怒らなかった。パウロとシラスは、復讐心ではなく、キリ [233]
ストの心を持っていた。救い主の愛に満たされていた心には、迫害者たちに恨みを抱くような余地はなかった。

獄吏は剣を落とし、明かりを呼び求めて、獄屋の中へ急いだ。残酷に取り扱われたにもかかわらず、親切でもって報いるとはなんと立派な人たちだろうと彼は思った。使徒たちのそばまで来て、彼は身を伏してゆるしを求めた。それから、ふたりを外に連れ出して言った、「先生がた、わたしは救われるために、何をすべきでしょうか。」

獄吏は地震によってあらわされた神の怒りを見て、恐れおののいた。囚人たちが逃げてしまったと思ったとき、自分の手で死ぬつもりでいたのであるが、今やこれらすべての事態は、彼の心をゆり動かす新しい不思議なおそれと、使徒たちが苦しみと虐待を受けながらも示した、落ち着きと快活さを自分も持ちたいと思う願いに比べれば、全く取

るに足りないことのように思えた。彼はふたりの顔に天の光がさしているのを見た。そして神がふたりの命を救われるために、奇跡的な方法で干渉されたのだと知った。そして不思議な力で、霊にとりつかれた女の言葉が思い出されてきた。「この人たちは、いと高き神の僕たちで、あなたがたに救の道を伝えるかただ。」

獄吏は心からへりくだり、いのちの道を教えてほしいと使徒たちに頼んだ。「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」と言って、ふ
[234] たりは「彼とその家族一同とに、神の 言を語って聞かせた。」それから獄吏は使徒たちの傷を洗い、ふたりをもてなした。そしてのち、彼と家族はみな、ふたりからバプテスマを受けた。心を清める感化力は獄屋の囚人たちにも広まり、すべての者が心を開き、使徒たちの語る真理に聞き入った。ふたりが仕える神が、ふたりを奇跡的に束縛から解き放されたことを彼らは認めた。

ピリピの市民たちはその地震にひどくびっくりした。そして翌朝、獄屋の役人たちがその前夜の出来事を長官たちに報告すると、長官たちは驚いて、警吏らをつかわし、使徒たちを釈放させようとした。しかしパウロは、「彼らは、ローマ人であるわれわれを、裁判にかけもせずに、公衆の前でむち打ったあげく、獄に入れてしまった。しかるに今になって、ひそかに、われわれを出そうとするのか。それは、いけない。彼ら自身がここにきて、われわれを連れ出すべきである」と言った。

使徒たちはローマ市民であった。極悪な犯罪人のほかは、ローマ人をむち打ったり、公正な裁判なしにローマ人の自由を奪うことは不法であった。パウロとシラスは公然と投獄されたので、いま彼らは長官たちのがわから正当な釈明もなしに、ひそかに釈放されることを拒否した。

この言葉が長官たちに報告されたとき、彼らは使徒たちが皇帝に苦情を申し立てるのではないかと恐れて、あたふたと獄屋に駆けつけ、パウロとシラスに自分たちのした不正で残酷な行為をわびたうえ、みずからふたりを獄から連れ出して、町を去るように頼んだ。長官たちは市民に及ぼす使徒たちの影響力をおそれ、更に、これら罪のない人々のために干渉された神の力をおそれたのである。

[235] キリストから与えられる指示に従って行動していた彼

らは、望まれていない場所に居つづけようとは思わなかった。「ふたりは獄を出て、ルデヤの家に行った。そして、兄弟たちに会って勧めをなし、それから出かけた。」

使徒たちはピリピでの働きがむだだったとは思わなかった。彼らは大いに反対と迫害に会ったが、獄吏とその家族の改心は、彼らが耐えた恥辱と苦痛をあがなう以上のものであった。ふたりが不正に投獄されて、奇跡的に救出されたことは、その地方一帯に知らされて、これがなかったら決して接することがなかったほどの多くの人々が、使徒たちの働きを知るようになった。

ピリピにおけるパウロの伝道により、教会が設立されるようになり、教会員が着実に増加していった。パウロの熱意と献身、それに何よりも、キリストのためによろこんで苦しむその姿勢は、改宗者に深くゆるぎない感化を及ぼした。使徒たちが多くの犠牲を払っている尊い真理を、彼らは称賛し、あがない主のために彼らも心から献身した。

この教会が迫害を免れなかったことは、ピリピにあてたパウロの手紙にあらわされている。「あなたがたはキリストのために、ただ彼を信じることだけではなく、彼のために苦しむことをも賜わっている。あなたがたは、さきにわたしについて見・・・・ているのと同じ苦闘を、続けているのである」とパウロは述べている（ピリピ一ノ二九、三〇）。しかも、彼らの信仰はゆるぎないものであったので、パウロは、「わたしはあなたがたを思うたびごとに、わたしの神に感謝し、あなたがた一同のために祈るとき、いつも喜びをもって祈り、あなたがたが最初の日から今日 [236]
に至るまで、福音にあずかっていることを感謝している」と言った（ピリピ一ノ三ー五）。

真理の使命者たちが働きかけるようにと召されている重要な中心地において、善と悪の力がしのぎをけずって戦うその戦いは、恐るべきものである。「わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者・・・・に対する戦いである」と、パウロは述べている（エペソ六ノ一二）。終わりの時まで、神の教会と悪天使の支配下にいる人々との戦いは続くのである。

初期のクリスチャンは、しばしば、暗黒の力と直面するよう召された。敵は詭弁や迫害によって真の信仰から彼

らをそらせようとする。地上のすべてのものの終わりが急速に近づいているこの現代において、サタンはこの世界を陥れようと必死の力をふりしぼっている。彼は人々の心を占領して、救いに欠くことのできない真理から注意をそらそうと、いろいろの計画を案出している。どの町でも彼の手下どもは、神の律法に反対する人々に徒党を組ませようと、懸命になっている。大欺瞞者は混乱と謀反の元となるものを持ち込もうと精を出し、知識によらない熱狂を人々にたきつけている。

悪はこれまで達したことのない頂点に達しつつあるが、なお、多くの福音伝道者たちは「平和で無事」だと叫んでいる。しかし神の忠実な使命者たちは、使命を携えて着実に前進しなければならない。彼らは天の武具を身につけて、恐れず、誇らかに前進し、接することのできる魂が、ひとり残らず現代に与えられた真理の使命を受けるまで、戦い抜くのである。

第二二章テサロニケでの働き [237]

本章は使徒行伝一七章一節－一〇節に基づく

ピリピを去ってのち、パウロとシラスはテサロニケへと向かった。ここで彼らは、ユダヤの会堂で大ぜいの会衆に語りかける特権にあずかった。彼らの容貌は見るからに、最近受けたひどい仕打ちを物語るものであったので、事の顛末てんまつを説明しなければならなかった。これにあたって彼らは、自分たちを高めるのではなく、彼らを救い出して下さった神をさんびした。

パウロはテサロニケの人々に説くにあたって、メシヤに関する旧約聖書の預言に訴えた。キリストはその公生涯において、弟子たちの心をこれらの預言に向かって開き、「モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた」（ルカ二四ノ二七）。ペテロはキリストを説くにあたり、自分のあかしの言葉を旧約聖書から引き出した。ステパノも同じ方法をとった。そしてパウロもその伝道において、キリストの誕生、苦難、死、復活、昇天を預言した [238] 聖句に訴えた。彼はモーセと預言者たちの霊感のあかしによって、ナザレのイエスがメシヤであることを明白に立証し、アダムの時代から父祖たちや預言者たちを通して語ってこられたのは、キリストのみ声であったことを教えた。

約束のかたが現れることについて、わかりやすく明確に預言が与えられていた。アダムにはあがない主の来臨について確証が与えられた。「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」とサタンに言われた宣告は、われわれの最初の両親にとって、キリストを通してなされるあがないの、約束であった（創世記三ノ一五）。

アブラハムには、彼の家系から世の救い主が生まれるという約束が与えられた。「地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう」（創世記二二ノ一

八）。「それは、多数をさして『子孫たちとに』と言わずに、ひとりをさして『あなたの子孫とに』と言っている。これは、キリストのことである」（ガラテヤ三ノ一六）。

モーセは、イスラエルの指導者また教師としての働きを終えようとしていたとき、メシヤの来臨を明らかに預言した。「あなたの神、主はあなたのうちから、あなたの同胞のうちから、わたしのようなひとりの預言者をあなたのために起されるであろう。あなたがたは彼に聞き従わなければならない」とモーセは、集まったイスラエルの人々に言った。また彼は、「わたしは彼らの同胞のうちから、お
[239] まえの ようなひとりの預言者を彼らのために起して、わたしの言葉をその口に授けよう。彼はわたしが命じることを、ことごとく彼らに告げるであろう」ということをイスラエルびとに保証した（申命記一八ノ一五、一八）。

メシヤは王の家系から生まれるはずであった。ヤコブによって語られた預言の中で、「つえはユダを離れず、立法者のつえはその足の間を離れることなく、シロの来る時までに及ぶであろう。もろもろの民は彼に従う」と主が言われたからである（創世記四九ノ一〇）。

イザヤの預言はこうであった。「エッサイの株から一つの芽が出、その根から一つの若枝が生えて実を結」ぶ。「耳を傾け、わたしにきて聞け。そうすれば、あなたがたは生きることができる。わたしは、あなたがたと、とこしえの契約を立てて、ダビデに約束した変らない確かな恵みを与える。見よ、わたしは彼を立てて、もろもろの民への証人とし、また、もろもろの民の君とし、命令する者とした。見よ、あなたは知らない国民を招く、あなたを知らない国民はあなたのもとに走ってくる。これはあなたの神、主、イスラエルの聖者のゆえであり、主があなたに光栄を与えられたからである」（イザヤ書一一ノ一、五五ノ三－五）。

エレミヤもまた、ダビデの家の王子としてあがない主が来られることをあかしした。「主は仰せられる、見よ、わたしがダビデのために一つの正しい枝を起す日がくる。彼は王となって世を治め、栄えて、公平と正義を世に行う。その日ユダは救を得、イスラエルは安らかにおる。その名
[240] は『主はわれわれの 正義』ととなえられる。」そして更に「主はこう仰せられる、イスラエルの家の位に座する人

がダビデの子孫のうちに欠けることはない。またわたしの前に燔祭をささげ、素祭を焼き、つねに犠牲をささげる人が、レビびとである祭司のうちに絶えることはない」（エレミヤ書二三ノ五、六、三三ノ一七、一八）。

メシヤの出生地さえも預言された。「ベツレヘムエフラタよ、あなたはユダの氏族のうちで小さい者だが、イスラエルを治める者があなたのうちからわたしのために出る。その出るのは昔から、いにしえの日からである」（ミカ書五ノ二）。

救い主がこの地上でなさるはずのお働きは、十分にそのあらましが説明されていた。「その上に主の霊がとどまる。これは知恵と悟りの霊、深慮と才能の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。彼は主を恐れることを楽しみと」する。この油を注がれたかたは「貧しい者に福音を宣べ伝え....心のいためる者をいやし、捕われ人に放免を告げ、縛られている者に解放を告げ、主の恵みの年とわれわれの神の報復の日とを告げさせ、また、すべての悲しむ者を慰め、シオンの中の悲しむ者に喜びを与え、灰にかえて冠を与え、悲しみにかえて喜びの油を与え、憂いの心にかえて、さんびの衣を与えさせるためである。こうして、彼らは義のかしの木ととなえられ、主がその栄光をあらわすために植えられた者ととなえられる」（イザヤ書一一ノ二、三、六一ノ一一三）。

「わたしの支持するわがしもべ、わたしの喜ぶわが選び人を見よ。わたしはわが霊を彼に与えた。彼はもろもろの国びとに道をしめす。彼は叫ぶことなく、声をあげることなく、その声をちまたに聞えさ せず、また傷ついた葦を折 [241]
ることなく、ほのぐらい灯心を消すことなく、真実をもって道をしめす。彼は衰えず、落胆せず、ついに道を地に確立する。海沿いの国々はその教を待ち望む」（イザヤ書四二ノ一一四）。

パウロは、「キリストは必ず苦難を受け、そして死人の中からよみがえるべきこと」を、旧約聖書から力強く論じた。ミカは、敵が「つえをもってイスラエルのつかさのほおを撃つ」と預言しなかっただろうか（ミカ書五ノ一）。また、約束されたかたは、イザヤを通して、ご自身のことを「わたしを打つ者に、わたしの背をまかせ、わたしのひげを抜く者に、わたしのほおをまかせ、恥とつばきとを避

けるために、顔をかくさなかった」と預言されなかっただろうか（イザヤ書五〇ノ六）。詩篇記者を通してキリストは、人々から受けるあしらいを預言しておられた。「わたしは・・・・人にそしられ、民に侮られる。すべてわたしを見る者は、わたしをあざ笑い、くちびるを突き出し、かしらを振り動かして言う、『彼は主に身をゆだねた、主に彼を助けさせよ。主は彼を喜ばれるゆえ、主に彼を救わせよ』と。」「わたしは自分の骨をことごとく数えることができる。彼らは目をとめて、わたしを見る。彼らは互にわたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引にする。」「わたしはわが兄弟には、知らぬ者となり、わが母の子らには、のけ者となりました。あなたの家を思う熱心がわたしを食いつくし、あなたをそしる者のそしりがわたしに及んだからです。」「そしりがわたしの心を砕いたので、わたしは望みを失いました。わたしは同情する者を求めたけれども、ひとりもなく、慰める者を求めたけれども、ひとり
[242] も見ませんでした」（詩篇二二ノ六ー八、一七、一八、六九ノ八、九、二〇）。

キリストの苦しみとその死についてのイザヤの預言は、なんと明白で、まぎれもないものであったろうか。「だれがわれわれの聞いたことを信じ得たか」と預言者は問いかける。「主の腕は、だれにあらわれたか。彼は主の前に若木のように、かわいた土から出る根のように育った。彼にはわれわれの見るべき姿がなく、威厳もなく、われわれの慕うべき美しさもない。彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。また顔をおおって忌みきらわれる者のように、彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。

まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった。しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。

われわれはみな羊のように迷って、おのおの自分の道に向かって行った。主はわれわれすべての者の不義を、彼の上におかれた。彼はしえたげられ、苦しめられたけれど

も、口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のように、また毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかった。彼は暴虐なさばきによって取り去られた。その代の人のうち、だれが思ったであろうか、彼はわが民のとがのために打たれて、生けるものの地から断たれたのだと」（イザヤ書五三ノ一一八）。

キリストの死のありさまさえもほのめかされていた。荒野でへびが上げられたように、やがて来られるあがない主も上げられなければならない。「それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネ三ノ一六）。 [243]

「もし、人が彼に『あなたの背中の傷は何か』と尋ねるならば、『これはわたしの友だちの家で受けた傷だ』と、彼は言うであろう」（ゼカリヤ書一三ノ六）。

「彼は暴虐を行わず、その口には偽りがなかったけれども、その墓は悪しき者と共に設けられ、その塚は悪をなす者と共にあった。しかも彼を砕くことは主のみ旨であり、主は彼を悩まされた」（イザヤ書五三ノ九、一〇）。

しかし、悪人の手で死の苦しみに会われるかたは、罪と死の勝利者としてよみがえられるはずであった。全能なる神の霊感をうけて、イスラエルの麗しい詩人ダビデは、よみがえりの朝のよろこびについてあかししていた。「このゆえに、わたしの心は楽しみ、わたしの魂は喜ぶ。わたしの身もまた安らかである。あなたはわたしを陰府よみに捨ておかれず、あなたの聖者に墓を見させられないからである」と、ダビデはよろこびを宣べ伝えた（詩篇一六ノ九、一〇）。

パウロは、神が犠牲の儀式と「ほふり場にひかれて行く小羊」となるかたに関する預言とを、いかに密接につなげておられたかを説明した。メシヤはそのご生涯を、「とがの供え物」としてささげられるはずであった。何世紀も貫いて、救い主のあがないが行われるときの光景を見つめ、預言者イザヤは、神の小羊が「死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、とがある者と共に数えられ・・・・しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした」ことをあかししていた（イザヤ書五三ノ七、一〇、一二）。 [244]

預言された救い主は、ユダヤ民族を地上における抑圧者から救い出すための、一時的な王としてではなく、人々の中のひとりとして、貧しく謙遜な生活を送り、ついには卑いやしめられ、拒まれ、殺されるために来られるはずであった。旧約聖書に預言されている救い主は、堕落した人類のために犠牲としてご自身をささげられ、それによって、破られた律法のすべての要求を果たされるはずであった。彼によって、犠牲制度のさまざまの予型はその本体に一致した。十字架におけるキリストの死は、ユダヤの制度全体に重要な意味を与えるものであった。

パウロは、以前に自分が礼典律に熱心であったこと、それからダマスコの門のところで受けたすばらしい経験について、テサロニケのユダヤ人たちに話した。改心する以前に彼は、先祖伝来の信心に信頼し、誤った望みをもっていた。彼の信仰はキリストにつながっていなかった。その代わりに形式と儀式を信じていたのである。律法に対する彼の熱意は、キリストへの信仰と切り離されていたもので、全く無益であった。律法のわざを行うことにおいては、自分は非難されるところがないと誇っていたあいだ、彼は、律法を価値あるものとされたかたを拒んでいたのである。

しかしパウロが改心したとき、すべてのものが変わった。彼が聖徒たちの名を借りて迫害していたナザレのイエスが、約束のメシヤとしてパウロの前に姿を現されたのである。この迫害者は、神のみ子としてのイエスを見た。このイエスは、さまざまの預言を成就するためにこの地上に来られ、しかも、その生涯において、聖書が明細に述べていることに全くかなっておられた。

[245]
[246]

パウロが聖なる勇気をもって、テサロニケにある会堂で福音を宣べ伝えていたとき、幕屋の奉仕に関する慣例や儀式のほんとうの意味が豊かに照らし出された。彼は、地上でのキリストのみわざと、天の聖所におけるお働きをこえて、キリストが仲保者の仕事を完成されて、この地上に再び力と大いなる栄光をもって来られ、王国を建設されるというその時に、聞く人々の心を向けさせた。パウロはキリストの再臨を信じる者であった。この事に関して、パウロが真理を明瞭に力強く語ったので、聞いた人たちの多くはその心に、消え去ることのない印象を受けた。

パウロはつづけて三回にわたる安息日に、テサロニケの人びとに「ほふられた小羊」であられるキリストの生涯、死、復活、天における働き、そして未来の栄光に関して、聖書から説いた（黙示録一三ノ八）。彼はキリストをあがめた。キリストのみわざについての正しい理解は、旧約聖書の意味を明らかにする鍵であり、その豊かな宝への接近をゆるすものである。

福音の真理がテサロニケでこのように力強く宣べ伝えられて、大会衆の注意を引いた。「ある人たちは納得がいって、パウロとシラスにしたがった。その中には、信心深いギリシヤ人が多数あり、貴婦人たちも少なくなかった。」

以前に行った場所では、使徒たちは断固とした反対に [247] 会った。「ユダヤ人たちは・・・・ねたんで」いた。そのころこれらのユダヤ人たちは、ローマの権力の好意を得ていなかった。少し前に彼らがローマで暴動を起こしていたからである。彼らは疑いの目で見られていて、自由がある程度制限されていたのである。いまこそ彼らは、自分たちの立場を立て直して彼らの好意を得るのに有利な時であり、また同時に、使徒やキリスト教に改宗した人々を非難するよい機会だと思った。

彼らはまず手始めに、「町をぶらついているならず者らを集めて暴動を起し、町を騒がせ」ることに成功した。そして、使徒たちを捜し出そうと「ヤソンの家を襲」ったが、彼らはパウロもシラスも見つけることができなかった。しかし「ふたりが見つからないので」暴徒は失望に狂い、「ヤソンと兄弟たち数人を、市の当局者のところに引きずって行き、叫んで言った、『天下をかき回してきたこの人たちが、ここにもはいり込んでいます。その人たちをヤソンが自分の家に迎え入れました。この連中は、みなカイザルの詔勅にそむいて行動し、イエスという別の王がいるなどと言っています』」。

パウロとシラスが見つからなかったので、市の当局者は告訴された信者たちに平和を保つ契約を結ばせた。更に暴動の起こることを恐れて、「兄弟たちはただちに、パウロとシラスとを、夜の間にベレヤへ送り出した」。

今日、人々に一般受けしない真理を教える者たちは、時々、パウロやその弟子たちが、働きかけた人人から受け入れられなかったように、クリスチャンだと主張する人々

[248] からさえ快く受け入れられないこ とがあっても失望するにはあたらない。十字架の使命者たちは、たえず目を覚まして祈りで身を固め、常にイエスのみ名によって働き、信仰と勇気をもって前進しなければならない。彼らはキリストを、天の聖所における人類の仲保者として、旧約聖書のすべての犠牲制度の中心である救い主として、あがめなければならない。そのかたのあがないの犠牲を通してこそ、神の律法を犯した罪人が平和とゆるしを見いだすことができるのである。

第二三章文化の中心アテネにて [249]

本章は使徒行伝一七章一一節ー三四節に基づく

ベレヤでパウロは、彼が教えた真理を熱心に調べているユダヤ人を見いだした。彼らについてルカの記録はこう述べている、「ここにいるユダヤ人はテサロニケの者たちよりも素直であって、心から教を受けいれ、果してそのとおりかどうかを知ろうとして、日々聖書を調べていた。そういうわけで、彼らのうちの多くの者が信者になった。また、ギリシヤの貴婦人や男子で信じた者も、少なくなかった。」

ベレヤに住む人々の心には、偏見のための狭量さはなかった。彼らは、使徒の語った教理の真実性を熱心に調べていた。彼らは、好奇心からではなく、約束のメシヤについて書かれていることを知りたいと思って、聖書を研究し、日々、霊感によって書かれた記録を調べた。そして、彼らが聖句と聖句を比べる時に、天のみ使いがそのそばにいて彼らの心を照らし、心に感銘を与えた。

福音の真理が宣べ伝えられるところではどこででも、正しいことをしたいと心から願う人々が、聖書 を熱心に [250] 調べるよう導かれる。この地上の歴史が閉じられようとする状況にあって、特別の真理を聞かされる人々が、ベレヤの人々の模範に従い、日々聖書を調べて、神のみことばと彼らに伝えられた使命を比べようとするならば、神の律法の教えに忠実なものが、いま比較的少数しかいないところに、今日、もっと多くいるはずである。しかし、人々が好まない聖書の真理が示されるとき、多くの人々はこのように熱心に調べることを拒むのである。聖書の明白な教えに論駁ばくできなくても、彼らはなお、示されている証拠を学ぶことに全く気が進まないのである。ある者たちは、これらの教理が本当に正しいとしても、その新しい光を受け入れるかどうかは大したことではないと考えて、敵が人々をさまよわせるために用いる面白いつくり話に執着してい

る。こうして彼らの心は誤りにくらまされて、天から離れてしまうのである。

すべての者は、与えられた光に応じて裁かれる。主は、救いの使命を携えて行く使者をつかわされ、聞く者たちに、神のしもべたちの言葉をどのように扱うかについて責任を負わせられるのである。真理を心から探し求めている人々は、彼らに提示された教理を、神のみことばに照らして、注意深く研究するのである。

テサロニケにいる信仰を持たないユダヤ人たちは、使徒たちを嫉妬しっとし、憎んで、町から彼らを追い出しただけでは満足せず、ベレヤへと追って行き、下層階級の激しやすい感情をかき立てて、彼らに逆らわせた。もしパウロがそこにとどまっていれば、彼らがパウロに暴力を振るうことを恐れて、兄弟たちは、新しく信仰を受け入れていたベレヤの人々の何人かを供につけて、パウロをアテネへ送った。[251]

こうして迫害は、町から町へ真理の教師たちを追った。キリストの敵は、福音の進展を阻止することはできなかったが、使徒たちの働きをひどく困難なものにさせることには成功した。しかし反対や衝突に接しながらなお、パウロは着実に前進し、「わたしが、あなたを遠く異邦の民へつかわすのだ」と、エルサレムで幻のうちに見せられたように、神の御目的を果たす決意をしていた（使徒行伝二二ノ二一）。

パウロはベレヤから急いで出て行ったため、これまでテサロニケの兄弟たちを訪問しようと計画していた機会を奪われた。

使徒パウロはアテネに着くと、シラスとテモテにすぐ来るようにとの伝言を託して、ベレヤの兄弟たちを送り返した。テモテはパウロの出発に先立ってベレヤに来ていて、既にここで順調に始められていた働きを継続し、新しい改宗者たちに信仰の原則を教えるために、シラスといっしょにとどまっていた。

アテネという都市は異教の首都であった。ここでパウロが出会ったのは、ルステラのときのような無知で軽々しく信じやすい民衆ではなく、知性と教養で知られている人々であった。ここではいたるところで彼らの神々の像や、歴史や詩に出てくる、神格化された英雄の像が目につき、ま

た壮麗な建築物や絵画が、国家の誇りと、異教の神々への民衆の礼拝を表していた。人々の感覚は、芸術の美と華麗さに魅せられていた。どちらを向いても、費用を惜しまず建てられた寺院や神殿の巨大な姿がそびえたっていた。軍事上の勝利や有名な人の行為が、彫刻や神社や石碑によって記念されていた。これらすべてが、アテネを巨大な画廊 [252]
にしていた。

パウロは、周囲の美しい、堂々たる光景を見わたし、町全体が偶像崇拝に陥っているのを見て、いたるところで侮辱されている神のために、嫉妬をかき立てられた。そして、知的文化が進んでいながら、真の神を知らないアテネの人々を、あわれむ気持ちになった。

使徒パウロは、この学問の中心地で見た事物によって惑わされはしなかった。彼の霊性は生き生きと天の事柄に向けられていたので、滅びることのないよろこびと栄光の富から見れば、周囲の華麗さ、壮麗さは無価値なものと映った。彼はアテネの壮麗さを見たとき、芸術や学問を愛する人々を支配する誘惑的な力を悟り、自分の前にある働きの重要性に深く心を動かされた。

真の神が礼拝されていないこの大都市で、パウロは孤独感におそわれ、共労者の同情と助けを切望した。人間的な友情に関するかぎり、彼は自分が全くひとりであると感じた。パウロはテサロニケ人への手紙の中でこの感情を「わたしたちだけがアテネに留まる」という言葉の中に表している（テサロニケ第一・三ノ一）。打ち勝ち難いと思われる障害が彼の前に立ちはだかっていて、人々の心に到達しようという試みはほとんど望みがないように思えた。

パウロは、シラスとテモテを待っているあいだ、何もせずに時間を過ごしたのではない。彼は「会堂ではユダヤ人や信心深い人たちと論じ、広場では毎日そこで出会う人々を相手に論じた」。しかしアテネでのパウロの主な仕事は、神について、また、堕落した人類のための神の目的について、知的な概念のない人々に、救いのおとずれを携 [253]
えて行くことであった。使徒パウロはまもなく、最も巧妙 [254]
で、魅惑的な形態の異教思想に出会うのであった。

アテネの偉大な人々は、まもなく、新しい聞きなれない教理を人々に提示している変わった教師が彼らの町に来ていることを知った。これらの人々のある者たちが、パウロ

を捜し出して、彼と話を交わすようになった。すぐに彼らのまわりに、耳を傾ける人垣ができた。ある者たちは、社会的にも知的にも彼らよりはるかに劣っている者としてパウロをからかうつもりで、仲間同志であざけるように言った、「このおしゃべりは、いったい、何を言おうとしているのか」。また、ほかの者たちは、「パウロが、イエスと復活とを、宣べ伝えていた」ので「あれは、異国の神々を伝えようとしているらしい」と言った。

広場でパウロに会った人々の中には「エピクロス派やストア派の哲学者数人も」いたが、彼らも、また、パウロと接触するようになった人たちもみな、彼が自分たちよりももっと大きな知識の宝庫を持っていることがすぐにわかった。パウロの知的能力は学問のある人たちの尊敬を集め、また彼の熱心で筋道だった議論と雄弁の能力は、すべての聴衆の注意を引いた。聴衆はパウロが未熟者ではなく、自分の教える教理を擁護し、説得力のある議論であらゆる階級の人々を迎えることができることを認めた。こうして使徒パウロは、恐れることなく立って、反対者たちに彼ら自身の土俵で応じ、論理には論理を、哲学には哲学を、雄弁には雄弁をもって対処した。

パウロに反対する異教徒たちは、異国の神々について説明したために死刑の判決を下されたソクラテスの運命に注意を向けさせ、彼も同じ道をたどって生命を危うくせぬようにと、パウロに忠告した。しかしパウロの説教は人々の注意を引き、彼のゆるぎない知識は人々の尊敬と称賛の的となった。パウロは哲学者たちの哲学や、皮肉によって沈黙させられるようなことはなかった。そこで人々は、パウロが自分の使命を彼らの中で果たし、万難を排しても自分の話を語ろうと決意していることに満足し、彼の話をまともに聞くことにした。 [255]

そこで彼らはパウロをアレオパゴスに案内した。これはアテネ中で一番神聖な場所の一つで、これにまつわる追憶や連想から、ある人々はこの場所に対して、心の中に恐怖に等しい迷信的な尊敬をいだいていた。ここで宗教に関係のある事柄が、重要な民事上の問題や道徳上の問題について最終的な裁判官をつとめる人々によって、注意深く検討されることがよくあった。

騒音やざわめきのある往来の雑踏から離れ、また、雑多な議論の騒ぎから離れたこの場所で、パウロは中断されることなく話を聞いてもらうことができた。彼のまわりには詩人、芸術家、哲学者、すなわちアテネの学者や賢人たちが集まり、彼に話しかけた、「君の語っている新しい教がどんなものか、知らせてもらえまいか。君がなんだか珍らしいことをわれわれに聞かせているので、それがなんの事なのか知りたいと思うのだ」。

その責任ある厳粛な時に、パウロは冷静、沈着であった。彼は大切な使命に対する重荷を感じた。そして、彼の語る言葉は聞く者たちに、彼がくだらぬおしゃべりをしているのではないことを納得させた。「アテネの人たちよ、 [256] あなたがたは、あらゆる点において、すこぶる宗教心に富んでおられると、わたしは見ている。実は、わたしが道を通りながら、あなたがたの拝むいろいろなものを、よく見ているうちに、『知られない神に』と刻まれた祭壇もあるのに気がついた。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるものを、いま知らせてあげよう」とパウロは言った。彼らはあらゆる理解力と常識をもってしても、宇宙を創造された神について知らなかった。しかし中に、より偉大な知識を求めている者たちがいた。彼らは無限の神に向かって手をのばしていた。

偶像のぎっしり並んだ神殿のほうへ、手をのばして指さしながら、パウロは心の重荷を思うままに述べ、アテネ人の宗教の虚偽を暴露した。聴衆の中の最も賢明な人たちは、パウロの議論を聞いて驚いた。パウロは彼らの芸術、文学、宗教によく通じていることを示した。彼は彫刻や偶像を指さして、神は人間が考え出したこんな形に似せられるものではないと断言した。これらの刻まれた像は、どんな意味においても、主なる神の栄光を表すものではなかった。パウロはこれらの像には生命がなく、ただ人間の力にあやつられ、人間の手によって動かされる時だけ動くにすぎないこと、したがってこれらの像を拝している人間の方が、礼拝されている像よりもあらゆる点においてすぐれていることを彼らに気づかせた。

パウロは偶像に心酔している聴衆の心を、彼らが「知られない神」と呼んでいたまことの神に対する、誤った宗教観から抜け出させようとした。今、パウロが彼らに伝えよ

うとしている神は、人間とは独立した存在であり、人間の手によってそのかたの権威と栄光に加えるべきものは何もなかった。

[257] 人々は真の神の属性、すなわち神の創造力や神の支配的な摂理の存在についての、パウロの熱心で論理的な説明に感心して、われを忘れていた。使徒パウロは熱心に、激しく、雄弁に語った、「この世界と、その中にある万物とを造った神は、天地の主であるのだから、手で造った宮などにはお住みにならない。また、何か不足でもしておるかのように、人の手によって仕えられる必要もない。神は、すべての人々に命と息と万物とを与え」ておられる。全天は神を入れるほど十分に大きくはない。ましてや人間の手で造られた宮などは小さすぎるのである。

人間の諸権利が認められないことがしばしばあった、当時の階級制の時代に、パウロは神が「ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住まわせ」てくださったことを述べて、人類同胞についての偉大な真理を明らかにした。神の御目には、すべての者は同等であった。また、人はその造り主に絶対に従う義務があるのだった。それから使徒パウロは、神と人とのすべての関係において、神の恵みとあわれみの意図が、一本の金の糸のように貫いていることを示した。神は「それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれひとりびとりから遠く離れておいでになるのではない」。

パウロは自分の周囲にいる立派な人格者たちを指して、彼らのある詩人の言葉を借りて無限の神をみ父として描き、彼らがその神の子らであると言った。「われわれは神
[258] のうちに生き、動き、存在してい るからである。あなたがたのある詩人たちも言ったように、『われわれも、確かにその子孫である』。このように、われわれは神の子孫なのであるから、神たる者を、人間の技巧や空想で金や銀や石などに彫り付けたものと同じと、見なすべきではない。

神は、このような無知の時代を、これまでは見過ごしにされていたが、今はどこにおる人でも、みな悔い改めなければならないことを命じておられる。」キリストの来臨に先だった暗黒の時代に、支配者であられる神は、異教徒の

偶像礼拝を見過ごしておられたが、今、神はみ子を通して真理の光を人々にお与えになり、貧しくつつましい者ばかりでなく、誇り高い哲学者やこの世の君主たちすべてが、救いを得させる悔い改めに導かれるようにと望んでおられた。「神は、義をもってこの世界をさばくためその日を定め、お選びになったかたによってそれをなし遂げようとされている。すなわち、このかたを死人の中からよみがえらせ、その確証をすべての人に示されたのである。」パウロが死者の復活について語ると、「ある者たちはあざ笑い、またある者たちは、『この事については、いずれまた聞くことにする』と言った」。

こうして、異教の学問の中心地アテネにおける使徒パウロの働きは終わった。アテネ人は偶像礼拝に堅くしがみついていて、真の宗教の光から離れ去った。国民が彼ら自身の業績に全く満足しているとき、彼らはほとんど見込みがないのである。アテネの人々は、学問があって洗練されていることを誇っていたが、ますます堕落し、偶像崇拝のあいまいな神秘にますます満足していった。

パウロの言葉を聞いた人々の中には、真理がその心に [259]
示されて確信を与えられた者たちがいたが、彼らはへりくだって神を認めようとも、救いの計画を信じようともしなかった。どんなに雄弁な言葉も、議論の力も、罪人を改心させることはできない。神の力だけが、心に真理を注ぐことがおできになる。この力からかたくなに身をかわそうとする者は、真理に達することができない。ギリシヤ人は知恵を求めていたが、十字架の使命をばかげたことと思っていた。彼らは天来の知恵よりも、自分たち自身の知恵をもっと高く評価していたからである。

福音の使命がアテネ人のあいだで比較的成功しなかった理由は、知性と人間の知恵に対する彼らの誇りの中に見いだされるであろう。この世の賢い人々で、迷える貧しい罪人としてキリストのもとへくる者は、救いにいたる知恵を持つようになるが、著名な者として自分の知恵を称揚しながらやってくる人人は、神だけがお与えになれる光と知識を受けることができないであろう。

こうしてパウロは、当時の異教思想に出会った。アテネにおける彼の働きは、全くむだになったわけではない。最

も有名な市民の一人であるデオヌシオや、その他の幾人かが福音使命を信じ、信者たちと全く一つに結ばれた。

霊感は、知識と洗練と芸術を身につけていたにもかかわらず、なお、悪に落ち込んでいたアテネ人たちの生活を、われわれにかいま見させてくれたが、それは神が、ご自分のしもべを通して、どれほど偶像崇拝や、人々の高慢と自己満足の罪を譴責けんせきされたかを、示すためであった。霊感の筆によって描かれた使徒パウロの言葉と、彼の態度や境遇についての描写は、きたるべきすべての世代に伝えられ、彼のゆるぎない確信、孤独と逆境の中における勇気、そして異教の直中で彼がキリスト教のために獲得した勝利について、あかしするのであった。 [260]

パウロの言葉は、教会のための知識の宝を含んでいる。彼は、誇り高い聴衆を刺激するような言葉を軽々しく口に出すことによって、困難を招きかねないような立場にあった。もし彼の演説が、彼らの神神や町の有力者に対する直接の攻撃だったら、彼はソクラテスの運命に会う危険に陥ったであろう。しかし天来の愛から生ずる機知をもって、彼は人々の知らない真の神を彼らに示しながら、人々の心を異教の神々から注意深く引き離した。

今日、聖書の真理は、この世の偉大な人々の前に示されなければならない。それは彼らが、神の律法に従うか、悪の王に忠誠を誓うかを、選ぶことができるためである。神は永遠の真理、すなわち救いに至る知恵を与える真理を彼らに与えられるが、それを強制的に受けさせることはなさらない。もし彼らが真理から離れるならば、彼ら自身の行いの実に満たされるままにしておかれるのである。

「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である。すなわち、聖書に、『わたしは知者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしいものにする』と書いてある」。「神は、知者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選び、有力な者を無力な者にするために、この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無きに等しい者を、あえて選ばれたのである」（コリント第一・一ノ一八、一九、二七、二八）。 [261]

最もすぐれた学者や政治家、この世の最も傑出した人々の多くは、終末の時代には天の光から身をかわすであろう。

この世は自分の知恵によっては神を認めるに至らないからである。しかし、神のしもべたちは、これらの人々に真理を伝えるために、あらゆる機会を利用しなければならない。ある人々は、神の事柄に無知であったことを悟り、大教師イエスのみ足のもとに、謙遜な生徒として身を置くであろう。

上層階級の人々を動かすためのあらゆる努力に対して、神の働き人は強い信仰が必要である。見たところとても不可能に思えるかもしれないが、最も暗黒の時にも上のほうには光がある。神を愛し神に仕える者の力は、日に日に新たにされる。彼らが神のご計画を遂行する時に間違いを犯さないように、必要な時にはいつでも無限の神の英知が与えられる。このような働き人は、最初の確信を最後までしっかりと持ち続け、神の真理の光が、この世界をおおっている暗黒のさなかに輝かねばならないことを覚えねばならない。神の奉仕に関して、落胆があってはならない。献身した働き人の信仰は、それを試めすためのすべての試みに耐えなければならない。神は、ご自分のしもべたちが必要とするすべての力を、よろこんでお与えになることができるし、また、さまざまな必要から彼らの求めている知恵を、お与えになることができるのである。神はご自身に信頼する者の最高の期待以上のことを実現してくださるのである。

[262]

第二四章退廃の都コリントにて

本章は使徒行伝第一八章一節－一八節に基づく

紀元一世紀のあいだ、コリントは、ギリシヤばかりでなく世界の主要都市の一つであった。ギリシヤ人、ユダヤ人、ローマ人、各地からの旅行者などが、仕事や楽しみを熱心に求めて、町の通りに群がっていた。ローマ帝国内のどこからでも楽に行ける位置にある、商業の大中心地として、コリントは神と神の真理のために記念碑を打ち立てるべき重要な場所であった。

コリントに住居を定めていたユダヤ人たちの中に、アクラとプリスキラがいた。彼らはのちに、キリストのための熱心な働き人として目立つ存在になった。このふたりの人柄を知るようになったパウロは、「その家に住み込ん」だ。

パウロは、この交通の大通りで働きを始めようとした最初から、彼の働きの進展を妨げる深刻な障害を見た。町全体が偶像礼拝にささげられていたのである。ビーナスは気
[263] に入りの女神で、ビーナスを拝むことには、さまざまな風紀を乱す慣習や儀式が伴っていた。コリント人は、異教徒たちの中でさえも、みだらな不道徳行為のために目立つ存在であった。彼らは一時的な快楽や歓楽以外、ほとんど何も考えず、気にかけもしないようであった。

コリントで福音を宣べ伝えるにあたって、パウロは、アテネにおける働きを特徴づけたものとは異なった方法を取った。アテネにおいてパウロは、聴衆の性格に自分のやり方を適合させようとし、論理には論理で、科学には科学で、哲学には哲学で立ち向かった。彼は、このようにして過ごした時のことを考え、アテネにおける彼の教えがほとんど実を結ばなかったことに気づいて、コリントでは、また別の伝道方法によって、軽率で無関心な人々の心をとらえようと決めた。彼はむずかしい議論や討論をさけて、「イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは」、コリント人のあいだでは「何も知る

まい」と決心した。彼は、「巧みな知恵の言葉によらないで、霊と力との証明によ」ってコリント人を説こうとした（コリント第一・二ノ二、四）。

パウロがコリントのギリシヤ人たちにキリスト〔注・救い主〕として紹介しようとしていたイエスは、悪名の高い町で育てられた、身分の低い生まれのユダヤ人であった。イエスはご自分の民族に拒まれ、ついに、悪人として十字架にかけられた。ギリシヤ人は、人類を高めることは必要であると信じていたが、哲学や科学の研究が真に人類を高め名誉を得る唯一の方法だと思っていた。この身分の低いユダヤ人の力を信じることが、人間のあらゆる力を向上させ、高尚なものとすることを、パウロは彼らに信じ させる [264] ことができるであろうか。

現代に住む人々の心にとって、カルバリーの十字架は神聖な思い出につつまれたものである。キリストの受難の光景は神聖なものを連想させる。しかし、パウロの時代には、十字架は拒絶と恐怖の感情をもって眺められていた。十字架上で死を遂げた者を人類の救い主として支持すれば、当然、嘲笑や反感を呼び起こしたであろう。

パウロは自分の使命が、コリントのユダヤ人やギリシヤ人にどのように受けとめられるかをよく知っていた。「わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝える。このキリストは、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものである」と、彼は認めていた（コリント第一・一ノ二三）。ユダヤ人の聴衆の中には、パウロが宣べ伝えようとしていた使命に腹を立てる人々がたくさんいたであろう。ギリシヤ人の見るところでは、パウロの言葉はばかげた愚言であったであろう。十字架が民族を高尚にし、人類を救うことに関係があるということを示そうとしたパウロは、知能の低い者とみなされたであろう。

しかし、パウロにとって、十字架は最高の関心をはらうべき唯一の対象であった。パウロは、十字架にかけられたナザレ人に従う者たちを迫害していたさ中に捉とらえられて以来、ずっと、十字架をあがめつづけてきた。その時、キリストの死に表された、神の無限の愛についての啓示が彼に与えられたのである。そして、彼の人生に驚くべき変化が起こり、彼のすべての計画と目的が天と一致するようになった。 その時からパウロは、キリストにある新しい人 [265]

になった。罪人がみ子の犠牲の中に見られる天父の愛をあおぎ見て、神の感化力に従うとき、心に変化が起こり、それ以後、キリストがすべてであり、すべてのもののうちにおられると悟るようになることを、パウロは個人的な経験から知った。

パウロは改心したとき、ナザレのイエスを、人を変え救いを施す力のある生ける神のみ子として、同胞にぜひともあおぎ見させたいという願いをいだいた。それ以来彼は、生活のすべてをささげて、十字架にかけられたかたの愛と力を描くことに全力をつくした。彼の大きな同情心は、あらゆる階級の人々を受け入れた。「わたしには、ギリシヤ人にも未開の人にも、賢い者にも無知な者にも、果すべき責任がある」と彼は言った（ローマ一ノ一四）。パウロが以前に、聖徒たちの名を借りて冷酷にも迫害していた栄光の主に対する愛は、彼の行動を駆りたてる原理、すなわち原動力であった。もし義務の道において熱情の衰えることがあれば、彼は十字架を一目見るだけで、そこに驚くべき愛が示されていることを知り、自己否定の道に邁進まいしんするのであった。

コリントにある会堂で説教をし、モーセや預言者たちの書き物から説いて、聞く者たちを約束のメシヤの来臨へと導いている使徒パウロを見よ。あがない主が人類の大祭司として、ご自身の命を犠牲にすることにより、一度だけすべての者のために罪の償いをされて、それから天の聖所においてご自分の務めをなさる、その主のみわざをわかりやすく説くパウロに耳を傾けよ。パウロの言葉を聞いていた者たちは、自分たちの待望していたメシヤが既に来られたこと、キリストの死がすべての犠牲のささげ物の 本体であったこと、また、天の聖所におけるキリストの務めは、背後にその影を持ち、ユダヤの祭司の務めを明らかにする、偉大な実体であるということを理解させられた。

[266]
[267]

パウロは「イエスがキリストであることを、ユダヤ人たちに・・・・あかしした」。預言やユダヤ人たちの一般的な期待によれば、メシヤはアブラハムとダビデの家系から出るはずだということを、彼は旧約聖書から説明した。次にパウロは、父祖アブラハムから、王位にある詩篇記者を経て、イエスの家系をたどった。彼は、約束のメシヤのご品性と働きについての、また、この地上でメシヤがどの

ような扱いをうけるかについての預言者たちのあかしを読み、次に、これらすべての預言が、ナザレのイエスのご生涯とみわざと死において成就したことを説明した。

パウロはキリストが、何よりもまず、国家の存続を達成し、その栄光をあらわすものとしてキリストの来臨を待ち望んでいた民族に、救いを与えるために来られたのだと説明した。しかし、その民族は、彼らにいのちをさずけてくださるはずであったキリストを拒んで、その支配が死と共に終わるような他の指導者を選んだ。パウロは、悔い改めによる以外、差し迫った滅亡からユダヤ民族を救うことができないことを、聞く者たちにはっきり分からせようと努めた。彼らが、十分に理解していることを自分たちの最高の誇りとし、栄光としていたそれらの聖句の意味について、実は無知であったことを、パウロは指摘した。また彼は、ユダヤ人の世俗的なことや、地位や肩書きや自分を誇示することを好むことや、過度に利己主義なことを譴責した。

聖霊の力により、パウロは自分の奇跡的な改心や、旧 [268]
約聖書に対する確信を語った。旧約聖書こそナザレのイエスにおいて完全に成就されたものである。このことを厳粛に、熱心に語ると、聞く者たちは、彼が、十字架にかけられて、よみがえられた救い主を、心から愛しているのだと認めざるを得なくなった。彼らには、パウロの心がキリストに向けられ、彼の全生涯が主に結びつけられているのだとわかった。彼の言葉は非常に心を動かすものだったので、無感動でいることができたのは、ただキリスト教に対する激しい憎悪に満たされていた者たちだけであった。

しかしコリントのユダヤ人は、使徒パウロによってはっきり示された証拠に目を閉じ、彼の訴えを聞こうとしなかった。キリストを拒むに至ったのと同じ精神から、彼らはキリストのしもべに対して激しい怒りに満たされた。パウロが福音使命を異邦人に伝え続けることができるよう、神が特別にパウロを保護されなかったら、彼らはパウロの息の根をとめてしまったであろう。

「しかし、彼らがこれに反抗してののしり続けたので、パウロは自分の上着を振りはらって、彼らに言った、『あなたがたの血は、あなたがた自身にかえれ。わたしには責任がない。今からわたしは異邦人の方に行く』。こう言っ

て、彼はそこを去り、テテオ・ユストという神を敬う人の家に行った。その家は会堂と隣り合っていた。」

シラスとテモテはパウロを助けるために「マケドニヤから下ってきて」、共に異邦人のために働いた。パウロとその仲間たちは、ユダヤ人ばかりでなく異邦人にも、堕落
[269] した人類の救い主としてキリストを宣べ伝えた。複雑な、遠まわしの論法を避けて、十字架の使命者たちはこの世の創造主、宇宙の最高の統治者のご性質を強調した。彼らの心は神とみ子への愛に燃え、彼らは人類のためにささげられた無限の犠牲を見上げるようにと異邦人に訴えた。彼らは、異教の中で暗中模索を続けてきた人々が、カルバリーの十字架から流れてくる光さえ見ることができれば、あがない主のもとへと導かれることを知っていた。「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」と、救い主は言っておられた（ヨハネ一二ノ三二）。

コリントにおける福音の働き人たちは、彼らが働きかけている魂の上に恐ろしい危険が迫っていることを実感した。そして、自分たちの上に負わされている責任を感じつつイエスのうちにある真理を明らかにした。彼らの使命は明瞭、率直、また決定的で、それはいのちからいのちに至らせる香りか、それとも死から死に至らせる香りであった。そして、彼らの言葉にばかりでなく、また日々の生活の中に福音があらわされた。天使たちは彼らと協力し、神の恵みと力は多くの者の悔い改めの中に示された。

「会堂司クリスポは、その家族一同と共に主を信じた。また多くのコリント人も、パウロの話を聞いて信じ、ぞくぞくとバプテスマを受けた。」

これまで常に使徒たちに向けられていたユダヤ人の憎しみは、いよいよ激しくなった。クリスポの悔い改めとバプテスマは、頑迷な反対者たちに自分たちの非を認めさせないで、かえって彼らを怒らせる結果になった。彼らはパウロの説教を議論で反駁はんばくすることができなかった。
[270] そのように証拠不足だったので、彼らは欺瞞ぎまんと悪意のある攻撃に訴えて、福音とイエスのみ名を冒涜ぼうとくした。彼らが盲目的な怒りの中で用いるとき、どんな言葉も彼らにとって激しすぎることはなく、どんな計略も低級すぎることはなかった。彼らはキリストが奇跡を行われた

ことを否定することはできなかったが、キリストはサタンの力によって奇跡を行ったのだと言った。そして、パウロが働きかけたすばらしい仕事も、同じ手先によってなされたのだと断言した。

パウロはコリントでいくらかの成功をおさめたが、なおこの堕落した都市の邪悪さを見聞きして、ほとんど落胆しそうになった。異邦人の堕落ぶりを目撃し、ユダヤ人からは軽蔑と侮辱を受けて、彼は激しく苦悶した。そして、そこに見いだされる人材で教会を築こうとすることは知恵のないことではないかと、おぼつかない気持ちになった。

パウロがもっと有望な伝道地を求めてこの町を去ろうと計画し、自分の義務をさとりたいと熱心に求めたとき、主は異象を通して彼に臨み、そして、言われた、「恐れるな。語りつづけよ、黙っているな。あなたには、わたしがついている。だれもあなたを襲って、危害を加えるようなことはない。この町には、わたしの民が大ぜいいる」。パウロは、このことがコリントにとどまれとの命令であり、またまかれた種を主がふやされるとの保証であるとさとった。力づけられ、勇気づけられて、彼は熱心に、辛抱強くそこで働きつづけた。

使徒パウロの努力は公開の説教だけに限られなかった。この方法では動かすことのできない多くの人 人がいた。彼 [271]
は戸毎訪問に多くの時間を費やし、そうすることによって家庭ぐるみの親しい交際を利用した。彼は病気の者や悲しんでいる者を訪れ、苦しんでいる者を慰め、しいたげられている者を助けた。そして、自分の言うこと行うことのすべてに、イエスのみ名を高めた。こうして彼は働き、「弱くかつ恐れ、ひどく不安であった」（コリント第一・二ノ三）。パウロは自分の教えていることが神を印象づけないで、人間を印象づけているのではないかとおそれた。

パウロは後になって、次のように言った。「わたしたちは、円熟している者の間では、知恵を語る。この知恵は、この世の者の知恵ではなく、この世の滅び行く支配者たちの知恵でもない。むしろ、わたしたちが語るのは、隠された奥義としての神の知恵である。それは神が、わたしたちの受ける栄光のために、世の始まらぬ先から、あらかじめ定めておかれたものである。この世の支配者たちのうちで、この知恵を知っていた者は、ひとりもいなかった。も

し知っていたなら、栄光の主を十字架につけはしなかったであろう。しかし、聖書に書いてあるとおり、『目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた』のである。そして、それを神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである。いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っていようか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない。

ところが、わたしたちが受けたのは、この世の霊ではなく、神からの霊である。それによって、神から賜わった恵みを悟るためである。この賜物について語るにも、わたしたちは人間の知恵が教える言葉を用いないで、御霊の教える言葉を用い、霊によって霊のことを解釈するのである」（コリント第一・二ノ六ー一三）。[272]

パウロは彼の力が、自分自身の中にあるのではなく、聖霊のご臨在の中にあって、その尊い感化力が彼の心を満たし、一つ一つの思いをキリストに服従させてくださることを知った。彼は自分自身について「いつもイエスの死をこの身に負うている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである」と言った（コリント第二・四ノ一〇）。使徒パウロの教えにおいては、キリストが中心人物であった。「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」と彼は言った。自己は隠されて、キリストがあらわされ、高められた。

パウロは雄弁家であった。改心する前に、彼はしばしばほとばしる雄弁で聴衆に感銘を与えようとした。しかし今は、彼はこれをすべて放棄した。感覚を楽しませ、想像力を満足させはするが、しかし日常の生活には関係のないような、詩的表現や空想的描写にふけることなく、パウロはきわめて重要な真理を、人の心に刻みつけるために、単純な言葉を用いるよう努めた。真理を空想的に描写するなら、人を感動させることができるかもしれない。しかし、往々にして、このようにして示された真理は、信者を強めて人生の戦いに備えさせるに必要な糧を与えるものではない。即刻の必要や現実の試みに苦闘している人々には、キ

リスト教の基本原則にある健全で実際的な教えを与えなければならない。

コリントにおけるパウロの努力には、成果がなかったわ [273]
けではない。多くの者が偶像礼拝を離れて生ける神に仕えるようになり、一つの大きな教会がキリストの軍旗の下に編入された。異邦人の最も放縦な者たちの中からも、救われる者たちがいて、神のあわれみと、罪からきよめるキリストの血の効力についての、記念碑となった。

パウロがキリストを示すことにますます成功したことから、不信なユダヤ人は一層強固な妨害へと奮い立った。彼らは一団となって立ち上がり、「一緒になってパウロを襲い、彼を法廷にひっぱって行って訴えた」。当時、ガリオがアカヤの総督であった。彼らは法廷の役人たちが、以前の場合と同じように彼らに味方するだろうと期待して、怒声を張り上げ、使徒パウロに対する苦情を訴えた、「この人は、律法にそむいて神を拝むように、人々をそそのかしています」。

ユダヤの宗教はローマの権力の保護下にあった。だからパウロを訴えた者たちは、もし彼に、彼らの宗教の律法を犯したという罪を負わせることができるなら、彼は裁判にかけられ、判決を受けるために引き出されることになるだろうと思った。こうして彼を死に追い込みたいと彼らは望んだ。しかし、ガリオは誠実な人で、ユダヤ人の嫉妬しっとと陰謀にだまされる者とならず、これをはねつけた。ガリオは彼らの偏狭と独善にあいそをつかし、彼らの訴えを無視していた。パウロが弁明のために口を開こうとすると、ガリオはその必要はないと彼に告げ、それから、怒っている告発者たちに向かって言った、「『ユダヤ人諸君、何か不法行為とか、悪質の犯罪とかのことなら、わたしは当然、諸君の訴えを取り上げもし ようが、これは諸君の言 [274]
葉や名称や律法に関する問題なのだから、諸君みずから始 [275]
末するがよかろう。わたしはそんな事の裁判人にはなりたくない』。こう言って、彼らを法廷から追いはらった。」

ユダヤ人もギリシヤ人もガリオの決定を熱心に待っていた。ガリオがこの事件を、公共の利害になんら関係のないものとしてその場で却下したのを見て、ユダヤ人は計画をくじかれたことを知り、怒って退場した。総督の断固たる態度によって、ユダヤ人のあと押しをしていたうるさい群

衆の目が開かれた。パウロがヨーロッパで働くようになって以来はじめて、群衆は彼に味方した。総督の見ている前で、しかも、彼の干渉も受けずに、彼らは使徒を訴えた有力者たちにはげしく襲いかかった。「みんなの者は、会堂司ソステネを引き捕え、法廷の前で打ちたたいた。ガリオはそれに対して、そ知らぬ顔をしていた。」こうしてキリスト教はめざましい勝利をおさめた。

「パウロは、なお幾日ものあいだ滞在した。」もし使徒パウロが、この時コリントを去るよう強いられていたなら、イエスを信ずる信仰へと改宗した人々は、危険な立場に置かれたことであろう。ユダヤ人たちは、その地方からキリスト教が絶滅してしまうまで、彼らが得た有利な状態をいよいよ徹底させる努力をしていたことであろう。

第二五章テサロニケ教会への手紙 [276]

本章はテサロニケ人への第一・第二の手紙に基づく

パウロがコリントに滞在しているあいだに、シラスとテモテがマケドニヤから下ってきたことは、パウロを大いに励ました。ふたりは、福音宣伝者たちがテサロニケをはじめて訪問したとき真理を受け入れていた人々の、「信仰と寛容」の「よきおとずれ」を彼に携えてきた。パウロは、試練と逆境の真っただ中にいて、変わることなく神に忠実につかえている信者たちへ、優しい同情の心を向けた。パウロは自分で彼らを訪問したいと思ったが、その時にはこれが不可能だったので、彼らに手紙を書いた。

テサロニケの教会にあてたこの手紙の中で、使徒パウロは、彼らが信仰を増し加えているというよろこばしい知らせを、神に感謝している。「兄弟たちよ。それによって、わたしたちはあらゆる苦難と患難との中にありながら、あなたがたの信仰によって慰められた。なぜなら、あなたがたが主にあって堅く立ってくれるなら、わたしたちはいま生きることになるからである。ほんとうに、わたしたちの神の みまえで、あなたがたのことで喜ぶ大きな喜びのため [277] に、どんな感謝を神にささげたらよいだろうか。わたしたちは、あなたがたの顔を見、あなたがたの信仰の足りないところを補いたいと、日夜しきりに願っているのである」とパウロは書いた。

「わたしたちは祈の時にあなたがたを覚え、あなたがた一同のことを、いつも神に感謝し、あなたがたの信仰の働きと、愛の労苦と、わたしたちの主イエス・キリストに対する望みの忍耐とを、わたしたちの父なる神のみまえに、絶えず思い起している。」

テサロニケにいる信者たちの多くが「偶像を捨てて神に立ち帰り、生けるまことの神に仕えるようにな」っていた。彼らは「多くの患難の中で、聖霊による喜びをもって御言を受けいれ」ていた。主に忠実に従っている彼らは「マケドニヤとアカヤとにいる信者全体の模範になった」

とパウロは述べた。この称賛の言葉は分に過ぎたものではなかった。「すなわち、主の言葉はあなたがたから出て、ただマケドニヤとアカヤとに響きわたっているばかりではなく、至るところで、神に対するあなたがたの信仰のことが言いひろめられたので」ある。

テサロニケの信者たちは本当の伝道者であった。彼らの心は、「きたるべき怒り」に対する恐れから彼らを救い出して下さった救い主への熱意に燃えた。キリストの恵みによって、彼らの生活におどろくべき変化が起こった。そして、主のみことばが彼らの口から語られると、力がそれに伴った。聞く者の心は宣べ伝えられた真理によって納得させられ、多くの魂が信者の群れに加えられた。

[278] この第一の手紙の中で、パウロは、テサロニケ人の中で働いた彼のやりかたに言及した。彼は欺きやだましごとで改心者を導こうとしたのではないと言明した。「わたしたちは神の信任を受けて福音を託されたので、人間に喜ばれるためではなく、わたしたちの心を見分ける神に喜ばれるように、福音を語るのである。わたしたちは、あなたがたが知っているように、決してへつらいの言葉を用いたこともなく、口実を設けて、むさぼったこともない。それは、神があかしして下さる。また、わたしたちは、キリストの使徒として重んじられることができたのであるが、あなたがたからにもせよ、ほかの人々からにもせよ、人間からの栄誉を求めることはしなかった。むしろ、あなたがたの間で、ちょうど母がその子供を育てるように、やさしくふるまった。このように、あなたがたを慕わしく思っていたので、ただ神の福音ばかりではなく、自分のいのちまでもあなたがたに与えたいと願ったほどに、あなたがたを愛したのである。」

パウロは続けた。「あなたがたもあかしし、神もあかしして下さるように、わたしたちはあなたがた信者の前で、信心深く、正しく、責められるところがないように、生活をしたのである。そして、あなたがたも知っているとおり、父がその子に対してするように、あなたがたのひとりびとりに対して、御国とその栄光とに召して下さった神のみこころにかなって歩くようにと、勧め、励まし、また、さとしたのである。

これらのことを考えて、わたしたちがまた絶えず神に感謝しているのは、あなたがたがわたしたちの 説いた神の言 [279]
を聞いた時に、それを人間の言葉としてではなく、神の言として――事実そのとおりであるが――受けいれてくれたことである。そして、この神の言は、信じるあなたがたのうちに働いているのである。」「実際、わたしたちの主イエスの来臨にあたって、わたしたちの望みと喜びと誇の冠となるべき者は、あなたがたを外にして、だれがあるだろうか。あなたがたこそ、実にわたしたちのほまれであり、喜びである。」

パウロは、テサロニケの信者たちにあてた第一の手紙の中で、死の本当の状態を彼らに教えようとした。死んだ人は眠っているのだ、無意識の状態にいるのだと、彼は述べている。「兄弟たちよ。眠っている人々については、無知でいてもらいたくない。望みを持たない外の人々のように、あなたがたが悲しむことのないためである。わたしたちが信じているように、イエスが死んで復活されたからには、同様に神はイエスにあって眠っている人々をも、イエスと一緒に導き出して下さるであろう。・・・・すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。」

テサロニケ人たちは、キリストは生きている信仰者を変えて、ご自身のもとに連れていくために来られるという考えを、しっかり持っていた。彼らは友人たちが死んで、主の来られる時に受けようとしている祝福を失うことのないようにと、友人たちの命を注意深く見守っていた。しかし、愛する人々が次 次に彼らから取り去られた。そしてテ [280]
サロニケ人たちは、亡くなった者たちの顔を、これが見納めと苦しみ嘆きながら見つめ、彼らと将来生きて会えるなどという希望は到底持てない気持ちになっていた。

パウロの手紙が開かれて読まれたとき、死の正しい状態を明らかにした言葉によって、大きなよろこびと慰めが教会に与えられた。パウロは、キリストが来られるとき、イエスにあって眠りについている者たちより先に、生きてい

る者たちが主に会いに行くのではないことを教えた。天使のかしらの声と神のラッパの音は、眠っている者たちにとどき、キリストにあって死んでいる者たちが最初によみがえり、それから生き残っている者たちに不死が与えられるのである。「それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。だから、あなたがたは、これらの言葉をもって互に慰め合いなさい。」

この保証がテサロニケの若い教会にもたらした希望とよろこびは、われわれには到底、十分にわかるものではない。彼らは福音の父から送られてきた手紙を信じて、大切にした。そしてパウロを愛するようになった。パウロはこれらの事を以前にも彼らに話していたが、その時には、彼らの心は新しい、なじみのない教理を理解することに必死であったので、いくつかの点についてその意味が、彼らの頭にはっきりと印象づけられなかったとしても、驚くにはあたらない。しかし彼らは真理に飢えていた。そして、パウロの書簡は彼らに新しい希望と力を与え、死を通していのちと不死とを明らかに示されたかたに対する、より固い信仰と深い愛情を与えた。

[281] 彼らは、信仰をもつ友が墓からよみがえり、神のみ国で永遠に生きることを知ってよろこんだ。死者の休息所を包んでいたやみが、吹き払われた。クリスチャンの信仰は新しい輝きで飾られ、彼らはキリストのいのちと死と復活とに新しい栄光を認めた。

「同様に神はイエスにあって眠っている人々をも、イエスと一緒に導き出して下さる」とパウロは書いた。多くの人がこの聖句を、眠っている人々が天からキリストとともに連れてこられるという意味に解釈しているが、パウロの言う意味は、キリストが死からよみがえられたように、神は眠っている聖徒を墓から呼び出し、キリストと一緒に天に連れて行かれるということであった。これはテサロニケの教会ばかりでなく、どこにいようとも、すべてのクリスチャンに与えられた慰めであり、輝かしい希望である。

テサロニケで働いているあいだに、パウロは時のしるしに関する問題を十分に教えて、人の子が天の雲に乗って現れる前に起こる出来事を示していたので、もうこの問題について書く必要はないと思った。しかし、彼は以前教え

たことに、もういちど注意をひいた。「その時期と場合とについては、書きおくる必要はない。あなたがた自身がよく知っているとおり、主の日は盗人が夜くるように来る。人々が平和だ無事だと言っているその矢先に・・・・突如として滅びが彼らをおそって来る」と彼は言った。

今日、この世界には、主の再臨について人々に警告するためにキリストがお与えになったさまざまの証拠に、目をつぶっている者たちが大ぜいいる。時の終わりを示すしるしが急速に成就しており、人の 子が天の雲に乗って来られ [282] るその時に向かって、この世界が急速に進んでいるにもかかわらず、彼らはすべての不安をおさえようとしている。キリストの再臨に先立って起こるしるしに無関心でいることは罪であると、パウロは教えている。この怠慢の罪を犯している人々を、彼は夜の者、やみの者と呼んでいる。彼は次の言葉で、油断なく警戒するようにと励ましている。「しかし兄弟たちよ。あなたがたは暗やみの中にいないのだから、その日が、盗人のようにあなたがたを不意に襲うことはないであろう。あなたがたはみな光の子であり、昼の子なのである。わたしたちは、夜の者でもやみの者でもない。だから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして慎んでいよう。」

この事柄に関する使徒の教えは、特にわれわれの時代の教会にとって重要である。この近づきつつある偉大な完成の時に生きている人々にとって、パウロの言葉は力強い筆致で迫ってくる。「しかし、わたしたちは昼の者なのだから、信仰と愛との胸当を身につけ、救の望みのかぶとをかぶって、慎んでいよう。神は、わたしたちを怒りにあわせるように定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによって救を得るように定められたのである。キリストがわたしたちのために死なれたのは、さめていても眠っていても、わたしたちが主と共に生きるためである。」

油断のないクリスチャンは、活動しているクリスチャンである。彼は、福音進展のために自分の力でできることは、何でも熱心にやろうとしている。あがない主に対する愛が増し加わるに従って、同胞に対する愛も増し加わる。彼は主が受けられたと同じように厳しい試練に会うが、苦悩のために気むずか しくなることも、心の平和が乱され [283]

ることもない。彼は、試練によく耐えれば、それが彼を洗練し、清めて、一層深いキリストとの交わりに導くことを知っている。キリストの苦しみにあずかる人々は、キリストの慰めにもあずかる者となり、ついには、キリストの栄光をも分かち与えられるのである。

パウロはテサロニケ人への手紙の中で、更に語った、「兄弟たちよ。わたしたちはお願いする。どうか、あなたがたの間で労し、主にあってあなたがたを指導し、かつ訓戒している人々を重んじ、彼らの働きを思って、特に愛し敬いなさい。互に平和に過ごしなさい。」

テサロニケの信者たちは、狂信的な考えや教理を持ち込んでくる人々に非常に悩まされた。ある者は「怠惰な生活を送り、働かないで、ただいたずらに動きまわって」いた。教会は正しく組織されており、役員は牧師や執事として奉仕するよう任命されていた。しかし中には身勝手で、衝動的で、教会の権威ある地位にいる人々に従うことを拒む者たちがいた。彼らは個人的に判断する権利ばかりでなく、彼らの見解を公に教会に主張する権利を要求した。このためにパウロは、教会の中で権威ある地位に任命されている人々を尊敬し、彼らの意見に聞き従うよう、テサロニケの人々に注意を与えたのである。

テサロニケの信者たちが神を恐れて歩むようにとの切なる願いから、使徒パウロは、日常の生活において神を敬う信仰を実践するようにと、彼らに求めた。「兄弟たちよ。わたしたちは主イエスにあってあなたがたに願いかつ勧める。あなたがたが、どのように歩いて神を喜ばすべきかをわたしたちから学んだように、また、いま歩いているとおりに、ますます歩き続けなさい。わたしたちがどういう教を主 イエスによって与えたか、あなたがたはよく知っている。神のみこころは、あなたがたが清くなることである。すなわち、不品行を慎」むことである。「神がわたしたちを召されたのは、汚れたことをするためではなく、清くなるためである。」 [284]

使徒は彼の働きによって改宗した人々の霊的な幸福のために、自分には大きな責任があると思った。彼らに対する願いは、彼らが唯一のまことの神と、神がおつかわしになったイエス・キリストを知る知識を深めることであった。パウロは宣教中にイエスを愛している人々の小さな群

れに会い、彼らと共に頭をたれて祈り、神との生きた交わりを保つ方法を彼らに教えていただきたいと、神に求めることがよくあった。彼は、しばしば、福音の真理の光を他の人々に与える最上の方法について、彼らに助言した。また彼が、こうして自分が働きかけた人々から離れているときには、彼らが悪から守られて、熱心で活動的な伝道者になるよう彼らを助けてくださるように、彼はたびたび神に嘆願した。

真の改心を示す最も強力な証拠の一つは、神と人とに対する愛である。あがない主としてイエスを受け入れている人々は、同じ尊い信仰を持っている他の人々に対して、深い、誠実な愛を持っている。テサロニケの信者たちもそうであった。「兄弟愛については、今さら書きおくる必要はない。あなたがたは、互に愛し合うように神に直接教えられており、また、事実マケドニヤ全土にいるすべての兄弟に対して、それを実行しているのだから。しかし、兄弟たちよ。あなたがたに勧める。ますます、そうしてほしい。そして、あなたがたに命じておいたように、つとめて落ち着いた生活をし、自分の仕事に身をいれ、手ずから働きなさい。そうすれば、外部の人々に対して品位を保ち、まただれの世話にもならずに、生活できるであろう。」 [285]

「どうか、主が、あなたがた相互の愛とすべての人に対する愛とを、わたしたちがあなたがたを愛する愛と同じように、増し加えて豊かにして下さるように。そして、どうか、わたしたちの主イエスが、そのすべての聖なる者と共にこられる時、神のみまえに、あなたがたの心を強め、清く、責められるところのない者にして下さるように。」

「兄弟たちよ。あなたがたにお勧めする。怠惰な者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。だれも悪をもって悪に報いないように心がけ、お互に、またみんなに対して、いつも善を追い求めなさい。いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられることである。」

使徒は続けて、テサロニケの人々に、預言の賜物を軽んじないようにと教えた。「御霊を消してはいけない。預言を軽んじてはならない。すべてのものを識別して、良い

ものを守」るようにと言って、真正のものから偽りのものを区別する慎重な識別力を持つように勧めた。「あらゆる種類の悪から遠ざかりなさい」とパウロは彼らに懇願し、「霊と心とからだとを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのない者にして下さるように」神が彼らを全くきよめて下さるようにという祈りで手紙を結んだ。そして「あなたがたを召さ
[286] れたかたは真実であられるから、この ことをして下さるであろう」と彼はつけ加えた。

パウロがテサロニケ人に送った第一の手紙の中で、キリストの再臨について述べた教えは、彼の以前の教えと完全に調和していた。それにもかかわらず、彼の言葉はテサロニケのある兄弟たちに誤解された。彼らは、パウロ自身が生きたまま救い主の来臨を目撃したいという希望を表しているものと理解した。このような信念は、彼らの熱狂と興奮を助長させた。以前に自分たちの責任や義務を怠っていた人人は、今、彼らの誤った考えをますます頑固に主張するようになった。

第二の手紙の中で、パウロは、自分の教えについて人々の誤解を訂正して、自分の正しい立場を示そうとした。彼は再び彼らの誠実さに対する確信を表明し、彼らの信仰が固く、また、互いに、主のみわざのために豊かな愛をもっていることに対する感謝をあらわした。パウロは、彼らを迫害や艱難に勇敢に耐える堅忍不抜の模範として他の教会に紹介したことを告げ、それから、神の民がすべての心配や困難な問題から休息を与えられるキリスト再臨の時へと、彼らの心を向けさせた。

「わたしたち自身は、あなたがたがいま受けているあらゆる迫害と患難とのただ中で示している忍耐と信仰とにつき、神の諸教会に対してあなたがたを誇としている。・・・・悩まされているあなたがたには、わたしたちと共に、休息をもって報いて下さる・・・・それは、主イエスが炎の中で力ある天使たちを率いて天から現れる時に実現する。その時、主は神を認めない者たちや、わたしたちの主イエスの福音に聞き従わない者たちに報復し、そして、彼らは主のみ顔とその力の栄光から退けられて、永遠
[287] の滅びに至る 刑罰を受けるであろう・・・・このためにまた、わたしたちは、わたしたちの神があなたがたを召しに

かなう者となし、善に対するあらゆる願いと信仰の働きとを力強く満たして下さるようにと、あなたがたのために絶えず祈っている。それは、わたしたちの神と主イエス・キリストとの恵みによって、わたしたちの主イエスの御名があなたがたの間であがめられ、あなたがたも主にあって栄光を受けるためである。」

しかしキリスト再臨の前に、預言に予告されているように、宗教界に重要な進展があるはずであった。使徒はこう断言した。「霊により、あるいは言葉により、あるいはわたしたちから出たという手紙によって、主の日はすでにきたとふれまわる者があっても、すぐさま心を動かされたり、あわてたりしてはいけない。だれがどんな事をしても、それにだまされてはならない。まず背教のことが起り、不法の者、すなわち、滅びの子が現れるにちがいない。彼は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して立ち上がり、自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する。」

パウロの言葉は誤解されてはならなかった。彼が特別の啓示によってテサロニケ人たちへキリストの再臨がすぐにくることを警告したのだと理解されてはならなかった。そのような見解は信仰の混乱を起こしたであろう。失望は不信仰へとつながるものだからである。そこで、使徒パウロは、そのような使命が彼から来たなどと受け取らないよう兄弟たちに警告し、預言者ダニエルがはっきり書いている法王権が今後起こって、神の民と戦うようになることを強調した。この権力が、目に余る冒涜ぼうとく的なことをするまでは、教会が主の再臨を期待するのはむなしいと、彼は述べている。「わたしがまだあなたがたの 所にいた時、これらの事をくり返して言ったのを思い出さないのか」[288] と、パウロはたずねた。

真の教会を悩ますはずの試練は、恐ろしいものであった。使徒が手紙を書いていた時でさえ、「不法の秘密の力」はすでに働き始めていた。未来に起こる事態の進展は、「サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議と、また、あらゆる不義の惑わしとを、滅ぶべき者どもに対して行うため」であった。

特に、「真理に対する愛」を受け入れない人々についてのパウロの言葉は厳粛である。真理の使命を故意に拒む

人々について彼は言った。「そこで神は、彼らが偽りを信じるように、迷わす力を送り、こうして、真理を信じないで不義を喜んでいたすべての人を、さばくのである。」神が人々にあわれみをもってお与えになった警告を拒む者たちは、とがめられずにはすまない。神は、これらの警告から身をかわし続けている人々からみ霊を引き離し、彼らの好む惑わしを受けるままに放置されるのである。

こうしてパウロは、キリストの再臨の前まで幾世紀もの長い暗黒と迫害の期間を通して継続する、あの悪の権力の破壊的な働きについて大要を説明した。テサロニケの信者たちはすぐさま救い出されることを望んでいたが、今は勇敢に、神をおそれながら、彼らの前にある仕事を始めるよう諭さとされた。使徒は彼らに、義務を怠ったり、あきらめて何もしないで待つようなことにならぬようにと命じた。すぐに救い出されるだろうという期待が燃えた後は、日常の仕事や、彼らが会わねばならない反対は、二倍の厳しさがあるようにみえるであろう。それだから、信仰に固く立つようにと彼らに熱心に説いた。

[289] 「堅く立って、わたしたちの言葉や手紙で教えられた言伝えを、しっかりと守り続けなさい。どうか、わたしたちの主イエス・キリストご自身と、わたしたちを愛し、恵みをもって永遠の慰めと確かな望みとを賜わるわたしたちの父なる神とが、あなたがたの心を励まし、あなたがたを強めて、すべての良いわざを行い、正しい言葉を語る者として下さるように。」「主は真実なかたであるから、あなたがたを強め、悪しき者から守って下さるであろう。わたしたちが命じる事を、あなたがたは現に実行しており、また、実行するであろうと、わたしたちは、主にあって確信している。どうか、主があなたがたの心を導いて、神の愛とキリストの忍耐とを持たせて下さるように。」

信徒たちの働きは、神によって彼らにさずけられていた。彼らは、真理を忠実に固守することによって、これまでに受けた光を他の人々に与えなければならなかった。使徒は善行に倦みうみ疲れることのないように彼らに命じ、キリストのためにたゆまず良い働きをしながら、日常の仕事にも勤勉であった使徒自身の模範を彼らに示した。彼は、怠惰で目的のない刺激に憂き身をやつしている人々を叱責しっせきし、「静かに働いて自分で得たパンを食べる

ように」勧めた。彼はまた、神のしもべたちによって与えられた教訓を無視し続けている者と交わらぬよう、教会に申しつけた。「しかし、彼を敵のように思わないで、兄弟として訓戒しなさい」と彼はつけ加えた。

この書簡もまた、パウロは、労苦と試練の生活の真っただ中にあって、神の平和と主、イエス・キリストの恵みが、彼らの慰めとなり支えとなるように、との祈りで結んだ。

[290]

第二六章　植える者と水をそそぐ者

本章は使徒行伝第一八章一八節－二八節に基づく

コリントを去ってのち、パウロの次の働き場はエペソであった。彼は、近づいていた祭りに出るために、エルサレムに向かう途中であった。だから、エペソでの逗留とうりゅうは当然短期間であった。彼は会堂にはいって、ユダヤ人たちと論じたが、彼らに与えた印象がとても良かったので、彼らはパウロにそこで働きを続けてくれるようにと懇願した。彼にはエルサレムを訪問する目的があったので、その時はぐずぐずそこに留まっていられなかったが、「神のみこころなら」また戻ってくると約束した。アクラとプリスキラは彼と共にエペソに来ていたが、パウロはふたりをそこに残して、彼の始めた仕事を続けさせた。

このとき、「アレキサンデリヤ生れで、聖書に精通し、しかも、雄弁なアポロというユダヤ人が、エペソにきた」。彼はバプテスマのヨハネの説教を聞き、悔い改めのバプテスマを受けていて、預言の働きがむだでなかったことを示す生きた証人であった。アポロについての聖書の
[291] 記録によると、彼は「主 の道に通じており、また、霊に燃えてイエスのことを詳しく語ったり教えたりしていたが、ただヨハネのバプテスマしか知っていなかった」。

ところで、彼はエペソで、「会堂で大胆に語り始めた」。聞いていた者たちの中にアクラとプリスキラがいたが、このふたりは彼がまだ福音の光を十分に受けていないことに気がつき、「彼を招きいれ、さらに詳しく神の道を解き聞かせた」。このふたりから教えられて、アポロは聖書についてのいっそう明らかな理解を得、キリスト教信仰の最も有能な主唱者の一人になった。

アポロがアカヤに行きたいと願っていたので、エペソにいる兄弟たちは、「彼を励まし、先方の弟子たちに」、キリストの教会に完全に調和する教師として、「彼をよく迎えるようにと、手紙を書き送った」。彼はコリントに行き、そこで、公の伝道や戸ごとの訪問により「イエスがキ

リストであることを、聖書に基いて示し・・・・ユダヤ人たちを激しい語調で論破した」。パウロが既に真理の種を植えていたが、今、アポロはそれに水をやったのである。福音の宣教にアポロは成功したが、このためにある信者たちは、アポロの働きをパウロの働きよりもほめそやすようになった。このように人と人を比較することで教会に党派心が生じ、福音の進展が非常に阻まれそうになった。

パウロは、コリントで過ごした一年半のあいだ、つとめて福音を単純に説いてきた。「すぐれた言葉や知恵を」携えてコリント人のところに行ったのではなく、恐れと不安を抱きながら「霊と力との証明に」より、「神のあかし」を宣べ伝えたのであった。「それは・・・・信仰が人の知恵によらないで、神の 力によるものとなるためであった」 [292]（コリント第一・二ノ一、四、五）。

パウロは当然のことだが、教会の状態に応じて教える方法を考えた。「兄弟たちよ。わたしはあなたがたには、霊の人に対するように話すことができず、むしろ、肉に属する者、すなわち、キリストにある幼な子に話すように話した。あなたがたに乳を飲ませて、堅い食物は与えなかった。食べる力が、まだあなたがたになかったからである。今になってもその力がない」と、パウロは後になって彼らに説明した（コリント第一・三ノ一、二）。パウロが彼らに教えようと努力していた教えを学ぶのに、コリントの多くの信者たちは時間がかかった。彼らの霊的知識の発達は、彼らが受けた特権や機会と釣り合っていなかった。彼らがクリスチャン経験をかなり積んで、みことばのより深い真理を理解し、実行していなければならない時に、彼らは、「わたしには、あなたがたに言うべきことがまだ多くあるが、あなたがたは今はそれに堪えられない」とキリストが弟子たちに言われたときの弟子たちの場所に立っていた（ヨハネ一六ノ一二）。嫉妬や邪悪な憶測や非難が、コリントの多くの信徒たちの心を閉ざしていて「すべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめる」聖霊の十分な働きを妨げていた（コリント第一・二ノ一〇）。彼らはこの世的な知識においてどんなに賢くとも、キリストを知る知識においては幼児にすぎなかった。

コリントの改宗者たちに、キリスト教信仰の基礎的なことを、まさにその初歩を教えるのが、パウロの仕事であっ

た。パウロは彼らを、神の力が人の心に働きかけることを
[293] 知らない人々として指導せざる を得なかった。そのころ、彼らは救いの奥義を理解することができなかった。「生れながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」（コリント第一・二ノ一四）。パウロは種をまくように努めた。そして他の人々がそれに水をまくのである。彼の後につづく者たちは、彼のやり残したその場所から働きを引き継ぎ、教会が耐えられる程度に応じて、時にかなった霊的光と知識を与えねばならない。

使徒パウロは、コリントで働きを始めたとき、彼が教えたいと思っていた偉大な真理を、最も慎重に紹介しなければならないと悟った。聴衆の中には、人間の理論を得意になって信奉するものや、誤った礼拝制度の代弁者もいて、彼らは聖書に示されている霊的な永遠の生命という現実に矛盾するような理論を、自然という書物の中に見つけたいと、見えない眼で模索していることを、パウロは知っていた。また、批評家たちが、啓示されているみことばについてのキリスト教の解釈を論駁ろんばくしようとしたり、懐疑主義者がキリストの福音を愚弄ぐろうし、嘲笑ちょうしょうするだろうということも、パウロは知っていた。

パウロは、人々を十字架のもとに導く努力をするにあたって、放縦な者たちを直接に譴責けんせきしたり、尊い神の御目に彼らの罪がいかに憎むべきものかを示したりはあえてせず、むしろ、人生の真の目的を彼らに示し、天来の教師の教えを彼らの心に刻みつけようとした。もしその教えを受け入れるなら、彼らは世俗と罪から純潔と義へと高められるのであった。パウロは特に、神の国に住むにふ
[294] さわしいと見な される者たちが到達しなければならない、実際的な信仰と聖潔を強調した。彼らの不道徳な行為が、神の御目にいかに不快なものであるかがわかるよう、彼らの心の暗やみをキリストの福音の光が貫くのを見たいと、彼は願った。したがって、彼らのあいだでの彼の教えの重荷はキリスト、しかも十字架につけられたキリストであった。彼らの最も熱心な学びと、最大のよろこびが、神に対する悔い改めと主イエス・キリストに対する信仰を通して

得られる、すばらしい救いの真理でなければならないことを、パウロは彼らに示そうと努めた。

哲学者は救いの光から身をかわす。それが彼の誇る理論の面目をつぶすからである。また世俗的な者も救いの光を拒む。それがこの世の偶像から彼を引き離そうとするからである。人々がキリストを愛したり、信仰の目で十字架を見ることができるようになる前に、キリストの品性が理解されねばならないことを、パウロは知っていた。永遠にわたって、あがなわれた者の科学となり歌となる学びは、ここで始まらねばならない。十字架の光によってのみ、人間の魂の真の価値が計られるのである。

人を洗練する神の恵みの感化力は、人の生まれつきの性質を変える。天国は世俗的な心を持つ者には好ましいところではない。彼らの生来の、きよめられていない心は、純潔で神聖な場所になんの魅力も感じないであろう。また、たとえ彼らが天国にはいれたとしても、彼らに合ったものは何も見いだせないであろう。堕落した人間が天国に入るにふさわしくなり、純潔で聖なる天使たちとの交わりを楽しむためには、まず、生まれながらの心を支配している性癖が、キリストの恵みによって和らげられねばならない。[295] 人が罪に死んで、キリストにある新しい命に生き返るとき、神の愛がその心を満たす。彼の知力はきよめられる。彼はよろこびと知識の尽きぬ泉から飲み、永遠の日の光が彼の道を照らす。いのちの光であられるかたが、絶えず彼と共におられるからである。

パウロは、彼も彼の共労者たちも、真理を教えることを神からゆだねられた者たちに過ぎず、みな同じ働きに携わり、みな同じように仕事の成功を神により頼んでいることを、コリントの兄弟たちにしっかり理解させようと努めた。それぞれの働き人の優劣に関して教会内に起こった論争は、神のご計画に沿ったものではなく、生来の性質を大事にかかえていた結果であった。「ある人は『わたしはパウロに』と言い、ほかの人は『わたしはアポロに』と言っているようでは、あなたがたは普通の人間ではないか。アポロは、いったい、何者か。また、パウロは何者か。あなたがたを信仰に導いた人にすぎない。しかもそれぞれ、主から与えられた分に応じて仕えているのである。わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるの

は、神である。だから、植える者も水をそそぐ者も、ともに取るに足りない。大事なのは、成長させて下さる神のみである」（コリント第一・三ノ四ー七）。

コリントではじめて福音を宣べ伝え、そこに教会を組織したのはパウロであった。これは主が彼に割り当てられた働きであった。のちになって、神の導きのもとに、他の働き人たちがそれぞれの役割と立場を占めるために連れて来られた。まかれた種には水をやらねばならない。これをするのがアポロであった。彼はパウロの働きを引き継いで、さらに教えを与え、まかれた種が成長するのを助けた。彼
[296] は人 人の心をとらえたが、数を増やしてくださったのは神
[297] であった。品性を変える働きをするのは、人間ではなく、神の力である。植える者や水をそそぐ者が、種の成長をもたらすのではない。彼らは、神に任命された代理者として、神と協力しながら、神のもとで働くのである。成功に伴う名誉と栄光は、主なる働き人、神のものである。

神のしもべたちは、全部が同じ賜物を受けているわけではないが、みな神の働き人である。おのおのが大教師について学び、それから、学んだことを伝えねばならない。神はご自分の使命者たちに各自の仕事をさずけておられる。賜物は種々さまざまであるが、働き人はみな聖霊のきよめの力に支配され、混ぜ合わされて調和を保つのである。彼らが救いの福音を知らせると、多くの者が神の力によって、罪を悟り、改心するであろう。人間の尽力はキリストと共に神のうちに隠され、キリストが、万人の中の最高のおかた、最もすばらしいおかたとして現れる。

「植える者と水をそそぐ者とは一つであって、それぞれその働きに応じて報酬を得るであろう。わたしたちは神の同労者である。あなたがたは神の畑であり、神の建物である」（コリント第一・三ノ八、九）。この聖句の中で、使徒は教会を農地になぞらえた。その中で農夫たちは、神の植えられたぶどうの世話をして働く。また、教会を建物にもなぞらえているが、それは、主のための聖なる宮へと成長するのである。神は雇い主であり、各人にそれぞれの仕事を定めておられる。すべての者は神の監督下に働き、神も働き人のために、また、働き人を通して働かれる。神は
[298] 彼らに機転や技術をお与えになり、もし彼らが神のご指示に従うなら、彼らの努力に成功の栄冠を与えて下さる。

神のしもべたちは、親切で礼儀正しい秩序のうちに混ざり合い、「進んで互に尊敬し合」って共に働くのである（ローマ一二ノ一〇）。不親切な批評をしたり、他人の仕事をめちゃめちゃにしたり、分派を起こしたりしてはならない。主から使命をゆだねられている者には、めいめい、特別の仕事がある。おのおのには独自の個性があって、それを他人の個性の中に埋没させてはならない。しかし、おのおのは、なお、兄弟たちと一致して働くのである。神の働き人は、彼らの奉仕において本質的には一つでなければならない。自分を一つの標準に仕立てて、仲間の働き人に失礼なことを言ったり、彼らを自分より劣っている者のように扱ったりしてはならない。神のもとでおのおのは、自分に定められた仕事をなし、他の働き人たちから尊敬され、愛され、励まされる。彼らは共にみわざを完成へと進めるのである。

これらの原則は、コリントの教会にあてたパウロの最初の手紙の中に詳細に語られている。使徒は、「キリストに仕える者」を「神の奥義を管理している者」と述べ、彼らの仕事についてこう説明している、「この場合、管理者に要求されているのは、忠実であることである。わたしはあなたがたにさばかれたり、人間の裁判にかけられたりしても、なんら意に介しない。いや、わたしは自分をさばくこともしない。わたしは自ら省みて、なんらやましいことはないが、それで義とされているわけではない。わたしをさばくかたは、主である。だから、主がこられるまでは、何事についても、先走りをしてさばいてはいけない。主は暗い中に隠れていることを明るみに出し、心の中で企てられていることを、あらわにされるであろう。その時には、神からそれぞれほまれを受けるであろう」（コリント第一・四ノ一一五）。 [299]

それぞれ違った神のしもべたちのあいだをさばくことは、人間に許されていない。神だけが人の行為の審判者であって、神はおのおのに正しい報いをお与えになるのである。

使徒パウロは、彼の働きとアポロの働きについてなされた比較に直接言及してつづけた、「兄弟たちよ。これらのことをわたし自身とアポロとに当てはめて言って聞かせたが、それはあなたがたが、わたしたちを例にとって、『し

るされている定めを越えない』ことを学び、ひとりの人をあがめ、ほかの人を見さげて高ぶることのないためである。いったい、あなたを偉くしているのは、だれなのか。あなたの持っているもので、もらっていないものがあるか。もしもらっているなら、なぜもらっていないもののように誇るのか」（コリント第一・四ノ六、七）。

パウロは、彼と彼の同労者たちが、キリストのための奉仕において辛抱強く耐えてきた危険や困難を、教会に対して率直に示した。「今の今まで、わたしたちは飢え、かわき、裸にされ、打たれ、宿なしであり、苦労して自分の手で働いている。はずかしめられては祝福し、迫害されては耐え忍び、ののしられては優しい言葉をかけている。わたしたちは今に至るまで、この世のちりのように、人間のくずのようにされている。わたしがこのようなことを書くのは、あなたがたをはずかしめるためではなく、むしろ、わたしの愛児としてさとすためである。たといあなたがたに、キリストにある養育掛が一万人あったとしても、父が多くあるのではない。キリスト・イエスにあって、福音によりあなたがたを生んだのは、わたしなのである」（コリント第一・四ノ一一一一五）。

[300]

福音の働き人たちをご自分の使者として送り出すおかたは、聴衆の中に、だれか気に入りの牧師に対する愛着が非常に強くて、他の教師の働きを受け入れたがらない様子が見られるときに、はずかしめを受けられる。主は神の民に、必ずしも彼らの選ぶとおりにではなく、ただ彼らの必要に応じて、助け手を送られる。人間の見方は近視眼的で、自分たちにとって最上のものを見分けることができないからである。教会を、キリスト教のすべての要求において完全なものとするのに必要な資格を、ひとりの牧師がすべて備えていることは、めったにない。そこで神は他の牧師たちを送られる。おのおのが、他の人たちには不足している何かの能力を持っているのである。

教会はこれらキリストのしもべを、主ご自身をお受けするように、感謝して受けなければならない。神に仕える者が神のみことばから与えてくれる教えから、できるかぎりの利益を引き出すようにしなければならない。神のしもべたちが紹介する真理は、謙遜に素直に受け入れて理解しな

ければならないが、神に仕える者が偶像化されてはならない。

神の働き人たちは、キリストの恵みによって、光と祝福の使者とされる。彼らが熱心に根気よく祈って聖霊を受け、救霊の重荷を負い、十字架の勝利を遠くまで及ぼしたいという熱意に心が満たされて出て行くとき、彼らは自分たちの働きの実を見る。人間的な知恵を見せびらかしたり、自己を高めたりすることを断固として拒むとき、彼らは、サタンの攻撃に耐える働きをなし遂げる。多くの人々がやみから光へと導かれ、多くの教会が設立される。人々は、人間の器に対してではなく、キリストへと改心する。自己は背後に隠れてしまい、カルバリーのおかた、イエスのみが現れる。[301]

今日、キリストのために働いている人々は、使徒の時代に福音を宣伝した人々が表したように、優れた力を表すことができる。神は、パウロやアポロに、シラスやテモテに、また、ペテロやヤコブやヨハネに力をお与えになったように、今日も、神のしもべたちに力を与えようと待ち構えておられる。

使徒の時代には、キリストを信じると主張しながら、なお、キリストの使者たちを尊敬しないという、心得違いの人々がいた。彼らは、自分たちは人間の教師に従うのではなく、福音の働き人の助けを受けずに直接キリストから教えを受けるのだと主張した。彼らは気ままで、教会の声に従おうとはしなかった。そのような人々は、欺瞞ぎまんに陥るという重大な危険にさらされていた。

神は、多くの人々の知恵が寄せ合わされて、聖霊の意図が果たされるよう、神の任命された助け手として、さまざまの才能を持った人々を教会に置かれた。自分自身の強い個性に従って行動し、神のみわざに長い経験を持つ他の人々とくびきを共にすることを拒む人々は、自信から盲目となり、誤りと真理を見分けることができなくなるであろう。そのような人々が教会の指導者として選ばれるのは安全ではない。彼らは、兄弟たちの判断を顧みず、自分自身の判断や計画に従おうとするからである。自分自身、一歩ごとに助言を必要としていながら、キリストの謙遜さを学ぼうともせず、自分の力で人々の世話を焼こうとする者[302]

たちを通して働くことは、サタンにとって容易なことである。

印象だけでは義務に対する安全な手引きにはならない。敵はしばしば人々に、彼らを導いているのは神だと信じさせようとするが、実際には、彼らは人間の衝動に従っているにすぎないのである。しかし、もしわれわれが、よく注意し、そして兄弟たちと相談するなら、われわれは主のみこころが理解できるようになる。「へりくだる者を公義に導き、へりくだる者にその道を教えられる」というみ約束があるからである（詩篇二五ノ九）。

初代のキリスト教会には、パウロやアポロを認めようとせず、ペテロを自分たちの指導者として支持した人々がいた。彼らは、主がこの世におられたときペテロはキリストと最も親しく、一方、パウロは信者たちの迫害者だったと主張した。彼らの見解や感情は偏見に縛られていた。彼らは、キリストが心に内住しておられることをあらわす寛大さ、寛容さ、優しさを示さなかった。

この党派心は、キリスト教会に非常に悪い結果をもたらす危険があった。それでパウロは、熱心な訓戒と真剣な抗議を表明するよう、主より指示された。「『わたしはパウロにつく』『わたしはアポロに』『わたしはケパに』『わたしはキリストに』」と言っていた人々について、パウロは、「キリストは、いくつにも分けられたのか。パウロは、あなたがたのために十字架につけられたことがあるのか。それとも、あなたがたは、パウロの名によってバプテスマを受けたのか」と尋ねた。「だから、だれも人間を誇ってはいけない。すべては、あなたがたのものなのである。パウロも、アポロも、ケパも、世界も、生も、死も、[303] 現在のものも、将来のものも、ことごとく、あなたがたのものである。そして、あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものである」（コリント第一・一ノ一二、一三、三ノ二一一二三）。

パウロとアポロは完全に一致していた。アポロはコリント教会内の不一致に失望し、悲しんだ。彼は、自分に対して示された特別な好意を利用もしなければ、それを助長するようなこともしないで、急いでこの争いの地を去った。のちになってパウロが、コリントをもう一度訪れるようにすすめたときにも彼はことわり、ずっとのちになって教

会の霊的状態がよくなるまでは、二度とそこで働かなかった。

[304]

第二七章　エペソでのめざましい働き

本章は使徒行伝第一九章一節－二〇節に基づく

アポロがコリントで教えを説いていたとき、パウロはエペソに戻るという約束を果たした。彼は短期間、エルサレムを訪問し、それから彼の初期の働き場であったアンテオケにしばらく滞在した。そのあと、小アジアの「ガラテヤおよびフルギヤの地方を」歴訪し、彼が建てた教会を尋ねて信者たちの信仰を強めた（使徒行伝一八ノ二三）。

使徒たちの時代に、小アジアの西部はローマ帝国のアジア州として知られていた。首都エペソは商業の一大中心地であった。港は船舶で混み合い、通りは各地から来る人々でごった返していた。コリントと同様に、エペソも伝道のためには有望な地であった。

今やすべての文明化された地方へと散らされたユダヤ人は、一般にメシヤの来臨を期待していた。バプテスマのヨハネが説教をしていたとき、年ごとの祭りでエルサレムに
[305] やってきていた多くの人々が、ヨルダン川の岸に行って彼の話に耳を傾けた。そこで彼らはイエスが約束のメシヤであると言われるのを聞き、世界各地にこのおとずれを携えていったのである。こうして神のみ摂理により、使徒たちの働きのための道が備えられていた。

エペソへ到着してすぐ、パウロは、アポロのようにバプテスマのヨハネの弟子であった十二人の兄弟たちを見つけた。彼らもアポロのように、キリストの使命についてある程度の知識を持っていた。彼らにはアポロのような能力はなかったが、彼と同じ誠実な信仰をもって、彼らが受けていた知識をひろめようとしていた。

この兄弟たちは、聖霊の働きについて何も知らなかった。彼らは、聖霊を受けたかとパウロに聞かれると、「いいえ、聖霊なるものがあることさえ、聞いたことがありません」と答えた。「では、だれの名によってバプテスマを受けたのか」と彼がきくと、「ヨハネの名によるバプテスマを受けました」という答えであった。

そこでパウロは、クリスチャンの希望の基礎である偉大な真理を彼らに伝えた。彼はこの地上におけるキリストのご生涯のことや、残酷な恥辱の死について彼らに語った。また、いのちの主が死の障壁を打ち破り、死に勝利してよみがえられたことを教えた。彼は救い主が弟子たちにゆだねられたことを繰り返した、「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施」せ（マタ [306]
イ二八ノ一八、一九）。彼はまた、助け主を送るというキリストのみ約束についても彼らに教えた。その助け主の力により、力強いしるしと不思議が行われるのであった。そして彼は、このみ約束が、ペンテコステの日にいかに輝かしく成就したかを述べた。

深い関心と、感謝と驚きに満ちたよろこびをもって、兄弟たちはパウロの言葉に聞き入った。彼らは信仰により、キリストのあがないの犠牲というすばらしい真理を把握はあくし、自分たちのあがない主としてキリストを受け入れた。それから彼らは、イエスの名によるバプテスマを受けた。そして、パウロが「彼らの上に手をおく」と、彼らは聖霊のバプテスマをも受け、それによって、ほかの国のことばを話したり、預言したりすることができるようになった。こうして彼らは、エペソやその近辺、更に小アジアに福音を宣べ伝えに出て行く宣教師としての資格を与えられた。

これらの人々が、こうした経験を得て働き人として収穫の野に出て行くことができるようになったのは、謙遜で、素直な精神を持っていたからである。彼らの実例は、クリスチャンに非常に価値のある教訓を与えている。あまりにもうぬぼれが強いために学ぶ者となることができず、信仰生活においてほとんど進歩しない人々がたくさんいる。彼らは神のみことばの、上すべりの知識で満足している。彼らは自分たちの信仰や行いを変えたいとは思わず、より大いなる光を受けるための努力もしない。

キリストに従う者たちが、知恵を熱心に追い求めるならば、彼らはそれまで全く知らなかった広大な真理の野へと導かれるであろう。自分自身のすべてを神にささげている
者は、神のみ手によって導かれ る。彼は身分は低く、一見 [307]

何の才能もないように見えるかもしれない。しかし、もし愛と信頼の心で神のみこころの示しに従うならば、彼の能力はきよめられ、高尚にされ、活気づけられる。そして彼の可能性が伸ばされるのである。天来の知恵に関する教えを大事にするとき、神聖な任務が彼にゆだねられる。彼は自分の生涯を、神をあがめ、この世の祝福となるものとすることができる。「み言葉が開けると光を放って、無学な者に知恵を与えます」（詩篇一一九ノ一三〇）。

今日も、エペソの信者たちのように、聖霊が心に働きかけることを知らない人々が大ぜいいるが、神のみことばの中でこれほど明瞭に教えられている真理はない。預言者たちや使徒たちはこのことについてくわしく述べている。キリストご自身が、霊的生命を支える聖霊の働きについての例解として、植物の成長にわれわれの注意を促しておられる。ぶどうの樹液は、根から上って行き、枝に行きわたり、成長を支えて、花や実を結ばせる。それと同じように、聖霊のいのちを支える力は、救い主から生じて、魂に浸透し、動機や感情を新たにし、思いすらも神のみこころに従わせるようにして、清い行為という尊い実を結ばせてくれるのである。

この霊的生命の創造者は目に見えず、その生命が分かち与えられさずけられる正確な方法は、人間の思索力では説明できない。しかし、聖霊の働きは書かれたみことばに常に一致する。霊的世界は、自然界と同様である。肉体の生命は、一瞬一瞬神の力によって保たれている。しかもそれは、直接の奇跡によって支えられるのではなくて、われわれの手の届くところに置かれている祝福を用いることによって、支えられるのである。同様に、霊的な生命も、神のみ摂理によって備えられている方法を用いることによって支えられる。もしキリストに従う者が「全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで」（エペソ四ノ一三）成長しようとするならば、彼はいのちのパンを食べ、救いの水を飲まなければならない。彼はすべての事において、みことばの中に示された神の指示を心に留め、注意し、祈り、働かねばならない。

[308]

これらユダヤ人改宗者の経験の中には、われわれにとってさらにもう一つの教訓がある。ヨハネの手でバプテスマを受けたとき、彼らは罪を負うかたとしてのイエスの使命

を完全には理解していなかった。彼らは重大な思いちがいをしていた。しかしもっと明るい光がのぞんだとき、彼らはよろこんでキリストをあがない主として受け入れた。この進歩とともに、彼らの責任も変わってきた。彼らが一層純粋な信仰を受け入れたとき、彼らの生活はそれに応じて変化した。この変化のしるしとして、またキリストに対する信仰の表明として、彼らはイエスの名によってバプテスマを受けなおしたのであった。

いつものように、パウロはエペソでもユダヤ人の会堂で説教することから働きを始めた。彼はそこで三か月のあいだ働き続け、「大胆に神の国について論じ、また勧めをした」。最初は好意をもって受け入れられたが、しかし他の伝道地の場合と同様に、彼はすぐさま激しい反対に会った。「ある人たちは心をかたくなにして、信じようとせず、会衆の前でこの道をあしざまに言った」。彼らが福音を拒み続けたので、パウロは会堂での説教をやめた。

パウロが同国人のために働いているとき、神のみ霊は彼 [309]
とともに、彼を通して働いていた。真理を知りたいとまじめに望んでいるすべての人々に、確信を与えるのに十分な証拠が示されていた。しかし多くの人々は、自らを偏見と不信に支配されるがままにまかせて、最も確実な証拠に従うことを拒んだ。真理の反対者たちとこのまま交わりを続けていれば、信徒の信仰が危うくなるのではないかと恐れて、パウロは彼らを離れ、弟子たちを別個の群れとして集め、かなり著名な教師、ツラノの講堂で公開の説教を続けた。

「敵対する者も多」くいたが、自分の前に「有力な働きの門」が開かれているのをパウロは知った。（コリント第一・一六ノ九）。エペソはアジアの諸都市の中で、最も壮麗だったばかりでなく、最も堕落していた。迷信や官能的快楽が、人口の多いこの都市を支配していた。神殿のかげに、あらゆる種類の犯罪者がひそみ、最も堕落的な悪徳が栄えていた。

エペソはアルテミス礼拝の有名な中心地であった。「エペソ人のアルテミス」の壮麗な神殿の名声は、アジア全土にまた全世界に行きわたっていた。神殿はその比類のない美しさのために、市ばかりでなくまた国の誇りであった。神殿の内部の偶像は、天から下ってきたと伝説に言われて

いた。その像に象徴的な字がきざまれていて、それには偉大な力があると信じられていた。これらの象徴の意味と用法を説明するために、エペソ人はいろいろの本を書いていた。

こうした高価な本を念入りに研究していた人々の中に、[310] 多くの魔術師たちがいて、彼らは、神殿の中 の像を迷信的に拝んでいる人々の心に、強力な影響を及ぼしていた。

使徒パウロは、エペソでの働きにおいて、神の恵みの特別なしるしを与えられた。彼の伝道には神の力が伴い、多くの者が肉体の病弊からいやされた。「神は、パウロの手によって、異常な力あるわざを次々になされた。たとえば、人々が、彼の身につけている手ぬぐいや前掛けを取って病人にあてると、その病気が除かれ、悪霊が出て行くのであった。」こうした超自然の力のあらわれは、それまでエペソで見られたものよりもずっと強力であって、手品師の技術や魔術師の魔法などではまねのできない性格のものであった。これらの奇跡はナザレのイエスの名によって行われたので、人々は天の神が、アルテミス女神を拝んでいる魔術師たちよりももっと力あるおかたであることを知る機会が与えられた。こうして主は、偶像礼拝者たち自身の目の前で、最も有力で人気ある魔術師たちより測り知れないほど高く、神のしもべを高められた。

悪の霊をすべて従わせ、ご自分のしもべたちに、悪霊に打ち勝つ権威をお与えになった神は、神の聖なるみ名を軽蔑べつし汚す者たちに、更に大きな恥と敗北をもたらそうとしておられた。魔術はモーセの律法により、死刑をもって禁じられていたが、しかし時々、背信したユダヤ人によりひそかに行われていた。パウロがエペソを訪問したとき、この都市には「ユダヤ人のまじない師で、遍歴している者たちが」おり、パウロが不思議なわざを行うのを見て、試しに「悪霊につかれている者にむかって、主イエスの名をとなえ」た。「ユダヤの祭司長スケワという者の七[311] 人のむすごたちも」そんなことをしていた。悪 霊につかれている人を見つけて、彼らは「パウロの宣べ伝えているイエスによって命じる」と言った。しかし「悪霊がこれに対して言った、『イエスなら自分は知っている。パウロもわかっている。だが、おまえたちは、いったい何者だ』。そして、悪霊につかれている人が、彼らに飛びかかり、みん

なを押えつけて負かしたので、彼らは傷を負ったまま裸になって、その家を逃げ出した」。

このようにして、キリストのみ名の神聖さと、救い主の宣教が神よりのものであることを信じないでこの名をとなえる危険について、間違えようのない証拠が与えられた。「みんな恐怖に襲われ、そして、主イエスの名があがめられた。」

これまで隠されていた事実が、いまや明るみに出された。キリスト教を受け入れるにあたって、信者たちの中には迷信を完全に捨てきれない人々がいた。彼らはある程度まだ魔術をつづけていた。今、彼らは自分たちの過ちに気がつき、「信者になった者が大ぜいきて、自分の行為を打ちあけて告白した」。魔術師たち自身の中にもよい働きがひろがり、「魔術を行っていた多くの者が、魔術の本を持ち出してきては、みんなの前で焼き捨てた。その値段を総計したところ、銀五万にも上ることがわかった。このようにして、主の言はますます盛んにひろまり、また力を増し加えていった」。

エペソの改宗者たちは、魔術に関する本を焼くことによって、かつては自分たちがよろこんでいたものが、今は嫌悪すべきものになったことを示した。彼らはこれまで、魔術を行うことによって特に神を怒らせ、おのれの魂を危険に陥れていた。そうした魔術に対して、彼らはそのような憤りを示したのであった。こうして彼らは真の回心の証拠を示した。[312]

これらの占いの書物には、悪霊とのまじわりの規則と方式が書かれていた。それはサタンの礼拝の規則、すなわち、サタンの助けを求め、サタンから知識を得るための手引きであった。こうした本を手元に置いておけば、弟子たちは自分たちを誘惑にさらすことになったであろう。また、それらを売れば、ほかの人たちに誘惑となったであろう。弟子たちはやみの王国を拒絶し、その勢力を滅ぼすためには、どんな犠牲を払うこともためらわなかった。こうして真理は、人間の偏見と金銭欲とに勝利した。

キリストの力がこのようにあらわれたことによって、迷信の本拠地において、キリスト教は大いなる勝利を得た。この事件は、パウロさえ悟らなかったほどの広汎はんな影響を及ぼした。エペソからこの事件が広く伝えられて、キ

リストのための働きは力強く促進された。使徒パウロが、人生の旅路を終えてからずっとのちまでも、これらの光景は人々の記憶に残り、人々を福音へと改心させる手段となった。

異教の迷信は二十世紀の文明以前に消えてしまったと、愚かにも考えられている。しかし、神のみことばと、事実の断固とした証拠は、昔の魔術師の時代と全く同じように現代においても、魔術が行われていることを言明している。古代の魔術の方法は、実際は、現代の心霊術として知られているものと同じである。サタンは死別した友人たちを装って現れ、幾千もの人々の心に近づく。「死者は何事をも知らない」と聖書は、はっきり述べている（伝道の書九ノ五）。死者の思い、愛、憎しみは消えうせている。死者は生きている者たちと交わりを持たない。しかし、初めから狡猾こうかつなサタンは、人々の心を支配 するために、この策略を用いるのである。[313]

心霊術によって、多くの病人や遺族や好奇心の強い人々が、悪霊と交わっている。これをあえて行う者はみな危険な場所にいる。真理のみことばは、神が彼らをどう見ておられるか述べている。昔、神は、使者をつかわして異教のお告げに相談を求めた王に、厳しい審判をお下しになった。「『あなたがたがエクロンの神バアル・ゼブブに尋ねようとして行くのは、イスラエルに神がないためか』。それゆえ主はこう仰せられる、『あなたは、登った寝台から降りることなく、必ず死ぬであろう』」（列王紀下一ノ三、四）。

今日の降神術の霊媒、透視者、占い師たちは、異教の時代の魔術師たちに当たる。エンドルやエペソで語った神秘的な声は、今もなお、その偽りの言葉で人の子らを惑わしている。われわれの目からおおいが取り去られるならば、悪天使たちが人類を欺き滅ぼすために、あらゆる手段を用いているのが見えるであろう。人間に神を忘れさせるような力が働いているところではどこでも、サタンがその魔力を働かせているのである。サタンの力に従うとき、知らないうちに、心は迷わされ、魂は汚される。今日の神の民らは、エペソの教会に与えられたパウロの訓戒を、心にとめねばならない。「実を結ばないやみのわざに加わらない

で、むしろ、それを指摘してやりなさい」（エペソ五ノ一一）。

[314]

第二八章　銀細工人たちの騒動

本章は使徒行伝一九章二一節－四一節、二〇章一節に基づく

エペソは三年以上にわたって、パウロの働きの中心地であった。繁栄した教会がここに立てられ、この都市から福音は、アジヤ州全体に、ユダヤ人にも異邦人にも伝えられた。

使徒パウロはかなり長いあいだ、他の伝道旅行を思案していた。彼は「御霊に感じて、マケドニヤ、アカヤをとおって、エルサレムへ行く決心をした。そして言った、『わたしは、そこに行ったのち、ぜひローマをも見なければならない』」。この計画に合わせて彼は、「自分に仕えている者の中から、テモテとエラストとのふたりを、まずマケドニヤに送り出し」たが、エペソの働きのためにまだ自分の滞在が必要であると感じたので、ペンテコステの後まで自分はとどまることに決めていた。しかしまもなく、一つの事件が起こり、そのために彼の出発が早くなった。

エペソでは、一年に一回、女神アルテミスのために特別な行事が催された。州の各地から大ぜいの人 人が集まってきた。この期間中、お祭りが最も盛大に、はなやかに行われた。[315]

このお祭りの期間は、新しく信仰にはいったばかりの人たちにとって試練の時であった。ツラノの講堂に集まった信者の一団は、お祭り気分にそぐわない異分子のように見られ、嘲笑と非難と侮辱とが容赦なく彼らに浴びせられた。パウロの働きは異教の礼拝に痛烈な打撃を与えており、その結果、異教のお祭りに参加しない者や、参拝に熱のこもらない者が目に見えて多かった。パウロの教えの影響は、信仰へと実際に改宗した人々よりはるかに広く及んでいた。新しい教えを公然とは受け入れていなかった者たちも、多くが、異教の神々に対する信頼をすっかり失ってしまうほどに、光を受けていた。

不満の原因はもう一つあった。エペソでは、アルテミスの宮や像にかたどった小さな神殿や像の製造販売から、手広く利益の多い商売が発達していた。この産業に利害関係のある人々は、自分たちのもうけが少なくなって行くことに気がつき、このおもしろくない変化はパウロの働きのせいだと、みなで言い合っていたのである。

デメテリオという銀細工人が、その職人たちを集めて言った、「諸君、われわれがこの仕事で、金もうけをしていることは、ご承知のとおりだ。しかるに、諸君の見聞きしているように、あのパウロが、手で造られたものは神様ではないなどと言って、エペソばかりか、ほとんどアジヤ全体にわたって、大ぜいの人々を説きつけて誤らせた。これでは、お互の仕事に悪評が立つおそれがあるばかりか、大女神アルテミスの宮も軽んじられ、ひいては全アジヤ、いや全世界が拝んでいるこの大女神のご威光さえも、消えてしまいそうである」。これらの言葉が人々の激情をかり立てた。「人々は怒りに燃え、大声で、「大いなるかな、エペソ人のアルテミス」と叫びつづけた。」 [316]

この演説の噂はたちまち広まり、「町中が大混乱に陥」った。パウロの捜索が行われたが、彼はどこにも見当たらなかった。危険を予知した兄弟たちが、パウロを急いで去らせたのである。使徒を守護するために神の天使たちがつかわされた。殉教者としてパウロが死ぬ時は、まだきていなかった。

群衆は怒りをぶつける相手を発見できなかったので、「パウロの道連れであるマケドニヤ人ガイオとアリスタルコとを捕えて、いっせいに劇場へなだれ込んだ」。

パウロのかくれ場所はそれほど遠いところではなかったので、彼はすぐに愛する兄弟たちの危険を知った。自分自身の安全など忘れて、彼はすぐに劇場へ行って暴徒たちに演説したいと望んだ。しかし、「弟子たちがそれをさせなかった」。ガイオとアリスタルコは、人々が探していた獲物ではなかったので、ふたりにひどい危害が加えられるおそれはなかった。しかし、もし、使徒パウロの心痛に青ざめた顔を見たら、群衆はすぐさま最悪の興奮状態となり、彼の命を救う可能性は全くないであろう。

パウロは、大衆の前で真理を擁護したいとなおも望んだが、劇場から届いた警告の知らせに、ついに思いとど

まった。「アジヤ州の議員で、パウロの友人であった人たちも、彼に使をよこして、劇場にはいって行かないようにと、しきりに頼んだ。」

劇場の中では騒ぎがますます激しくなり、「ある者はこ
[317] のことを、ほかの者はあのことを、どなりつ づけていたので、大多数の者は、なんのために集まったのかも、わからないでいた」。パウロとその弟子のある者たちがヘブル系であることから、ユダヤ人たちは、自分たちはパウロも彼の活動をも支持していないのだということをはっきり示しておかねばと思った。そこで彼らは、仲間のうちからひとりを前に押し出して、人々に説明しようとした。選ばれた演説者は職人たちの一人、銅細工人のアレキサンデルで、のちにパウロを大いに苦しめたものだとパウロが言っている者であった（テモテ第二・四ノ一四参照）。アレキサンデルはかなり能力のある男で、彼は全精力を傾けて、人々の怒りをひたすらパウロとその弟子たちに向けさせようとした。しかし群衆は、アレキサンデルがユダヤ人だとわかると、彼を押しのけて、「みんなの者がいっせいに『大いなるかな、エペソ人のアルテミス』と二時間ばかりも叫びつづけた」。

とうとう、人々は、へとへとに疲れ切り、騒ぎをやめた。そして一瞬の沈黙があってのち、市の書記役が群衆の注意を引き、役職の力で発言の機会を得た。彼は人々の立場に立って話し、このような騒ぎを起こす理由はないのだと説明した。彼は人々の理性に訴えた。「『エペソの諸君、エペソ市が大女神アルテミスと、天くだったご神体との守護役であることを知らない者が、ひとりでもいるだろうか。これは否定のできない事実であるから、諸君はよろしく静かにしているべきで、乱暴な行動は、いっさいしてはならない。諸君はこの人たちをここにひっぱってきたが、彼らは宮を荒す者でも、われわれの女神をそしる者でもない。だから、もしデメテリオなりその職人仲間なり
[318] が、だれかに対して訴え事がある なら、裁判の日はある
[319] し、総督もいるのだから、それぞれ訴え出るがよい。しかし、何かもっと要求したい事があれば、それは正式の議会で解決してもらうべきだ。きょうの事件については、この騒ぎを弁護できるような理由が全くないのだから、われわ

れは治安をみだす罪に問われるおそれがある』。こう言って、彼はこの集会を解散させた。」

デメテリオは演説の中で、「これでは、お互の仕事に悪評が立つおそれがある」と述べたが、こうした言葉は、エペソにおける騒動の本当の原因、また、使徒たちの活動に伴った迫害の主な原因を、明らかにしている。デメテリオや仲間の職人たちは、福音が教え広められることによって、偶像造りの商売が危機に瀕ひんするのを見た。異教の祭司や職人たちの収入は危うくなった。この理由で、彼らはパウロに激しく反対したのである。

市の書記役やその他要職にある人々の裁定で、パウロは不法な行為に何の関係もない者であることが人々の前に明らかにされた。これは誤謬ごびゅうと迷信に対するキリスト教の再度の勝利であった。神は、ご自分の使徒を弁護し、騒いでいる暴徒を静めるために、一人の偉大な長官をお立てになったのであった。パウロは自分の生命が保護され、またエペソの騒動でキリスト教に汚名がきせられなかったことで、神への感謝の念に満たされた。

「騒ぎがやんだ後、パウロは弟子たちを呼び集めて激励を与えた上、別れのあいさつを述べ、マケドニヤへ向かって出発した。」この旅では、ふたりの忠実なエペソの兄弟、テキコとトロピモがパウロの 同行者であった。 [320]

エペソにおけるパウロの働きは終わった。ここでのパウロの伝道は、絶えまない働きと多くの試練と深い苦悩の連続であった。彼は公衆の面前で、また家ごとに訪問して人々を教え、多くの涙をもって彼らを教育し、また注意を与えた。彼はたえずユダヤ人から反対された。彼らはどんな機会ものがさず、パウロに対する民衆の反対をかきたてたのである。

こうして、反対と戦い、たゆまない熱意をもって福音事業をおし進め、まだ信仰的に若い教会の利益を守りながら、一方、パウロはすべての教会に対する重い責任を心に負っていた。

パウロが建てた教会のうちのあるところで、背信が起きたという知らせは、彼を深く悲しませた。彼らのためにささげた努力がむだになるのではないかと彼はおそれた。彼の働きを妨げるために用いられた方法について知ったとき、彼は幾夜も眠れぬまま祈りと真剣な思いのうちに過

ごした。機会があるごとに、また彼らの状況に応じて、彼は叱責、勧告、訓戒、激励の手紙を教会に書き送った。このような手紙の中で、使徒は自分自身の試練についてくどくど述べてはいないが、しかしキリストのための彼の骨折りや苦しみについて、時おりかいま見ることができる。むち打ちや投獄、寒さと飢えと渇き、陸路や水路での危険、町や荒野での危険、同国人や、異邦人や、偽兄弟たちから受ける危険など、こうしたことすべてを、彼は福音のために耐えた。彼は「ののしられ」、「はずかしめられ」、「人間のくずのようにされ」、「途方にくれ」、「迫害され」、「四方から患難を受け」、「いつも危険を冒し」、[321] 「イエスの ために絶えず死に渡されてい」た。

絶えまない反対の嵐と、敵の怒号と、友の離反のさ中にあって、さすが剛毅ごうきなパウロもくじけそうになることがあった。しかし彼はカルバリーの十字架をふり返り、新たな熱意に燃えて前進し、十字架につけられたイエスについての知識を宣べ伝えた。彼は、自分の前を歩かれたキリストの血だらけの道を、歩いているにすぎなかった。彼はあがない主の足もとに武装を解くまで、戦いから解放されたいと願わなかった。

第二九章　共に悩み、共に喜ぶ [322]

本章は、コリント人への第一の手紙に基づく

コリント教会への第一の手紙は、使徒パウロが、エペソに滞在中の後期に書いたものである。彼は、他のだれよりも、コリントの信者たちに深い関心を抱き、たゆまず彼らのために努力した。彼は、一年半にわたって、彼らのあいだで働き、十字架にかけられてよみがえられた救い主を、唯一の救いの道として示し、主の恵みの改変力に絶対的に信頼するように勧めた。彼は、キリスト教を信じると告白した人々を教会の交わりに受けいれる前に、キリスト教の信者の特権と義務について、彼らに注意深く訓戒を与え、バプテスマの誓約に忠実であるよう彼らを助けるために、熱心に努力したのである。

パウロは、すべての人が、たえず彼らを欺き陥れようとする悪の勢力と戦わなければならないことを痛感して、信仰に入ってまだ日の浅い人々を強め、信仰を堅くさせるために、たゆまず働いた。パウロは、神に対する全的降伏を彼らに勧めた。なぜならば、この降伏がなければ、罪は捨て去られておらず、食欲と情欲は、まだ力を振るおうとし、誘惑は、良心を混乱させるからである。 [323]

降伏は、完全でなければならない。人間は、どんなに力弱く、疑念に閉ざされ、苦闘していても、主に完全に服従する者はみな、彼を勝利者とすることができる力に、直接触れるのである。天は、彼のそば近くにある。そして、すべての試練と必要の時に、恵みの天使の支えと助けを受けるのである。

コリントの教会の信者は、最も魅惑的な形態の偶像礼拝と官能主義にとりかこまれていた。パウロが、彼らと共にいたときは、こうした勢力は、彼らに対してほとんど影響を及ぼさなかった。パウロの堅固な信仰、熱烈な祈り、真剣な教えの言葉、そして、何にもまして、彼の虔けんな生活が、罪の快楽にふけるよりキリストのために自己を否定するよう、彼らを励ました。

しかし、パウロが去ったあと、情勢が思わしくなくなった。敵のまいた毒麦が、麦の中に出て来た。そして、まもなく、毒麦は悪い実を結び始めた。これはコリントの教会にとって、激しい試練の時であった。彼らの熱意を奮いたたせ、神と一致した生活を送るように彼らを助ける使徒パウロは、もういなかった。そして、多くの者は、徐々に、軽率と無関心におちいり、生来の好みと傾向のままに生活するようになった。純潔と高潔という高い理想に到達するようにと、幾度となく彼らに勧告を与えた者は、もう彼らと共にいなかった。そして、改心した時に悪習慣を捨て去った者の多くが、また、異教の堕落的な罪に逆もどりした。

パウロは、短い手紙を教会に送って、不品行をやめない
[324] 人々とは「交際してはいけない」と勧告した。しかし、多くの信者は、パウロの真意を曲解し、彼の言葉に対して、勝手な理屈を言って、その教えを無視する口実にした。

教会は、種々の問題について勧告を求める手紙をパウロに送ったが、彼らの中の重大な罪については、何も言わなかった。しかし使徒パウロは、教会の真の状態が隠されていること、また、手紙の筆者たちが、自分たちの都合のよいように解釈できるような言葉をパウロから引き出そうとしていることを、聖霊によって、力強く知らされた。

そのころ、コリントで評判のよいクリスチャン家族、クロエの家の者たちが、エペソに来た。パウロが彼らに事情をたずねたところ、彼らは、教会が分裂していることを彼に語った。アポロが訪問したときに起こった紛争が、いよいよ激しさを増していた。にせ教師たちが、パウロの教えを軽蔑するように信者たちを仕向けていた。福音の教理と儀式が曲解されていた。かつては熱心なクリスチャン生活を送っていた人々のあいだに、高慢と偶像礼拝と官能主義が、ますますふえひろがっていた。

パウロは、こうした状態を知らされたときに、彼の恐れていた最悪の事態が起きたことを悟った。しかし、そうだからといって、彼の働きが失敗であったとは考えなかった。彼は、「心の憂い」と「多くの涙」をもって、神の勧告を求めた。すぐにコリントを訪問することが、最善の道であったなら、彼はよろこんでそうしたことであろう。しかし、彼は、信者たちの現状にかんがみて、自分が骨折っ

ても益にならないことを知っていたので、のちに彼が訪問するときの準備として、テトスをつかわした。そして、使徒パウロは、不可解でよこしまな行動をとった人々に対する彼の個人的感情をすべて捨て去って、神に信頼をよせ、彼のすべての手紙の中で最も豊かで、最も教訓に富み、最も力強い手紙の一つを、コリントの教会にあてて書いたのである。 [325]

パウロは、驚くべき明確さをもって、教会が提出した問題に解答を与え、一般的原則を定めた。もし、これらに留意するならば、彼らはより高い霊的水準へと導かれるのであった。彼らは、危機におちいっていた。そしてパウロは、この重大な危機に当たって彼らの心を動かすのに失敗するというようなことは、考えただけでも耐えられなかった。誠意をこめて彼は、彼らの危険について警告し、彼らの罪を責めた。彼は、ふたたび、彼らにキリストを指し示し、初めのころの献身の炎をもう一度燃え立たせようとした。

コリントの信者に対する使徒パウロの大きな愛は、教会へあてた優しいあいさつの言葉にあらわされている。パウロは、彼らが偶像礼拝を捨てて、真の神を礼拝し、仕えるようになったことに言及した。彼らが受けた聖霊の賜物を思い起こさせ、クリスチャン生活においてたえず進歩し、ついにはキリストの純潔と神聖さに到達することが、彼らの特権であることを教えた。「あなたがたはキリストにあって、すべてのことに、すなわち、すべての言葉にもすべての知識にも恵まれ、キリストのためのあかしが、あなたがたのうちに確かなものとされ、こうして、あなたがたは恵みの賜物にいささかも欠けることがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現れるのを待ち望んでいる。主もまた、あなたがたを最後まで堅くささえて、わたしたちの主イエス・キリストの日に、責められるところのない者にして下さるであろう」と彼は書いた。 [326]

パウロは、コリントの教会に起きた不和について腹蔵なく語り、争いをやめるよう教会員たちに勧告した。「さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの名によって、あなたがたに勧める。みな語ることを一つにし、お互の間に分争がないようにし、同じ心、同じ思いになって、堅く結び合っていてほしい」と彼は書いた。

パウロは、教会の分裂のことを、どのようにして、また、だれに聞いたかを言ってもよいと思った。「わたしの兄弟たちよ。実は、クロエの家の者たちから、あなたがたの間に争いがあると聞かされている」。

パウロは、霊感を受けた使徒であった。彼が、他の人々に教えた真理は、「啓示によっ」て与えられたものであった。しかし、主は、神の民の状態がどのようなものであるかを、彼に、常に直接啓示されたわけではない。この場合においては、コリントの教会が栄えることに関心を持っていた人々、そして害悪が忍び込んでくるのを見た人々が、パウロにそのことを言ったのであって、彼は、以前に受けた神からの霊感によって、こうした事態の発展が何であるかを判断することができた。主は、この特別の時のために新しい啓示をお与えにはならなかったが、真に光を求めていた人々は、パウロの言葉を、キリストのみこころをあらわしたものとして受けいれた。主は、教会に起こってくる困難や危険を既にパウロに示しておられた。そして、そのような害悪が生じてきたとき、彼は、それらの意味を悟る
[327] ことがで きた。彼は、教会を擁護するために立てられていた。パウロは、神に言い開きをすべき者として責任を持って、人々を見守らなければならなかった。したがって、彼らのあいだに無秩序と分裂があるという報告に注意することは、彼にとって、当然かつ正当なことであった。そして、彼が彼らに書き送った譴責は、疑いもなく、彼の他の手紙と同様に、神の霊の感動によって書かれたのである。

パウロは、彼の働きの実を破壊しようとしていた偽教師たちについては、何も言わなかった。教会内の暗黒と分裂のために、彼は、彼らに言及して刺激することを賢明にも差し控えた。それは、ある人々を、真理から全く離反させてしまわないためであった。彼は、彼らのあいだにおける自分の働きは、「熟練した建築師のように」土台をすえることで、他の人々がその上に家を建てるのであると言った。しかし、そうだからといって、自分を高めたのではない。「わたしたちは神の同労者である」と彼は言った。彼は、自分自身の知恵を誇らず、ただ神の力によってのみ、神に喜ばれるような方法で真理を伝えることができたことを認めた。パウロは、教師中の大教師キリストと結合することによって、神の知恵の教えを伝えることができた。そ

れは、どんな階層の人々の必要をも満たし、どんな時代、どんな場所、どんな状態のもとにおいても当てはまるものであった。

コリントの信者間において生じた、いっそう深刻な害悪の一つは、多くの者が、異教の堕落した習慣に逆もどりしたことであった。かつての一改心者は、異邦人のあいだの低い道徳的標準をさえ犯すほどの、みだらな生活に逆もどりしていた。パウロは、「その悪人を」彼らのあいだから除いてしまうよう に教会に訴えた。「あなたがたは、少し [328] のパン種が粉のかたまり全体をふくらませることを、知らないのか。新しい粉のかたまりになるために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたは、事実パン種のない者なのだから」と、パウロは彼らに忠告した。

教会に生じたもう一つの大きな害悪は、兄弟たちが互いに訴訟を起こしていたことであった。信者間の諸問題の解決のためには、十分な規定が設けられていた。キリストご自身が、そのような問題を調整する方法を明白にお教えになっていた。「もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、行って、彼とふたりだけの所で忠告しなさい。もし聞いてくれたら、あなたの兄弟を得たことになる。もし聞いてくれないなら、ほかにひとりふたりを、一緒に連れて行きなさい。それは、ふたりまたは三人の証人の口によって、すべてのことがらが確かめられるためである。もし彼らの言うことを聞かないなら、教会に申し出なさい。もし教会の言うことも聞かないなら、その人を異邦人または取税人同様に扱いなさい。よく言っておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天でも皆つながれ、あなたがたが地上で解くことは、天でもみな解かれるであろう」と救い主は勧告された（マタイ一八ノ一五－一八）。

パウロは、この明白な勧告を見失ってしまったコリントの信者たちに、はっきりした忠告と譴責を書き送った。「あなたがたの中のひとりが、仲間の者と何か争いを起した場合、それを聖徒に訴えないで、正しくない者に訴え出るようなことをするのか。それとも、聖徒は世をさばくものであることを、あなたがたは知らないのか。そして、世があなたがたによってさばかれるべきであるのに、きわめて小さい 事件でもさばく力がないのか。あなたがたは知ら [329] ないのか、わたしたちは御使をさえさばく者である。まし

てこの世の事件などは、いうまでもないではないか。それだのに、この世の事件が起ると、教会で軽んじられている人たちを、裁判の席につかせるのか。わたしがこう言うのは、あなたがたをはずかしめるためである。いったい、あなたがたの中には、兄弟の間の争いを仲裁することができるほどの知者は、ひとりもいないのか。しかるに、兄弟が兄弟を訴え、しかもそれを不信者の前に持ち出すのか。そもそも、互に訴え合うこと自体が、すでにあなたがたの敗北なのだ。なぜ、むしろ不義を受けないのか。・・・・しかるに、あなたがたは不義を働き、だまし取り、しかも兄弟に対してそうしているのである。それとも、正しくない者が神の国をつぐことはないのを、知らないのか」。

サタンは、常に、神の民の中に、不信と離反と悪意を持ち込もうとしている。われわれは、実際は何の原因もないにもかかわらず、自分たちの権利が侵害されているように考えたくなることがよくある。キリストと彼の事業を愛することよりも、もっと強く自分を愛する者は、自分自身の利益をまず第一にし、どんな手段を講じてでもそれを守り、維持しようとする。良心的なクリスチャンと思われる多くの人々でさえも、誇りと自尊心のゆえに、過ちを犯していると思われる人々のところへ個人的に行って、キリストの精神をもって彼らと語り、互いのために共に祈ることをしないのである。ある者は、兄弟たちから害をこうむったと考えたら、救い主の規則に従うかわりに、訴訟をさえ起こすであろう。

クリスチャンは、教会員のあいだに起こる問題を解決
[330] するのに、裁判に訴えるべきではない。そのような諸問題は、キリストの教えに従って、彼ら自身のあいだで、または、教会によって、解決されなければならない。たとえ、不正が行われたとしても、柔和で心のへりくだったイエスの、弟子たちは、教会の兄弟たちの罪を世に公表するよりは、むしろ「だまされて」いるのである。

兄弟間の裁判沙汰ざたは、真理の働きに対する恥辱である。訴訟を起こすクリスチャンは、教会を敵の嘲笑にさらし、暗黒の勢力を勝利させる。彼らは、キリストをふたたび傷つけ、キリストをさらし者にする。彼らは、教会の権威を無視することによって、教会に権威をお与えになった神を軽蔑するのである。

パウロは、このコリント人への手紙の中で、キリストの力が、彼らを悪から守ることを示そうと努めた。もし彼らが、示された条件に従うならば、大いなる神の力によって強くなることを、彼は知っていた。パウロは、彼らが罪の奴隷から解放され、神を恐れて全く清くなるための助けとして、彼らに対する神の所有権を強調した。すなわち、改心のとき彼らは、自分たちの生涯を神にささげたのであった。「あなたがたは、キリストのもの」であると、パウロは断言した。「あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい」。

使徒パウロは、純潔と聖潔の生活から、異教の腐敗した習慣にもどることの結果を、はっきりと述べた。「まちがってはいけない。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、・・・・盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者は、いずれも神の国をつぐことはないのである」。彼は、下劣な情欲 や食欲を抑制するように [331] 彼らに訴えた。「あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であ」る。

パウロは、豊かな知的資質を持っていたが、生活においても、まれに見る知恵の力をあらわし、機敏な洞察力と心からの同情によって、親しく他の人々と交わり、彼らの善い性質を呼びさまし、より高い生活へと努力するように彼らを奮い立たせた。彼の心は、コリントの信者たちへの心からの愛に満ちていた。彼らが内的敬虔けんをあらわし、誘惑に対して強く抵抗することを彼は渇望した。彼は、クリスチャンの道のりの一歩一歩において、彼らがサタンの会堂の者たちの反対に会い、日ごとに戦いに従事しなければならないことを知っていた。彼らは、敵のひそかな侵入に対して防備を怠らず、古い習慣と生まれながらの傾向を退けて、常に目をさまして祈らなければならなかった。パウロは、クリスチャンの高い境地には、多くの祈りと、常に目をさましていることによってしか到達できない、ということを知っていた。そして、このことを彼らの心に教えこもうと努めた。しかしまた、彼は、彼らが、十字架にかけられたキリストによって、魂を悔い改めさせる十分な力

が与えられ、悪に対するすべての誘惑に抵抗できる者とされることも、知っていた。神に対する信仰を武具とし、神の言葉を戦いの武器とするとき、彼らは内的な力を与えられて、敵の攻撃をかわすことができるのであった。

コリントの信者たちは、神の事柄に関して、より深い経験が必要であった。彼らは、神の栄光を見つめて、品性が徐々に変えられていくということが、どんなことなのか[332]十分に知らなかった。彼らは、そ の栄光のきざしをかいまみたに過ぎなかった。パウロが彼らに願ったことは、彼らが、神に満ちているもののすべてをもって満たされ、あしたの光のように現れる神を知り、ますます神のことを学んで、完全な福音信仰の真昼の輝きに到達することであった。

第三〇章　競走に勝ち抜くために [333]

本章は、コリント人への第一の手紙に基づく

パウロは、コリントの信者たちの心に、堅固な自制心と厳格な節制、そしてキリストに仕えるゆるがぬ熱意の大切さを、はっきり刻みつけたいと願って、彼らにあてた手紙の中で、クリスチャンの戦いと、コリントの近くで、定期的に開催された有名な競走とを、印象的に比較した。競走は、ギリシア人とローマ人が始めたあらゆる競技のうちで、最も古く、最も重んじられたものであった。王侯、貴族、政治家たちが列席してそれを見守った。富と地位を持った青年たちが競走に参加し、賞を得るために必要などんな努力や訓練をもいとわなかった。

競走は、厳しい規則に従って行われ、それに対して不服の申し立てはできなかった。賞をめざして競走に参加したいと望む者は、まず、厳格な準備訓練を受けねばならなかった。食欲にふけること、あるいはそのほか、精神的肉体的活力を低下させるような楽しみは、すべて堅く禁じられた。強さと速さを 競うこうした試合に勝利しようと望む [334]
者は、その筋肉が強く、柔軟で、神経は十分な抑制の下になければならなかった。すべての行動が確実で、その一歩一歩は、迅速で確かなものでなければならなかった。肉体の能力は、最高の標準に到達しなければならなかった。

競走の選手たちが、待ちかまえた観衆の前に、姿を現わすと、彼らの名が発表され、競走の規則が明示された。それから彼らは、いっせいにスタートした。観衆がじっと見つめていると思うと、彼らは勝利への意欲をかきたてられた。審判たちは、ゴール附近に席を占めて、競走の最初から最後までを見守り、真の勝利者に賞を与えようとした。もしだれかが、不正な手段によって一着になっても、賞は与えられなかった。

こうした競走には、大きな危険が伴っていた。肉体的な恐るべき負担から、二度と回復しない者もあった。走っている途中で、口や鼻から血を出して倒れることもまれでは

なく、時には、選手が、賞をつかもうとした時に倒れて死んでしまうこともあった。しかし、一生残る障害や死の可能性も、勝利者に与えられる栄誉と比較するならば、大きすぎる危険とは考えられなかったのである。

勝利者がゴールにはいると、大観衆の拍手がわき起こって周囲の丘や山に鳴りひびいた。全観衆の注目する中で、審判は彼に、勝利の象徴である月桂樹の冠と、右手に持つしゅろの枝を手渡した。彼は国中でほめそやされた。彼の両親には栄誉が与えられ、彼の住んでいた町でさえ、このように偉大な選手を生み出したことを称賛された。

[335] パウロは、こうした競走を、クリスチャンの戦いの比喩ゆとして引用し、選手が競走に勝利するために必要な準備——準備訓練、節食、そして節制の必要——を強調した。「しかし、すべて競技をする者は、何ごとにも節制をする」と彼は断言した。競走する者は、体力を弱める傾向のあるあらゆる楽しみを捨て去り、厳格な不断の訓練によって、筋肉の強さと耐久力をきたえ、いよいよ競技の日が来たならば、できる限りの力をふりしぼるのである。ましてクリスチャンの場合は、自分たちの永遠の利益がかかっているのだから、食欲と情欲を理性と神のみこころに従わせることが、どんなにか重要なことであろう。決して彼は、娯楽やぜいたくや安逸に心を奪われてはならない。彼のすべての習慣と情欲は、最も厳格な訓練の下におかれなければならない。神の言葉の教えに照らされ、聖霊の導きを受けた理性が、支配権を握らなければならない。

クリスチャンは、このようにした後で、勝利を得るために全力をつくさなければならない。コリントの競技において、競走者たちは、その最後の数歩のところで、速度を落とさないように、死に物狂いの努力をしたのである。そのように、クリスチャンも、ゴールに近づくにつれて、競走の最初よりも、さらに大きな熱意と決心をもって前進するのである。

パウロは、競走の勝者が受ける朽ちる花の冠と、クリスチャンの競走に勝利を得る者に与えられる永遠の栄光の冠とを比較している。「彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである」と彼は言う。ギリシアの競走者たちは、朽ちる賞を
[336] 得るために、どん な苦しみも訓練もいとわなかった。われ

われは、永遠の命の冠という無限に価値のある賞を得ようと努力しているのである。それだから、われわれは、もっと注意深く努力し、もっとよろこんで犠牲と克己に励むべきではないだろうか。

ヘブル人への手紙の中に、永遠の命を得ようとしているクリスチャンの競走の特徴は、一意専心その目的に向かって進むことだと指摘されている。「こういうわけで、わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか」（ヘブル一二ノ一、二）。ねたみ、悪意、邪推、悪口、貪欲などは、クリスチャンが永遠の命をめざす競走に勝利するために、捨て去らなければならない重荷である。われわれを罪におとしいれ、キリストのみ栄えを汚すような習慣や行為は、みな、どんな犠牲を払ってでも捨て去らなければならない。天の祝福は、正義の永遠の原則を犯している人に与えられることはない。一つの罪でも心に抱いているならば、品性を堕落させ、他の人々を誤った道におとしいれるのに十分なのである。

「もし、あなたの片手が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両手がそろったままで地獄の消えない火の中に落ち込むよりは、かたわになって命に入る方がよい。・・・・もし、あなたの片足が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両足がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片足で命に 入る方がよい」と救い主は言われた（マルコ九ノ四三、四五）。もし、体を死から救うために、足や手を切り捨て、目を抜き出さなければならないとしたら、クリスチャンは、魂を死に至らせる、罪を捨て去るために、どれほど熱心にならなければならないことだろう。 [337]

古代の競技の選手たちは、克己と厳しい訓練に服したからといって、必ず勝利を得るのではなかった。「あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけである」とパウロは言った。競走者たちが、どんなに熱心に真剣に努力しても、賞は、ただひとりにしか与えられなかった。待望の栄冠を手にす

るのは、ただひとりだけであった。賞を得ようとして全力をつくし、まさにそれを手にしようとした瞬間に、他の者が彼らの前に現れて、熱望する宝物をさらってしまうこともあった。

ところが、クリスチャンの戦いは、そのようなものではない。条件に従った者は、競走の終わりにおいて、だれひとりとして失望におちいることはない。真剣に耐え忍ぶ者は、ひとりとして失敗することはない。それは、いちばん速い者のための競走ではなく、いちばん強い者のための競争でもない。最も強い聖徒とともに最も弱い聖徒も、永遠の栄光の冠を受けるのである。すべて、神の恵みの力によって、自分たちの生活をキリストのみこころに一致させる者は、勝利するのである。神の言葉のうちに述べられている原則を、日常の生活において実行するということが、しばしば、重要でなく、注目に値しないささいな事と思われている。しかし、その結果の重要性を考えるとき、それ
[338] を助けたり、妨害したりするものは、何一つささいなこととは言えない。すべての行動は、人生の勝利か、または、敗北を決定する重みを持っている。そして勝利者に与えられる報賞は、彼らが努力する気力と真剣さに比例している。

使徒パウロは、自分を、賞を得ようとして全力をつくす走者にたとえている。「そこで、わたしは目標のはっきりしないような走り方をせず、空を打つような拳闘はしない。すなわち、自分のからだを打ちたたいて服従させるのである。そうしないと、ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分は失格者になるかも知れない」と彼は言っている。パウロは、クリスチャンの競走において、目標のはっきりしないような、いいかげんな走りかたをしないために、厳しい訓練に自らを従わせた。「自分のからだを打ちたたいて」という言葉は、定義的には、厳しい訓練によって、欲望、衝動、情欲などを抑制するという意味である。

パウロは、ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分は失格者になりはしないかと恐れた。彼は、自分が信じ宣べ伝えた原則を、自分の生活に実行しなければ、他の人々のための彼の働きは、彼には何の役にも立たないことを知っていた。彼はその行状と影響力、自己の欲望の満足を拒否することなどによって、自分の宗教が、単に口先だけのもの

でなくて、神との日毎の生きた関係であることを示さなければならなかった。彼は、自分の前に一つの目標を持ち、それに到達するように努力した。それは、「信仰に基く神からの義」であった（ピリピ三ノ九）。

パウロは、命のある限り、悪との戦いは終わらないことを知っていた。彼は、霊的熱心が世俗の欲望 に負ける [339] ことのないよう、常に自分をしっかりと守っておく必要を感じた。彼は全力をつくして、生来の傾向と戦い続けた。彼は、自分の到達すべき理想を常に目の前に置いた。そして、神の律法によろこんで従うことによってこの理想に到達しようとした。彼の言葉、彼の行為、彼の情熱は、みな、神の霊の支配下にあった。

パウロが、コリントの信者たちの生活に現れるのを見たいと熱望したのは、永遠の生命を勝ち取ろうとするこうした心からの決意であった。彼は、彼らが、キリストが彼らのために持っておられる理想に到達するためには、避けることのできない一生涯にわたる苦闘が、彼らの前にあることを知っていた。パウロは、彼らに、原則に従って努力し、日毎に、敬虔けんと道徳的卓越を追求するように勧めた。すべての重荷を捨てて、キリストにある完全という目標に向かって前進するよう、彼らに訴えた。

パウロは、コリントの人々に、古代のイスラエルの経験を指し示し、彼らが服従によって受けた祝福と、罪を犯したためにこうむった刑罰とを示した。彼は、ヘブル人が、昼は雲の柱、夜は火の柱に守られて、奇跡的にエジプトを脱出したことを彼らに思い起こさせた。こうしてヘブル人は、安全に紅海を渡ったが、同じようにして渡ろうとしたエジプト人は、みなおぼれ死んでしまった。このような行為によって、神は、イスラエルをご自分の教会としてお認めになったのである。彼らは、「みな同じ霊の食物を食べ、みな同じ霊の飲み物を飲んだ。すなわち、彼らについてきた霊の岩から飲んだのであるが、この岩はキリストにほかならない」。ヘブル人の旅路の全期間にわたる指導者は、キリストであった。 打たれた岩は、キリストを代表し [340] ていた。キリストは、すべての人に救いの水が流れていくよう、人間の罪のために傷つけられるのであった。

神がヘブル人に恵みをほどこされたにもかかわらず、彼らは、エジプトに残してきたぜいたくな生活にあこがれ、

その罪と反逆のゆえに、神の刑罰をこうむったのである。パウロは、コリントの信者たちに、イスラエルの経験の中に含まれている教訓に留意するよう命じている。「これらの出来事は、わたしたちに対する警告であって、彼らが悪をむさぼったように、わたしたちも悪をむさぼることのないためなのである」と彼は言った。彼は、安楽と快楽を愛する心が、どのようにして、神の著しい報復を招いた罪への道を開いていったかを示した。イスラエルの民が、律法をさずけられたときに感じた神への恐れを捨て去ったのは、彼らが坐して飲み食いをし、また立って踊り戯れたときであった。そして、彼らは、神の象徴として金の子牛を造り、それを礼拝した。多くのヘブル人たちが、不品行のゆえに倒れたのは、ペオルのバアル礼拝に伴う放縦な宴会に連なったあとであった。神の怒りが引き起こされた。神の命令の下に、疫病のために倒された者が、「一日に二万三千人もあった」。

使徒パウロは、コリント人に命じて、「だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい」と言った。もし彼らがおごり高ぶって、自分をたのみ、目をさまして祈ることを怠るならば、重大な罪におちいり、神の怒りを自分たちの身に招くのであった。しかしパウロは、彼らが失望したり落胆したりすることを望まなかった。彼は、彼らに確証を与えて言った。「神は真実である。あなたが [341] たを耐えられないような試錬に会わせることはないばかりか、試錬と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである」。

パウロは兄弟たちに、彼らの言行の影響についての反省を促し、たとえ、どんなにその事自体は誤っていないように思われても、偶像礼拝を是認したり、あるいは、信仰の弱い者の良心を傷つけたりするようなことは、何一つしないようにと勧告した。「だから、飲むにも食べるにも、また何事をするにも、すべて神の栄光のためにすべきである。ユダヤ人にもギリシヤ人にも神の教会にも、つまずきになってはいけない」。

コリント教会への使徒パウロの警告の言葉は、各時代にあてはまるが、特にわれわれの時代に適合している。彼が、偶像礼拝と言ったのは、ただ偶像を拝むことだけでなくて、自己の利益を追求し、安楽を愛し、食欲と情欲をほ

しいままにすることをも意味していた。単に、キリストに対する信仰を表明し、真理の知識を誇るだけで、人はクリスチャンとなるのではない。目や耳や嗜好を満足させることのみを求め、放縦を是認する宗教は、キリストの宗教ではない。

パウロは、教会を人間の体と比較することによって、キリストの教会のすべてのメンバーの間における密接で調和した関係を、適切に説明した。彼は、次のように書いた。「わたしたちは皆、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受け、そして皆一つの御霊を飲んだからである。実際、からだは一つの肢体だけではなく、多くのものからで きている。もし足が、わたしは手ではないから、か [342] らだに属していないと言っても、それで、からだに属さないわけではない。また、もし耳が、わたしは目ではないから、からだに属していないと言っても、それで、からだに属さないわけではない。もしからだ全体が目だとすれば、どこで聞くのか。もし、からだ全体が耳だとすれば、どこでかぐのか。そこで神は御旨のままに、肢体をそれぞれ、からだに備えられたのである。もし、すべてのものが一つの肢体なら、どこにからだがあるのか。ところが実際、肢体は多くあるが、からだは一つなのである。目は手にむかって、『おまえはいらない』とは言えず、また頭は足にむかって、『おまえはいらない』とも言えない。・・・・神は劣っている部分をいっそう見よくして、からだに調和をお与えになったのである。それは、からだの中に分裂がなく、それぞれの肢体が互にいたわり合うためなのである。もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ。あなたがたはキリストのからだであり、ひとりびとりはその肢体である」。

次に、パウロは、キリストのすべての弟子たちが持つべき愛の重要性について語ったが、この言葉は、その時代から現代に至るまで、あらゆる人々にとって霊感と励ましの源泉となった。「たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鐃鉢と同じである。たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識

とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。たとい
[343] また、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である」。

口先で、どんなに立派なことを言っても、もし心の中に、神と同胞に対する愛が満ちていなければ、キリストの真の弟子ではない。大いなる信仰を持ち、奇跡を行うほどの力があっても、もし愛がなければ、その信仰は価値がない。また、大いなる施しが行われるかもしれない。しかし、それが真の愛以外の動機によって行われたとするならば、自分の全財産を人に施しても、その行為によって神の恵みにあずかることはできない。また、熱心さのあまり、殉教の死をとげることさえするかもしれない。しかし、もしそれが愛の動機によるものでなければ、神は彼を、惑わされた熱狂家、あるいは野心的偽善者とみなされることであろう。

「愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない」。最も純粋なよろこびは、最も深い謙遜から生じる。最も強く、最も高潔な品性は、忍耐と愛と、神のみこころに対する服従という基礎の上に築かれるのである。

愛は、「不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない」。キリストのような愛は、他人の行為と動機を最も好意的に解釈する。それは、不必要に彼らの欠点を暴露したりしない。それは、好ましくない噂に聞き耳を立てたりせず、むしろ、他の人々の良い特質を思い起こさせようと努めるのである。

[344] 愛は、「不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える」。この愛は、「いつまでも絶えることがない」。これは、決してその価値を失うことがない。それは、天の特性である。その所有者は、尊い宝としてそれを持って、神の都の門の中にはいることができるのである。

「このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である」。

コリントの信者たちの道徳的標準の低下に伴って、ある人々は、信仰の基本的な特徴のいくつかを放棄してしまった。ある人々は、復活の教理さえ否定するに至った。パウロは、キリストの復活が、疑う余地のない証拠に基づいていることを明白に証言して、この異端に対処した。彼は、次のように言明した。キリストは、死後、「聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえった・・・・ケパに現れ、次に、十二人に現れた・・・・そののち、五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた。その中にはすでに眠った者たちもいるが、大多数はいまなお生存している。そののち、ヤコブに現れ、次に、すべての使徒たちに現れ、そして最後に、いわば、月足らずに生れたようなわたしにも、現れたのである」。

使徒パウロは、人を説得せずにはおかぬ力をもって、復活の偉大な真理を説いた。「もし死人の復活がないならば、キリストもよみがえらなかったであろう。もしキリストがよみがえらなかったとしたら、わたしたちの宣教はむなしく、あなたがたの信仰もまたむなしい。すると、わたしたちは神にそむく偽 証人にさえなるわけだ。なぜなら、 [345]
万一死人がよみがえらないとしたら、わたしたちは神が実際よみがえらせなかったはずのキリストを、よみがえらせたと言って、神に反するあかしを立てたことになるからである。もし死人がよみがえらないなら、キリストもよみがえらなかったであろう。もしキリストがよみがえらなかったとすれば、あなたがたの信仰は空虚なものとなり、あなたがたは、いまなお罪の中にいることになろう。そうだとすると、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのである。もしわたしたちが、この世の生活でキリストにあって単なる望みをいだいているだけだとすれば、わたしたちは、すべての人の中で最もあわれむべき存在となる。しかし事実、キリストは眠っている者の初穂として、死人の中からよみがえったのである」。

使徒パウロは、コリントの兄弟たちの心を、復活の朝の勝利へと向かわせた。その時、すべての眠っていた聖徒はよみがえらされて、永遠に主と共に住むのである。パウロは、次のように言った。「ここで、あなたがたに奥義を告げよう。わたしたちすべては、眠り続けるのではない。終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変え

られる。というのは、ラッパが響いて、死人は朽ちない者によみがえらされ、わたしたちは変えられるのである。なぜなら、この朽ちるものは必ず朽ちないものを着、この死ぬものは必ず死なないものを着ることになるからである。この朽ちるものが朽ちないものを着、この死ぬものが死なないものを着るとき、聖書に書いてある言葉が成就するのである。『死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこに
[346] あるのか』。・・・・しかし感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利を賜わったのである」。

忠実な者を待ち受けている勝利は、実に輝かしいものである。パウロは、コリントの信者たちの可能性を認め、利己心と情欲から彼らを引き上げて、永遠の生命の希望に満ちた輝かしい生活へと彼らを導こうと努めた。彼は、彼らに、キリストにあって受けた高い召しに対して忠実であるようにと、熱心に勧めた。「だから、愛する兄弟たちよ。堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあっては、あなたがたの労苦がむだになることはないと、あなたがたは知っているからである」、と彼は勧告した。

こうして、パウロは、最も明確で印象的なやりかたで、コリント教会に広まっていた誤った危険な考えと習慣を正そうと努めた。彼は、率直に語ったけれども、彼らの魂に対する愛をもって語ったのである。彼の警告と譴けん責の中には、彼らの生活を汚していた隠れた罪を示す、神のみ座からの光が輝いていた。彼らは、それをどのように受けいれるだろうか。

パウロは、手紙を送り出したあとで、自分の書いたことが、自分が助けたいと望んでいるその人々に、深い傷を負わせ過ぎたのではないかと恐れた。彼は、人々が彼から更に離反することを非常に憂慮し、言ったことを取り消したいとさえ思った。パウロと同様、愛する教会や伝道機関に対する責任を感じている人々が、彼の精神的苦悩と自責の念を最もよく理解することができる。この時代に対する神
[347] の働き の重荷を負う神のしもべたちは、大いなる使徒が負わなければならなかったのと同様の労苦、葛藤かっとう、心労の経験の幾分かを知っている。パウロは、教会の分

裂の重荷をかかえ、また、自分が同情と支持を求めた人々の忘恩と裏切りに心を痛め、罪をはらむ教会の危機に気づいて、率直、厳重な罪の譴責けんせきをしなければならなかったが、同時に、自分は事を処するのに、厳し過ぎはしなかっただろうかという危惧きぐの念が、心にのしかかった。彼は、自分の手紙が、どのように受け入れられたかということについての知らせを、心配しながら待ちわびていた。